

椎田バイパス関係 埋蔵文化財調査報告

— 9 —

福岡県築上郡椎田町所在広幡城跡の調査

1992

福岡県教育委員会

椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告 -9-

頁	行	誤	正
例 言	(14)	Vと〔特論〕	V-A・Bと〔特論〕
X I	2	Photo. 7 SX 5~7の発掘	降雪中の作業
タ	4	Photo. 9 降雪中の作業	SX 5~7の発掘
X II	10	Tabel. 3	Table. 3
3	表 1	7-C 赤幡・十双遺跡	7-C 十双遺跡
タ	9	+ 水原	椎田町水原
6	Photo. 7	SX 5~7の発掘	降雪中の作業
タ	Photo. 9	降雪中の作業	SX 5~7の発掘
7	12	椎田バイパス工事	椎田バイパス工事
15	3	天陰の要害	天陰の要害
タ	5	僅かしきない	僅かしきない
16	13	④『築上郡誌』	④『築上郡志』
25	11	豈郭は西面は	豈郭は西面には
43	第22図	(1/4)	(1/40)
131	29	第92・93図	第90・91図
タ	31	(第91図)	(第89図)
134	2	安岐城(第92・93図)	安岐城(第90・91図)
タ	4	広幡城(第91図)	広幡城(第89図)
136	9	(第94図414・415)	(第92図414・415)
138	3	第95図	第93図
144	15	豊前国衛田所,	豊前国衛田所,
タ	26	及ばし。	及ばし。
タ	29	鎮西宇都宮氏	鎮西宇都宮氏
145	21	論じてあるとおり	論じているとおり
151	8~9	■ 長崎港地図 長崎港地図	領邑 <small>×長崎</small> (線が抜けている)
付編 9	Fig. 6		下段右より 1~4 トレンチ 上段右より 5~8・6・7 トレンチ (Fig. 16)。
17	8	(Fig. 15)。	上段が1、下段が2
PL. 1			上段が1、下段が2
PL. 2			上段が1、下段が2

椎田バイパス関係 埋蔵文化財調査報告

— 9 —

福岡県築上郡椎田町所在広幡城跡の調査



広幡城跡全景航空写真（東から）



1 広輔城跡遠景（東から）



2 広輔城跡全景（東から）



1 広幡城跡全景気球写真（真上から）



2 広幡城跡 S R 2 下石組（南から）



1 広輔城跡の虎口と堀（北から）



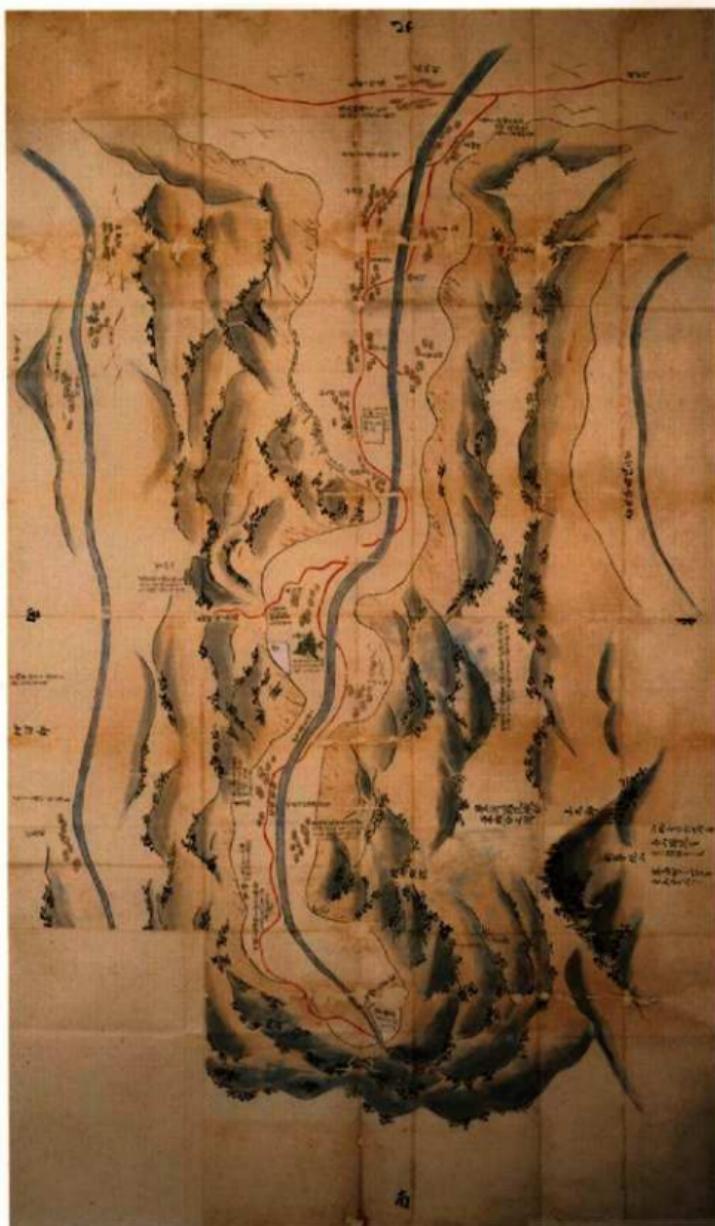
2 広輔城跡の堀と土層（北から）



1 広幡城跡 S X 5・6・7 (東から)



2 広幡城跡火葬墓 (南から)



築城郡域井谷絵図（福岡県立図書館蔵）



1 広幡跡出土ボタン



2 広幡遺跡SK1出土二彩小壺

序

福岡県教育委員会は、日本道路公団から委託されて、昭和61年度より一般国道10号椎田バイパスに関わる埋蔵文化財の調査を行ってきました。

発掘調査については平成元年をもって終了し、椎田バイパスの供用が平成3年3月15日より開始されましたことは、この事業に関与することとなったひとりとして、誠に慶賀すべきことであると存念します。

この報告は、昭和63年度に実施した広幅城跡についてのものであります。中世宇都宮氏の出城と言われていたこの山城跡の内容の一端が明らかにされるとともに、弥生時代の造構なども知られるに至っております。

本書が、旧豊前国内における原始・古代そして中世の地域史解明の一助ともなり、かつ文化財愛護思想の普及に活用されるならば幸甚であります。

最後に、発掘調査あるいはその後の事業に御協力・御援助いただいた方々に衷心より感謝いたします。

平成4年3月31日

福岡県教育委員会

教育長 御手洗 康

例　　言

1. 本書は、福岡県教育委員会が日本道路公団の委託を受けて発掘調査を実施した遺跡の報告書であり、一般国道10号椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告の9冊目にあたる。
2. 本書をもって、日本道路公団の委託による椎田バイパス関係の報告は最後である。
3. 本書には、昭和63年度(1988~1989)に調査を行った、福岡県築上郡椎田町水原に所在する広轍城跡・広轍遺跡を収録した。
4. 遺構の実測は、井上裕弘・木下修・木村幾多郎・伊崎俊秋・日高正幸・海津恵子・鎌田つる代・森仲美・田原フジ子・久本英子が行い、写真は井上・木下・伊崎が撮影した。
5. 航空写真は伊崎と緒方泉が撮影し、気球写真はフォトオツカによる。
6. 出土遺物の整理は、岩瀬正信の指導のもと福岡県立九州歴史資料館および文化課甘木事務所において行った。
7. 出土遺物の実測は、大野愛里・高瀬照美・木下・伊崎が行った。
8. 遺構・遺物の整図等は、豊福弥生・原かよ子・水野美奈・閔久江・岡由美子・黒木美幸・塩足里美と伊崎が行った。
9. 出土遺物の写真は、石丸洋・岡紀久夫・上野周平が撮影した。
10. 本書で使用した方位には座標北と磁北とがある。
11. 出土鉄滓の分析・炭化材の樹種同定・C¹⁴年代測定の結果を、自然科学系の調査として収録した。
12. 特論として、松下辰章氏・磯村幸男氏の玉稿を掲載した。
13. 末尾に、付編として、平成3年(1991)に行った広轍城跡第二次調査の成果を収めた。
14. 本書の執筆は、Vと【特論】を除いて、本文中の出土遺物の石器・土製品については木下が、それ以外を伊崎が行った。
15. 本書は伊崎が編集した。

本文目次

(頁)

Iはじめに	1
1. 調査の経過	1
2. 調査組織と関係者	7
II遺跡の立地と歴史的環境	10
1. 立地	10
2. 周辺の遺跡	12
3. 周辺の山城跡の分布	13
4. 広幡城跡についての文献	15
III広幡城遺跡の調査	19
A. 広幡城跡	21
1. 調査区内外の遺構の状況	21
2. II・III郭の様相	24
3. 調査の内容	26
I. 調査前の状況	26
II. 土壘と堀	26
III. 郭内の遺構(礎石・建物・土壤)	32
IV. 南斜面の遺構	38
V. 出土遺物	44
4. 小結	50
B. 奈良時代の遺構と遺物	52
1. 1号火葬墓	52
2. その他の遺物	53
3. 小結	54
C. 弥生時代の遺構と遺物	56
1. 積穴住居跡	56
2. 貯蔵穴	62
3. ピットその他の土器・石器	70
4. 小結	76

IV 広幡遺跡の調査	77
A. 中世以降の遺構と遺物	78
1. 調査区外の現況	78
2. 建物・石垣・溝	79
3. 土 壤	88
4. 墓	93
5. SGI その他	95
6. 小 結	98
B. 古墳時代～平安時代の遺構と遺物	99
1. 積穴住居跡	99
2. 挖立柱建物跡	110
3. 包含層(S G 2)	112
4. その他の遺構と遺物	118
5. 小 結	119
C. 繩文時代ほかの遺物	120
1. 出土遺物	120
2. 小 結	121
V 自然科学系の調査	122
A. 広幡遺跡から出土した炭化材	122
B. 広幡遺跡出土鉄滓の金属学的調査	123
C. C-14年代測定	129
VI 総 括	130
1. 広幡城跡の築城と存続年代	130
2. 広幡遺跡と広幡城跡	139
[特 論]	
1. 磯村幸男「宇都宮氏について」	144
2. 松下辰章「廣幡城と城井宇都宮氏」	159
[付 編]	
広幡城跡 一第2次調査一	

図版目次

- 巻頭図版 1 広幡城跡全景航空写真(東から)
巻頭図版 2 1. 広幡城跡遠景(東から)
2. 広幡城跡全景(東から)
巻頭図版 3 1. 広幡城跡全景気球写真(真上から)
2. 広幡城跡 S R 2 下石組(南から)
巻頭図版 4 1. 広幡城跡の虎口と堀(北から)
2. 広幡城跡の堀と土層(北から)
巻頭図版 5 1. 広幡城跡 S X 5・6・7(東から)
2. 広幡城跡火葬墓(南から)
巻頭図版 6 築城郡城井谷絵図(福岡県立図書館蔵)
巻頭図版 7 1. 広幡城跡出土ボタン
2. 広幡城跡 S K 1 出土二彩小壺

- 図版 1 広幡城跡周辺航空写真(国土地理院 K U - 72 - I X C I - 4)
図版 2 広幡城跡全景航空写真(東から)
図版 3 1. 広幡城跡航空写真(東南から)
2. 広幡城跡航空写真遠景(東南方向から)
図版 4 1. 広幡城跡航空写真(東から)
2. 広幡城跡航空写真遠景(北から)
図版 5 1. 広幡城跡航空写真(東から)
2. 広幡城跡航空写真(西から)
図版 6 1. 広幡城跡遠景(北から)
2. 広幡城跡遠景(東から)
3. バイパス開通後の広幡城跡(東から)
図版 7 1. 広幡城跡調査前全景気球写真(東南から)
2. 広幡城跡調査前Ⅰ郭部分気球写真(東から)
3. 広幡城跡調査前Ⅰ郭の堀・土塁気球写真(東から)
図版 8 1. 広幡城跡と広幡城跡全景(東南から)
2. 広幡城跡全景気球写真(東南から)

- 図 版 9 1. 広幡城跡全景気球写真(東から)
2. 広幡城跡Ⅰ郭気球写真(南から)
- 図 版 10 1. 広幡城跡 SR 1(東から)
2. 広幡城跡 SR 3(西から)
3. 広幡城跡 SR 4(南から)
- 図 版 11 1. 広幡城跡 SR 2(東から)
2. 広幡城跡 SR 2 下石組(東から)
3. 広幡城跡 SR 2 下石組(西から)
- 図 版 12 1. 広幡城跡 SR 2 下石組(南から)
2. 広幡城跡 SR 2 下石組(北から)
3. 広幡城跡 SR 11 下石組(北から)
- 図 版 13 1. 広幡城跡 SR 11(東から)
2. 広幡城跡 SR 11 下石組(東から)
3. 広幡城跡 SR 11 下石組(南から)
- 図 版 14 1. 広幡城跡堀Ⅰ区と SR 11(東から)
2. 広幡城跡堀Ⅱ区と SR 10(東から)
3. 広幡城跡堀Ⅲ区と SR 9(東から)
- 図 版 15 1. 広幡城跡 SR 6
2. 広幡城跡堀Ⅴ区と SR 5(東から)
3. 広幡城跡堀と SR 7(東南から)
- 図 版 16 1. 広幡城跡堀Ⅳ区・SZ I(北東から)
2. 広幡城跡 SZ I(南西から)
- 図 版 17 1. 広幡城跡堀Ⅱ区と SZ II(東から)
2. 広幡城跡 SZ II(南から)
- 図 版 18 1. 広幡城跡 SR 5 と階段(東から)
2. 広幡城跡虎口と SZ I(東北から)
- 図 版 19 1. 広幡城跡虎口とⅠ郭内(南東から)
2. 広幡城跡Ⅰ郭内礎石群(東から)
- 図 版 20 1. 広幡城跡 SS 1(東から)
2. 広幡城跡 SS 4(北から)
3. 広幡城跡 SS 5(北から)
- 図 版 21 1. 広幡城跡 SS 2(南西から)
2. 広幡城跡 SS 3(北西から)

3. 広幡城跡 SS 9・10(西から)
- 図版 22 1. 広幡城跡 SK 1(東から)
2. 広幡城跡 SK 3(南から)
3. 広幡城跡 SK 5(南から)
- 図版 23 1. 広幡城跡 SK 6(北から)
2. 広幡城跡 SK 7(南から)
3. 広幡城跡 SK 7(南から)
- 図版 24 1. 広幡城跡 SX 1(真上から)
2. 広幡城跡 SX 1(北東から)
- 図版 25 1. 広幡城跡 SX 1(南西から)
2. 広幡城跡 SX 1 の礫石(南から)
3. 広幡城跡 SX 1 の壁溝(南西から)
- 図版 26 1. 広幡城跡 SX 8(真上から)
2. 広幡城跡 SX 8(東から)
3. 広幡城跡 SX 8(西から)
- 図版 27 1. 広幡城跡 SX 5～7(東から)
2. 広幡城跡 SX 5～7(真上から)
- 図版 28 1. 広幡城跡 SX 5～7(北から)
2. 広幡城跡 SX 5～7(東から)
- 図版 29 1. 広幡城跡 SX 5(東から)
2. 広幡城跡 SX 6・7(東から)
- 図版 30 1. 広幡城跡 SX 2・4(南東から)
2. 広幡城跡 SX 2(北から)
3. 広幡城跡 SX 9(東から)
- 図版 31 1. 広幡城遺跡 1 号火葬墓検出状態(南から)
2. 広幡城遺跡 1 号火葬墓検出状態(真上から)
3. 広幡城遺跡 1 号火葬墓断面(南東から)
- 図版 32 1. 広幡城遺跡 1・2 号住居跡(北東から)
2. 広幡城遺跡 1・2 号住居跡(西から)
- 図版 33 1. 広幡城遺跡 3 号住居跡(南西から)
2. 広幡城遺跡 4 号住居跡(北から)
- 図版 34 1. 広幡城遺跡 5 号住居跡(西南から)
2. 広幡城遺跡 2～9 号貯蔵穴(南から)

- 図版 35 1. 広幡城遺跡 1号貯藏穴(北から)
2. 広幡城遺跡 7号貯藏穴(南から)
- 図版 36 1. 広幡城遺跡 2・6号貯藏穴(南から)
2. 広幡城遺跡 8号貯藏穴(東から)
- 図版 37 1. 広幡城遺跡 3号貯藏穴(東から)
2. 広幡城遺跡 4号貯藏穴(東から)
3. 広幡城遺跡 5号貯藏穴(北から)
- 図版 38 広幡城跡出土土器
- 図版 39 広幡城跡出土土器
- 図版 40 広幡城跡出土土製品・石器・金属器
- 図版 41 広幡城跡出土陶磁器・骨蔵器・須恵器・石器
- 図版 42 広幡城遺跡弥生住居跡・貯藏穴出土土器
- 図版 43 広幡城遺跡出土弥生土器
- 図版 44 広幡城遺跡出土石器
- 図版 45 1. 広幡遺跡全景(南東から)
2. 広幡遺跡全景(北西から)
- 図版 46 1. 広幡遺跡東半部全景(北西から)
2. 広幡遺跡 1号建物跡(南東から)
- 図版 47 1. 広幡遺跡 1・2号石垣全景(東南から)
2. 広幡遺跡 1号石垣(東南から)
3. 広幡遺跡 2号石垣(東から)
- 図版 48 1. 広幡遺跡 3号石垣(東南から)
2. 広幡遺跡 3号石垣と暗渠(南西から)
3. 広幡遺跡 3号石垣と暗渠(蓋石除去後)(南西から)
- 図版 49 1. 広幡遺跡暗渠全景(北東から)
2. 広幡遺跡暗渠全景(蓋石除去後)(北東から)
3. 広幡遺跡暗渠全景(南西から)
4. 広幡遺跡暗渠の一部(東北から)
- 図版 50 1. 広幡遺跡 1号土壙(東から)
2. 広幡遺跡 1号土壙(礫石除去後)(東から)
- 図版 51 1. 広幡遺跡 2号土壙(南東から)
2. 広幡遺跡 1号墓(東南から)
3. 広幡遺跡 2号墓(西から)

- 図 版 52 1. 広轄遺跡 1号住居跡(南東から)
2. 広轄遺跡 3号住居跡(北西から)
- 図 版 53 1. 広轄遺跡 2号住居跡(北東から)
2. 広轄遺跡 2号住居跡カマド(東から)
- 図 版 54 1. 広轄遺跡 5~10号住居跡(西北から)
2. 広轄遺跡 7号住居跡(北から)
- 図 版 55 1. 広轄遺跡 9号住居跡と 3号石垣・暗渠(北東から)
2. 広轄遺跡 3号建物跡(北西から)
- 図 版 56 1. 広轄遺跡 包含層(SG 2)土層(北東から)
2. 広轄遺跡 包含層土器出土状態(東から)
- 図 版 57 広轄遺跡石垣・溝・墓等出土土器
- 図 版 58 広轄遺跡 1号土壙出土陶磁器・瓦
- 図 版 59 広轄遺跡出土陶磁器
- 図 版 60 広轄遺跡出土常滑陶器・鉄器
- 図 版 61 広轄遺跡住居跡出土土器
- 図 版 62 広轄遺跡住居跡出土土器
- 図 版 63 広轄遺跡 SG 2 等出土土器
- 図 版 64 広轄遺跡ビット出土土器: SG 1・2 出土焼塙土器・綠釉陶器
- 図 版 65 広轄遺跡出土石臼・子持勾玉・ふいご羽口など
- 図 版 66 広轄遺跡石器

挿 図 目 次

(頁)

第 1 図	一般国道10号椎田バイパス路線位置図(約1/850,000).....	2
第 2 図	一般国道10号椎田バイパス周辺地理図(1/500,000).....	11
第 3 図	広轄城跡周辺遺跡分布図(1/50,000)	12-13(折込)
第 4 図	豊前中部地方中世山城分布図(1/200,000)	14
第 5 図	広轄城跡調査部分名称・造構配置図(1/800).....	21
第 6 図	広轄城跡周辺地形図(1/5,000).....	22
第 7 図	広轄城跡Ⅱ・Ⅲ部地形図(1/800).....	24
第 8 図	広轄城跡S R 2 下の石組実測図(1/40)	28

第 9 図	広幡城跡S R 11下の石組実測図 (1/40)	30
第 10 図	広幡城跡土層実測図 (1/80)	30-31(折込)
第 11 図	広幡城跡階段・虎口・堀V区実測図 (1/60)	32-33(折込)
第 12 図	広幡城跡S B 1 実測図 (1/60)	33
第 13 図	広幡城跡郭内造構配置図 (1/600)	34
第 14 図	広幡城跡土壇実測図 1 (SK 1 ~ 3 · 5) (1/40)	35
第 15 図	広幡城跡土壇実測図 2 (SK 4 · 6 · 7) (1/40)	37
第 16 図	広幡城跡S X 1 実測図 (1/60)	38-39(折込)
第 17 図	広幡城跡S X 8 実測図 (1/60)	38-39(折込)
第 18 図	広幡城跡S X 5 ~ 7 周辺地形図 (1/300)	39
第 19 図	広幡城跡S X 5 実測図 (1/60)	40-41(折込)
第 20 図	広幡城跡S X 6 実測図 (1/60)	41
第 21 図	広幡城跡S X 7 実測図 (1/60)	42
第 22 図	広幡城跡S X 7 内土壤実測図 (1/4)	43
第 23 図	広幡城跡出土土器実測図 1 (1/4)	45
第 24 図	広幡城跡出土土器実測図 2 (1/4)	46
第 25 図	広幡城跡出土土鍾実測図 (1/3)	47
第 26 図	広幡城跡出土石器実測図 (1/3)	47
第 27 図	広幡城跡出土金属器実測図 (1/1)	48
第 28 図	広幡城跡出土鉄器実測図 (1/2)	49
第 29 図	広幡城跡近~現代陶磁器実測図 (1/3)	50
第 30 図	広幡城遺跡 1 号火葬墓実測図 (1/20)	52
第 31 図	広幡城遺跡出土骨蔵器実測図 (1/3)	53
第 32 図	広幡城遺跡出土須恵器実測図 (1/3)	55
第 33 図	広幡城遺跡弥生時代遺構分布図 (1/1,000)	56
第 34 図	広幡城遺跡 1 · 2 号住居跡実測図 (1/60)	57
第 35 図	広幡城遺跡 3 · 4 号住居跡実測図 (1/60)	59
第 36 図	広幡城遺跡 5 号住居跡実測図 (1/60)	60
第 37 図	広幡城遺跡 6 号住居跡実測図 (1/60)	61
第 38 図	広幡城遺跡住居跡出土土器実測図 (1/4)	62
第 39 図	広幡城遺跡貯藏穴実測図 1 (1 · 7 号) (1/40)	64
第 40 図	広幡城遺跡貯藏穴実測図 2 (2 · 6 · 8 号) (1/40)	65
第 41 図	広幡城遺跡貯藏穴実測図 3 (3 ~ 5 · 9 号) (1/40)	67

第 42 図	広幡城遺跡貯蔵穴出土土器実測図 (1/4).....	69
第 43 図	広幡城遺跡弥生ビット等出土土器実測図 1 (1/4).....	71
第 44 図	広幡城遺跡弥生ビット等出土土器実測図 2 (1/4).....	72
第 45 図	広幡城遺跡弥生ビット等出土土器実測図 3 (1/4).....	73
第 46 図	広幡城遺跡弥生時代ほかの石器実測図 1 (1/2).....	75
第 47 図	広幡城遺跡弥生時代ほかの石器実測図 2 (1/3).....	75
第 48 図	広幡城遺跡出土石器実測図 (1/3).....	75
第 49 図	広幡遺跡表採土器実測図 (1/3).....	79
第 50 図	広幡遺跡 1 号建物跡・出土遺物実測図 (1/60・1/3).....	80
第 51 図	広幡遺跡 4 号建物跡実測図 (1/60)	81
第 52 図	広幡遺跡 1・2 号石垣、暗渠実測図 (1/60)	82—83(折込)
第 53 図	広幡遺跡石垣出土遺物実測図 (1/3).....	83
第 54 図	広幡遺跡 2 号石垣出土石臼実測図 (1/4).....	83
第 55 図	広幡遺跡溝出土遺物実測図 1 (SD 1 : 2) (1/3)	86
第 56 図	広幡遺跡溝出土遺物実測図 2 (SD 3 ~ 10) (1/3)	87
第 57 図	広幡遺跡 1 号土壙実測図 (1/40)	89
第 58 図	広幡遺跡 1 号土壙出土遺物実測図 1 (1/2).....	90
第 59 図	広幡遺跡 1 号土壙出土遺物実測図 2 (1/4).....	91
第 60 図	広幡遺跡 2・3 号土壙実測図 (1/40)	92
第 61 図	広幡遺跡 1・2 号墓実測図 (1/20)	93
第 62 図	広幡遺跡 1・2 号墓出土遺物実測図 (1/3).....	94
第 63 図	広幡遺跡 SG 1 出土土器実測図 1 (1/3).....	96
第 64 図	広幡遺跡 SG 1 出土土器実測図 2 (1/4).....	97
第 65 図	広幡遺跡出土遺物実測図 (1/3).....	98
第 66 図	広幡遺跡 1 号住居跡実測図 (1/60).....	100
第 67 図	広幡遺跡 2 号住居跡出土土器実測図 (1/2)	101
第 68 図	広幡遺跡 5 号住居跡出土羽口実測図 (1/3).....	102
第 69 図	広幡遺跡 2・3 号住居跡実測図 (1/60)	103
第 70 図	広幡遺跡 7・9 号住居跡実測図 (1/60).....	105
第 71 図	広幡遺跡住居跡出土土器実測図 1 (1/3)	106
第 72 図	広幡遺跡住居跡出土土器実測図 2 (1/4)	107
第 73 図	広幡遺跡出土鉄器実測図 (1/3)	108
第 74 図	広幡遺跡 5・6・8・10号住居跡実測図 (1/60)	108—109(折込)

第 75 図	広幡遺跡10号住居跡出土土器実測図1 (1/3)	109
第 76 図	広幡遺跡10号住居跡出土土器実測図2 (1/3).....	110
第 77 図	広幡遺跡 2・3号建物跡実測図 (1/60)	111
第 78 図	広幡遺跡建物跡出土土器実測図 (1/3)	112
第 79 図	広幡遺跡包含層土層図・土器出土状態実測図 (1/40).....	113
第 80 図	広幡遺跡包含層(SG2)出土土器実測図1 (1/3)	114
第 81 図	広幡遺跡包含層(SG2)出土土器実測図2 (1/3)	115
第 82 図	広幡遺跡包含層(SG2)出土土器実測図3 (1/4)	116
第 83 図	広幡遺跡包含層(SG2)出土羽口実測図 (1/3)	117
第 84 図	広幡遺跡包含層(SG2)出土焼塗土器実測図 (1/3)	117
第 85 図	広幡遺跡出土石器・土製品実測図 (1/3)	117
第 86 図	広幡遺跡ピット出土土器実測図 (1/3)	118
第 87 図	広幡遺跡出土縄文時代他遺物実測図 (1/3)	120
第 88 図	広幡遺跡縄文時代他の出土石器実測図 (1/2)	121
第 89 図	広幡城跡出土土器実測図 (1/6)	132
第 90 図	安岐城SX1・SX2出土土器	133
第 91 図	安岐城出土土器	134
第 92 図	伐株山城跡第5土壙追構3号土壙ほか出土土器	135
第 93 図	波多江遺跡SD003 その他出土土器	137
第 94 図	広幡城復原イラスト	142
第 95 図	城井谷をめぐる見取図	163
第 96 図	広幡城跡・広幡遺跡地形図 (1/800)	164(折込)
第 97 図	広幡城跡・広幡遺跡全体図 (1/800)	164(折込)

写 真 挿 図

Photo. 1	完成後の椎田バイパス(椎田町水原付近)	Xii
Photo. 2	広幡遺跡調査風景	4
Photo. 3	広幡遺跡10号住居跡付近	4
Photo. 4	葛城小学校6年生の社会科実習	5
Photo. 5	ム、ム……何かあるぞ!?	5

Photo.	6	広幡城跡での完全防備の體姿.....	5
Photo.	7	S X 5 ~ 7 の発掘.....	6
Photo.	8	葛城小学校 5 年生の実習.....	6
Photo.	9	降雪中の作業.....	6
Photo.	10	作業員一同.....	9
Photo.	11	雪のあと求菩提方向をのぞむ.....	18
Photo.	12	広幡城跡空中写真(虎口付近).....	20
Photo.	13	広幡城跡尾根上に残る土壘.....	23
Photo.	14	広幡城跡 II ・ III 郭西端の土壘.....	25
Photo.	15	広幡城跡 I 郭北端くびれ付近.....	27
Photo.	16	広幡城跡 II 郭堀 I 区の発掘.....	31
Photo.	17	(左) S X 1 の溝、(右) I 郭堀 V 区の溝.....	51
Photo.	18	(左) S X 1 のピット、(右) S X 8 のピット.....	51
Photo.	19	降雪中の発掘.....	68
Photo.	20	作業風景.....	76
Photo.	21	広幡遺跡周辺.....	135
Photo.	22	宇都宮鎮房の墓.....	164

表 目 次

表 一	1	一般国道10号椎田バイパス関係遺跡一覧表.....	3
-----	---	---------------------------	---

付 図 目 次

付 図	1	広幡城跡地形測量図 (1/400)
付 図	2	広幡城跡測量図 (1/400)
付 図	3	広幡城遺跡遺構図 (1/200)
付 図	4	広幡遺跡遺構図 (1/200)

V-A 林氏の報文

- | | | | |
|------|---|----------------------|---------|
| Fig. | 1 | 広幡1号墓 ユズリハ..... | 122-123 |
| Fig. | 2 | 広幡城跡藏穴2下層 ウリカエデ..... | 122-123 |
| Fig. | 3 | 広幡城跡藏穴6 ウリカエデ..... | 122-123 |
| Fig. | 4 | 広幡城跡藏穴8 ウリカエデ..... | 122-123 |

V-B 大沢氏の報文

- | | | | |
|--------|---|---|---------|
| Fig. | 1 | 築上郡地区出土製鉄関連遺物の Ti - V | 128 |
| Table. | 1 | 供試材の履歴と調査項目..... | 123 |
| Table. | 2 | 鉄滓・鍛造剝片の化学組成..... | 125 |
| Tabel. | 3 | 広幡遺跡出土精錬鍛冶滓(F K17)のコンピュータープログラムによる
高速定性分析結果..... | 127 |
| Photo. | 1 | 鍛錬鍛冶滓・精錬鍛冶滓の顕微鏡組織..... | 128-129 |
| Photo. | 2 | 広幡遺跡出土精錬鍛冶滓(F K17)の特性X線像..... | 128-129 |



Photo. 1 完成後の椎田バイパス（椎田町水原付近）

I はじめに

一般国道10号は、北九州市から大分市～宮崎市を経て鹿児島市に至る総延長450kmの、九州東海岸を走る大動脈である。そのうち、北九州市と大分市との間は北大道路として過年度より部分的に整備が進められてはきていたが、特に行橋市から豊前市にかけては近年北九州市のベッドタウン化が進んできたこともあって、その道路交通網の整備が急務とされていた。その北大道路の一環として椎田バイパスが計画され、建設大臣の事業許可がおりたのは和昭55年(1980)2月のことである。

椎田バイパスは京都郡豊津町から築上郡椎田町に及ぶ全延長16.2kmであり、そのうち10.3kmを日本道路公団が施工し、一般有料道路として供用するというものであった。道路の工事については昭和62年(1987)2月に発注されてのち、平成3年3月15日には供用開始となった。

その間、文化財についての協議は、事業許可の前後から開始されていたが、路線決定、用地買収等を経過してのち、日本道路公団から委託されて実際に発掘調査が開始されたのは昭和61年(1986)からであった。26の地点が対象となっていたものの、実際には22の地点において175,740m²を調査し、平成元年(1989)12月をもって完了した(表1)。報告書の刊行は平成元年(1989)より逐次行ってきて、5集まで刊行されたが、本年度(平成3年度)が最終年度となっている。

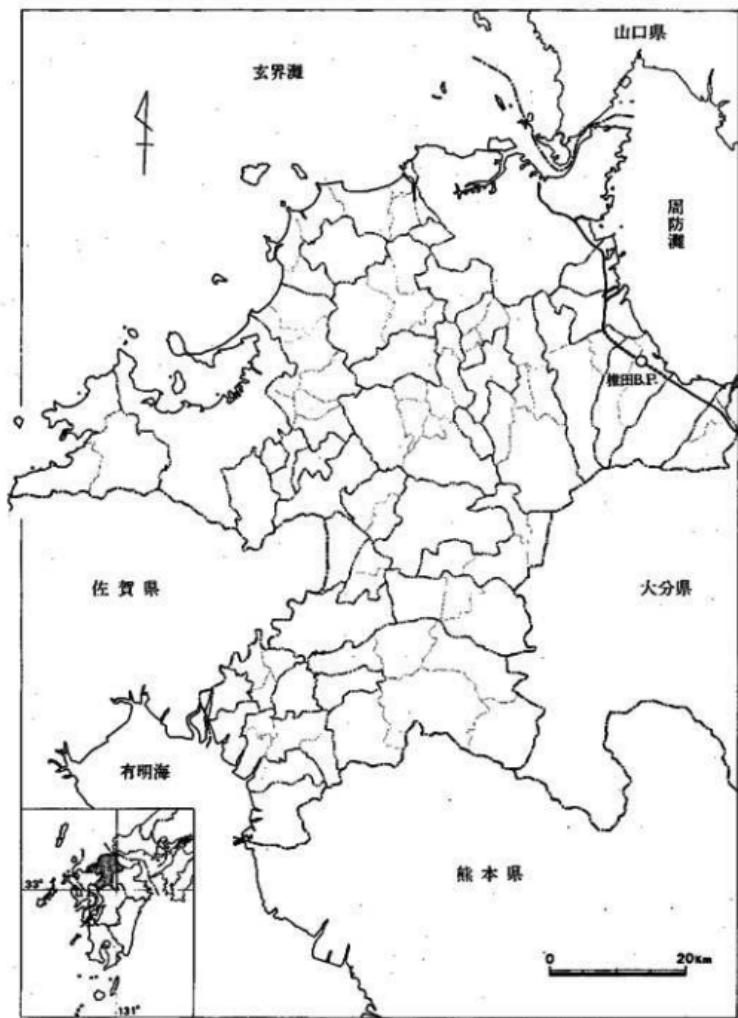
平成3年度は、1地点・神手遺跡、7地点(A・豪ノ神遺跡、B・赤幡森ヶ坪遺跡、C・十双遺跡)、9地点(広幡城跡・広幡遺跡)10地点・山崎遺跡、11地点・尾久保屋敷遺跡、13地点・日奈古寺尾遺跡についての整理を文化課甘木事務所、同太宰府事務所、九州歴史資料館等で行うとともに、報告書が刊行され(6～9集)、日本道路公団からの委託による椎田バイパス関係の事業は完了したのである。

本書においては、第9地点の広幡城跡・広幡遺跡について報告する。

1. 調査の経過

広幡城跡・広幡遺跡の発掘調査は、昭和63年(1988)7月から開始し、翌平成元年(1989)3月に終了した。

第9地点としては、はじめ広幡城跡のみの名称であったが、山頂の山城跡に加えて裾部にも竪穴住居跡等が検出されたので、この裾部の方を広幡遺跡と別称することとした。広幡城跡で約6,200m²、広幡遺跡で約2,600m²の面積、計約8,800m²を調査したが、これは平面積であつて、実際には斜面がかなり含まれるので実面積はもっと広くなる(付図1・2)。



第1図 一般国道10号椎田バイパス路線位置図(約1/850,000)

表 1 10号線椎田バイパス関係遺跡一覧表

地点	遺跡名	所在地	内 容	分布面積 (m ²)	調査地区と面積			備 考	報告書
					61年度(m ²)	62	63		
1 神手遺跡	黒瀬町池永	弥生・古墳集落、墓地	1,200	試掘(1,200)	1,000			6集	
2-A 言見遺跡	吉見	弥生・古墳・奈良集落	9,600	試掘	9,600			3集	
2-B ハツ重遺跡	*	*	11,000	*	11,000			黒瀬町委託 1集	
2-C 弓田遺跡	下原	*	3,300	*	3,300			*	1集
2-D 下原遺跡	*	*	2,000	*	2,000			3集	
2-E	*	*	*	*	2,000			3集	
2-F カワラケ田遺跡	吉見	*	3,000	*	2,900			3集	
3	栗城町船迫	土塚		4,683			4,683	4集	
4	*	*						遺構なし	
5	安武	弥生散布地	4,547	試掘	4,547			4集	
6-A 安武・土井の内遺跡	*	桃文・旁生・古墳集落	5,300	*	800	4,500		4集	
6-B 安武・深田遺跡	*	弥生・古墳集落、墓地	22,000	*	11,000	11,000		4集	
7-A 萩ノ神遺跡	赤瀬	中世石横	450	*		450		8集	
7-B 赤瀬・森ヶ原遺跡	*	古墳～平安集落	20,800	*	2,000	18,800		8集	
7-C 赤瀬・十羽遺跡	*	桃山・古墳集落	9,500	*	7,500	2,000		8集	
8 広末・安永遺跡	広末	*	5,900	*	4,900	1,000		5集	
9 広幡城遺跡	水原	弥生・中世城跡	13,800	*	13,800			9集	
10 山崎遺跡	椎町水原	桃文・奈良集落	7,200	7,200				7集	
11 尾久保屋敷遺跡	*	古墳集落	160	160				7集	
12 日奈古寺尾跡	日奈古	*	5,800	5,800				7集	
16	山本				試掘			遺構なし	
18	上り松		*	*				遺構なし	
21	石堂中後ヶ谷古墳群	石堂	古墳墓地	19,500	19,500			2集	
22	葉切古墳群	福間	*	11,000	11,000			2集	
23	須無古墳群	山野	*	15,000	15,000			2集	
24	石堂				442			遺構なし	
	計			175,740	(4,800) 58,660	32,242	44,547	42,433	

以下、調査日誌を抄録して経過を辿ることとする。

昭和63年（1988）

7月7日(木) 道路公団と調査に着手する件で協議。

22(金) 現地へユニットハウス、器材を搬入。

26(火) 重機に入るも雨にて動けず。トイレ設置。水原区区長へ挨拶。

28(木) 広幅遺跡について重機稼動す。

8月1日(月) 作業員入る。テント設営。

5(金) 造構検出と発掘。16:00すぎより雷雨。

10(水) 住居跡らしき造構が現れる。

17(水) 広幅城跡について発掘前の現況における気球写真撮影。

18(木) 広幅遺跡の遠景写真。

25(木) 1・2号石垣の調査。レベル

移動。

30(火) 1号墓発掘。広幅城跡の現況

地形測量にとりかかる。

9月1日(木) 福岡県文化財保護指導委

員・宮本工氏来訪。

6(火) 広幅城跡の路線内現況測量お
わり。

8(木) 広幅城跡のS X 1周辺の表土
を除去。S X 1の石組が横穴墓の
閉塞石のようにみえた。

9(金) 2号住居跡より子持勾玉出土。

また、溝5の南側造構面より青磁
・白磁・陶器・土師器・スラッグ
などが出土。

13(火) 地質測定を始める。溝5の南に
は5~7軒の住居跡があるようだ。
(15~29の間、現場休止となる。)

30(金) 現場再開。10号住居跡より多
量の炭化米出土。

10月4日(火) 包含層の発掘にとりかか



Photo. 2 広幅遺跡調査風景



Photo. 3 広幅遺跡10号住居跡付近

る。

12(火) 1号土壠より二彩の小壺出土。

17(月) 広幡遺跡全体写真。

19(水) 萩城小学校 6年生28人来訪。

包含層の発掘を手伝う。

25(火) 広幡城跡頂部の遺構検出を始める。

28(金) テントを広幡城跡の方に移す。

31(月) 広幡遺跡については発掘も図面も全て終了。広幡城跡の報の発掘。

11月 1日(火) 広幡城跡の調査に本格的にとりかかる。

2(水) 土層の写真撮影、実測及び堀の発掘等をすすめる。併せて 1 / 100 平板測量を行う。

4(金) 築上郡文化財協議会長・松下辰章氏来訪。

18(金) 土層用土堤の除去。平板測量をすすめる。

22(火) SX 1 の発掘始める。

30(木) SK 1 より永楽通宝出土。レベル 59.505 m。

12月 6日(火) 広幡城跡の用地外の平板測量 (1 / 200) を始める。

13(水) 航空写真撮影に備えて清掃。

14(木) 天候不順にて航空写真は中止。

SX 5~7 の検出。

19(火) ヘリコプターによる航空写真撮影。

22(木) 碓石その他の写真撮影。

26(月) 本年の調査おわり。

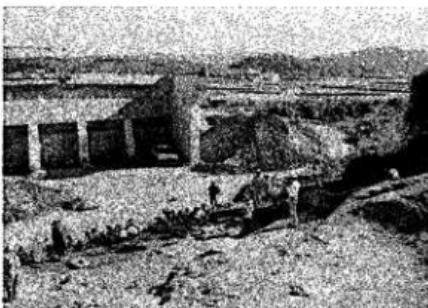


Photo. 4 萩城小学校 6年生の社会科実習



Photo. 5 ム・ム……何かあるぞ!?



Photo. 6 広幡城跡での完全防備の勢姿

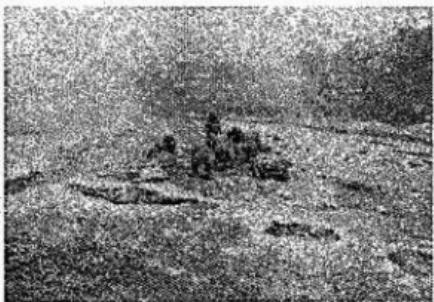


Photo. 7 SX 5～7の発掘



Photo. 8 葛城小学校 5年生の実習



Photo. 9 降雪中の作業

昭和64年（1989）

- 1月6日(金) 仕事はじめ。
7(土) 昭和天皇 6：33崩御。
9(月) 平成元年となる。
10(火) 暖かい一日であった。広幡城跡頂部の弥生遺構の発掘を続行。
13(金) 葛城小学校 5年生29人来訪。
発掘を手伝う。
16(金) 貯蔵穴や S X, S K等の発掘
と実測を併行して行う。
20(火) 新聞発表を行う。
27(火) ものすごい雪となる。それで
も実測、発掘を行う。
2月10日(金) 雪ひどし。
15(水) 気球写真をとる。
20(月) テントを撤去し、器材の一部
を片づける。実測と写真撮影等の
詰めの作業を行う。
26(日) 広幡城跡のⅡ郭・Ⅲ郭等の測
量を始める。
3月1日(水) 遠景写真。
2(木) 広幡城跡の発掘調査全て終了。
路線外の測量を行う。
6(月) 広幡跡の路線外部分の測量
を行う。
14(火) 花ぐもりのような一日。広幡
跡の測量おわり。
17(金) 広幡城跡の測量おわり。
18(土) 全て終了。

2. 調査組織と関係者

調査関係者は次のとおりである（昭和63〈1988〉～平成3〈1991〉年度）。

日本道路公团福岡建設局

局長	杉田 美昭（前任）	白井 信（前任）
	中島 英治（前任）	加藤 典次
次長	吉岡 康行（前任）	進 哲美（前任）
	高野 武（前任）	渡辺 国几
総務部長	安元 富次（前任）	進 哲美（前任）
	堀 義任（前任）	岡本 房徳
管理課長	副島 紀昭（前任）	江良 信弘
管理課長代理	三野 徳博（前任）	荒木 恒久（前任） 堀本 文康

日本道路公团福岡建設局椎田パイバス工事事務所

所長	山田 将博（前任）	大島 敏
副所長（事務）	佐藤健一郎	
副所長（技術）	坂牧 崇三（前任）	国本 忠敬
庶務課長	櫻川 敏博	
用地課長	二神 鉄男（前任）	益岡 政夫
工務課長	佐々木俊治（前任）	飯田 文夫
築城工事区工事長	山口 宗雄	
椎田工事区工事長	黒田 義樹	

福岡県教育委員会

総括

教育長	竹井 宏（前任）	御手洗 康
教育次長	大鶴 英雄（前任）	酒井 雄幸（前任）
	光安 常喜	龜谷 陽三
指導第二部長	大平 岩男（前任）	月森清三郎
指導第二部参事	葉石 勲（兼任）	
文化課長	葉石 勲（前任）	六本木豊久（前任） 森山 良一
文化課参事	森本 精造	石松 好雄

文化課課長補佐	平 聖峰（前任）	安野 義勝（前任）
	国武 康友	松尾 正俊
文化課課長技術補佐	宮小路賀宏（前任）	石松 好雄（前任）
文化課参事補佐	柳田 康雄	井上 裕弘

文化課参事補佐 濱田 信也 副島 邦弘 石山 熊
清水 生輔

庶務・管理

文化課庶務係長	池原 勝二（前任）
文化課管理係長	岸本 実（平成2年度から）
文化課主任主事	沢田 俊夫（前任） 安丸 重喜

調査

文化財保護室室長	石松 好雄（兼任）（平成3年度から）
文化課調査班総括	柳田 康雄（兼任）
同 総括補佐	井上 裕弘（兼任）
同 技術主査	木下 修（現北九州教育事務所）
同 技術主査	中間 研志（現福岡教育事務所）
同 主任技師	伊崎 俊秋（現京築教育事務所）
同 主任技師	飛野 博文
同 主任技師	小田 和利
同 技師	水ノ江和同
同 文化財専門員	木村幾多郎（現大分市歴史資料館長）
同 文化財専門員	日高 正幸
同 調査補助員	高田 一弘
同 調査補助員	武田 光正（現遠賀町教育委員会）

〈発掘作業員〉

今川 和子・奥 フサエ・奥村 端子・前田 フサエ・仲 律子・横本 富代・西森ヒサ子
 久本 英子・海津 恵子・吉園 洋子・田原フジ子・木戸 時子・森渕アツ子・横田みち子
 森 伸美・久保 年子・鎌田つる代・横田シズ子・宮原 操・上田 荘子・加来 咲美
 奥本ツジエ・正野 鈴子・井上 洋子・井上 正子・西 一枝・井上フミヨ・高橋 知子
 加藤 弘義・横田 昇・横田 信雄・河上倉之助・杉野 政一

その他、下記の機関ならびに諸氏には発掘調査期間中および報告書作成の段において、多大なる御協力・御援助・御教示等を賜わった。記して深甚の謝意を表します。

福岡県教育庁京築教育事務所・県立求善資料館・椎田町教育委員会・築城町教育委員会・

築上郡文化財協議会・椎田町文化財研究協議会・築城町文化研究会・国立博物館誘致対策室・
椎田町水原区

村本建設㈱・岡崎工業㈱共同企業体・南日本高圧コンクリート㈱・福島建設

濱島三司・宮本工・川本義継・一川淳江・飯田昭・大尾勝美・相原孝行・松中猛・宮田隆・
上杉兼春・今田義雄・百留隆男・大木本法通・森重高峯・上田初利・高橋章・谷口知子・鳥井
義明・廣畠博・小松憲道・浦本陽子・尾座本康子

重松敏美・松下辰章・竹下鐵生・高島悟・多田寛・西野浩平・合羅謙治・棚町信康・大塚清
美・横山康子・菅野彌栄子・杉本和子・川本壽子・井無田栄子・掠野恵子・井上九三郎・中原
三重子

横田義章・大塚健・濱田信也・石丸洋・小池史哲・末永弥義

小島佐枝子・西奇子・中塙屋リツ子・藤井カオル・石井紀美子・渡辺輝子・大野愛里・近藤
美恵子・高瀬照美・塙足里美・豊福弥生・岩瀬正信・高畠美智子・古賀陽子・砥上トシ子・武
藤睦子



Photo. 10 作業員一同

II 遺跡の立地と歴史的環境

広幡城跡および広幡遺跡は、福岡県篠上郡椎田町大字水原653-1, 2, 654, 663, 664-1, 2, 665-1, 2, 3, 666, 667, 671-1, 2, 676, 677, 678, 679, 680、その他に所在し、広幡城跡のごく一部は隣接の篠町大字広末にかかっている。この広幡城跡は、「福岡県遺跡等分布地図（豊前市・篠上郡編）」には940008の番号にて周知の遺跡となっており、「鎌倉時代、丘陵端付近に所在」との概要説明がなされている。

また、同分布地図には、この広幡城跡の東方に940007の番号で「広幡八幡宮跡」という神社跡が存することになっていて、概要説明は広幡城跡のそれと全く同じである。この広幡八幡宮の存した場所というのが今回調査した広幡遺跡の周辺にあたるのか、もっと離れているのかよくわからない。

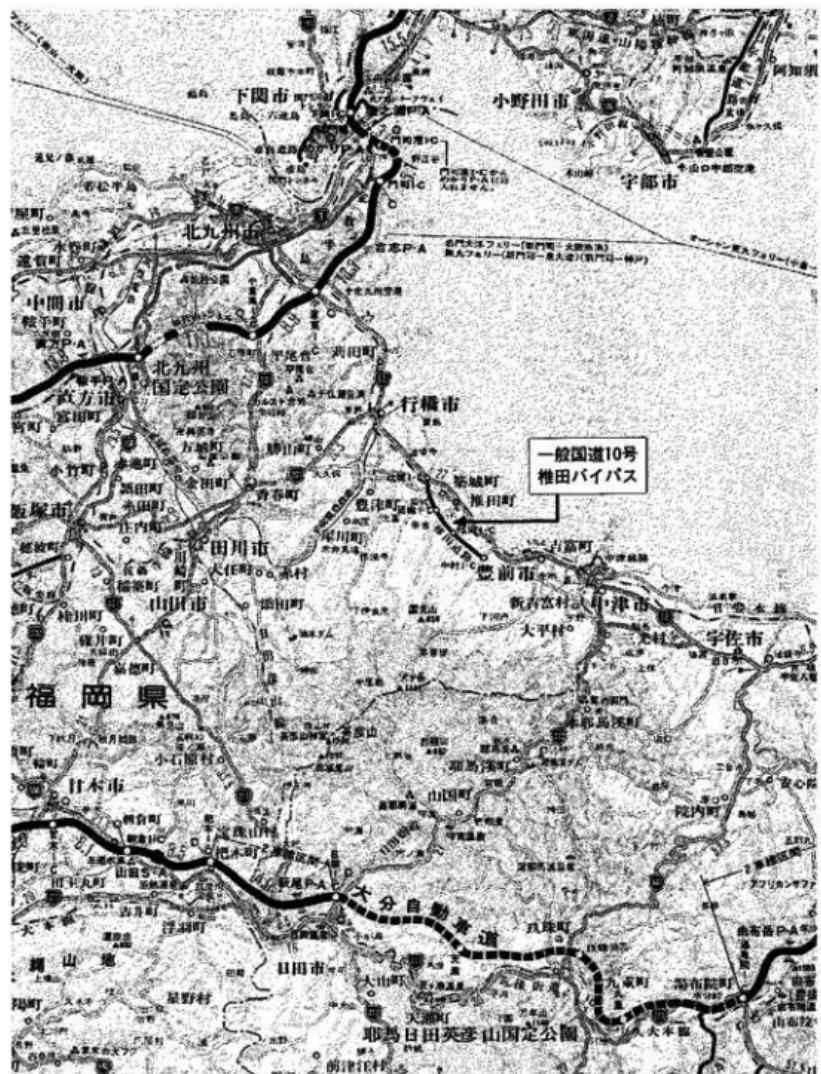
1. 立 地 (図版1~3, 第2図)

福岡県の東端部に位置する行橋市・京都郡・豊前市・篠上郡のいわゆる京築地方は、九州山脈の中の一峰たる英彦山・犬ヶ岳・求菩提山・国見山等から派生していくつもの尾根が周防灘に向かって八ツ手状に伸びて横たわるという地形的環境をなしている。それらの丘陵はわりと高峻なもの、なだらかなものがあるが、ここに報告する広幡城の位置する丘陵は、直接的には求菩提山・国見山からやや東に偏しつつ北へと派生してきて、その先端部付近では屈折して東西方向に尾根を有することになる。ここは北に急で南に緩やかな地形をなしており、山城としての立地上きわめて重要なポイントとなっている。

広幡城跡は頂部で標高約60mを測り、眼下には丘陵西に小山田川が、東に岩丸川が流れ、丘陵先端部で合流してのち椎田浜宮で周防灘に流れ込んでいく。ここから現在の海岸線までは直線で3kmしかない。城跡頂部と周辺の田地とは比高差が40m程ある。

広幡遺跡は広幡城跡の東南裾部にあって、岩丸川左岸の水際に近い所と言つてよい。この標高20~36mの所で各種遺構を検出した。

なお、広幡城跡の頂部に立つと、晴れて空気が澄んでいる日には、遠く東は国東半島とその先端に姫島が、北方には中国地方の山口県宇部市付近の工場群までもが鮮明に眺望できる。あるいはもっと遠く光市のあたりまで見えているのかもしれない。ただし、発掘調査を実施していた期間（1988年8月~1989年3月）の中で、上述の所が見晴るかす眺望したのは僅かに数えるしかなかった。



第2図 一般国道10号姫田バイパス周辺地理図 (1/500,000)

(日本道路公团1991.12発行を転載)

2. 周辺の遺跡（第3図）

広幅城跡・広幅遺跡のある椎田町と隣接の築城町においては、従来はそれほど多くの遺跡が周知されているとはいえない。昭和43年（1968）3月に刊行された「全国遺跡地図（福岡県）」では、椎田町は2ヶ所の古墳群が示されているにすぎず、築城町でも7ヶ所の遺跡しかとりあげられていなかった。1976年に福岡県が作成した分布地図では、椎田町が34ヶ所、築城町は45ヶ所の遺跡がリストアップされた。

その後15年程を経過する中で、椎田バイパスの建設あるいは農業基盤整備事業（ほ場整備）等に伴っての発掘調査が行われるようになり、遺跡の数はどんどん増え続けている。椎田バイパスに関連した調査は、まさしくこの一帯に幅35~60mのトレンチ（試掘壕）を延々と設定したものであった。

この路線内で築城町・椎田町の遺跡を見ると、3地点、6A地点・安武士井の内遺跡、6B地点・安武深田遺跡、7A地点・塞ノ神遺跡、7B地点・赤幡森ケ坪遺跡、7C地点・千双遺跡、8地点・広末安永遺跡の7ヶ所が築城町、10地点・山崎遺跡、11地点・尾久保屋敷遺跡、13地点・日奈古寺尾遺跡、21地点・石堂中後ケ谷古墳群、22地点・桑切古墳群、23地点・頭無古墳群の6ヶ所が椎田町で新たに加えられたことになる。築城町の5地点と椎田町の9地点・広幅城跡は以前より知られていた遺跡であった。

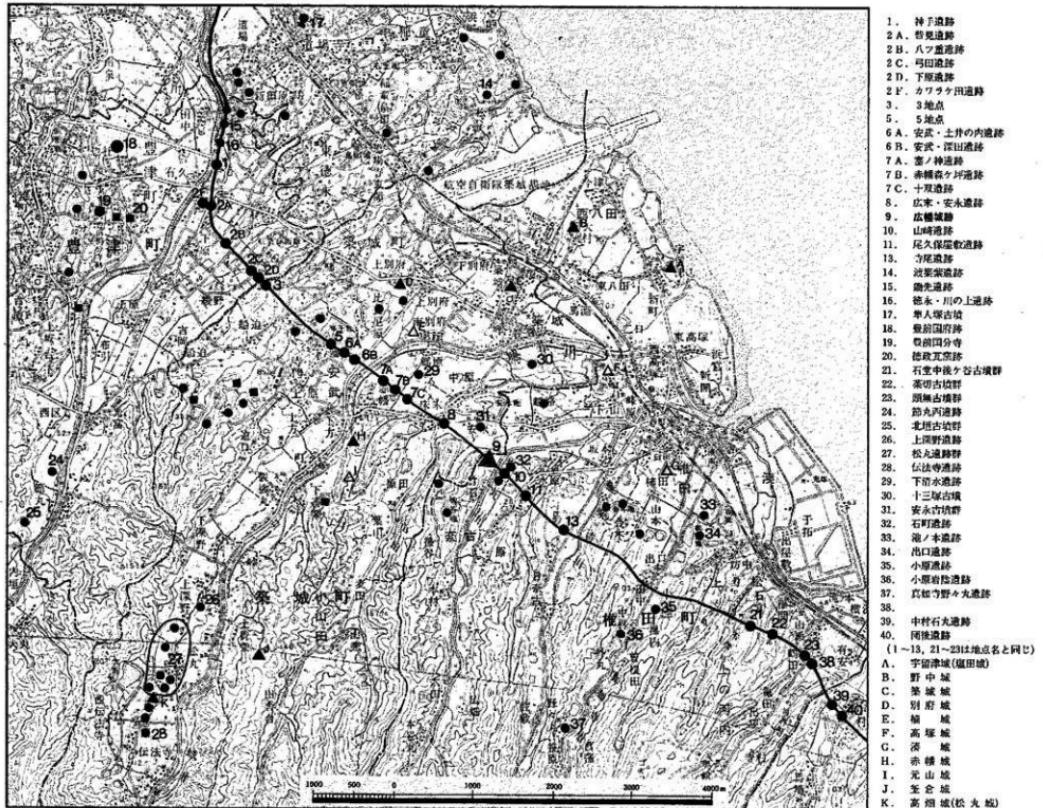
また、ほ場整備事業に伴って水田地を試掘したり、発掘調査を行うことが多くなってきたが、これによっても新しい遺跡が次々と発見されてきている。椎田町で見ると、小原遺跡、水原遺跡、池ノ本遺跡、真如意寺野々丸遺跡などがあり、築城町では下清水遺跡、安永遺跡、十三塚古墳、上深野遺跡、松丸遺跡群（A~F地区）、伝法寺遺跡、本庄遺跡などがあげられる。

以上のことから勘案してみると、今までの分布地図にドットがなく空白であった所は、遺跡がないのではなく、これまでに発見されていないのであって、かえって存在する可能性が高いということを示しているようである。

さて、周辺遺跡についての紹介は、すでにいくつか行われているので、それらを参照していただきたい。ただ本報告と時代的に関連する遺跡を周辺の知られている中から拾いあげると、繩文時代後期では、岩丸川をはさんで広幅遺跡とすぐ対峙した所に石町・山崎・水原遺跡が存する。これらは名称は異なるものの本来は同一の遺跡の広がりである。

弥生時代前期は、築城町下清水において石棺墓群の検出を見るが、あと赤幡森ケ坪遺跡において土器片の出土を見るのみである。それ以外には旧京都・仲津郡まで視野を広げないと近在しない。弥生中期の前半段階までだと広幅城の北方眼下に広末・安永遺跡が存する。

古墳時代後期（6世紀末~7世紀）から奈良時代あるいは平安時代にかけては、この周辺でも遺



第3図 广幡城跡周辺遺跡分布図 (1/50,000)

跡がかなりふえてくる。舌状丘陵の頂部あるいは先端付近に群集墳がみられ、その周辺低台地上には集落が形成されている。集落は築城町が安武・深田遺跡、同土井の内遺跡、赤幡森ヶ坪遺跡、椎田町で石町遺跡、山崎遺跡、池ノ本遺跡などにて検出・調査されており、とくに、赤幡森ヶ坪遺跡の奈良～平安期の住居群は注目される。古墳群は調査されたものは安永古墳群くらいのものであり、現在までに前方後円墳の存在を見ない旧築城郡の具体的様相はまだ詳らかにしえない状況と言つてよい。

中世期の遺構も、椎田町池ノ本・小原あるいは石町・山崎、築城町では赤幡森ヶ坪・松丸などで知られており、戦乱の多かったであろう時代背景の中での生活・生業の一端を垣間見ることが少しずつ可能となつてきつつある。

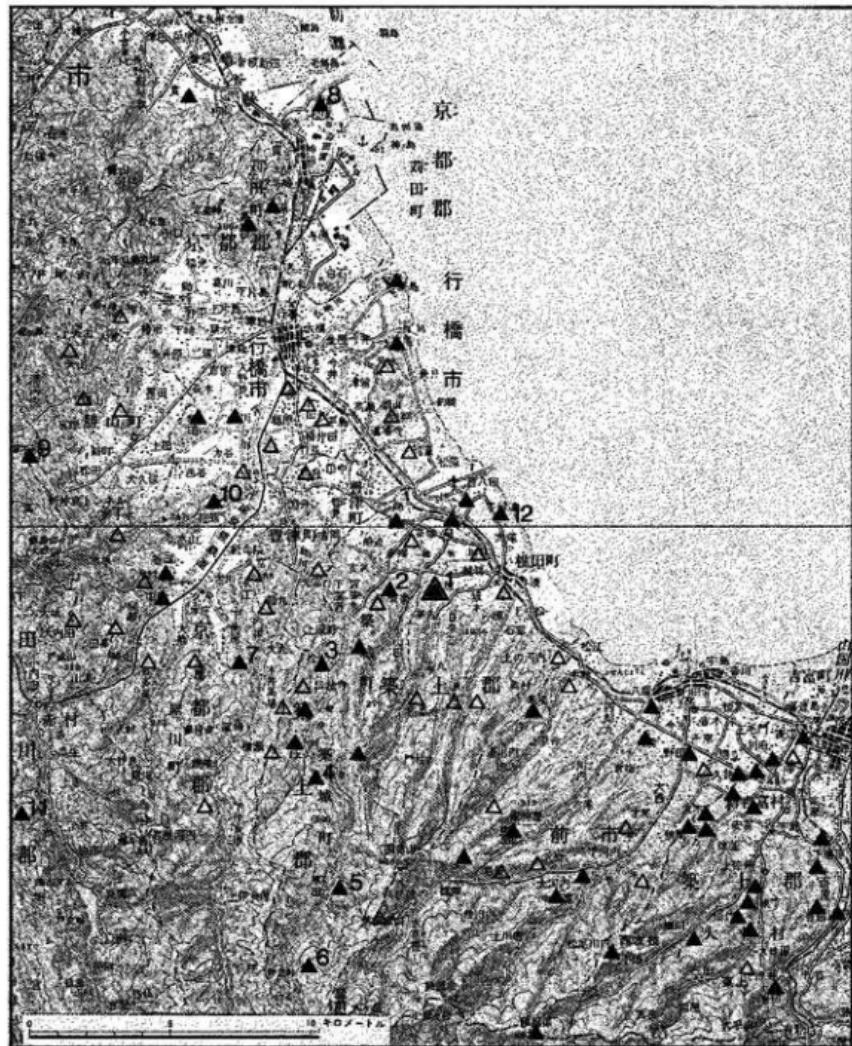
3. 周辺の山城跡の分布（第4図）

豊前国は中世期山城跡の多い所である。福岡県下全体では700ヶ所を前後する山城跡の存在が知られているが、そのうち豊前国（福岡県分のみ）は200ヶ所をこえる数が捉えられている。
〔註1〕それを単純に県下の面積比で分布密度を考えても、その占める割合は高いといわねばならぬ。

今回報告する広幡城跡は築上郡椎田町に存するが、所謂京築地方に限ってみても、行橋市・京都府で51ヶ所、豊前市・築上郡で70ヶ所もの城跡が知られている。それらは鎌倉時代から江戸初期までの約450年の間に築城されたものの集計であつて、決して短期間に営まれたものではない。ただ、大半は室町時代後半の戦国期に築城されたものであり、下剋上を常とする戦乱の世にあって諸豪族の興亡は著しいものがあった。必定、防御のためにも山城の築城が多くなったものと考えられる。また、豊前地方は瀬戸内海の西端にあたり、本州側から九州へ上陸する際の最初の地であるという地理的背景も、この豊前地方をあまたの戦乱にまきこむこととなったのである。

さて、広幡城の周辺を見渡すと半径2kmの範囲内でも赤幡城・元山城・楠城・高塙城の存在が知られており、さらに半径6kmとエリアを広くすれば、稻童城・黒岩城・高畠城・釜倉城・岩丸城・極楽寺城・真如寺城・馬場城・鳥越城・有安城・野中城・塩田城（宇留津城）・別府城・築城城・湊城といった城跡が存する。ともかく数が多い。しかし、その内容がごく一部なりとも具体的に知れるものは皆無であり、それらの詳細は今後の調査に委ねられる。これらの多くは山頂に立地する文字どおりの要塞としての山城であるが、いくつかの低台地に存するものは山城というより平地における居館の名残りを示しているのであろう。

もっと広い視野で周辺をみると、文献にもよく名の出てくるものに松山城（苅田町）、馬ヶ岳



第 4 図 豊前中部地方中世山城分布図 (1/200,000)

城(行橋市), 障子ヶ岳城(勝山町), 神楽城(犀川町), 本庄城・萱切城(篠城町), 香春岳城(田川郡香春町), 岩石城(同添田町)などがある。特に萱切城は戦国末期、城井宇都宮氏が、中津に封した黒田氏に反抗して拠点とした城とされており、天陥の要塞の地に営まれている。

以上をもふくめて、京葉地方の山城跡の中でこれまでに地形測量・発掘調査等の行われたものはごく僅かしかない。

松山城跡は周防灘に突き出た独立丘陵の、標高128mを最高所とする所に築かれている。ここは遺構の確認調査や踏査のあと、重要遺跡緊急確認調査を実施して主郭付近の測量、発掘、地形図作成など基礎資料の整備に努めているが、それ以外に土取り等に先立っての土星の調査なども行われている。こここの土星も主郭から延びて尾根上を屈折しつつ築かれて山麓の方へと続いている。

障子ヶ岳城跡は京都郡と田川郡の境にあり、標高427mを最高所とする尾根上に築かれている。こここの頂部のみで全長260mに及ぶ距離の中に5つの郭が造られ、それらは一直線に並ぶ連郭式の配置をとっている。頂部の地形測量が行われたのみで発掘は実施されていない。ここは京都平野から筑豊へぬける要衝の地である。

4. 広幡城についての文献

広幡城のことにつれた文献が江戸時代以降に幾つかあるので、知りえた範囲で以下に引いておく(①~⑤)。

また、広幡社(八幡宮)については中世に遡る文献があるので該当する部分のみ抜きだしておく(④・⑤)。

① 「豊前国古城記」 宝曆7年(1757)

城跡 一ヶ所 廣末村水原村堺廣幡山

右昔宮原中将と云ふ者切開き、其後城井民部重房出城に取立、瓜田春永と云ふ者城代此は如水に内通城井の郷案内せしよし。

② 「大宰管内志」 天保12年(1841)

豊前国六卷 築城郡

○廣幡社

〔宇佐大鏡〕に築上郡桑田郷云々……。廣幡は比呂波多と訓ムベシ……。

〔城井闘争記〕に鎮房家臣瓜田・春永兩人水原村廣幡城に在し由見えたり、

〔小出氏云〕築城郡廣幡八幡ノ社は越路村南、水原村ノ北に有て、両村ノ境なり、此社地ノ事早く論ありて、今は何れの内とも定め難し、此社より半町許上に、廣幡城のあとあり……。

③ 「豊前志」 文久3年(1863)

六之卷 築城郡

茅切山城址

本城村にあり。……

城井谷物語云、大野、勝又討死して、……

宇都宮鎮房は、廣幡城に御馬をとゞめ、寄手大方退散と見えたり、……

廣幡城山城址

廣末村と水原村との境にあり。宮原忠将築く。後、城井民部修造して、瓜田謙岐守春永を城代に置きしに黒田家に内通し城井城への簡募せしとぞ。

④ 「築上郡誌」 明治44年(1911)

第十六章 名所舊跡 第二節 舊跡

廣幡山城址

廣末村と水原村との境、岩力山の峯尾にありて、東西一町、南北三十間なりと、往昔、宮原中将の築く所にして、宇都宮鎮房之を修築し、家臣瓜田謙岐守春永を置きしが、天正の役に黒田氏の東道を為して亡ぶと。

⑤ 「舊城跡調」 大正5年(1916)

一、旧城名称及城主名

廣幡城 宮原中将ノ築ク所ニシテ宇都宮鎮房之ヲ修築シ家臣瓜田謙岐守春永之ニ居ル

二、位置及面積

葛城村大字水原岩力山ノ峯尾ニアリ東西一丁南北三十間

三、建物

建物ナシ

四、現在ノ所有者

葛城村大字水原共有

五、維持方法

維持方法ナシ

④ 「八幡宇佐宮御神領大鏡」(到津文書) 建久 8 年 (1197) 頃
(建久 8)

一、国々敷在常見名田 の項に

築城郡 桑田郷 田百六十二町六反番代 島

四至 東限赤幡社 南限伝法寺塙ニ石

西限船坂峯 北限熊瀬木大路

廣幡社 田十町 或注文六丁 近來被押領奈古庄天、所残僅一丁余也云々、

⑤ [到津文書] 天福 2 年 (1234) 頃
(天福 2)

注進 三ヶ社一丁二反内

除諸免事 広幡社十三丁七反 赤幡社七丁四反 橋社十一丁一反

註1 文化財保護委員会「全国遺跡地図(福岡県)」1968

椎田町は石堂北古墳群で 4 基、石堂南古墳群で 6 基の古墳が示されているのみである。築城町は船追、上野池(比丘尼原)、船追大池の各遺跡と船追南古墳群、船追南古墳群、船追窓跡である。

註2 福岡県教育委員会「福岡県遺跡等分布地図(豊前市・築上郡編)」1976

椎田町・築城町とともに 76までの番号が付けられているが、古墳群等を 1 ケ所として数えると少くなる。

註3 福岡県教育委員会「椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告一4-」1991

註4 福岡県教育委員会「椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告一8-」1992

註5 福岡県教育委員会「椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告一5-」1991

註6 福岡県教育委員会「椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告一7-」1992

註7 福岡県教育委員会「椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告一2-」1990

註8 1990年 椎田町教育委員会調査

註9 1991年 椎田町教育委員会調査

註10 1991年 椎田町教育委員会調査

註11 1991年11月試掘、1992年調査予定

註12 築城町教育委員会「安永遺跡」に所収(築城町文化財調査報告書 第1集) 1984

註13 築城町教育委員会「安永遺跡」(築城町文化財調査報告書 第1集) 1984

註14 1986年、築城町教育委員会調査

註15 築城町教育委員会「城井谷I」(築城町文化財調査報告書 第2集) 1992

註16 1991年11月の試掘にて発見。1992年調査予定。

註17 福岡県教育委員会「福岡県中世山城跡」

(「九州歴史自動車道関係埋蔵文化財調査報告書 XXII」 1979 付録)

『日本城郭大系18(福岡・佐賀・鹿児島)』新人物往来社 1979

- 註18 菊田町教育委員会「豊前国松山城」（菊田町文化財調査報告書 第8集）1988
菊田町教育委員会「豊前国松山城（土壘）」（菊田町文化財調査報告書 第14集）1991
- 註19 豊山町教育委員会「陣子ヶ岳城趾調査報告書」（豊山町文化財調査報告書 第4集）1991
- 註20 香春町教育委員会「香春岳」1992
- 註21 1992年報告書刊行予定
- 註22 「西州軍談」の著者・僧良喜が編したものという。巻首の序に宝曆七年とあるというから、その年までには成っていたと考えてよいだろう。
『福岡県史資料』第六輯 書目、解題
- 註23 伊藤常足によって文化元年（1804）から天保12年（1841）の間に完成された地誌。歴史図書社 1969復刻
- 註24 渡辺重春著。椎山閣 1971復刻
- 註25 福岡県教育会栗上支会
- 註26 福岡県教育委員会が県内各郡ごとに調査を依頼した結果の纏り。
- 註27 「宇佐神宮史」史料篇 卷四 1987より
- 註28 「宇佐神宮史」史料篇 卷五 1988より



Photo. 11 雪のあと求菩提方向をのぞむ

III 広幡城遺跡の調査

〈概要〉

広幡城跡については、当初は中世期の山城の遺構が存するのみとみていたが、調査をすすめていく中で、弥生時代や奈良時代の遺構も存することがわかった。よって、ここでは広幡城跡として各時代を包括するものとするが、もとより遺跡の主体は中世山城であるとして大過ない。今回の調査で検出された遺構、遺物を時代別に記すと、次のようになる。次項以下においてはその時代毎に順次説明してゆく。

◎中世

- 山城跡…………堀・土塁を巡らせた郭3（調査したのはⅠ郭とⅡ郭の一部）
 - 縦堀・虎口など
- 〈Ⅰ郭内〉——礎石と思われる大石14個
 - 土壇7基（SK1～SK7）
 - 建物跡1棟（SB1）
 - ピット
- 〈南斜面〉——建物跡5棟（SX1, 5～8）
 - 出土遺物……瓦質・土師質の擂鉢・壺・鉢・鍋・釜等の土器、白磁片1、永楽通宝1
 - その他

◎奈良時代

- 火葬墓1基
- 出土遺物……骨蔵器・須恵器・土師器

◎弥生時代

- 穴住居跡6軒
- 貯藏穴9基
- ピット
- 出土遺物……弥生土器・磨製石斧・打製石鎌

上記遺構のうち、礎石とした石はⅠ郭内にあちこち点在し、土壇はⅠ郭中央に空白地帯を設ける如くに周縁に位置する。SB1とした建物は虎口を守護する所にある。南斜面の建物跡は

SX1とSX8が櫓跡をはさんでⅠ郭直下にあり、SX5~7はこの山城への登っていく途中にある。

火葬墓はⅠ郭SZⅡの西南に単独で存した。周辺の須恵器等の分布状況からみて調査区外にもまだ存するかもしれないが、1号としておく。

弥生時代の住居跡はⅠ郭内の周縁部に位置する如くであり、貯蔵穴は西側に集中している感がある。

なお、この広幅城跡のⅠ郭とした所はもと地元水原区の区有地となっており、以前は桜の木が植えられていて、春には花見をする場所であったと聞いた。上記していない遺物の中に近世あるいは近代の所産になる磁器やボタン等がある。これらは花見の時の“置きみやげ”かもしれない。城跡の遺物のところでその最後の方に図示して説明を加えたい。



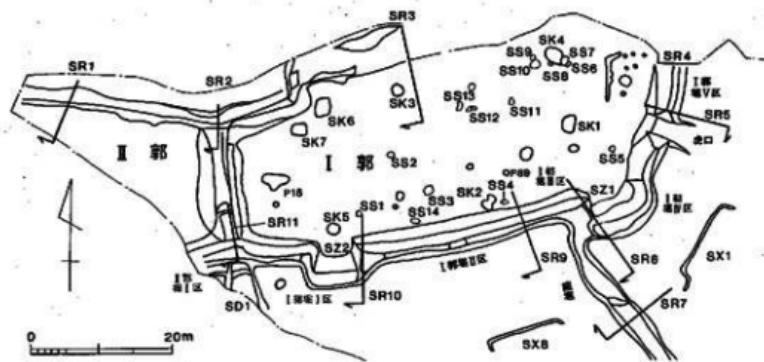
Photo. 12 広幅城跡空中写真（虎口付近）

A. 広幅城跡

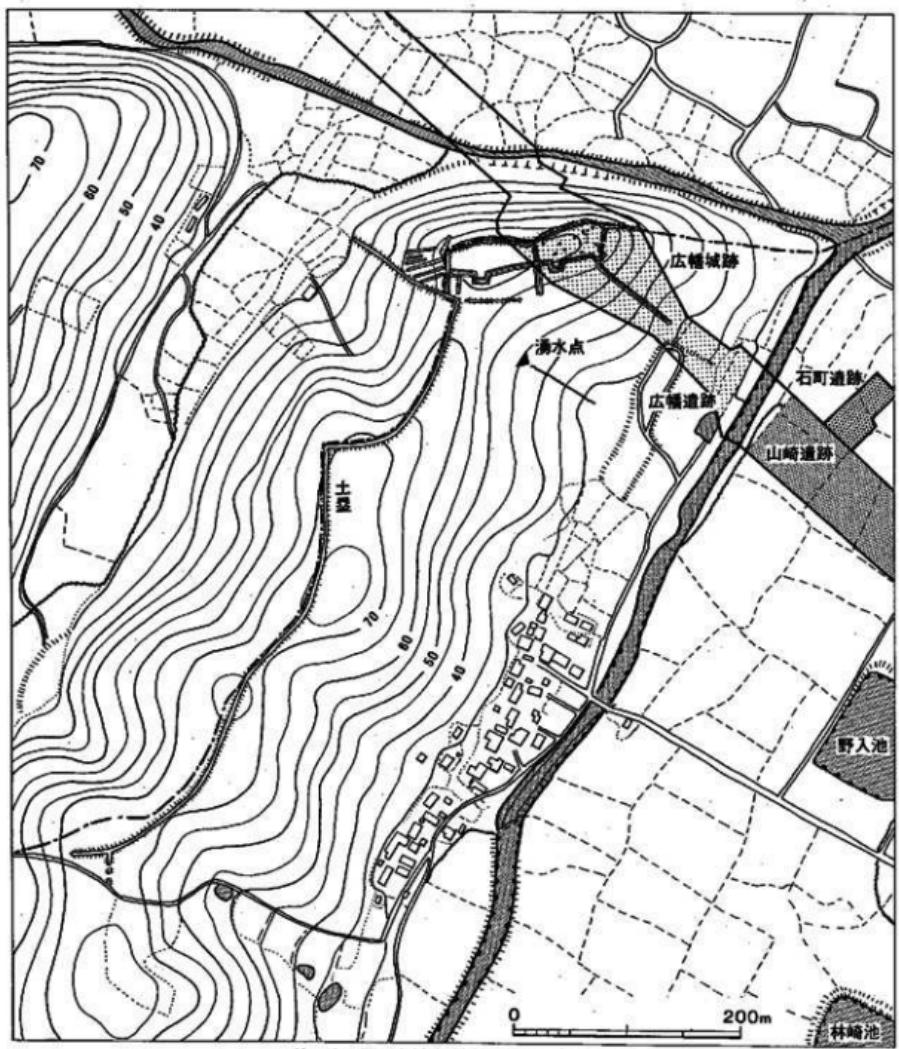
1. 調査区内外の遺構の状況（付図1・2、第96・97図）

城跡の各部分についての名称は、特に近世城郭史の立場から専門的な用語が多々使われているようであるが、それを中世の山城にまで敷衍して使用するのは何如か、とする意見も出されている。しかし、中世に山城をつくり、使用していた時点でのどのような名称が存したのかを知ることは至難のことであろう。ここでは、これまでの用語を援用しつつも、本報告の便宜上、土層岡等の場所もふくめて第5図に示すような呼称にて説明していくこととした。その一部について簡述しておく。

- 一郭・二郭・三郭……本丸・二の丸・三の丸と言われてきた所で、建物の存した場所になるが、ここでは郭と称しておく。曲輪とも表記されることもある。
- 堀……濠・堀の字もあるが、ここは堀とする。遺物の取上げ部位もあるのでI～V区に分けておく。
- 虎口……郭への出入口のことである。
- S Z……横矢掛りの一種で、折を二重にした形状にて張り出し部を形成する。出札とする呼称もあるようだが、いまは略称としておく。
- S K……土壤の略称。蘿芥捨て場・トイレ等の可能性がある。
- S S……建物の礎石に使用されていたらしい大石を略称しておく。



第5図 広幅城跡調査部分名称・遺構配図 (1/800)



第 6 圖 広福城跡周辺地形図 (1/5,000)

- S X…………建物跡として捉えうるもの（1・5～7，8）とその他の性格不詳の遺構で南斜面に存するものの略称。
- S R…………山城に残っている土壘の土盛の仕方、あるいは堀の埋没状況を知るために設定した土層観察用の土堤をこのように略称しておく。
- S D…………溝状のものをこのように呼んでおく。
- S B…………建物の略称。

広幡城のうち、バイパスの路線として発掘調査を行ったのはⅠ郭の全部とⅡ郭の東端部分、Ⅰ郭の南東斜面ということになるが、山城としての遺構はまだ西側の尾根上に広がりをもって遺存している。まず、周辺部分をも地形測量を行ったので、その平板測量図をもとに全体の様相を説明しておこう。

広幡城の郭の縄張りは連郭式と称すべきと思われるが、Ⅰ郭（本丸）とⅡ郭（二の丸）を東西に配し、Ⅱ郭の西南部にⅢ郭が配される。Ⅰ郭・Ⅱ郭とも南面に張り出し部（S Z 1～3）を配した堀が巡り、その堀の外側（南側）には土塁がつくられる。Ⅰ郭・Ⅱ郭の北面は土塁を配するのみで、土塁の外側は急崖となる。

Ⅰ郭南東斜面には1本の縱堀が走り、Ⅱ郭西斜面にも6本ほどの縱堀がある。Ⅲ郭の東西南の三方には土塁が配されるけれども、東側のそれは小谷の谷頭上部にあたり、あまり高いものではなく目立たない。西側から南側へとL字形に屈折してのびる土塁は高さ120cm程度のもので、特に南から南西へと伸びてゆくそれは途中でL字形に屈折しつつ、尾根上を延々と600mの長さまで確認され

る。またⅡ郭の南面の小谷の谷頭からは湧水があり、そこには石組がみられる。

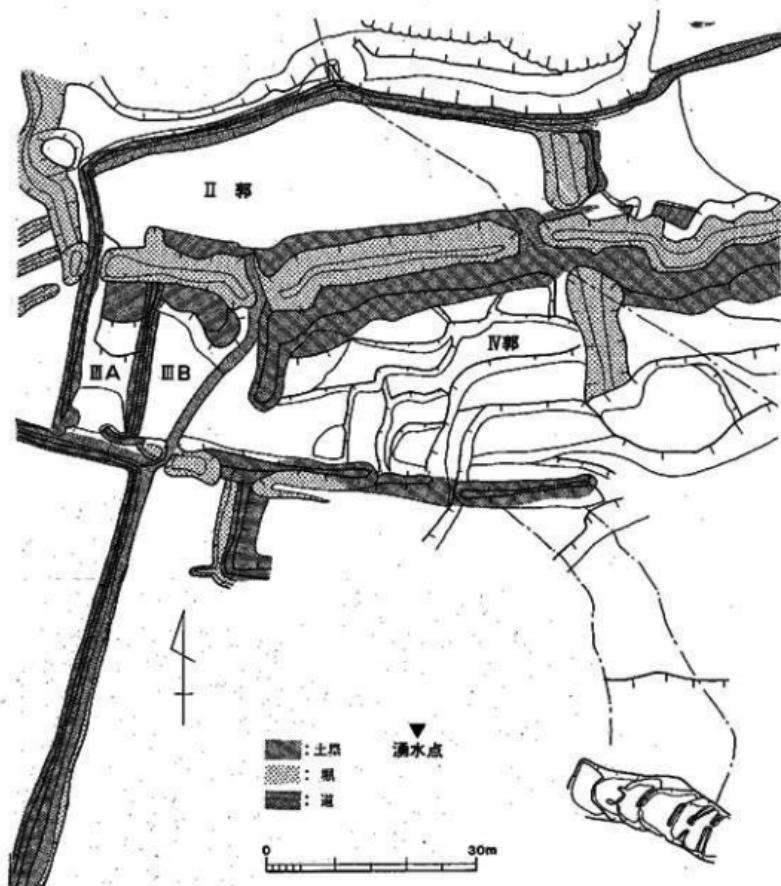


Photo. 13 広幡城跡尾根上に残る土塁

2. II・III郭の様相（付図1・2, 第7図）

I郭については次項で詳述する。

II郭は北面土塁が中央付近で尖っているので平面形は五角形状を呈す。平坦面のみで東西長63m, 南北長11~22mを測り面積1180m²。中央部がやや高くて東西へと少し低くなっている。



第7図 広島城跡II・III郭地形図(1/800)

礎石らしき石材は小さいもの1、2個を見たのみで、Ⅰ郭のような大石はない。北面土壘は西側で屈折して西面を画し、堀を分断してさらに南へ延びてⅢ郭の西面をも区画する。南面の堀の手前には土壘の名残りかと思われる僅かな高まりがある。中央よりやや西寄りの南面に巾5m程のSZ3(張り出し部)がつくられ、現状ではこのSZ3の西側部分が小道となっている。また、南面の堀はかなり深く掘られているが、東端近くで溝底が高くなる部分がある。おそらく虎口が存するのだろう。

なお、Ⅱ郭西北コーナーの外側には直径8m程の古墳のような高まりがある。中央部は盗掘により陥没しているが、円墳である可能性はきわめて高いものの断言しえない。あるいはこの古墳状の高まりを避けるように堀が巡るので、ここは隅櫓の基礎の如きものであるのかもしれない。

Ⅲ郭は西面はⅡ郭から続く土壘があり、東面はⅡ郭のSZ3の所から延長したような格好でのびる、あまり高くない土壘で区画される。南面は低い土壘と浅い堀とで区画される。東西長25m、南北長22mで約500m²の方形プランとなるが、中央やや西寄りに低い土壘状の高まりがあって郭内を東西に分けている。その西側の南端は土壘が途切れて門の如くなっている。ここを勢溜りとする見解もある。その西側ⅢA部のみでは150m²である。

Ⅱ郭、Ⅲ郭の西にはあまり深さのない縦堀が6本ほど走っている。しかし、それも30mほど行った所で急崖となって消え去る。

Ⅲ郭の東側・Ⅱ郭の南側は段々になってテラスがいくつかあるが、Ⅲ郭南面から延長した低い土壘がのびてきているので、あるいはここも郭と称してよいのかもしれない。これを仮にⅣ郭としておこう。Ⅰ・Ⅱ郭を画する堀の南方延長上に浅い溝状のくぼみがあり(SDI),ここまでをⅣ郭とすれば、東西長43m、南北長25~32mの長方形プランとなる。面積は1280m²。

このⅣ郭の南方に湧水点がある。



Photo. 14 広輪城跡Ⅱ・Ⅲ郭西端の土壘

3. 調査の内容

発掘調査を行ったのは前述のようにⅠ郭の全てとⅡ郭の東端部分、それにⅠ郭の南側斜面である。調査の主眼は、郭内に建物跡が遺存しているか否か、また堀と土塁の残存・埋没の状況はどうか、南側斜面に造構は存しないか等に置いていた。これを達成するためには人力にて表土から剥いでいたのでは到底対応しえないと判断より、重機（パワーショベル）を入れて、随所に土層観察用の土堤を残しつつ、全面を剥ぐこととした。

以下、各造構を説明したあと、出土遺物についてはまとめて後述する。

I. 調査前の状況（図版7、付図1）

まず、Ⅰ郭内外の調査前の状況から説明しよう。

Ⅰ郭は北面に高さ30cmに満たない土塁が残存し、その外は急崖となっている。4m程下った所には狭小なテラスがある。

西面はⅡ郭とを区する堀切があり、その内側には低い土塁の名残りが見られた。この堀切の南北にはⅡ郭へ通ずる狭い通路（土橋）が付いている。

南から東にかけてはSZ I・IIの張出し部2ヶ所を配しながら堀が巡り、堀の外にはその掘削土によって盛り上げた土塁がある。SZ Iの東北に虎口としいう出入口があり、石を置いてつくった階段と小さな石垣が遺存する。また、その北端の崖に近い所にも土橋があり、その東側の崖線際には土塁が残っている。SZ I西端部にも出入口らしきスロープがあり、そのすぐ横から雜堀が走っている。

Ⅰ郭の南斜面は目立った造構らしきものは見えなかつたが、虎口から下方へは通路状の踏み固めた部分が蛇行しつつ存した。また、のちにSX 1・5～7・8とする建物の存した所は、やはりテラスとして意識しうる広さの段が存した。

以下に、土塁と堀・虎口、郭内の造構、南斜面の造構に大きく分けて、土層図・測量図等をもとにしつつ説明してゆく。

II. 土塁と堀（図版7～18、第10図）

① Ⅰ・Ⅱ郭北端部の土塁・崖を含む北面

Ⅰ・Ⅱ郭北面の土塁は、郭内から見たとき西に高く東に低くなっていく。郭内の高さと比べれば、SR 1の所で110cm、SR 2で60cm、SR 3で50cmの高さが残り、Ⅰ郭東端部付近では土塁の高まりそのものが見当らない。

Ⅱ郭の土塁前面は幅80cmくらいの浅い溝状のくぼみになっており、武者走りとして機能していたものであろうか。SR 1・3には版築状の叩き締めは見られない。



Photo. 15 広幡城跡Ⅰ郭北端くびれ付近

Ⅰ郭の西端付近（SR2と3の間）は、SZⅡの張出しと対称の場所においてL字状の削り出しを行っていて、この部分がくびれ状となる。ここからⅡ郭の方へは幅100～150cmの犬走り状のテラスおよび溝状のくぼみが削り出されている。SR1で見ると、この犬走りの外に若干の盛土を行っている。また、SR3の西には長さ10mにわたって、斜面ながらも緩やかなテラス風の段がつくられている。

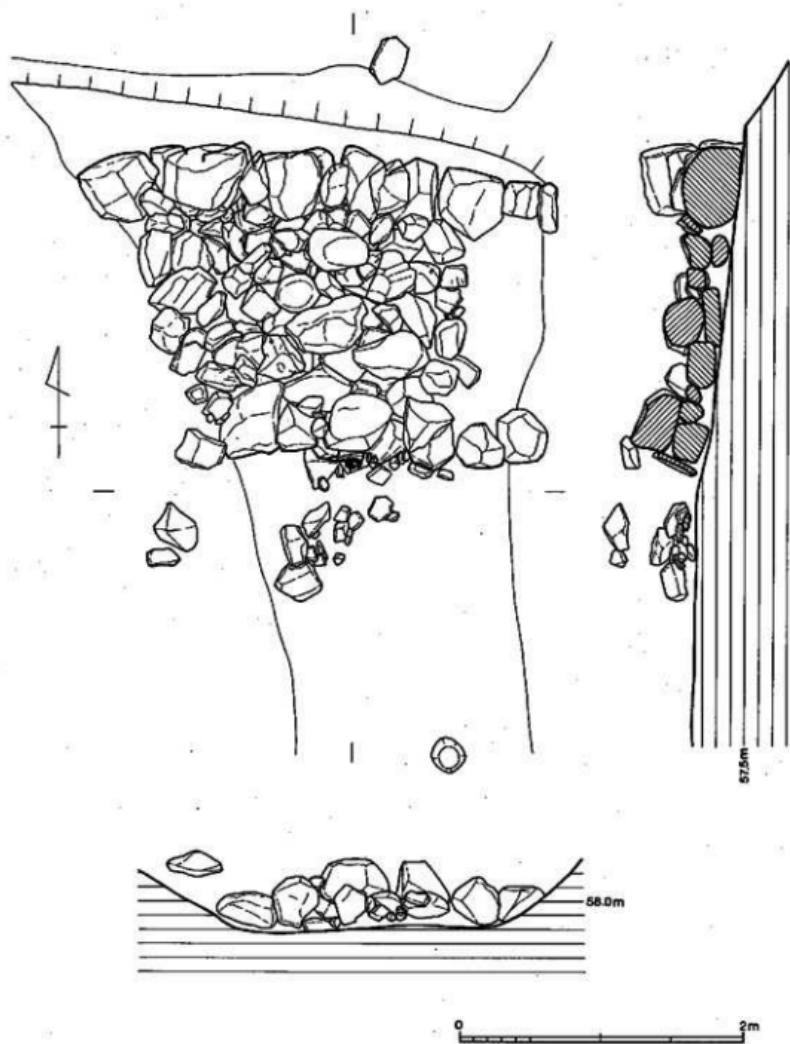
これらを見ると、北面としては急崖にて特別の防護工作を施さなくとも万全であったかのように思えるけれども、実際にはやはり最少限の対策は講じていたことが伺われる。

SR2と3の土壘盛土中からサヌカイト石鐵や黒曜石剝片、弥生土器、瓦質土器、磁器片が出土している。

② Ⅰ・Ⅱ郭間の堀切と土橋

I・Ⅱ郭間の堀切は幅5.5～7m、長さ16mにわたり、約1mの深さで掘られている。この堀と並行してⅠ郭の端には僅かな高まりの土壘の残存部分が存した。堀の横断面は緩やかな傾斜の逆台形状となる。

この堀を掘削してのち、北端と南端には礫石を敷きつめて土壘・土橋の基礎としている。SR2もSR11もその石組上の盛土は、黑色系の砂質土と地山の黄褐色系の土を混ぜた砂礫土と



第 8 図 広幡城跡 SR 2 下の石組実測図 (1/40)

を版築状に積上げており、崩れないようにとの配慮がみられる。なお、SR2の高まりは北面土壘の延長であり、土橋はその内側に土を埋め込んでつくられている。

SR2下の石組（図版11・12、第8図）

北端に10個、南端に8個の石を置き、その両者の210～220cmの間に、敷き並べるというよりは空間をうめていくようにして石を置いて石組としている。基本的に重複のない一段のみの石組だが、所々で二段積みの部分がある。頁岩質の角張った石塊を用い、一部に地山に入りこんでいる凝灰岩質のくされ礫の大きなものを使用している。最大のものでも直径50cm程の大きさしかない。

南端に8個置かれた基礎の石の前面（南面）に、幅20cm強、長さ30cm、厚さ4cm程の板状の石（スレート）があたかも立てかけたかのように置いてあった。この石の表面は黒く煤けた如く変色しており、何か書いてあるように見えるが定かではない。土器の基礎として石組をつくったときに、普請の一環として地鎮的な意味あいで置かれたものかもしれない。

SR11下の石組（図版12・13、第9図）

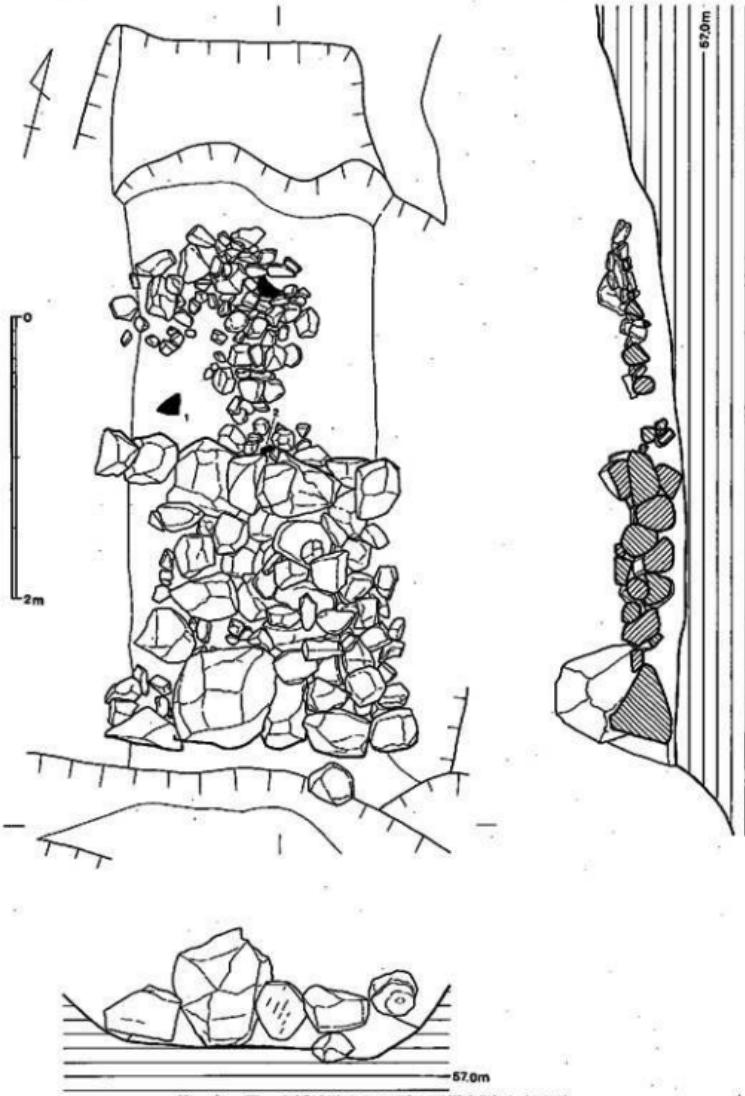
SR2の下部と同様の石組である。北端部は7個、南端には5個の石を置き、その210～220cmの間には石が二重に置かれている部分が多い。南端の5個のうち1個は直径70cmをこす大きさである。他の石はSR2下のそれと大差ないが、玄武岩・頁岩・凝灰岩といった石材がある。さらにはこの石組の北側に、より小さな礫石の集積があった。これらは地山面より15cm程浮いていて、その下には若干の炭化物層が存した。

この石組内から土器片と砥石が出土している。土器も砥石も底面より少し浮いた状態での出土であるが、この山城を築造した当初に間わる遺物とみてよいだろう。

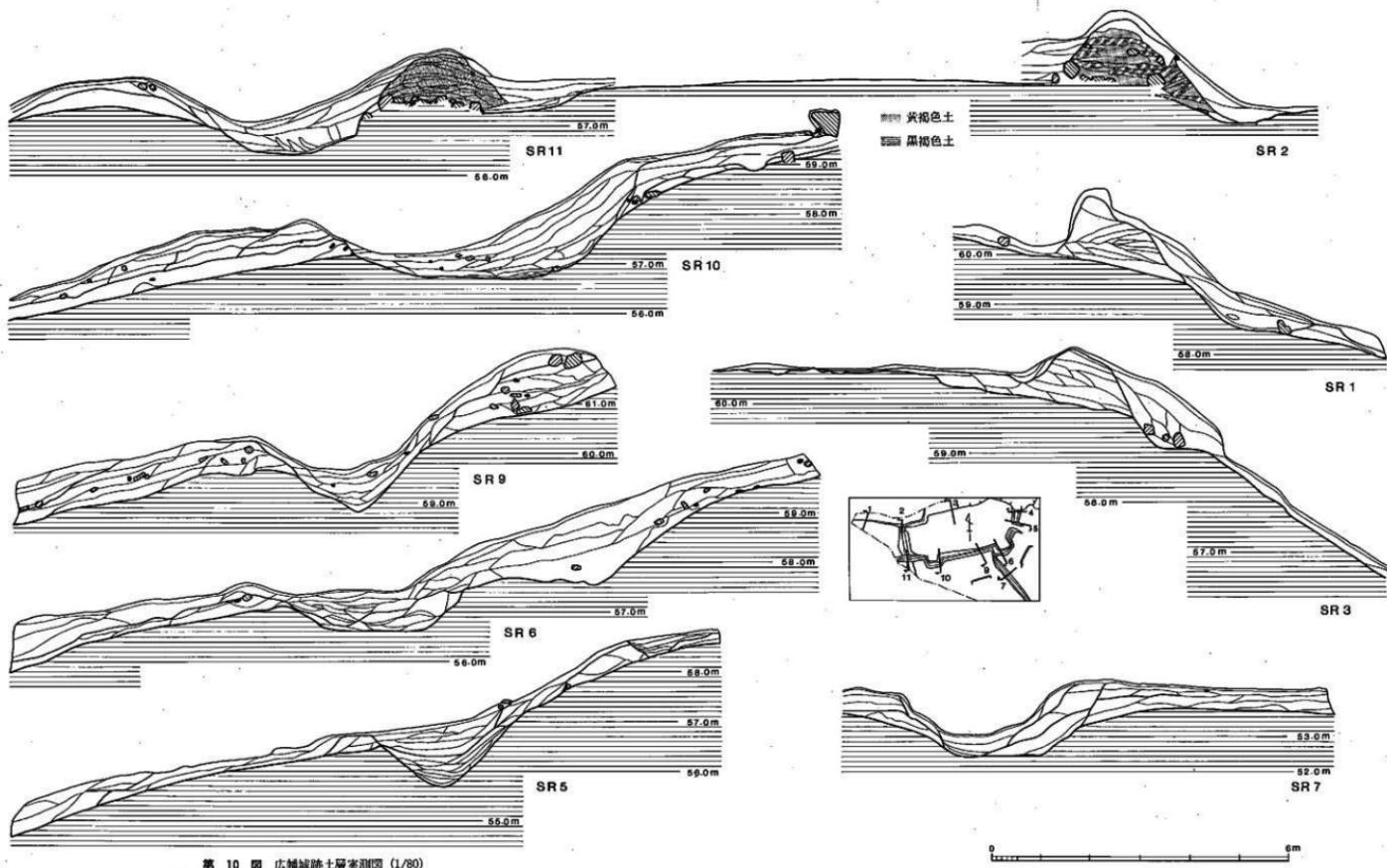
③ 南面の堀とSZI・II（図版14～17、第10・11図）

調査区内では、II郭の南面の堀のごく一部とI郭の堀がSZI・IIを取り込んで検出された。堀の外側にはこの堀を掘削したときの排土を盛り上げた土壘がある。また、SZIIの所にも僅かながら土壘の名残りがあった。

堀についてはSZI・IIの部分を除くと、薬研掘りに近いV字形断面にて掘削されている。当然のことながら、郭内である北側が高くて、南側が低いという横断面の形状になる。地山面で上端幅3.5～4.5mを測るが、もとの土壘の存在を考慮すれば幅も深さも更に大きな数値になることは言うまでもない。虎口の北側（V区）は8m、SZIの東は7m、SZIとIIの間は32m、SZIIの西は10m、II郭部分は5mで、これにSZI・IIのそれぞれ8m程を加えれば総延長80～90mを発掘したことになる。



第9図 広幡城跡SR11下の石組実測図 (1/40)



第 10 図 広輔城跡土層実測図 (1/80)

虎口の北側(堀V区)の底面西端には、幅12~13cmの刃幅を有するクワのような工具で掘削した浅い溝(深さ約5cm)が走っている。この溝は後述するSX1・SX8の壁溝と同一の工具にて掘られているとみてよい。

SZIとSZIIの間(堀II・III区)は、堀の底面が何ヶ所かで段を有している。またSZIIの西(堀I区)にも底面に段がある。

SZIとSZIIは平面が方形状の張出し部であるが、上面(郭内)部分にて幅5~6m、長さ2.5~3mにわたって突出している。SZIは東に21.5°、SZIIはやはり東に3°ほどふれる方向で張り出している。

堀の中からは少量の遺物が出土しているが、多くは須恵器と弥生土器であって、中世期の山城に關わりのあるもので図示しうるのはII郭堀I区から出土した1点しかない。堀IV区上面からは近世の磁器がいくつか出土している。その他SR5~11の土壘や埋土中から弥生土器や須恵器の破片が出土している。

また、堀I区・II区・V区などでは、その底面に礫石の集中して出土した部分があった。それは挙大から人頭大程度までの礫であるが、これらはあるいは防禦の投石用として郭内に置かれていたものが転げ落ちたものかもしれない。



Photo. 16 広輔城跡II郭堀I区の発堀

④ 虎口（図版18・19、第11図）

I郭全体の中では東端に近い所に位置する。上端の幅220~270cm、堀IV区とV区底面から見れば幅5.1m間を掘削することなく出入口としてつくり出している。郭に向かう角度としてはN-67°W。地山面では階段など造り出しているが、この上層に石を利用しての階段と簡単な石垣があった。この階段と石垣は時期の特定は難しいが、堀IV区の陶磁器あたりがその時期の一端を示しているともみてとれる。

階段は7段が約50cm間隔で存し、おおよそ15~20cmの段差を有する。最も高所にある石のすぐ前面に、多い所で四段積みの無難作な石垣がある。乱積みと言つてよい積み方である。

III. 郭内の構造

① 碓石〈SS 1~14〉と建物〈SB 1〉（図版19~21、第12図）

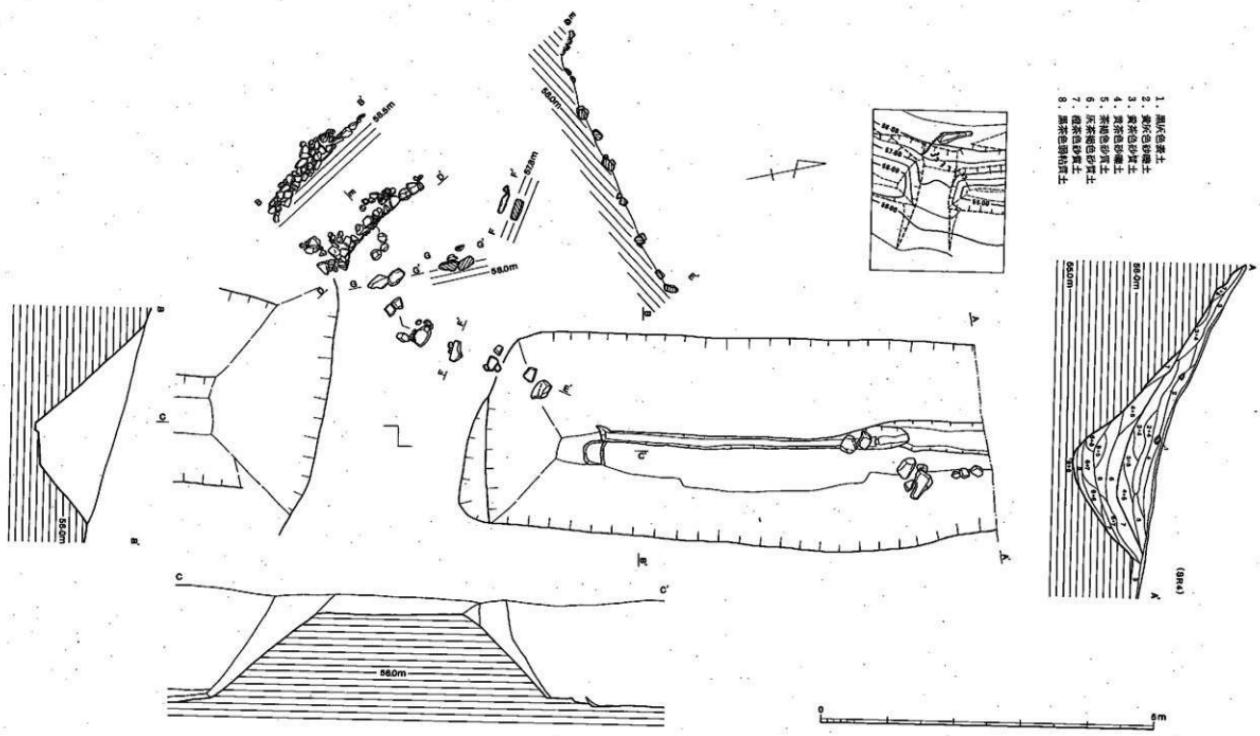
郭内にもと存したであろう建物の礎石として使つたと思われる大石10数個が遺存していた。これらはSS 1・14・3~5が郭の南縁に近く存し、6~13は北端近くに存する。12・13の2個はもともと地山に入りこんでいる石が露出しているだけであるが、他は全て人為的に置かれたものである。しかしこれらも上面を平らにすると、柄穴を穿つとかの造作を施したものではなく、自然面を残したままの石が置かれている。

また、もと礎石が置かれていたらしい掘り形のピットも幾つか見られたので、礎石とそれらピットとを基礎として建物が建つのかどうか、現地においても柱間を測り、図面上でも配置について検討してみたが、適切な建物配置は得られなかった。全ての礎石を結ぶほどの大規模な建物はまず考えにくく、もしこの“礎石”を使った建物があったとすれば数棟が存したと思われる。礎石周辺から土器等の出土した所があるが、山城に関連すると思われるものはSS 5~7の周辺である。

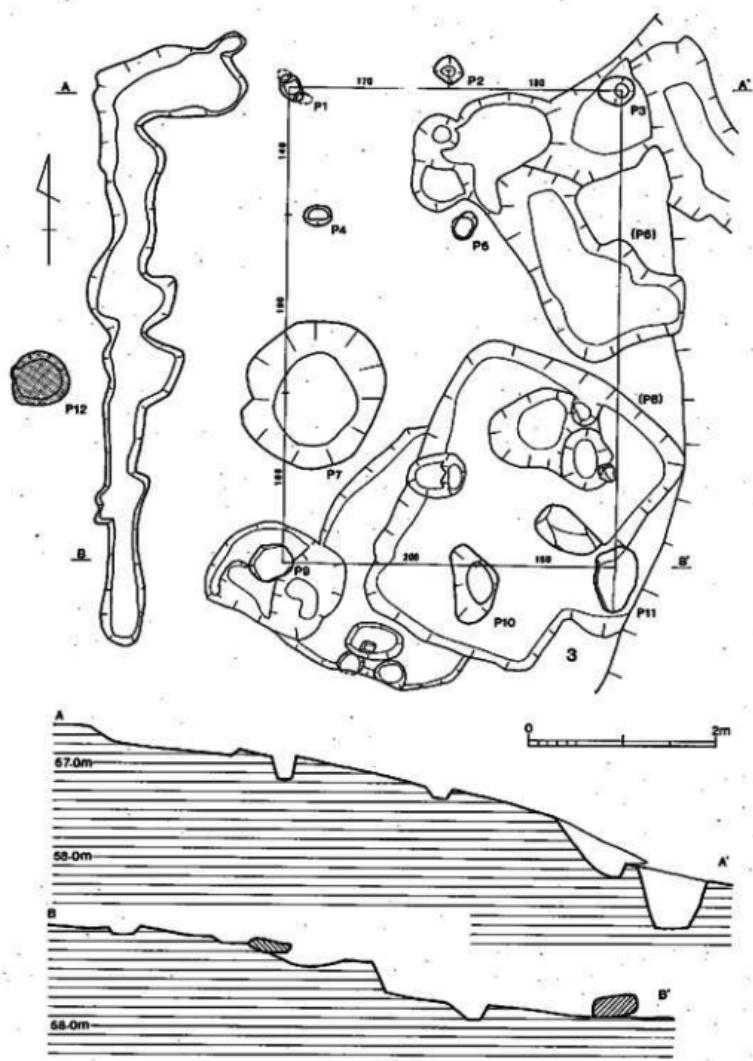
SB 1については確実に建物とする根拠を持ちあわせないが、南北に約6mの長さがあり北端でL字状に折れ曲がる浅い溝を雨落ち溝と考えて、その内側に建物を想定した。

SB 1（第12図） ほぼ南北に主軸をおく2×3間の建物になろう。梁行3.5m、桁行5.1mの心心距離を測り、P 9とP 11は小さな礎石を使用する。P 5は使わないのが妥当かもしれない。P 7の西、雨落ち溝より50cm程離れてP 12が存する。このピットは直径60cmの円形プランで深さ約10cmの浅いものであるが、中には炭がつまついて、さらには西端部が幅15cmにわたって焼けていた。どのような用途のピットかわからないが、SB 1と無関係とも思われない。出土遺物は全くない。

虎口から郭内に入ってすぐの北面に位置するので、出入口に関連した性格の建物を考えることも可能である。



第 11 圖 广城城跡段・虎口・堆V区実測図 (1/60)



第 12 図 SB 1 実測図 (1/60)

② 土壙

SK1～SK7の7基がある。SK4と6・7には礫石が多量に入っていた。

SK1 (図版22, 第14図)

郭内東端に近く位置し、虎口のほぼ真正面に近い。240×170cm程の楕円形に近いプランで、最も深い所でも30cm程しか残存しない。長軸をほぼ南北にとる。東端部中央付近の床面近くにて「永楽通宝」1枚が裏面を上にして略水平の状態で出土した。また、埋土中より土器片1が出土している。

SK2 (第14図)

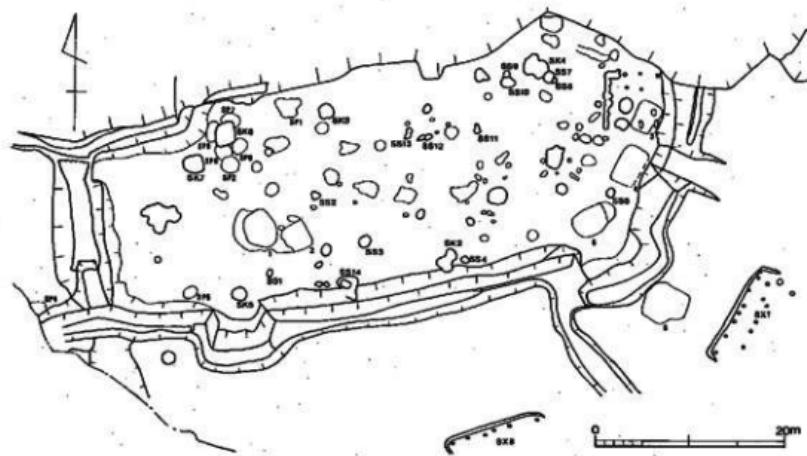
SS4の西に存する浅い土壙で、長軸246cm、短軸95cmの楕円形プランを呈する。埋土中より鉢の小破片が出土している。

SK3 (図版22, 第14図)

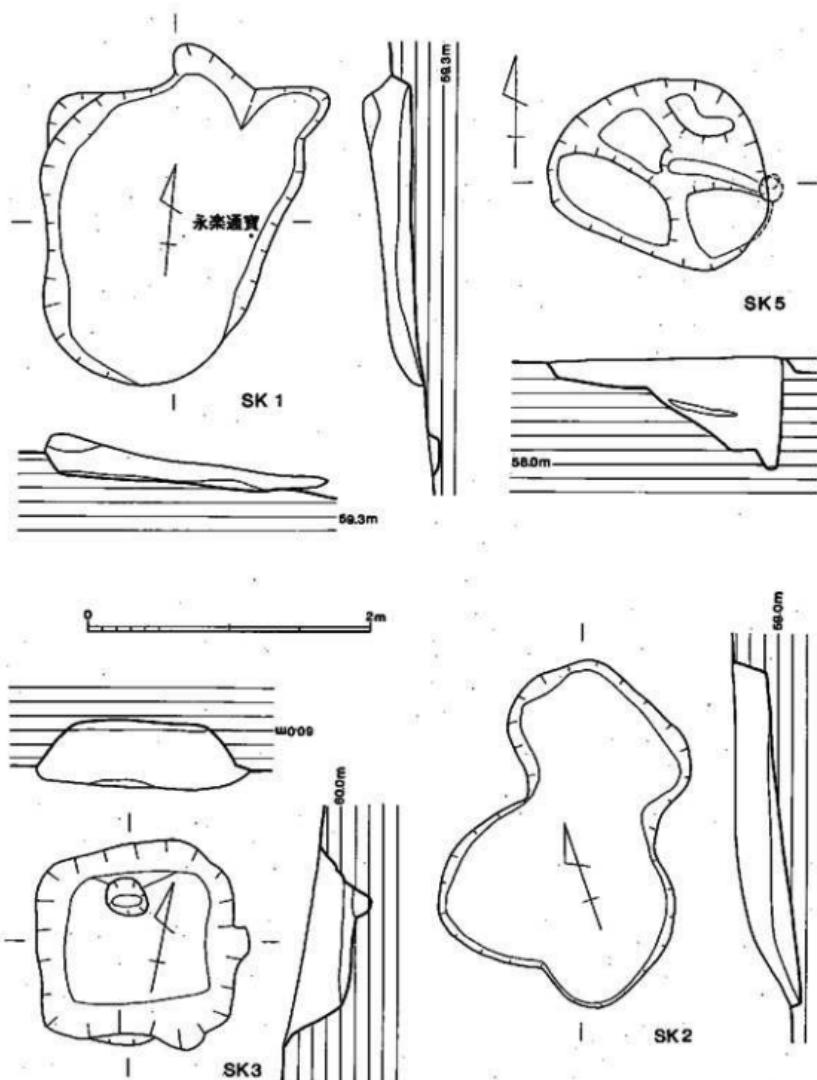
郭内の中央よりやや西の北寄り、SR3の西に位置する。一辺が約140cmの隅円方形プランを呈し、最深40cmを測る。壇底北端に小ピットがある。土錐1点が出土している。

SK4 (第15図)

SS7の東隣りに主軸を東西方向において存する不整形の土壙である。掘り形はSS7をも取込むようにしてあり、長軸350cm、短軸170cm程を測る。壇内には玄武岩や頁岩の礫が多量に入っており、中には二次火熱を受けて赤変したものがある。東端付近より瓦質土器の破片が出



第13図 幹権城跡郭内造構配置図 (1/600)



第 14 図 広輔城跡土塙実測図 1 (SK 1 ~ 3・5) (1/40)

土した。

SK5 (図版22, 第14図)

SS1の西南, SR10の西に位置する不整円形プランのもので, 塙内は段堀り風になる。長軸155cm, 短軸135cm。弥生土器片と瓦質の鉢が出土した。

SK6 (図版23, 第15図)

郭内西端寄りの北面くびれに近い所に位置し, 弥生期の貯蔵穴6~9号を切っている。平行四辺形もしくは菱形と称しうる平面プランをなし, 対角線の長軸290cm, 短軸245cmを測る。中には大小さまざまの礫石が入っている。塙底は東側が高くて二段掘りとなる。少量の土器片の出土がある。

SK7 (図版23, 第15図)

SK6の西南方にあり, 隅円の長方形プランをなす。長軸210cm, 短軸170cm。これも塙内に多量の礫石が入っていた。弥生土器片と瓦質土器片が出土している。

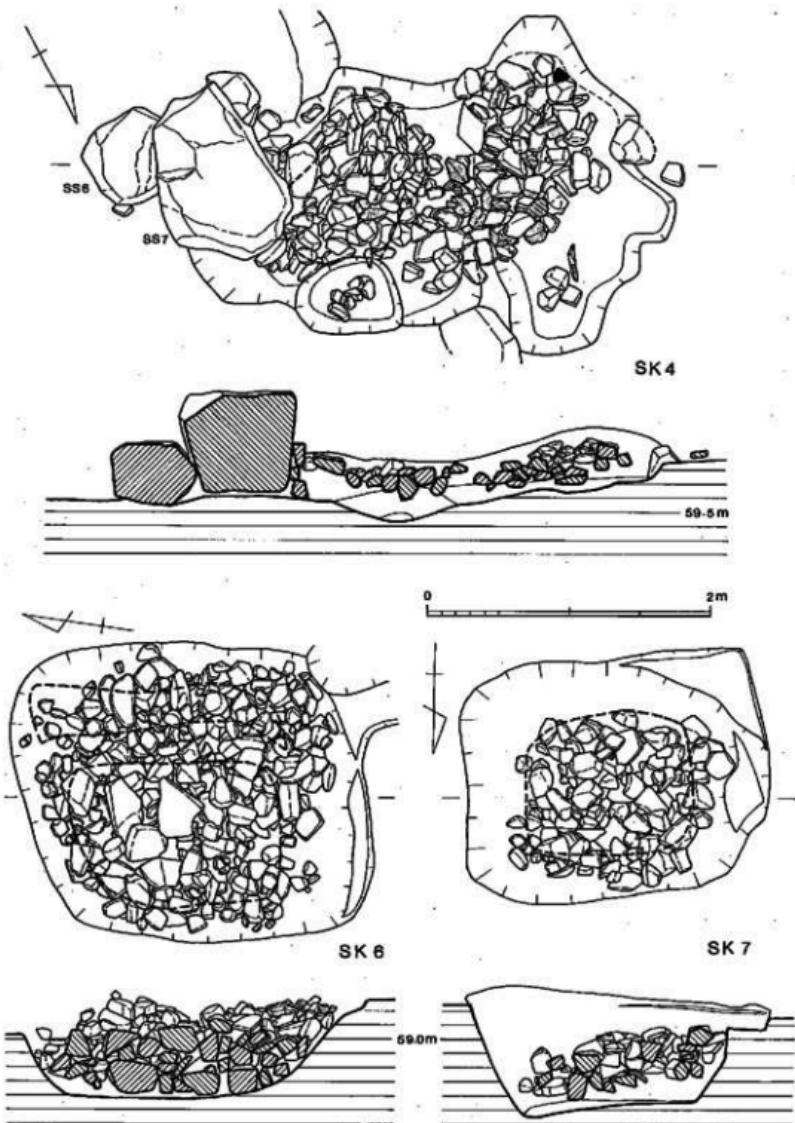
③ ピット (付図3)

郭内で土壙としたもの以外にも幾つか山城が機能していた時点のピット等があろうとは思うが、弥生時代の遺構も存することとて、遺物の出土したもの以外にはどれを中世とするか判じえない。いま三つをとりあげる。

P18 西端のⅡ郭に近い所で浅い掘込みが存した。この中から青銅製品が出土している。弥生期にかような青銅器の存することを知らないので、とりあえず中世として報告する。

P89 SK2・SS4の東北にある小ピットで、中に石が置かれている。瓦質の摺鉢の破片が出土している。

P95 虎口前面の北側にある土壙状の掘込みである。弥生土器と土師器片それに鉄器片が出土した。土師器片は奈良期のもののようにも思えるが断じないので、とりあえずここで報告しておきたい。



第 15 図 広輔城跡土壌実測図 2 (SK 4・6・7) (1/40)

IV. 南斜面の遺構

① 縦堀 (図版15, 付図1・2)

これはSZ1の西側堀部分より始まり、北から140°の角度をもって東南方向に走っている。掘削した土で堀の東側に土壘状の高まりを持たせている所があるが、あまり目立たない。幅は170~370cmと広狭あるも、下方になるに従って狭くなっていく傾向にある。深さは150cm程度を測る。

② 建物跡

明確に建物跡としるのはSX1・5~7・8の5棟である。いずれも高い方の傾斜面を削り、その削った土を低い方へ盛って整地し平坦面を広く造り出したのである。竪穴住居風のあり方を示すが、いまは建物跡としておく。5棟ともに壁直下に排水溝と覚しき壁小溝を有している。SX5~7は三棟が接するように検出された。重複関係を捉えきれなかったが、通常ではSX6→SX7→SX5の順に新しくなる。ただ三棟が軒を接して建っていた可能性もないではない。

SX1 (図版24・25, 第16図)

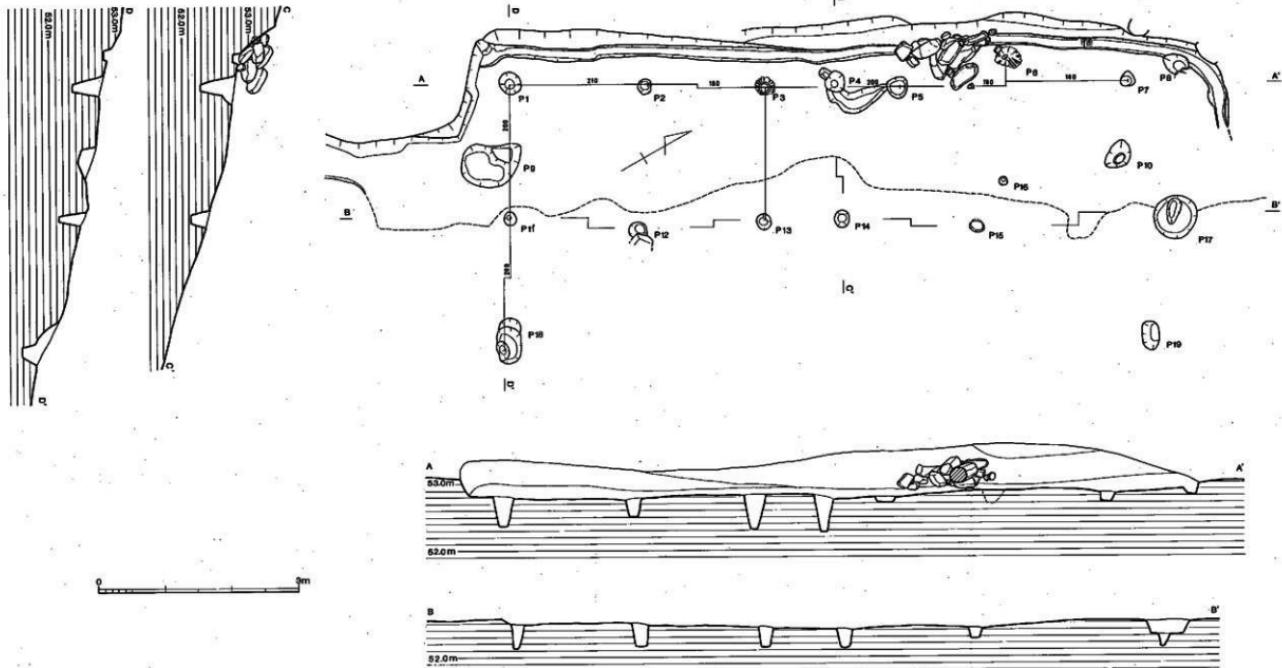
I郭の虎口の南方、SZIの東南方、SR7の東に位置する。主軸を北東—南西にとり、P1~P7を結ぶラインでN-40°-Wとなる。主軸長は11.2m。下方への壁の延びは1.5m程度までが確認される。床面の硬い面というものは壁より1.6~3mの範囲に認められた。柱穴はP1~P18までを検出し、P1~3・6~8・11~13には掘削した際の工具の痕が明瞭にわかる。P1~2間は210cm、P2~3間180cm、P3~5間200cm、P5~6間160cm、P6~7間200cm、P1~11間とP11~18間、P3~13間はいずれも200cmとなる。

壁小溝は刃幅12cmのクワ状の工具を打込んで削り込む。P6とP7間の小溝内にはそのクワを南から北へ1~2cm間隔で打込んだ痕がはっきりと見られた。この壁小溝のあり方は、I郭堀V区の底面に残るそれとよく似ており、同一工具によって掘削されたものであろう。

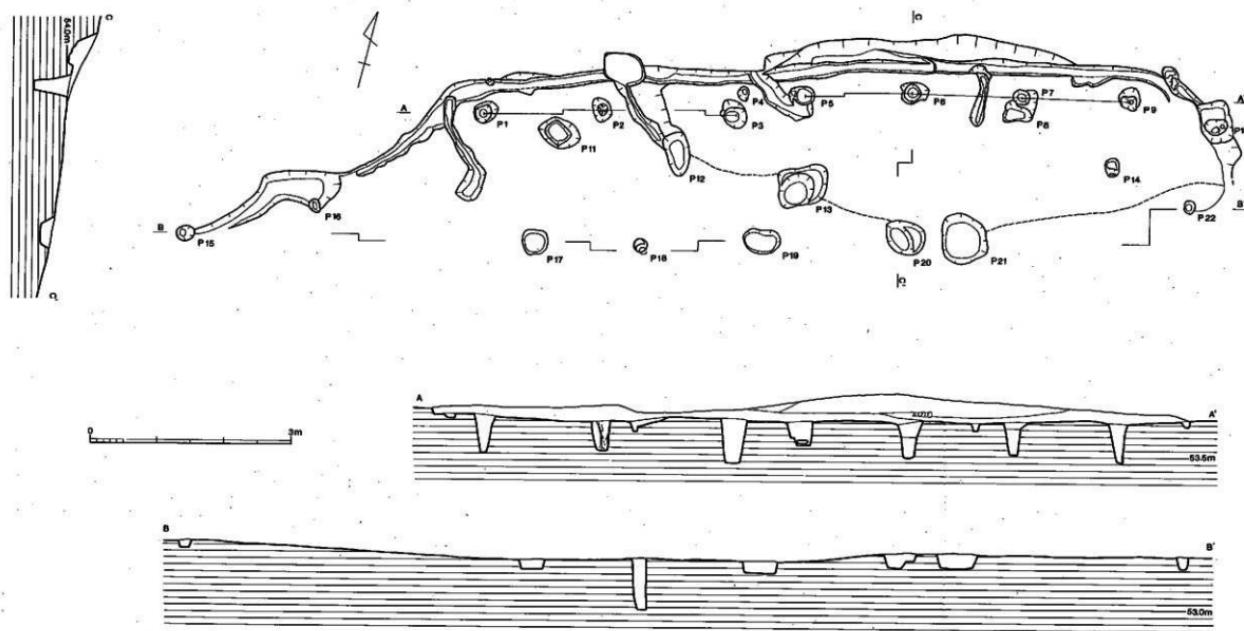
P5とP6の間の壁小溝上に頁岩・砂岩等が10数個積み上げてあり、当初は横穴墓の閉塞石かとも考えたが、結局のところ性格不明の石組として取扱うしかなくなった。この周辺から土器が出土している。

SX8 (図版26, 第17図)

縦堀をはさんで西方に、SX1と対峙するかのような位置にある。主軸をN-76°-Eの略東西におき、壁小溝の長さは15.3mまで確認しているが、建物としてはP1のすぐ西まで11.7m程の長さであろう。柱穴はP1~P22までを検出しているが、P13~17~19~21については掘り形も大きく埋土の状況から見ても柱穴ととしてやや怪しい。P1~2間180cm、P2~3



第 16 図 広種城跡 S X 1 断面図 (1/60)



第 17 図 広幡城跡 SX 8 実測図 (1/60)

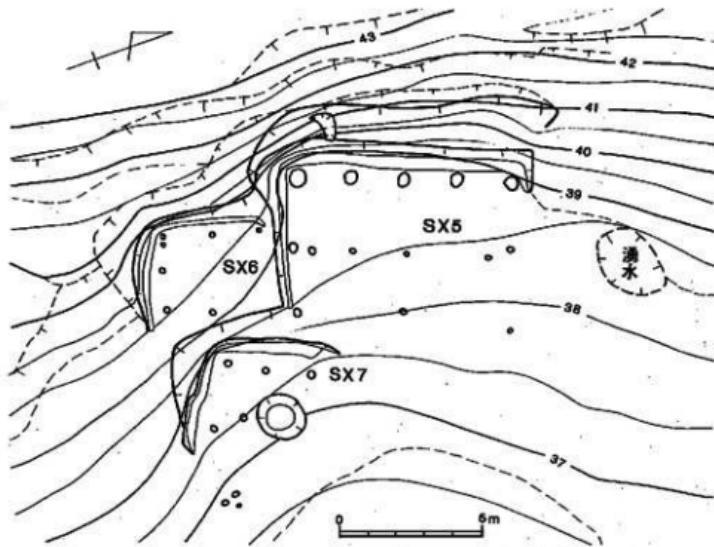
間200cm, P 5・6間160cm, P 6・7間165cm, P 7・9間160cmという柱間寸法をとる。床面の硬い部分は壁より1.5~2.6mあたりまで認められるが、それも北側に片寄ってP12の付近までである。

壁から直交するような小溝がP1の西、P2・3間、P4・5間、P6・7間に認められることと、P1~3とP4~9の並び方(柱筋)が少しずれることを考慮すれば、建替え(建増し)のあったことが予想される。P1~3・5~9・22には工具痕が明瞭に認められた。また、SX1と同様に壁小溝にも工具痕があり、やはり南から北へ向かって“クワ”を打込んで削ったことがわかる。出土遺物は全くない。

SX5(図版27~29、第18・19図)

I郭からかなり降りてきた所の縦坂の北東にあり、山城全体からすればかなり下方になる。ここに集中する三棟の中では最も大きい。西壁側などは2m以上を削り込んで壁をつくり出している。P1~P5の柱筋を主軸とすればN=18.5°-Eをさす。床面で南北8.7m、東西6m+αの規模となる。西と南の壁下には小溝が走るが、西壁下のそれはかなり幅広くなっている。

P1・4・6は工具痕が明瞭にわかり、またP3・5・7・10には根石が置かれていた。P1・2間とP2・3間は200cm, P3・4間180cm, P4・5間190cm, P7・9間210cm, P9・10間190cm, P1・7間250cm, P7・13間240cm, P3・10間260cm, P10・14間210cmという柱



第18図 広幅城跡SX5~7周辺地形図(1/200)

間寸法をとる。

P 1とP 2の西方壁面中に縦長の方形掘込みが存したが、これは何のためのものかよくわからない。ここに柱を入れ込んだとすれば、それは屋根より上に出ていたかもしれない。床面の硬い部分は西南に集中している。

なお、P12の北方4m付近には、水量はあまりないけれども少しづつ湧き出てくる所がある。

S X 6 (図版27~29、第18・20図)

S X 5の南、S X 7の西にあり、床面レベルは S X 5より70cm、S X 7より200cmも高い。西壁側床面で南北3.5m、南壁側で3.6mの規模となり、北側は削平された格好になる。P 1とP 3を結ぶ主軸はN-12°-Eをさす。西壁は床面より80cm程がほぼ直に立上り、それより上方は斜めに立上る。P 1・5・8には工具痕がよくわかる。P 1・2間とP 2・3間は170cm、P 1・5間90cm、P 5・7間150cmの柱間寸法をとる。

S X 7 (図版27~29、第18・21図)

S X 6の東にあり、三棟の中では最も低い所にある。西壁と南壁の床面で4.6m×3.3mの規模になり、P 1とP 3を通る主軸はN-25°-Eとなる。周壁溝のほかに、それとほぼ並行する小溝が内側にL字形に存するので、連増しがあったのかもしれない。P 1・2間の西で壁小溝に被さるように頁岩の礫が存するが、これは床面にくついてはいない。P 1・2間150cm、P 2・3間170cm、P 1・4間220cm、P 5・6間270cmとなる。

P 5の北に大きな土壙が1基ある。P 4の最上面から鉛と思われる金属の玉が1個出土した。
土壙 (図版29、第22図)

東西160cm、南北152cmのほぼ円形に近いプランで、深さは最深123cmを測る。床面の西壁寄りに頁岩のわりと扁平な石が置かれている。この土壙の埋土は地山と同じ黄灰褐色砂礫土であった。掘りこんだあと埋戻したのだろう。

③ その他

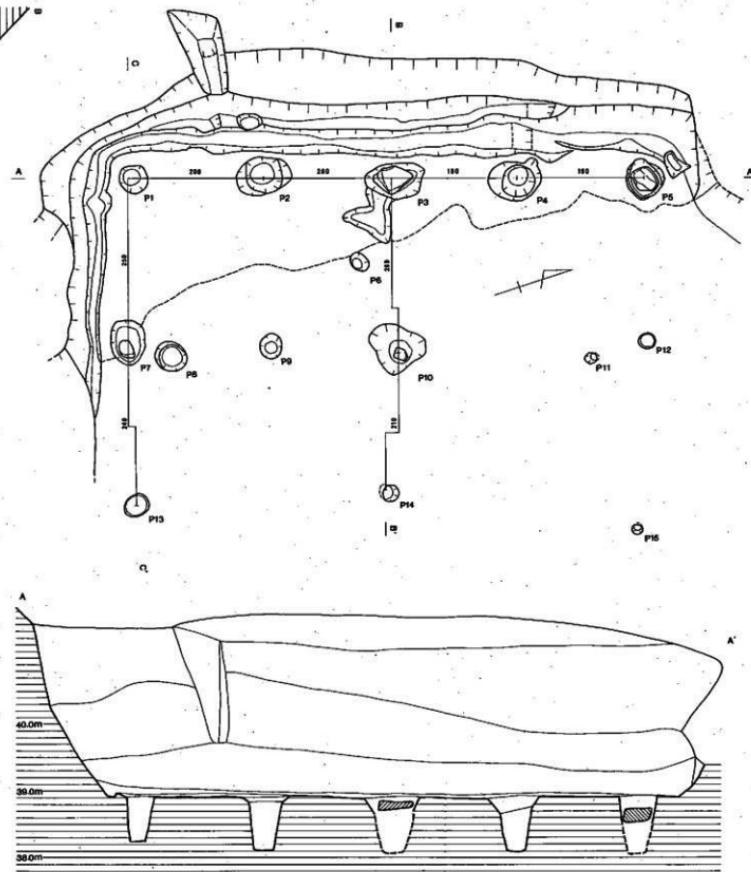
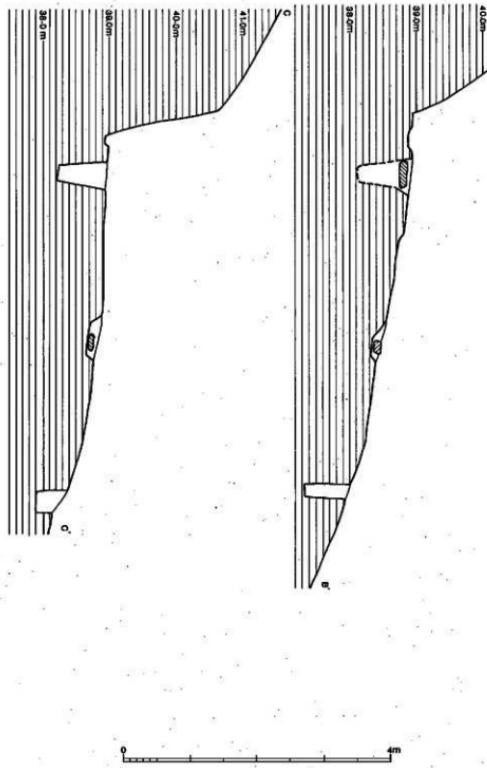
調査中には S X の名称を付していたものの、建物跡とは捉えきれないが、さりとて全く山城と無関係とも思われない造構があるので、それらを取上げる。

S X 2 (図版30、付図2)

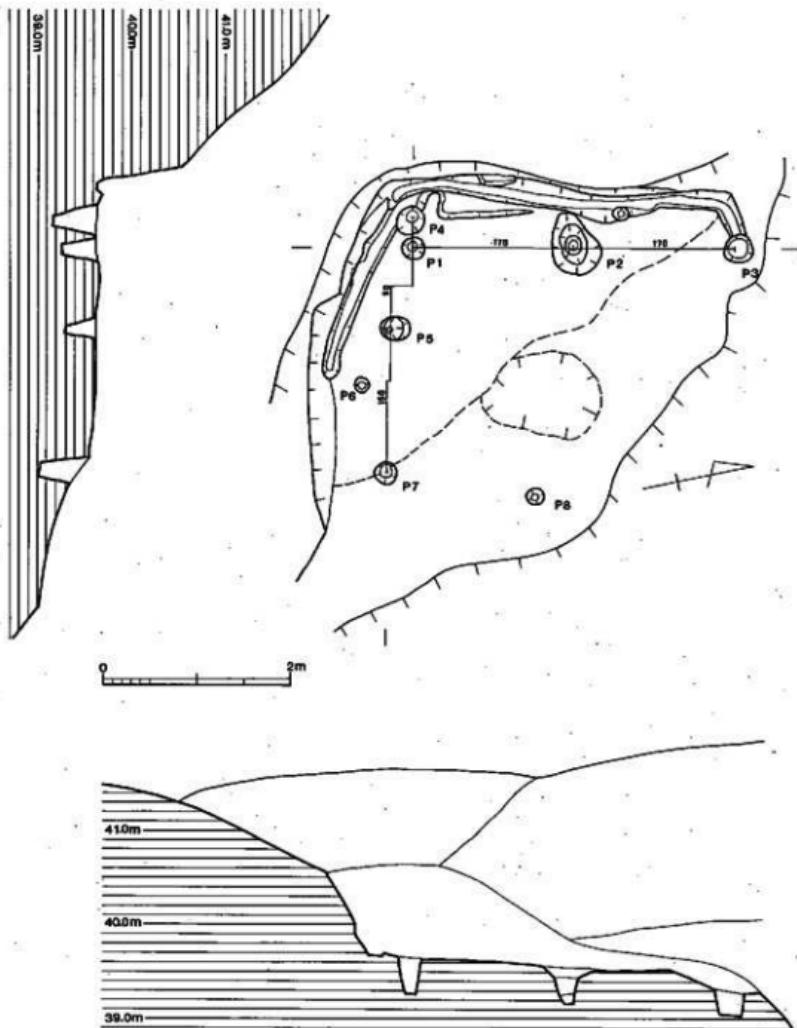
S X 1の東側10m程の所に、最も狭い部分で50cm、最大で180cm、平均100cm程のテラスが長さ23mにわたって存した。このテラスの北半部に直径30cm程の小ピット3個が存したもの、建物としてまとまるではない。

S X 3 (付図2)

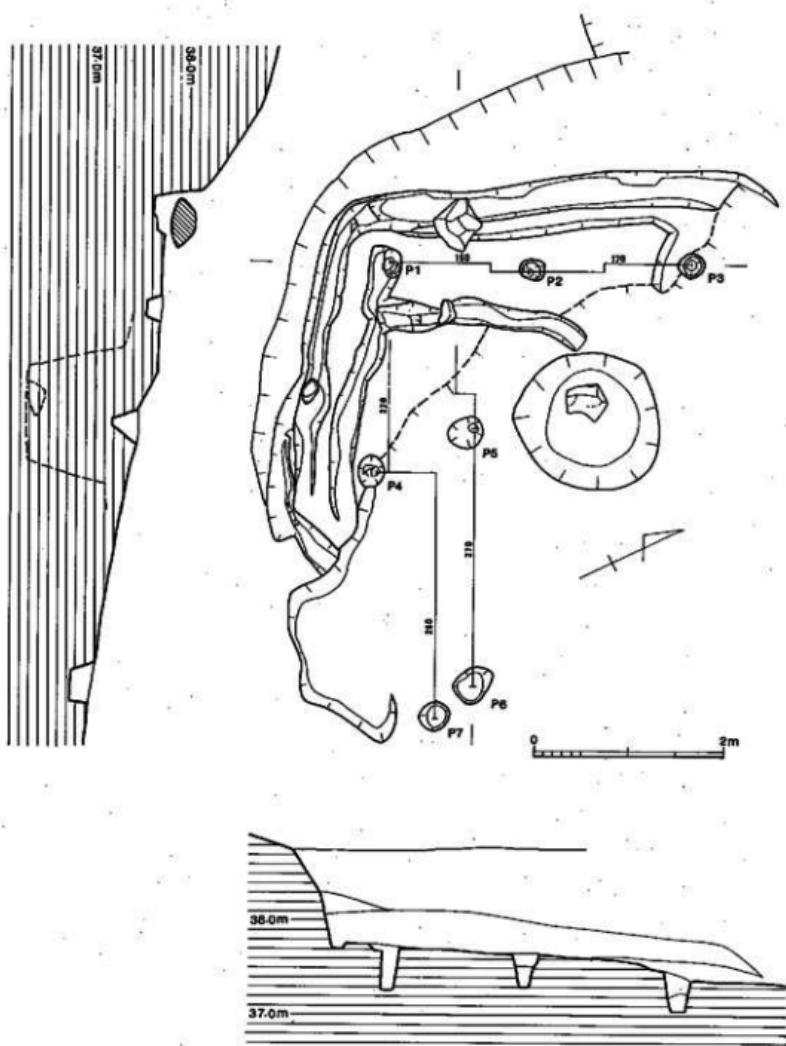
S X 5~7の西方約10m、縦堀より東方に存する楕円形の掘込みである。5×7m程の平面プランで、床面も傾斜があり、そこに10数個の小穴がある。埋土は周囲の土とよく似ているも



第 19 図 广域城跡 SX 5 断測図 (1/60)



第 20 図 広糧城跡 S X 6 実測図 (1/60)



第 21 圖 広輪城跡 S X 7 実測図 (1/60)

のの除去できる土であった。しかし掘込みとして明確なものではない。造構として明瞭に捉えきれないけれども何らかの施設であった可能性はある。

S X 4 (図版30, 付図2)

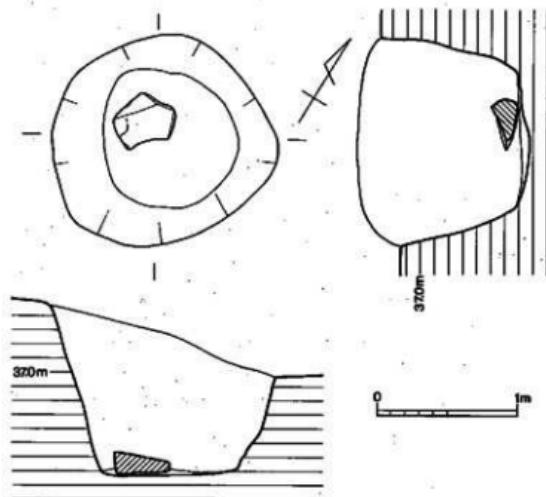
S X 5 の北方にテラス状になる部分があったので、ここを S X 4 とした。幅 2 m 前後で長さ 10m 程が見た目にもテラス状となる。しかし、ここに柱穴等は確認できなかった。

S X 9 (図版30, 付図2)

S X 3 の西方、縦堀よりも西に溝状の造構が存した。幅は 80~150 cm、長さ 15.5 m までを認めたが、はっきりとした溝になるわけでもない。これのほぼ中央付近から土器片が出土した。

S D 1 (付図3)

I・II郭間の堀の南方、その延長上に I・II郭を巡る堀とは直交する溝状の部分がある。幅は 4 m 以上で深さはあまりない。この溝はおそらく山城の通路に関連するものだろう。



第 22 図 広幡城跡 S X 7 内土壤実測図 (1/4)

V. 出土遺物 (図版38~41, 第23~29図)

土器と土製品・石器・金属器・近世磁器等に分けて説明してゆく。

① 土器 (図版38・39, 第23・24図)

SR11Tの石縄内 1~6はいずれも瓦質に近いが、1~3・6は土師質としたがよい。この1~3・6は鍋になろう。いずれも外面はヘラケズリで、内面は明確でないもののミガキがあるようだ。2と6には煤が付着している。2と3は同一個体破片の可能性もある。6は復原径51.8cmの大振りのものとなる。4は摺鉢の破片で内面に6本単位の櫛目がある。5は鉢になろうか。復原径36.2cm。

SK1 7は須恵質で壺になろうかと思われる底部片である。外面は横などで擦過が入る。復原底径11.8cm。

SK2 8は瓦質の鉢になろう。内外ともに磨滅が著しい。復原口径36.6cm。

SK4 9は瓦質で大形の鉢の破片である。外面は淡黒色を呈し、断面M字に近い突帯を付す。内面は黄灰色を呈する。約 $\frac{1}{3}$ の残存破片であるが、この破片で高台部分が途切れることはない。復原底径45.8cm。

SK5 10は須恵質に近い瓦質の鉢で、口縁は玉縁状となる。外面は横方向にヘラケズリを行ったあと、縦方向に工具使用のナデを行う。内面はナデ。約 $\frac{1}{3}$ が残存し、復原口径25.8cm。緑灰色~白灰色を呈する。

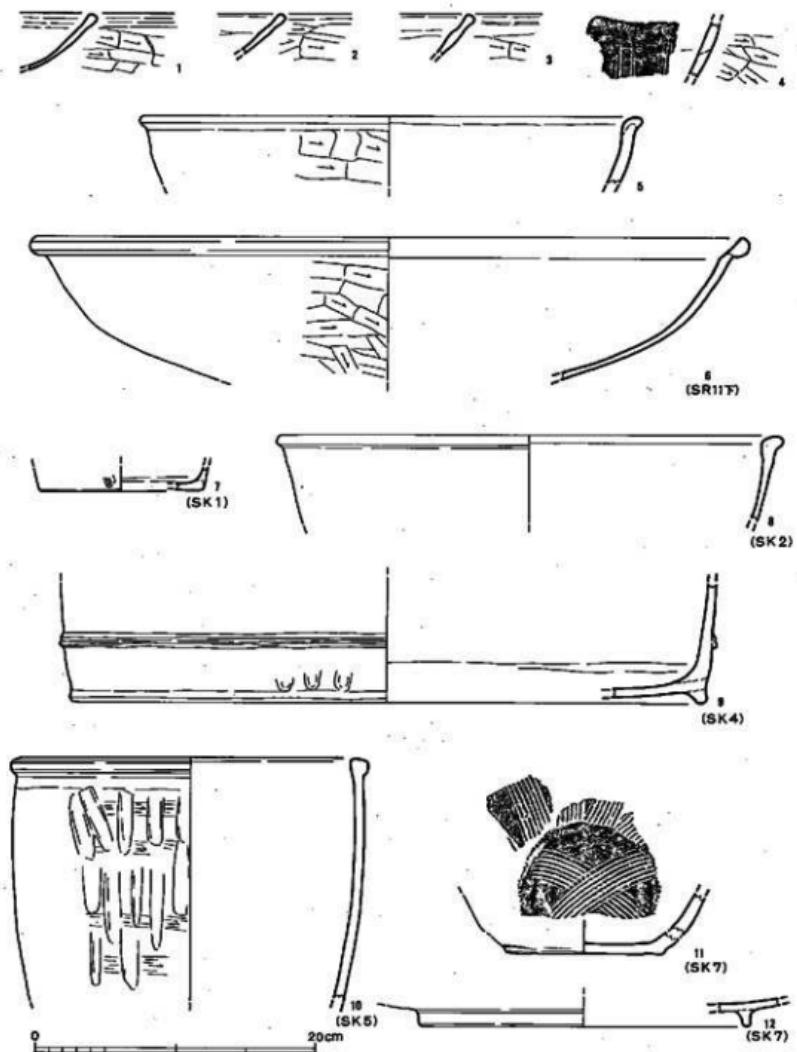
SK6 13~15が埋土中より出土している。13は白磁の小片で皿になろう。やや濁った白色釉がかかる。14は瓦質の皿か鉢で灰白色を呈する。復原高台径16.5cm。15は瓦質に近い土師質土鍋の破片であり、かなり大ぶりである。復原口径30cm。外面はヘラケズリを施す。

SK7 11・12はともに瓦質であるが、11は須恵質に近いとした方がよい。11は摺鉢の破片であり復原底径12.1cm。櫛目は8本を1単位としている。12は高台の付く皿か鉢で、復原高台径24cmを測る。

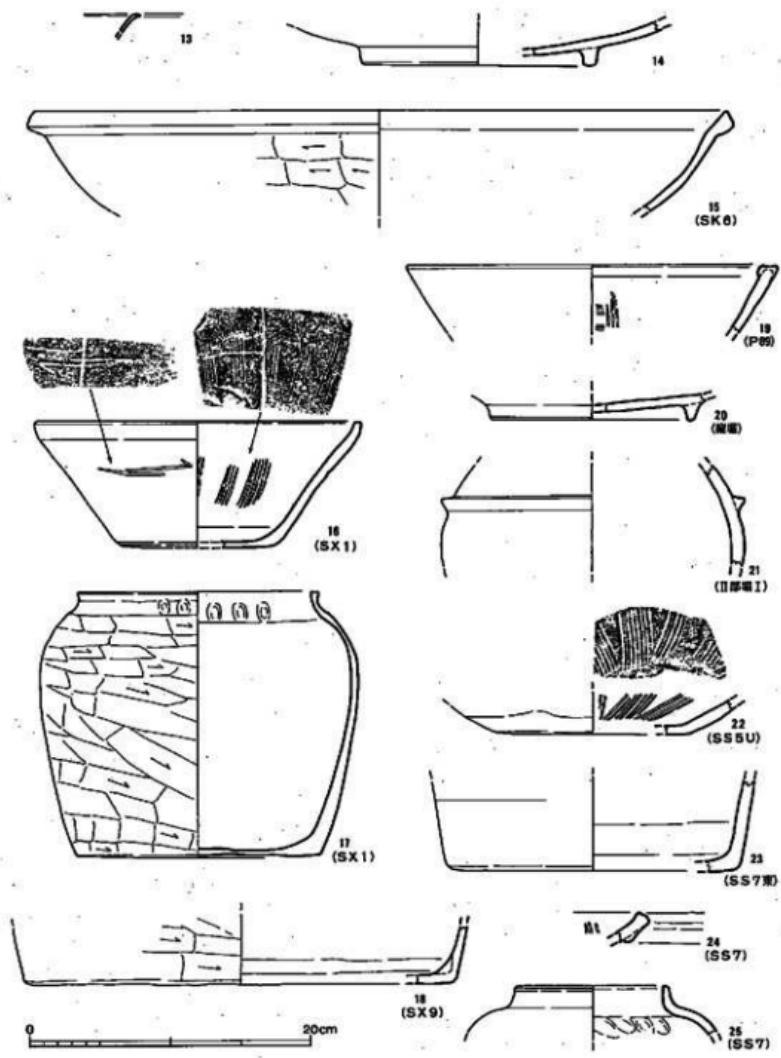
SX1 16・17の2点が出土している。16は瓦質というより土師質に近い摺鉢片である。口縁直下は僅かに内湾している。茶褐色~橙褐色を呈し、遺存状態はあまりよくない。櫛目は6本を一単位とする。外面の胴中位に横方向の部分沈線があるも、当初から意識的に付けたものかどうかわからない。口径23.6cm、底径11.8cm、器高8.8cmに復原される。17は瓦質に近い須恵質の直口壺である。 $\frac{1}{3}$ が残存し全形は復原できる。口径17.3cm、底径17.5cm、胴部最大径23cm、器高18.6cm。外面はヘラケズリを行い、内面はナデている。

SX9 18は瓦質の鉢の底部片である。外面は白い化粧土をかけているらしい。復原底径31.2cm。焼成がややあまい。

續壙 20は縦堀内の、SX1とSX9を結んだライン上のあたりから出土した瓦質土器片であ



第 23 図 広幡城跡出土土器実測図 1 (1/4)



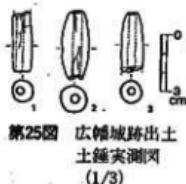
第 24 図 広幡城跡出土土器実測図 2 (1/4)

る。小片からの復原で高台径14.5cm。鉢か皿になろうか。

P89 19は瓦質の摺鉢片である。磨滅が著しいが、外面はヘラケズリらしい。復原口径26.7cm。その他 21はⅡ郭堀Ⅰ区出土の瓦質釜胴部片である。断面三角形の突帯を有し、その部分で復原径21.8cmを測る。角閃石・赤褐色粒子を含んでいる。22はSS5の北側にて出土した瓦質の摺鉢片であり、軟質の焼成である。標目は8本を一単位とする。復原底径13.6cm。23はSS7の東側から出土した瓦質の鉢か壺の破片であり、復原底径21.2cm。底部外面は手持ちヘラケズリを施す。24・25はSS7周辺にて出土した瓦質土器の破片で、24は鉢になろう。25は短頸壺で、胎土中に角閃石を含む。復原口径11cm。

(2) 土製品 (図版40、第25図)

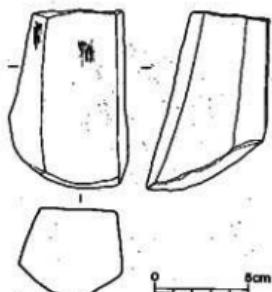
いずれも管状土錐。1は端部が窄まらず、平坦になる形態。孔は片寄って穿たれる。色調は茶褐色を呈す。残長3.2cm、径1.2cm、孔径0.4cm。SK-3出土で、中世の時期。2はラグビーボール状を呈す完形品。ねずみ色を呈し、須恵器。長3.7cm、径1.4cm、孔径0.4cm、重7.8g。表掲資料である。3は半欠資料で断面は正円形に近い。赤褐色を呈し、化粧土を塗布する。残長3.2cm、径1.2cm、孔径0.35cm。礎石6・7付近より出土。



第25図 広幡城跡出土
土錐実測図
(1/3)

(3) 石器 (図版40、第26図)

SR11下の石組内より出土した延石である。結晶質の石材で花崗岩のようにも見えるが硬砂岩であろう。現存長9.4cm。



第26図 広幡城跡出土石器実測図
(1/3)

(4) 金属製品 (図版40、第27図)

1はSK1より出土した中国は明代の銅錢・永樂通宝である。周縁の一部を欠失するもほぼ完形としてよい。直徑25.15mmの中央に5.9mm四方の孔がある。表面には孔の上下に「永樂」、右左に「通寶」と陽鋳されているが、「永」の字は少し左に、「樂」の字は右に傾いていて、全体として字のバランスがよくないように見える。裏面には文字はない。永樂通宝は明代・成祖永樂年間(1403~1424年)の銅錢である。

2はSX7より出土した鉛製と思われる玉である。直徑13mm、厚さ3.6mmで内径5.2mmの孔が

ある。大きさの割に重量感があり2.2gを量る。表面は白っぽい。

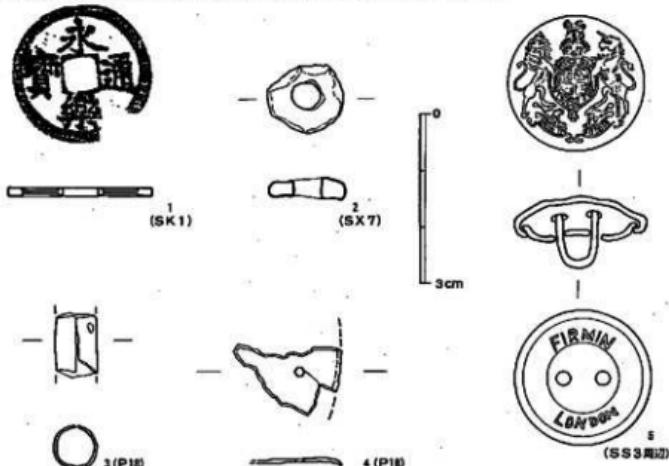
3・4はP18出土の青銅製品である。3は円筒状製品で現存長11mm、径は7~7.3mm。きわめて薄く0.6mmの厚さしかない。外表面は金の鍍金を施す。4は厚さ0.6mmの薄っぺらい板状品で、表面には金鍍金の痕跡がある。全体の形状を把握しきれないが、平面形は円になりそうな気がする。穿孔がある。3・4ともに同一製品の部分かと思われるが接合もしないので元の形がわからない。

5は表面にいわゆる「大紋章」といわれる紋章を陽鋳にてあしらったボタンである。磁石3(S S 3)の周辺にて採集した。直径23.65mm、厚さ7.9mm、重さ5.9gをはかり、赤茶色を呈する。銅を主体とした合金製であろう。裏面には中央に縫い付けるためのU字形の金具があり、それをはさんで上下に同方向から読めるように「FIRMIN」・「LONDON」の文字が陰刻されている。以下、紋章について少し説明する。

(1)

中央にクォータリングの方法で四分割した楯(escutcheonと呼ぶ)が置かれ、その周囲にガーター勲章のベルトが配される。このベルトには、全ての文字が見えてはいないが、正面左のバックルの所から「Honi soit qui mal y pense.」(下線が見えている文字)というフランスの諺が右回りに書き込まれている。楯の真上、ガーターの上にヘルメットではなく直接に冠が乗せられている。王冠であろう。その上にクレストとしての獅子が乗っており、こちらに顔を向けている。

橋・ガーターの左右にはサポーターとしての獅子と一角獣とが、互いに前脚1本をガーターにかけて向かい合って配される。獅子の顔はこちら側に向けられる。



第27図 広幡城跡出土金属器実測図(1/1)

楯の下方には花木を表現したと思われる台座 compartmentがあり、獅子・一角獣ともに後脚の一本をその上に置いている。台座の下には左右に分かれて "Dieu et mon droit" ("神とわが権利") というモットーの書き込まれたスクロール scroll (リボン状の巻物) があって、これが紋章の図柄全体のバランスをとるのに役買っているように見える。

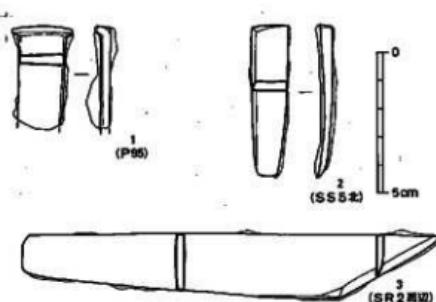
以上のこの紋章は英国王家のそれに由来すると考えられる。しかし、このボタンが裏面にロンドンと刻んであることを根拠にイギリスで作られたとしてよいのか、どのような服に付けられるボタンであったのか、など不明な点は多々存する。

⑤ 鉄器 (第28図)

1 は P 95より出土したくさび風の板状品である。現存長 3.7 cm, 幅 1.6 cm。頭部は片方に折れ曲がった形状のようである。

2 は S S 5 の北から出土したくさび状鉄器で、全長 5.3 cm, 頭部幅 1.4 cm を測る。ごく新しいものであろう。

3 は S R 2 周辺から出土した切れナイフである。刃部は片刃につくる。全長 14.6 cm, 刃わたり 4.3 cm。これも新しいものだろう。



第28図 広幡城跡出土鉄器実測図 (1/2)

⑥ 近世陶磁器 (図版41, 第29図)

1 は白磁の小壺で底径 5.4 cm。青白磁に近い色調をなす。S R 5 内出土。

2 は猪口の破片で、白磁胎に透明釉をかけ、その上に色絵付をする。外面は緑色の笹葉文様、内面は赤黄色・黄色で花と「入湯館跡」と書いた短骨をあしらう。口径 5.7 cm, 高台径 2.8 cm, 高さ 3.2 cm。S S 13周辺出土。ごく最近のものである。

3 も近時の湯呑碗の破片で、白磁胎に外面口縁は鐵釉がかかり、胴部には花びらをあしらう。口径 7.5 cm。S S 11周辺出土。

4 は染付磁器の小型の鉢である。外面に蝶と花、内面に岩山と花木をあしらう。これらは手描きであり、具須は群青色に発色する。胴部は一部がくぼむ器形となる。口径 17.2 cm。S S 10 の周辺より出土。

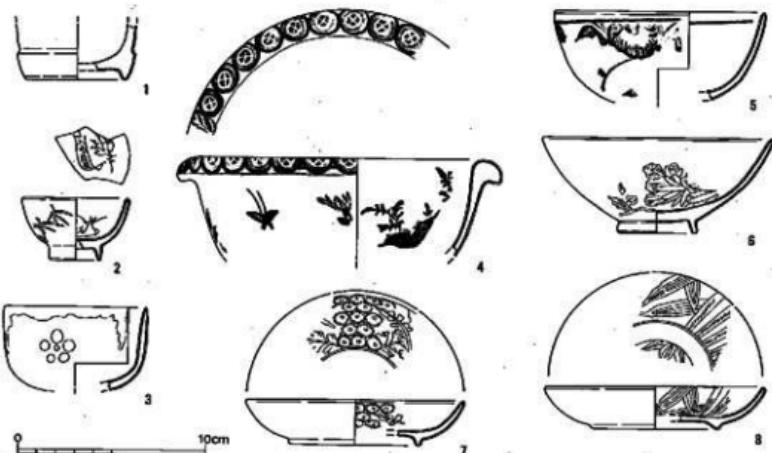
5 も染付の碗で、具須はやや淡い群青色に発色している。外面に草花を描き、内面は口縁直下に横線を入れる。口径 11.2 cm。I 郭堀 IV 区上面の出土。

6も染付碗であるが、これはスタンプによる草花模様が外面に描出されている新しいものである。口径12.3cm、底径4.2cm、器高5cm。I郭堀IV区上面とSS10周辺の双方から出土。

7・8はやはり近時の磁器皿で、ともに内面に型紙摺による文様が緑色の発色で釉上にあしらわれる。7はあざみらしい草花で、8は笹葉である。口径は7が11.5cm、8が11.6cm、底径は7が7cm、8が6.7cm、器高は7が2.4cm、8が2.3cmとほぼよく似た器形・法量だが、高台のつくりが異なる。7はSR3内出土。8はI郭堀IV区上面からの出土。

4. 小 結

広輪城跡のI郭内に礎石を使っての建物が存したことは間違いないところであるが、その具体的な建物配置等については明らかにすることはできなかった。土壇としたSK1~7が、その用途を明確にはできないけれども生活関連の施設（例えばゴミ穴、あるいは廻等）であったとするならば、これらからの遺物の出土が少ないと、さらには堀の中からも殆ど遺物が出ていないことなどを考えあわせると、この山城においては長年間にわたって多くの人が活動していたとは考えにくい、という結論が導かれる。多くの人がうごめいていたならば、あるいは長期間にわたっていたならば、もっと遺物が出土していても不思議ではない。ここに、この山城はあまり長期間使用されてはいないという結論を得ておきたい。



第29図 広輪城跡近～現代陶磁器実測図(1/3)

南斜面における造構（SX 1～9）は山城に付随するものとしてまちがいないであろう。その付隨するとした根拠は、位置的にみて城の防禦に関与しての建物とみられることがまずあげられる。さらには、堀V区の堀の底面に刻まれた細い溝がSX 1, SX 8のものと同じ道具を使ってあらわされている、ということを挙げよう。このような建物の存在はきわめて注意されるものである。

山城の築造と存続の時期については総括において検討を加えて提示したいが、16世紀中頃を遡るものではないと考えている。

註

1. 森謹『紋章の切手』大修館書店 1987 その他を参照した。
2. 「思い邪なる者に災いあれ」という意

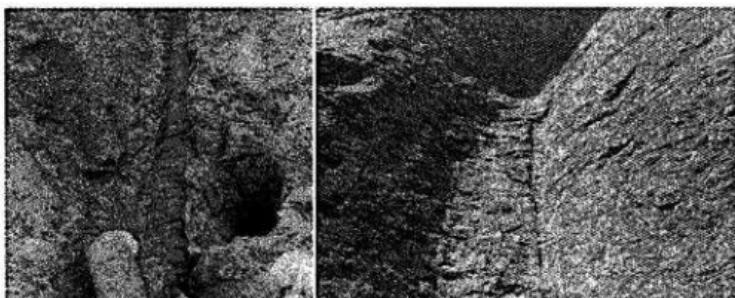


Photo. 17 (左) SX 1 の溝・(右) I 郷堀V区の溝

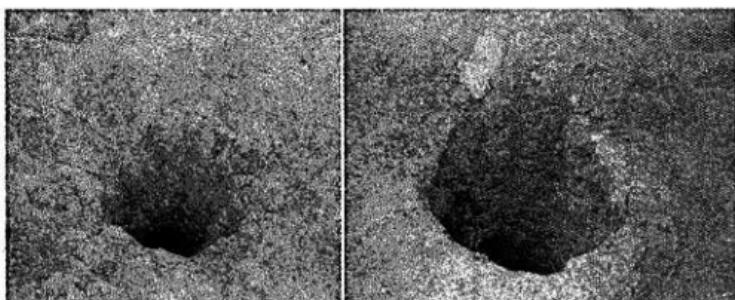


Photo. 18 (左) SX 1 の pit・(右) SX 8 の pit.

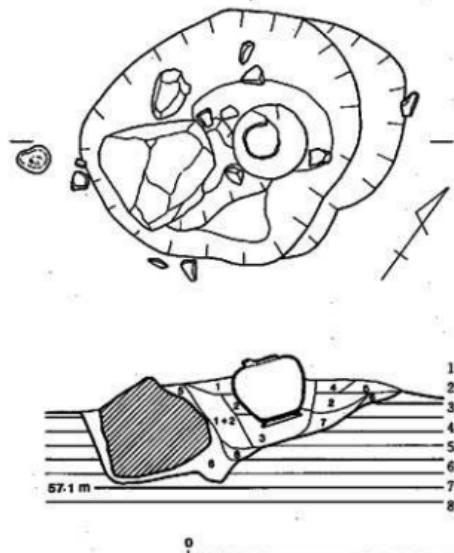
B. 奈良時代の遺構と遺物

奈良時代に属するものとして火葬墓1基が存した。これ以外には須恵器の出土した小ピットがある。明確な構造として捉えにくいものの須恵器が出土した所がある。須恵器が特に目立つのは1号火葬墓の周辺部である。

1. 1号火葬墓 (図版31、第30図)

山城跡におけるS Z 2とSD 1の中間にて検出した。火葬骨を納めた骨蔵器を埋置したものである。115×90cm程の不整な楕円形プランの南端に頁岩質の大きな石があり、その横でやや離れて須恵器の壺が少し傾いて、底面から7~8cm浮いて出土した。壺の周辺は炭化物の入った黒色土が充満していた。また、壺の中には人骨片と土師器皿の破片が入っており、この土師器皿は壺の蓋として使用していたものである。

なお、これより10cm離れた所で圓石が出土しているが、これは弥生時代の遺物の中で扱うこととする。



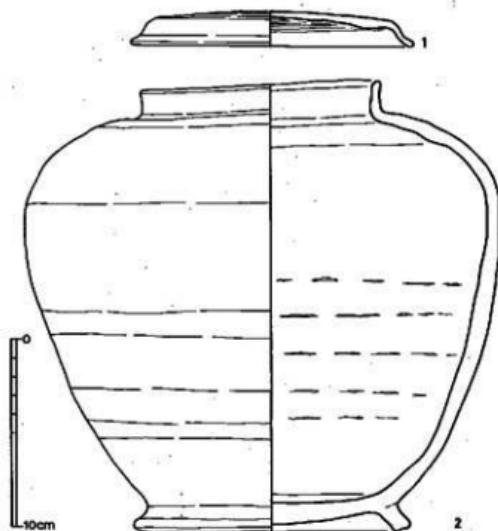
第30図 広橋城遺跡1号火葬墓実測図 (1/20)

骨蔵器

(図版41、第31図)

1は蓋として使用された土師器皿である。割れて本体の骨蔵器(壺)の中に落ち込んでいた。不安定な平底にならない底部から開きつつ立上った体部は口縁で大きく外反する。底部外面は左回りの回転ヘラケズリを施し、同内面はなでのあとに同心円状のミガキが入っている。口縁内外は回転などで行う。口唇部にねずみの門歯痕が付いている。口径15.1cm、器高1.9cm。

2は須恵器の直口壺であ



第31図 広幡城遺跡出土骨蔵器実測図 (1/3)

る。丸底の底部には踏んぱりのきいた少し高い高台が付けられ、ここから内窓気味に立上っていって胴上位で最も張りをもち、頸部で締まった所に直立した口縁部がとりつく。胴部中位外面がケズリに近い擦過を行い、内面の胴中位以下になでつけ痕をみるほかは回転なでにて調整する。内面には粘土紐巻上げの接合部分がみえる。つくりとしてはやや雑なほうであろう。完形品で口径12.6cm、高台径14.5cm、胴部最大径25cm、器高23.1cmを測る。

この上下のセットは8世紀前半～中葉のものとしてよいだろう。

2. その他の遺物 (図版41, 第32図)

土師器も少し出土しているが図示しうるのは須恵器のみである。以下、器種ごとに説明を加えて最後に出土地点を示すこととする。

蓋 (1～3) 1の口縁部はL字状に屈曲し、2はそれを丸くおさめている。3はつくりとしてはスマートである。復原で口径は1が19cm、2が20cm。

壺 (4～8) 4は傾きは違うが15とよく似ている。5の高台はあまり高くない。6の底部は平らにならないが7は平底である。8は壺とした方が妥当か。7の口径13.6cm。

高壺（9） 脚端部は蓋の口縁部と同様の形状となる。裾部径11.3cm。

壺（10～20） 10は器形がよくわからない。蓋になるのかもしれない。11～14は同じような形態の壺にならうか。11・12とも肩部が灰被りとなる。13と14は同一個体の破片らしいが接合はしない。15は鉢としてもよい器形である。16～20は長胴の瓶の如き器形の一部であろうか。ともに内面はなでによる凹凸が見られる。

以上の土器は、1がP24、6がP53、2が縦堀のSX1とSX8を結ぶ線上の付近、11・16・17はⅠ郭堀Ⅰ区、3・4・10は同じ堀Ⅲ区、5は同堀V区、9・13・14はⅡ郭堀Ⅰ区、8・12はSD1上層、7・18～20が1号火葬墓の東側掘込み中より、そして15がSS7の東から出土した。

これらの須恵器のうち、11～14あるいは16～20については本来は火葬墓の骨蔵器として使われていたものが、山城をつくる際に削平されて散存したという可能性も考えられよう。1号火葬墓の周辺にこれらの出土が多いということはその感を強くする。

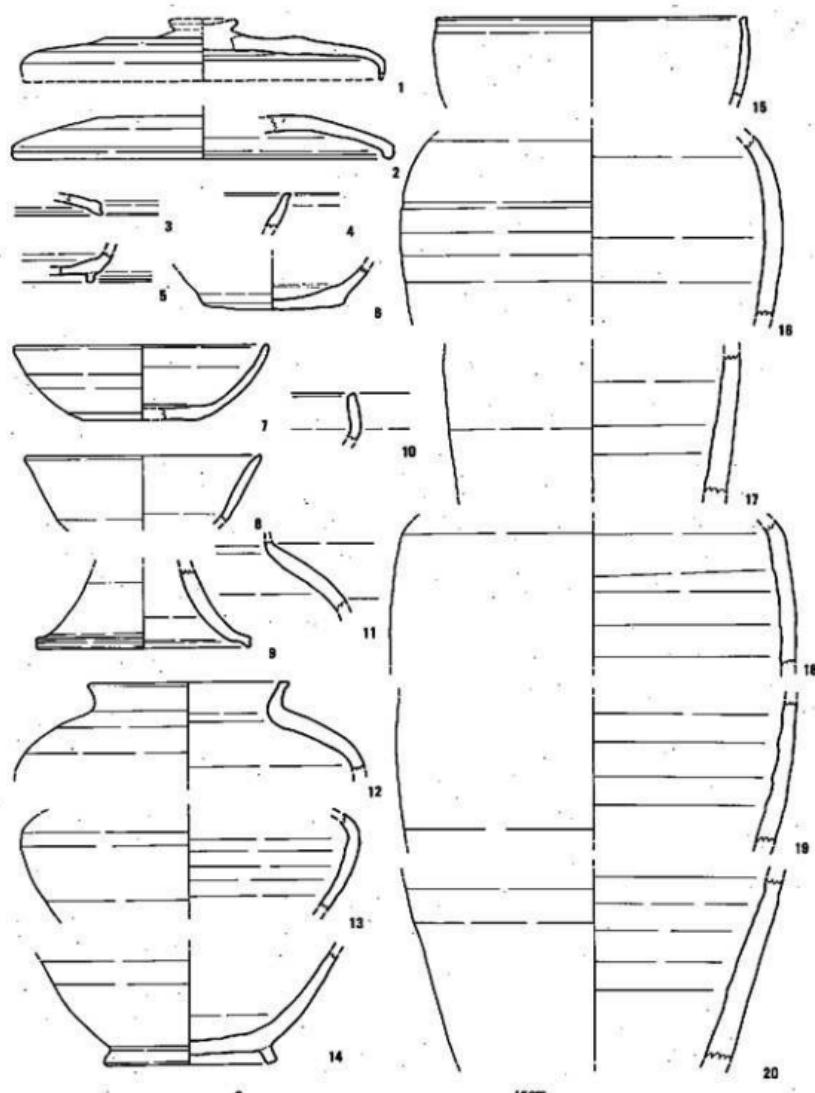
以上の殆どは8世紀中葉を前後する頃に比定される。

3. 小 結

奈良時代については、明確な造構は火葬墓のみであった。火葬墓としているが、火葬骨を入れた容器（骨蔵器）を埋置した造構であって、この場で茶毗に付したのではないことに注意しておかねばならない。

検出したのは1基であるけれども、先に触れたように、周辺から骨蔵器に使用したものとしても不当でない須恵器の破片がいくつか出土しているので、まだいくつか存したものと考えられる。8世紀代にこのあたりで火葬が行われ、骨蔵器に納めて埋置されたことを示すこの事実は、従来あまり明確でなかった豊前地方の葬制を考えるうえで興味深い。

なお、麓の広幅遺跡に奈良時代の住居が営まれており、この骨蔵器と無関係とすることはできない。



第32図 広縄城跡出土須恵器実測図(1/3)

C. 弥生時代の遺構と遺物（第33図）

広幡城遺跡の概要の中で述べたように、広幡城跡のⅠ・Ⅱ郭内外で弥生時代の竪穴住居跡や貯蔵穴・ピット等を検出している。当然のことながら、新しく造営された山城の堀などによって削平されているものも多々存するようであるが、以下においては調査時点での判断を基準に説明していくこととした。竪穴住居跡6軒、貯蔵穴9基が主たる遺構である。

1. 竪穴住居跡

1・2号はⅠ郭の西半部、SZ Iの北側にあり、3～6号はⅠ郭東端部の虎口あるいはSZ Iの周辺に存する。これら相互に重複関係はない。

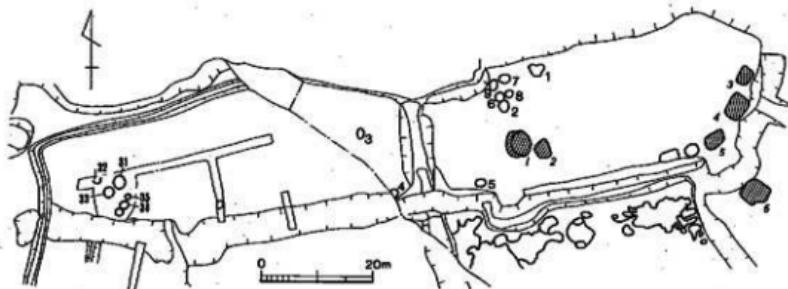
1号住居跡（図版32、第34図）

2号住居跡の北西にあり、長軸4.15m、短軸3.2mの長楕円形プランを呈する。この西側が5cm程高くなっているのでこの住居跡の西半を取巻く格好となるが、この部分までもが住居に含まれるのか否かわからない。これを含めても5.3×4.4mの楕円形プランを呈する。内側の低い部分のみで10.73m²。柱穴はP1・P2のみ深みがあり、他は総じて浅い。

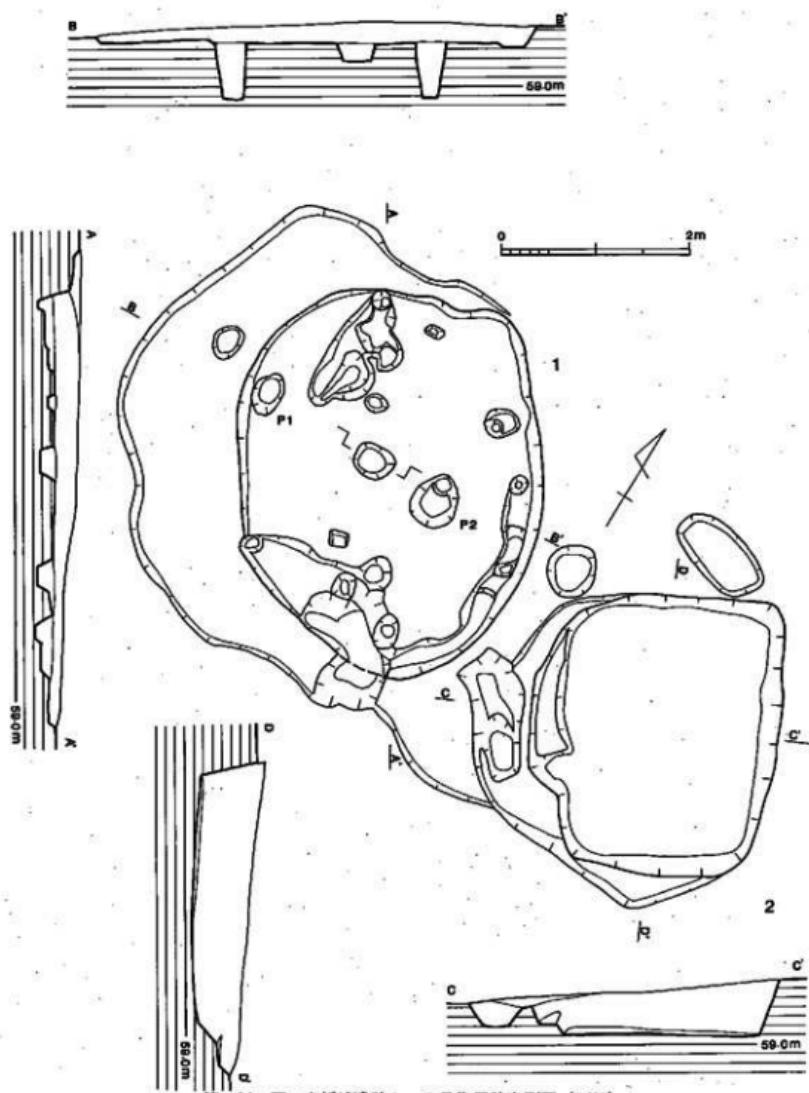
出土遺物は弥生土器少量があって、かろうじて前期の所産であろうことは伺い知れるが、図示にたえない。姫島産の黒曜石剝片1がある。

2号住居跡（図版32、第34図）

1号住居跡の東南にあり、主軸をN-27°-Wにおく長方形プランである。2.95×2.65m程



第33図 広幡城遺跡弥生時代遺構分布図 (1/1,000)



第 34 圖 広幡城遺跡 1・2号住居跡実測図 (1/60)

の大きさで6.9m²の面積を有する。南辺に三角形状の張り出しが、また西壁側にもテラスがあり、どちらかは出入口の用をなしていたのだろう。床面には柱穴は全く検出されなかった。

出土遺物（図版42・43、第38図）

壺7、甕10の個体数と水晶のコア1、姫島産剝片2が出土している。1～3は壺で、1は肩部にヘラ先にて羽状文が施される。2・3はともに上げ底となり、底径は2が7.3cm、3は9.8cm。4～7は甕になる。4・5はともに口唇下端部に刻目を施す。6・7ともに底径7.2cm。前期後半。

3号住居跡（図版33、第35図）

4号住居跡のすぐ北にある。長軸3.3m、短軸2～2.55mのあまり大きくない長方形プランを呈する。主軸はN-31°-E。面積7.26m²。主柱穴は主軸上の2本と考えるしかない。

出土遺物（図版42・43、第38、47図）

壺5、甕7の個体数と、石斧片、姫島産黒曜石コア1がある。1・2は壺になろう。1は肩部にヘラ先によって羽状文が施される。2の底径8.2cm。3～5は甕で、3は口縁下に沈線を、4は突帯を付す。4の突帯は刻目の存否は不明である。5の底径5.1cm。前期後半。

第47図12は、頭部・刃部を欠損する扁平な打製石斧。両側縁の中間から刃部にかけて調整を施す。残長9.1cm、最大幅5.4cm、厚0.9cmで緑泥片岩製。他に磨製石斧の小破片出土。

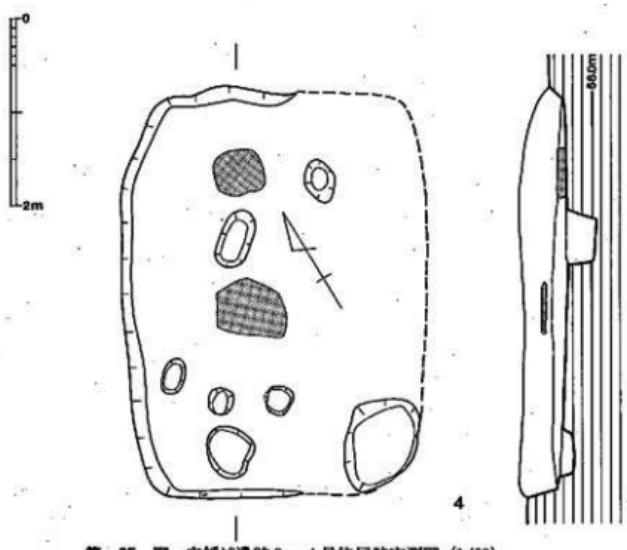
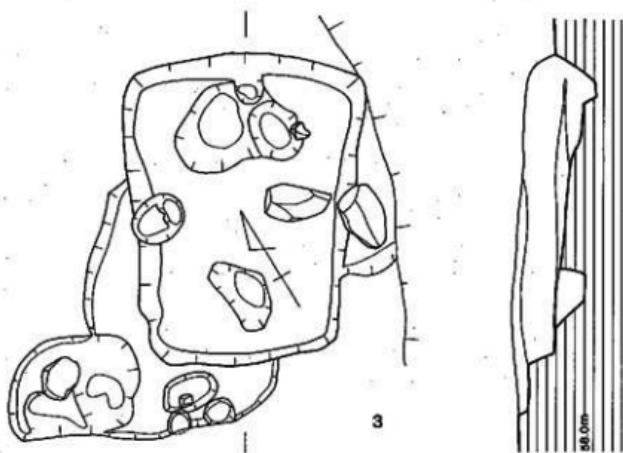
4号住居跡（図版33、第35図）

3号と5号の中間に位置する。東壁が遺存しないが、南北は4.3mを測りこの方向に細長い長方形プランであろう。主軸N-32°-Eとなって3号住居跡とほぼ同じ向きになる。東西壁間が3.2mくらいであるならば約13m²の面積を有することになる。中央付近で床面より約21cm上位で焼土が50～70cmの範囲に検出された。また北壁寄りの所でも12cm程浮いて50cm四方の間に焼土が存在した。柱穴は6個ほどあるものの、どれを主柱としらうかわからない。

埋土中より甕3個体分11片と姫島産黒曜石片1が出土したのみである。弥生前期ではあるが、図示しない。

5号住居跡（図版34、第36図）

4号住居跡の西南にある。主軸をN-56°-Eにおく長方形プランで、主軸長3.6m、短軸長2.25～2.85mを測る。東西両壁ともにその外側に掘込みがあるが、伴うものと断定できない。面積は8.67m²。中央北寄りで床面から12cm上位に焼土の広がりが60～85cmにわたって認められた。柱穴は床面に4個が存するものの、これらが主柱穴となりうるかどうかわからない。



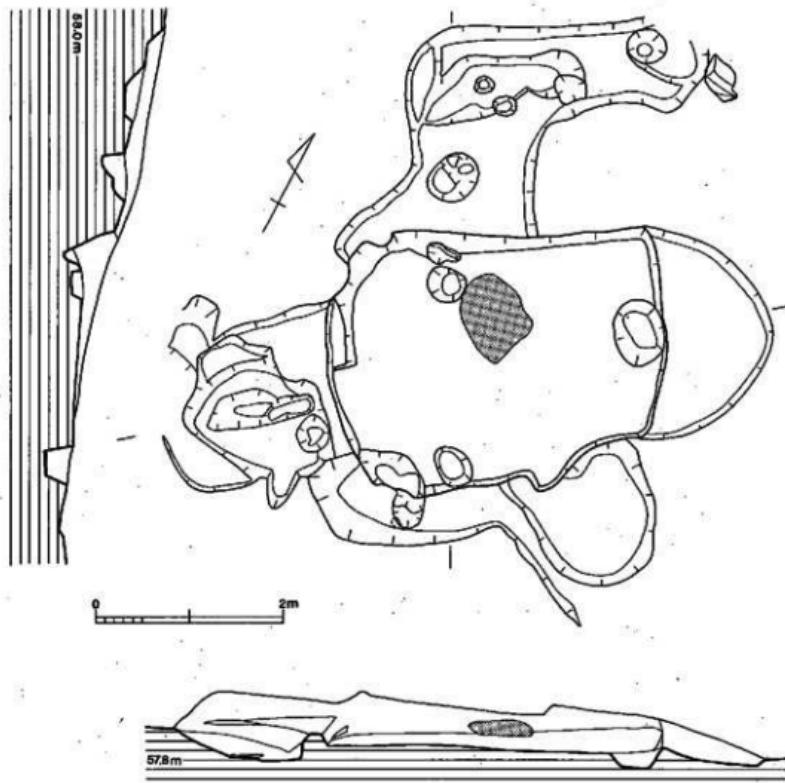
第 35 圖・廣幡城遺跡 3・4 号住居跡実測図 (1/60)

出土遺物 (図版43、第38図)

壺1、甕6そして黒曜石剣片7 (うち姫島産4)、サスカイト剣片1が出土している。1は壺の肩部片で貝殻腹縁にて羽状文を施すようだが明確でない。2~4は甕で、3の底径8.6cm。4は下城式で内湾する器形となる。口縁下の突帯は刻目があるのかどうか磨滅していてわからない。口径20.1cm。前期後半~末。

6号住居跡 (図版9・24、第37図)

山城におけるSZ1とSX1の中間に位置する。主軸をN-69°-Wにおき、長軸4.5m、短



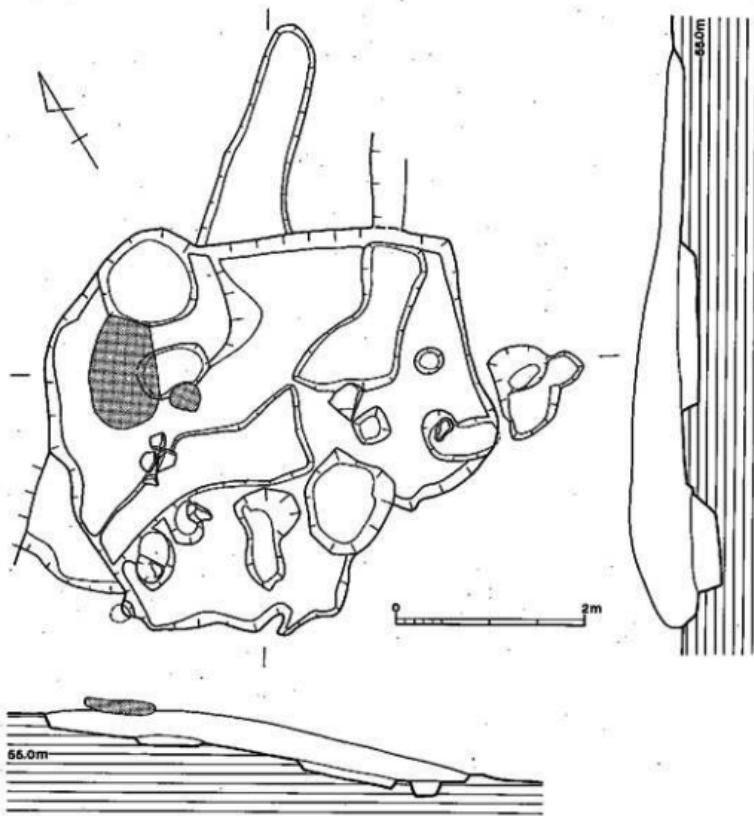
第36図 広幡城遺跡5号住居跡実測図 (1/60)

軸3m程の長方形プランの南西側に張出し部が付く。面積15.9m²。内部に掘込みやピット等がいくつかあるものの柱穴としてまとまりそうなものは捉えられない。

出土遺物（図版44、第38、46図）

壺1、甕4の土器と黒曜石製鉄2（姫島産）、スクレイパー1（姫島産）、剝片62（うち姫島産60）、サスカイト剝片2が出土している。剝片の多さは工房跡的な性格を思わせる。1は壺の底部で径8cm。磨滅が著しい。前期後半。

第46図1～3は石器で、1は抉りの浅い基部を有す完形品。二等辺三角形に近く、やや荒い



第37図 広幡城跡6号住居跡実測図 (1/60)

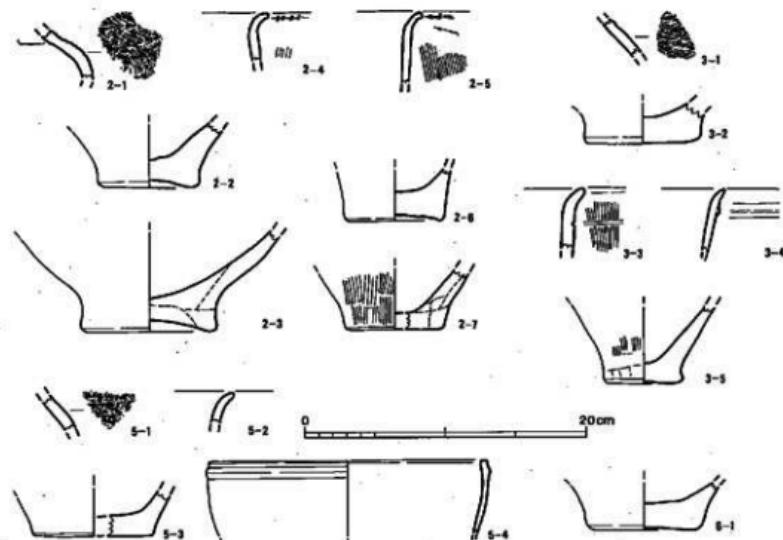
調整を施す。長2.4cm、幅1.6cm、厚0.35cm、重1.2g。2は片側縁に膨みを有す石鎌で、抉りはやや深い。横長剣片を素材とし周縁の調整は丁寧。長2.6cm、幅1.8cm、厚0.45cm、重1.4g。両者とも姫島産出の黒曜石製。3は幅広の縦長剣片を素材とし、片縁に刃部を作り出すサイドスクレバー。残長3.6cm、幅3cm、厚0.6cmで、やはり姫島産出の黒曜石製。

2. 貯蔵穴

I郭西半の北端に近い所で1・2・6～9号の6基が集中して存し、残り3基はやや離れて位置する。遺存状態を見ると、1・2・6～8号の5基はかなり深くて袋状の断面を示すが、残り4基は浅い土壇状の形態をとる。2号と6号は2号が新しい。6～9号はSK6に切られている。全体として出土遺物は少ないが、前期の中頃～末の時期に營まれたものである。

1号貯蔵穴（図版35、第39図）

SK3の西、SK6の東北に位置する。上面プランは崩落もあって出入りのある不整円形状となっているが、本来は破線で示したような直径1.2m前後の円形プランであったろう。底面



第38図 广幡城遺跡住居跡出土土器実測図(1/4)

は直径1.9～2.1mの楕円形に近いプランとなる。底面中央には幅約45cm、長さ78cm、深さ15cmの長方形掘込みがある。底面の南端には間口30cm、奥行30cmの、また北側には底面より10cm以上高い位置で間口25cm、奥行45cmの小さな横穴がある。現状で深さ1.7m、底面より30cm程の最も膨張りを有する所で2.15mを測る。

出土遺物（図版42図SP 1-1）

壺とわかる土器片5個体分が存したのみでごく少ない。図示しうるのは1点である。1は壺の口縁部片であるが磨滅著しく調整はわからない。二次火熱を受けているらしい。前期中頃。

2号貯蔵穴（図版34・36、第40図）

S K 6の南側にあり、6号貯蔵穴より新しい。もとの間口部分は崩落もあってはっきりしないが、現状では短軸1.1m、長軸1.7mの楕円形部分が残る。底面も1.62m×1.8mの楕円形プランとなる。最も深い所で0.9m。北端の6号貯蔵穴側に、あたかもその一部を塞ぐかのように10数個の石材が置かれていた。内部は自然に堆積したものとみてよく、茶褐色土を基調とする埋土が存した。2・3層には堅果類種子が多く見られた。

出土遺物（図版42、第42図SP 2-1～6）

上層・下層とに分けてみたが差異はない。破片のみから壺7、甕14の個体数を得たが図示しうるのは少ない。姫島産黒曜石剣片4、サスカイト剣片1そして炭化した栗・カシの実の堅果類が出土した。また、ウリカエデと同定された炭化材も下層に存した。

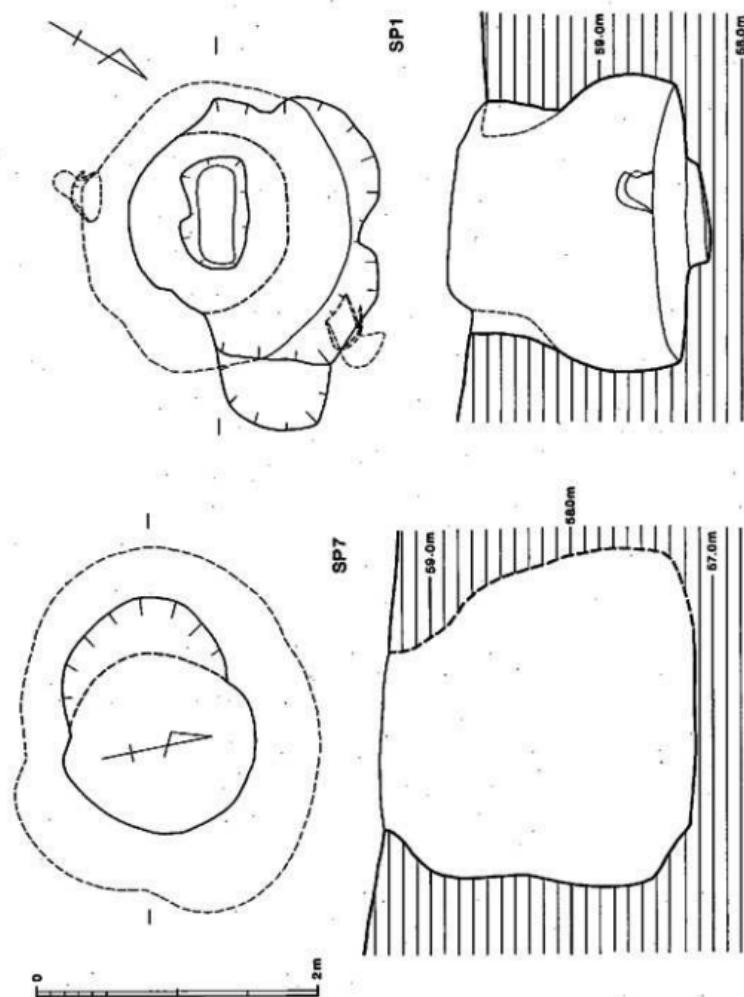
1・2は壺の破片である。1は内面に断面台形の突帯を有し、口唇部下端には小さな刻目を施している。2は頭部片であり、口縁部と胴部との境目には突帯が付され、その間にヘラ状の工具による線刻の山形文様があるが全体像を推測できない。肩部突帯の下には無軸の羽状文が施されている。頭部突帯部分で径15.2cm。3～6は甕の破片であり、いずれも如意形口縁をなす。3・4は口唇下端に刻目を施し、5は剥離が著しい。6は口縁直下に浅い沈線が入る。5の口径24.4cm、6は30.4cm。前期後半～末。

3号貯蔵穴（図版37、第41図）

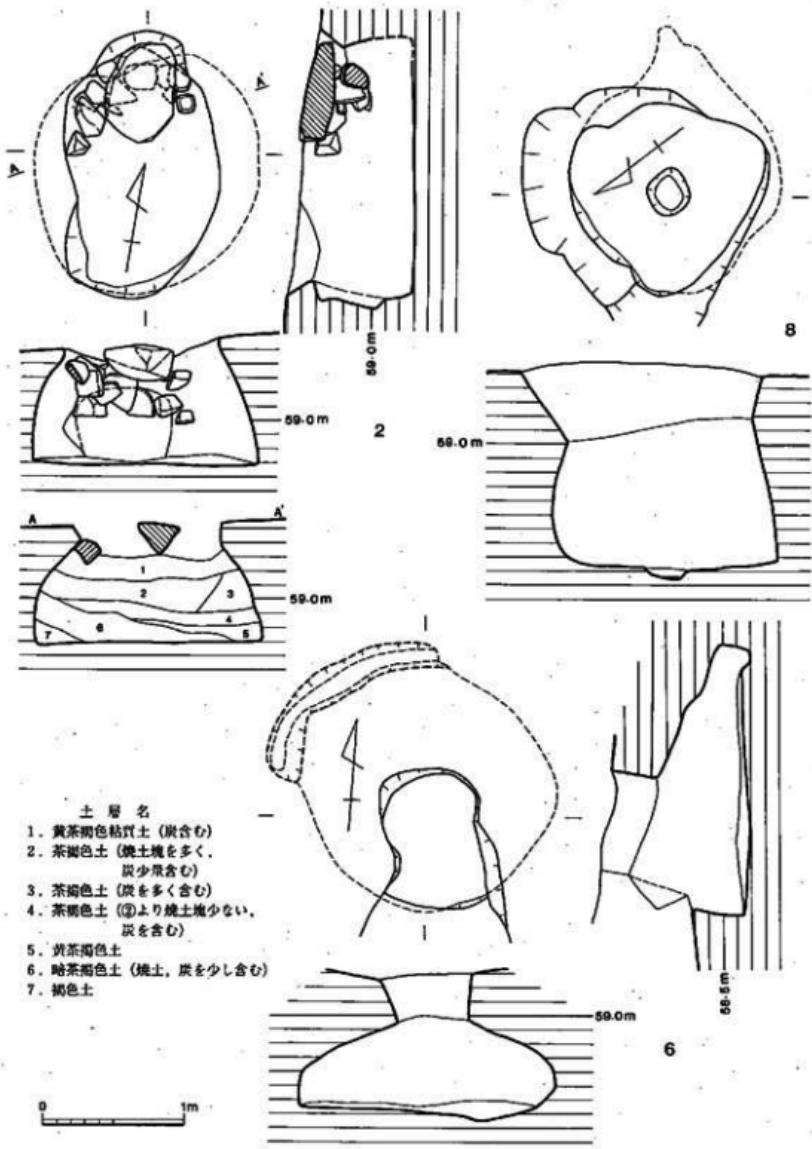
Ⅱ郭内にあり、南北方向に細長い1.2×1.8m程の不整楕円形プランを呈する。深さは最深で40cm。底面南東隅に深さ10cm程の小ビットがある。

出土遺物（図版42、第42図SP 3-1～4）

壺3個体、甕2個体の土器片と石斧片が出土している。1は甕の破片で如意形に開く口縁の下3cmに突帯を有するが、剥離している。2・3は壺の底部になろう。2は磨滅が著しく調整は殆どわからない。底径8.3cm。3は内外ともにミガキのあとがある。化粧土をかけているようだ。底径11cm。前期後半。



第 39 圖 廣州城道路貯藏穴實測圖 1 (1・7 号) (1/40)



第 40 図 広幡城遺跡跡蔵穴実測図 2 (2・6・8号) (1/40)

4号貯蔵穴（図版37、第41図）

II郭の南東端部にあり、一部は未調査区にかかっている。不整形なプランであり、北側にはテラスが、底面東寄りにはさらなる掘込みがある。南北方向で1.6mを測る。

出土遺物（図版42、第42図S P 4-1・2）

出土量はきわめて少なく、壺1、甕3を見るのみである。1は壺の肩部片であり、突帯の下にはヘラ描らしい羽状文がある。2は甕の底部であり、底径9cm。前期後半。

5号貯蔵穴（図版37、第41図）

I郭のSK5の西方にある。長軸1.4m、短軸1.25mの隅円方形プランを呈し、深さは40cm。床面より10~20cm上位にて打製石鎌が出土している。

出土遺物（図版44、第46図）

土器は甕の破片が2個体分、20片程出土したもののが示すにたえない。前期後半のものである。鏡以外に黒曜石剝片4（うち姫島産2）、サヌカイト剝片4が出土した。

打製石鎌2点あり。第46図4は先端部を欠く資料で、残長1cm、厚0.3cmの安山岩製。5は横長に近い部厚な剝片を素材とし、背面の左側縁及び基部側では直角に近い調整を施す。また基部には自然面が残る。長2.8cm、幅2.4cm、厚0.8cm、重3.4gで黒色良質な黒曜石製。

6号貯蔵穴（図版34・36、第40図）

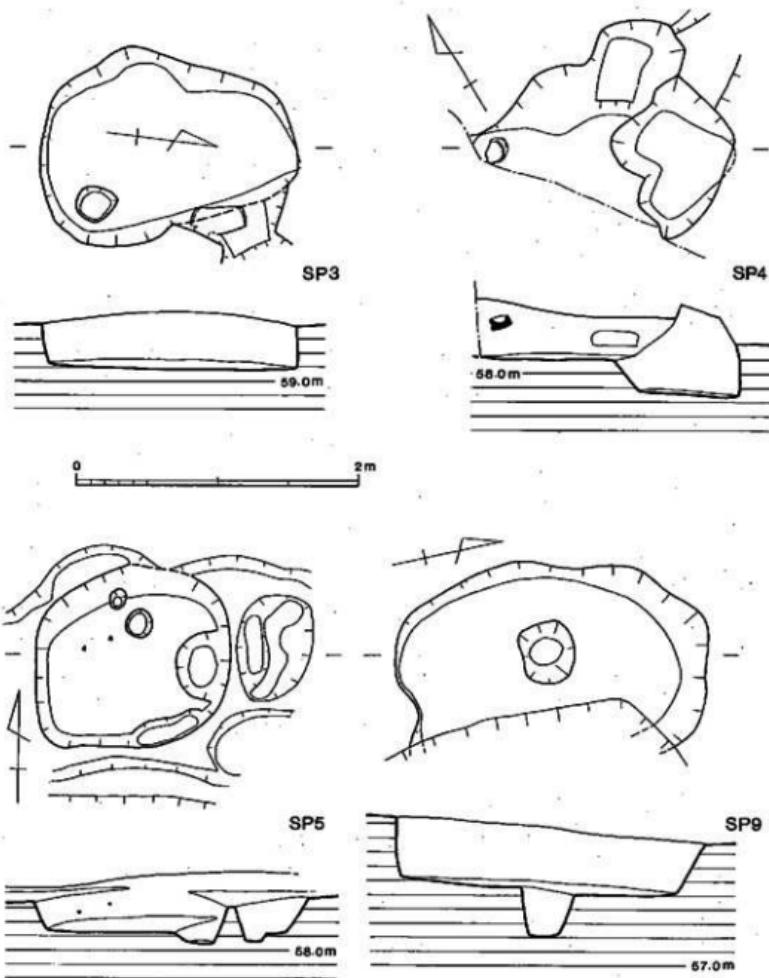
2号貯蔵穴の北にあって、これに切られている。開口部はもと径70cm程の円形プランであろう。底面は1.65×2mの楕円形プランを呈し、北西部には幅15~25cmの溝が約1.5mにわたって掘られている。豊穴内部は最も高い所でも底面より65cmしかなく、その断面形は洞窟のような感を呈している。

出土遺物（第42図S P 6-1~3）

壺・甕ともに5個体分の破片が存在するのみである。それ以外に炭化した種子（栗・カシの実類か）とウリカエデと同定された炭化材が出土している。1は小形の壺で口径10.4cm。2はやや大きくなる壺の口縁部で、内面に小突帯を有する。この小突帯は注ぎ口を形成するものとなる。3は甕の破片で口唇全体に刻目が施される。1~3ともに磨滅が著しい。前期後半。

7号貯蔵穴（図版35、第39図）

SK6の北にある。開口部は1.25~1.35mの円形プランで、その直下から広い空間となるが、西半部は危険性もあって全掘できなかった。底面は2.1~2.65mの楕円形プランになると想えたが、深さ2.2mまで行ってそこからまた30cm下がり、さらに西半部はそれよりもっと深くなっていくことが確認できた。これは下位に別の貯蔵穴の存することも考えてみたが、むしろ二



第 41 図 広幡城遺跡貯藏穴実測図 3 (3 ~ 5・9号) (1/40)

段・三段の底面を持つ貯蔵穴とする方が適当であろう。しかし実際にはその下層部分は掘ることができなかった。

出土遺物 (図版42、第42図S P 7-1~7)

壺2、壺9の個体数を認めたが小片ばかりである。下層から石斧が出土している。1~4は壺の口縁部片である。1はいわゆる下城式と称されるものであるが、刻目のある突帯は口唇部外端刻目部分とともに貼り付けられている。刻目の原体は不明。内面には磨きがよく残っている。2~4はやや厚ぼったくて胴の張らない器形となる。いずれも口唇に刻目はない。4は器胎断面により成形時の貼合せの様子がよくわかる。5・6も壺の底部になる。ともに少し上げ底となる。5・6ともに底径は7.8cm。7は壺の底部になる。底径9.8cm。前期後半~末。

8号貯蔵穴 (図版36、第40図)

6号貯蔵穴の東隣にある。開口部は崩落で変形しており、直径1.2~1.4mの不整円形プランとなる。深さ1.4m。底面は一辺1.4~1.5mの隅円方形状となり、東端部は突出している。中央には径30cmで深さ7cmの浅いピットがある。やや粘質の茶褐色土を埋土としていた。

出土遺物 (第42図S P 8-1)

土器は壺1、壺2の個体で少ない。炭化した栗・カシの実の類とウリカエデと同定された炭化材が出土している。1は壺の口縁部の小片である。口唇に刻目はない。前期末。

9号貯蔵穴 (図版34、第41図)

S K 6の西にあってこれに切られている。長軸2.2mの楕円形プランを呈し、中央に径40cmで深さ34cmのピットを有する。全体としては残くて深さ45cmしか残らない。

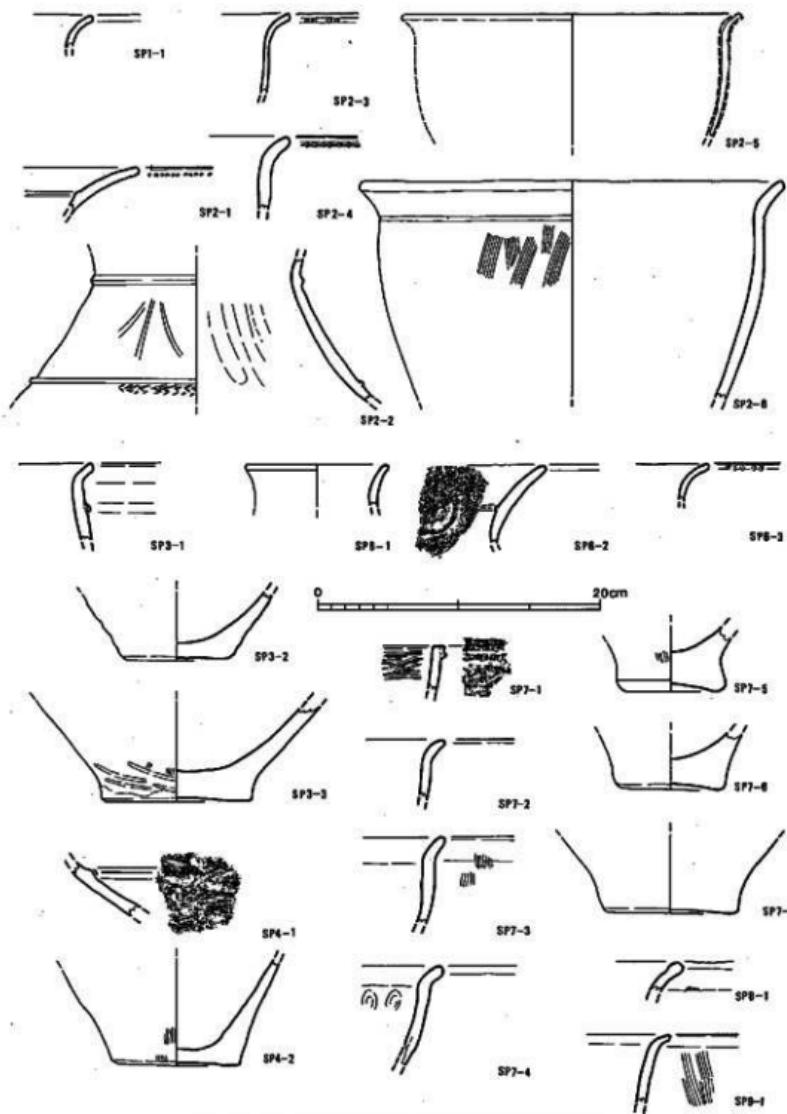
出土遺物 (第42図S P 9-1、第47図)

きわめて少なく、壺1、壺2の個体を数えたのみである。別に石斧1が出土している。1は壺の破片で胴がほとんど張らない。外面は刷毛目がよく残る。前期末。

第47図13は短舟形の打製石斧。周縁から刃部にかけて荒い剥離がみられる。図の右側縁は縦方向の磨きを施す。残長11.2cm、最大幅4.8cm、厚1.5cmで緑泥片岩製。



Photo. 19 降雪中の発掘



第 42 図 広幡城遺跡貯藏穴出土土器実測図 (1/4)

3. ピットその他の土器・石器

ピットとして取上げた土器・石器などを説明してゆくが、そもそもピットとしたものが本来の柱穴状のものもあれば、土壇状のものをもピットとしている場合もある。特に山城跡の堀の外に存した掘込みは住居跡とも貯蔵穴とも捉えきれないもので、かつ土壇とするのも躊躇したのであった。これらも本来は何らかの遺構であったのが後世の削平等によって性格不明瞭なものとなってしまったと考えられよう。P 46・47とした周辺は土器の量も多く、もともと何かが存したことは確かである。以下に説明してゆく土器は、前期の中頃から末の中に大半が納まるものの、一部に中期初頭に下るものもある。

① 土器（図版43、第43～45図）

P 30 壺の底部片である。穿孔があり瓶として使われたものだろう。底径 8.4 cm。

P 32 壺の底部片である。底径 11.7 cm。内面は黒く煤けている。

P 37 1は壺の肩部片で、外面はヘラ先にて描いた羽状文がある。2・3は壺の破片で、2は口縁下に沈線を持つ。3の底径 5.7 cm。

P 40 1は鉢になりそうな壺だろう。2は壺であろう。口唇下端の刻目は爪か棒の先端による施文である。口径 20.1 cm。3は壺の口縁で口径 23.2 cm。胴は殆ど張らない。

P 44 1は壺の肩部片で貝殻腹縁による羽状文がある。2は壺だろう。断面M字の突帯が口縁下に貼付されている。3は壺の底部か。底径 4.2 cm。

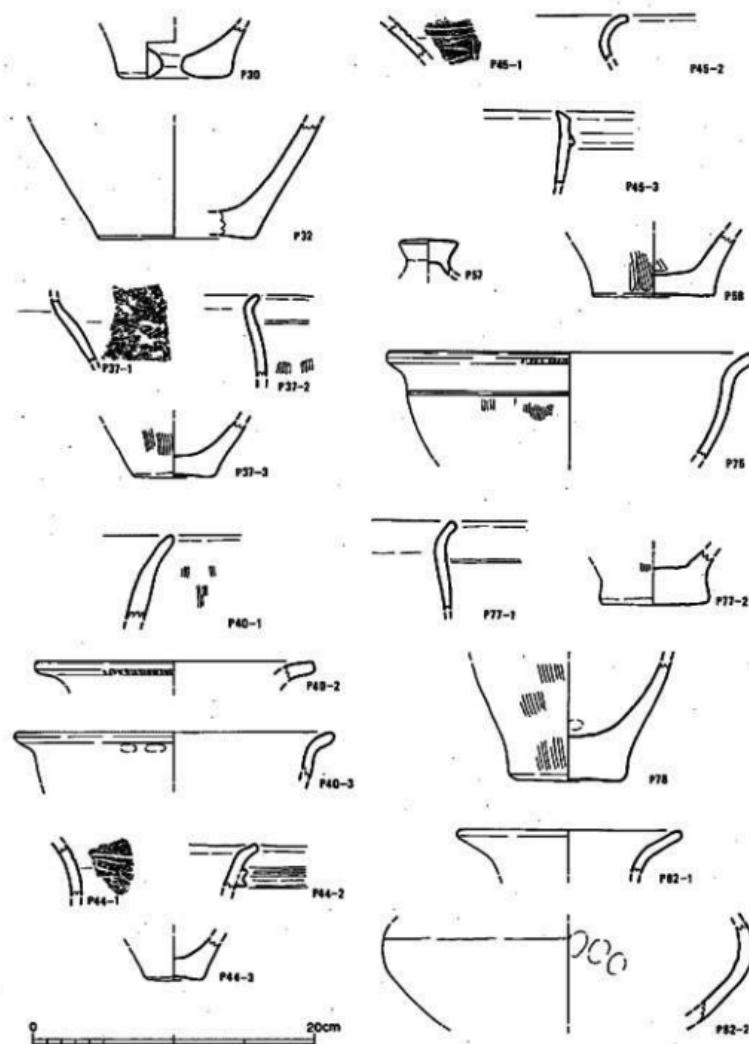
P 45 1の壺肩部には貝殻腹縁による羽状文がある。2はかなり外反する口縁である。あるいはずっと新しい土器かも知れない。3は直口の内面が肥厚する下城式の壺の破片である。

P 46 1・2は壺でこの両者は一個体だろう。1の口径 19.8 cm、2の底径 9.4 cm。ともに磨滅が著しい。2は外面に黒斑がある。3は鉢で口径 17.4 cm。4は沈線を入れる壺で胴は少し張りがあるものの口径をこえない。口径 23.5 cm。

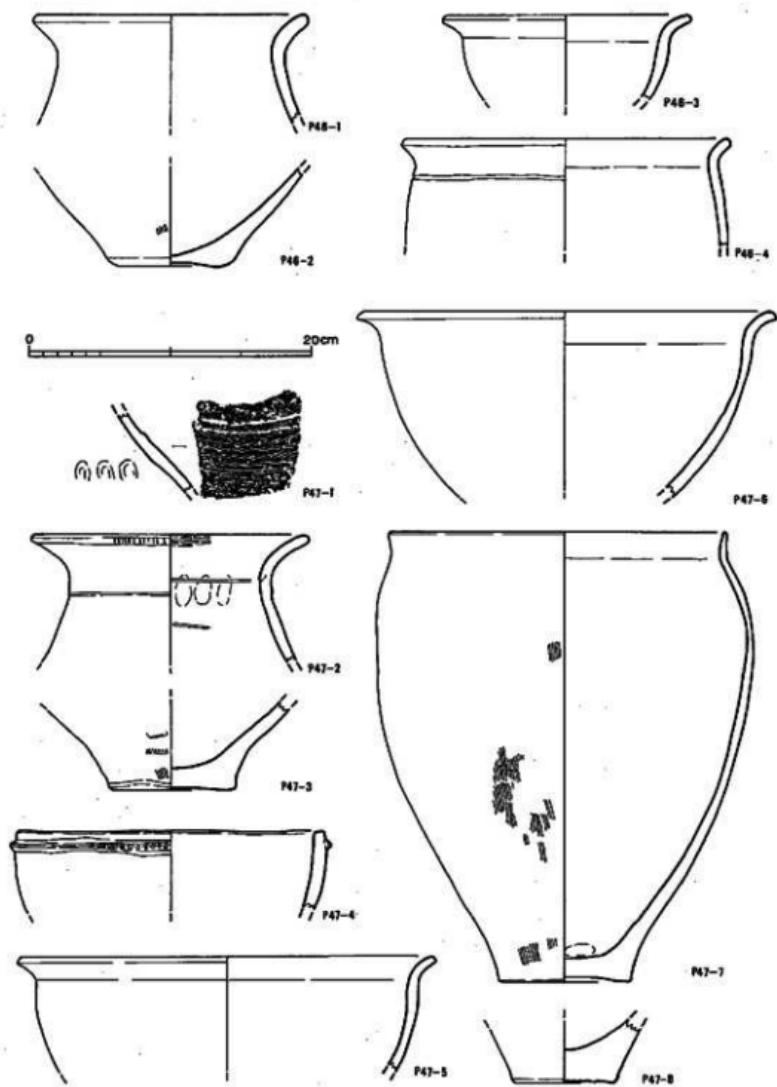
P 47 1～3は壺になる。1の台形突帯上の格子文とその下の羽状文とともに繊細な施文である。この土器は胎土も良質。2は口縁を内外ともに沈線と段とで区分している。口唇下端部には細い刻目を入れる。また内外ともに黒塗りの痕跡が伺える。口径 19.6 cm。3は底径 8.9 cm。外面に細かい刷毛目が残る。4は下城式の壺で口縁下 1 cm の所に突帯がある。内湾したままの器形を呈す。口径 21.6 cm。5・6は鉢と称した方がよいかもしれない同一個体と思われる。口径 30.3 cm。7は口縁が直口気味に立上る壺で、やや特異な形態を示す。底部は少し上げ底となる。口径 23.6 cm、底径 9.4 cm、胴径 26.2 cm、器高 32.5 cm。8は壺底部で径 9.6 cm。

P 57 蓋の搬みである。上端の径 4.1 cm。

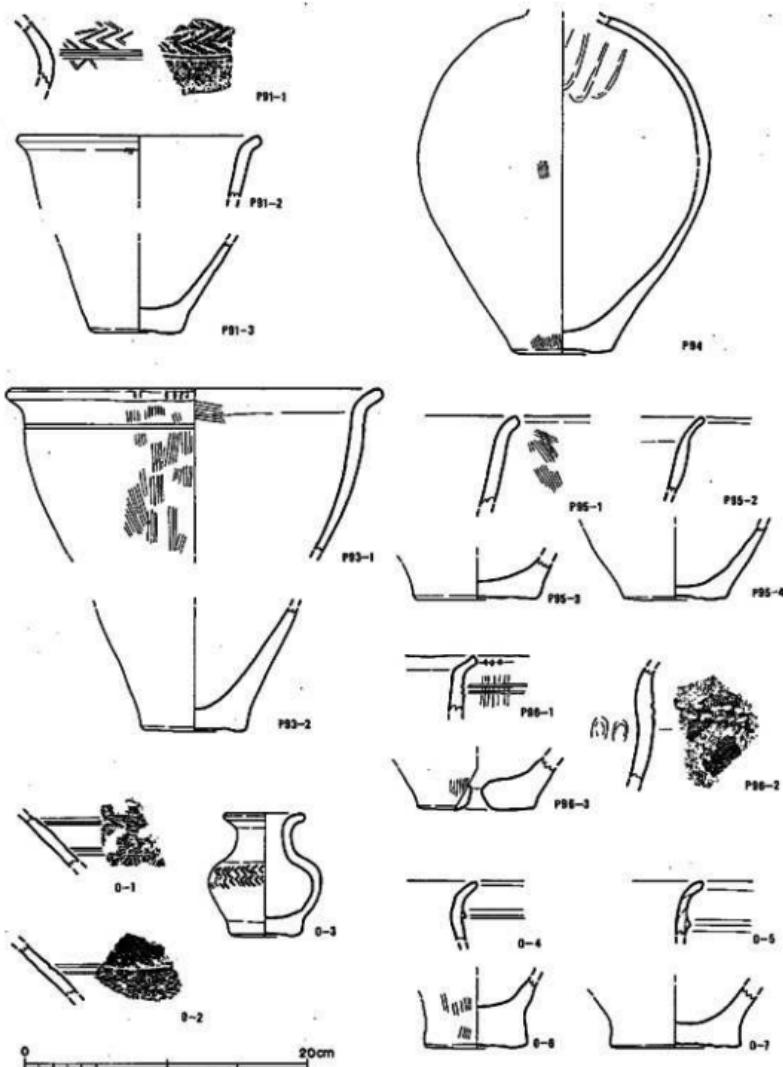
P 58 壺の底部片で径 8.9 cm。



第 43 図 広幡城遺跡弥生ピット等出土土器実測図 1 (1/4)



第 44 図 広幡城遺跡弥生ピット等出土土器実測図 2 (1/4)

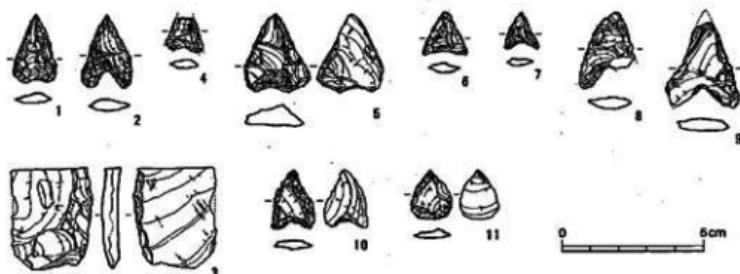


第 45 図 広幡城遺跡弥生ピット等出土土器実測図 3 (1/4)

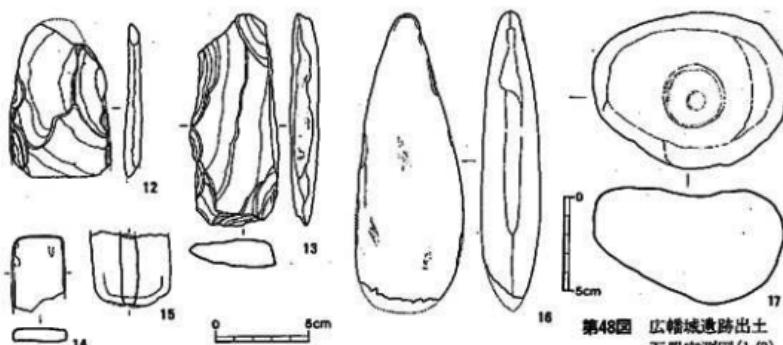
- P 75 鉢形になろう。口唇下端に細い刻目を施し、その下方に沈線を入れる。口径26.4cm。
- P 77 1は口縁下に沈線を入れる甕である。2は甕の底部で径7.7cm。
- P 78 甕の底部でかなり分厚い。径8.5cm。
- P 82 1は甕の口縁で径15.8cm。2は1の胴部とするには張りがそぐわない。
- P 91 1は壺胴部片で貝殻による羽状文を施している。2・3は甕で、2は口径17.7cm、3は底径6.8cm。
- P 93 1は鉢に近い甕で口径27.2cm。口唇全体に細い刻目を入れる。2は底径7.5cm。
- P 94 壺の破片で頸部はかなり締まっている。胴径20.9cm、底径7.3cm。
- P 95 1～3は甕であろう。3の底径9cm。4は壺の底部で径7.4cm。
- P 96 1は口縁下に2条の沈線を持つ甕で、2は沈線でなく長さ7mm程の列点文を二段に有する。3は甕に転用の穿孔された底部片であり、径8.5cm。
- その他(0～1～7) 1・2は壺肩部でともに羽状文を施すが、1はヘラ先、2は貝殻腹縁にて施される。3は小壺のほぼ完形品である。分厚い底部の上に、上位に張りを持つ球形刷をのせ、やすばまりながら外反してゆく口頸部が付く。胴部には羽状文がヘラ先にて施される。口径5.7cm、胴径7.9cm、底径5.1cm、器高8.9cm。1・3はSR5の中より、2はSS1周辺より出土した。4・5は如意形に開く口縁直下に三角突帯を貼付したものだが、甕ともしらうし大形の壺の可能性もないではない。4はSR3の中、5はSK7中より出土。6は甕、7は壺の底部である。6の底径7.1cm、7は9.1cm。6がSR5の中、7はI郭塙I区の南側より出土。

② 石器(図版44、第46図6～11、第47図14～16、第48図17)

- 6～11は石鎚で、図示した以外にも4点出土した。14～16は石斧。
- P 19 6は正三角形に近く、浅い抉りを有す。調整はやや荒い。完形品で長さ1.5cm、幅1.6cm、厚0.4cm、重さ0.5g。安山岩製。
- P 32 7は小型品で、片側縁が内湾する。長さ1.4cm、幅1.2cm、重さ0.25g。姫島産黒曜石製。
- P 57 9は横長の剥片を素材とし、図中の右側縁・基部に調整を施した段階の未製品。残長3cm、幅2.5cm、厚さ0.65cm。漆黒の黒曜石製。
- P 65 8は先端、基部を欠損する抉りの深い石鎚。残長2.7cm。安山岩製。
- P 11 15は扁平な磨製石斧の刃部破片。刃部はあまり鋭いものではない。全体に風化、剥落が著しい。残長4cm、幅4.2cm、厚さ0.9cm。綠泥片岩製。
- P 31 14は扁平片刃石斧の頭部破片。研磨は丁寧だが、風化著しい。残長4cm、幅2.8cm、厚さ0.7cm。泥岩製。
- その他 10は横長剥片を素材とし、背面の周縁のみに調整を施す。完形品で長2.1cm、幅1.55



第46図 広幡城跡弥生時代ほかの石器実測図1 (1/2)



第47図 広幡城跡弥生時代ほかの石器実測図2 (1/3)

第48図 広幡城跡出土
石器実測図(1/3)

cm, 厚0.35cm, 重1.1g。SR 2内より出土し, 安山岩製。11は平基式の石鎌で, 打瘤部を先端にとる縦長剣片を素材とする。10と同様に周縁のみに調整を施す。SR 11内出土で, 姫島産出の黒曜石製。16は蛤刃石斧で, 刃部を欠損する。全体の研磨は丁寧であるが, 器面風化し接線・方向等不明な部分が多い。残長15.2cm, 最大幅5.6cm, 厚3.1cm。広幡城のI郭堀I区の最上層より出土した。蛇紋岩製。

17は玄武岩の凹石で, 長さ10.6cm, 幅8.2cm, 厚さ5.9cm。くぼみはあまり深くない。1号骨蔵器のすぐ西より出土。弥生時代のものという積極的理由はないが, ここで紹介しておく。

4. 小 結

弥生時代の遺構は竪穴住居跡 6 軒、貯蔵穴 9 基を主なものとし、その他に遺物を包含した所があるけれども明瞭な遺構とならなかった。

竪穴住居跡 6 軒は 1 号が楕円形であるほかは皆長方形プランとしてよい。しかし、どの住居跡もプランに歪つなところがあり、かつ主柱穴を明確にし難い。また、4～6 号住居跡には焼土のブロックが検出されたけれども、全て床面より浮いた状態であって、これが炉の痕跡を示しているとは言い難い。また焼失住居であるといえるものでもなかった。このような住居としての機能にかかる条件を欠くものではあったが、これらを住居跡として認めないわけにもゆかないだろう。貯蔵穴があるのに住居がないのも不自然である。

なお、6 号住居跡において姫島産黒曜石の剝片が多量に出土していることは注意しておかねばならない。

貯蔵穴は 9 基を示したが、断面が袋状を呈して遺存状態もよいものは 1・2・6～8 の 5 基であって、これらは接近した所に密集している。広幡城の 2 次調査でⅡ郭を調査した折にも、数基が密集して検出されている。これは貯蔵穴を特定地に集中して設置し、管理をしやすくしていたのであろう。また、2・6・8 号より栗・カシの実と思われる種子が出土し、穀(米)が見られないことは、ここ立地と環境を想うとき興味深いものがある。

ここで出土した弥生土器は最も古いもので前期中頃であり、この点も当遺跡の立地とも相俟って注意されることと考える。



Photo. 20 作業風景

IV 広幡遺跡の調査

〈概要〉

広幡遺跡は、便宜的なものではあるが、広幡城跡におけるSX5～7の東南方6～7mより下方の部分をさすこととする。標高36mより低い方で、標高20mまでの間に下記の遺構を検出した。標高25～29mの間に平坦面があって、遺構の大半はここに存する（付図2・4）。

①中世期以降

- 据立柱建物跡（SB） 2棟
- 石垣（SW） 4
- 溝（SD） 15条以上（暗渠含む）
- 土塁（SK） 3基
- 墓（ST） 2基
- 窪地又は包含層（SG1） 1ヶ所

出土遺物 — 土師器・瓦器・青磁・白磁・陶器・染付・鉄器など

②古墳時代～平安時代

- 竪穴住居跡 9軒
- 据立柱建物（SB） 2棟
- 包含層（SG2） 1ヶ所

出土遺物 — 土師器・須恵器・綠釉陶器・子持勾玉・スラッグなど

③その他

遺構は捉えきれなかったが、遺物として縄文土器・打製石器等がある。

上記の遺構は、標高の高い方から石垣1・2、暗渠とがほぼ並行するように並んで走り、石垣1・2は北方の調査区外の石垣と関連するものとしてよい。石垣1の上方に1号土塁跡が、西に1号住居跡があり、石垣2との間に土塁1と3、建物1がある。他の住居跡や建物跡は暗渠よりも東方の崖線までの間に集中して存する。溝もこの付近に東西に走るものがある。調査区東北部の溝2～4、10～14の付近は少し低くなっている。他の遺構は見られない。

今回検出の中世以降の遺構については、用地外の北側に残る石垣等と関連するのであろう。

A. 中世以降の遺構と遺物

1. 調査区外の現況 (付図1・2)

今回調査した広幅道路の北方には石垣が広範囲に見られ、この石垣によって区画された部分が幾つか存する。これらは調査区における1・2号石垣などとも関連するものと思われるが、それらについて平板測量を行ったので、測量図をもとに現況の説明をしておこう。

なお、調査区の南方については果樹園に造成されている。

説明していくにあたっては広い範囲を一括できないので、石垣や段差で区画された面を便宜的に記号で呼ぶこととする。

まず、調査した所も低い方からA～E面を設定する。調査区外はF～Sに分けておく(第96図、第97図参照)。

A面は2段に分かれ、その東半分が包含層として多くの遺物を含んでいた。

B面は削平された部分であり、遺構は何もない。

C面は遺構が最も多く検出された所であり、中央付近の暗渠によって更に2分割できる。この面は隣のH面と一連としてよいだろう。

D面は1・2号石垣の間にあたる。ここも隣のK面と一連であろう。

E面はこれまでの面に比して傾斜が急になってくる。

F面はA面と一連なのであろうが、ここにも包含層があるか否かは不明。

G面はB面の続きとしてよいだろう。

H面はC面と一連であり、低い石垣をおいてI・J面ともレベル的にはわらない。

I面はその西南部を石垣でL字に区画するが、北部に至ると石垣は絶え絶えに蛇行していく。この北端あたりには石垣というよりは石組とすべき所作のなされた所があり、その一角に井戸かと思われる丸い掘込みらしきものがあった。この付近一帯は庭の如き景観を呈していたのかもしれない。

J面は狭長な面となる。

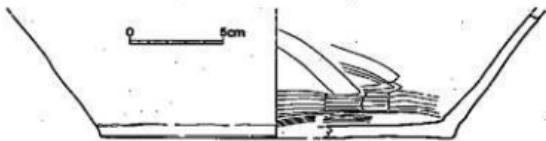
K面はD面の続きとみてよいだろう。

L面はO面とは大きな段差でもって分けられる。その西南部にはやや大きな石垣を築き、南面する所には出枠が設けられる。M面とは一連であろうが、その間に出口らしき部分がある。このL・M面が、ある時期に屋敷地の中核をなしていたことは間違いないだろう。

M面は上記のとおりで、東端の石垣もしっかりしているのでここまでが屋敷地内であろう。

N面はM面に従属する場所と思われる。

O面～S面は斜面がこれまでより急になっているが、ここも屋敷地に付属しての重要な空間



第 49 図 広幅溝跡表面探土器実測図 (1/3)

であつたらしいことが、P・Q間の溝やP・R面北側の溝（これはE面にて検出していた溝と連続するものであつて、おそらくは屋敷地と城とを連絡する通路的なものではなかつたかと考える）、S面の南隅に積石が見られることなどからも伺える。

以上を要するに、C・D、H～Mの面は特に屋敷地としての中核部分をなしていたと思われ、しかもそれは石垣のあり方等を見ると単一の時期に營まれていたものではなく、時期差があるようである。

なお、第49図はO面のL面にのぞむ崖面、L字形石垣の東端部付近（付図1のX印）で採集した瓦質土器片である。大型の壺にならう。内底面とそれより少し上位までは粗い刷毛目のあるが見える。内外ともに茶灰色。復原で底径18.8cm。

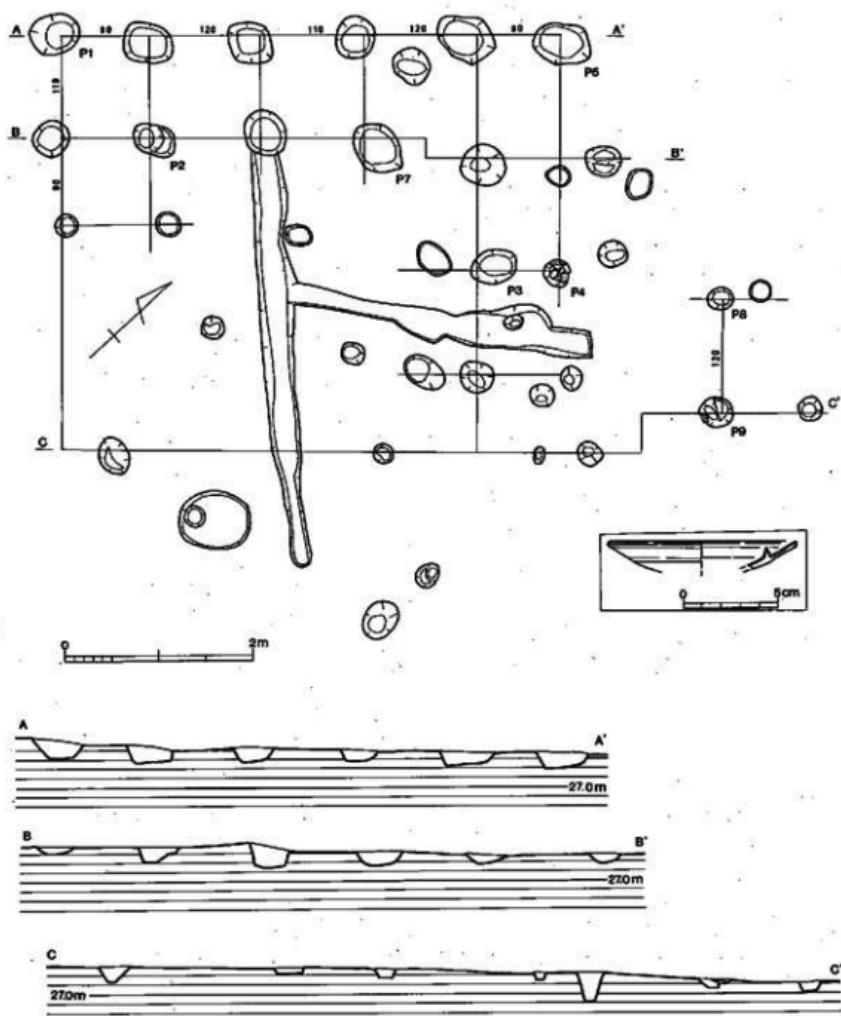
2. 建物・石垣・溝（付図4）

建物は掘立柱型式のもの2棟がある。3号石垣の北東あたりにまだ存するものと思うが確認できなかつた。石垣は1～4号まであるが、4号についてはごく近時のものとの判断により当初から除去したので、いまはその位置のみ示すこととする。溝は14まで数えたが、2～4号と10～14号の間、14号の東側にはほぼ等間隔にて同じような浅い溝が存した。これらは近時の所産であることもあるが全部は掘っていない。5・6号溝は新しい遺物も混じっているものの、ともに中世まで下るとは思えないものであるが、時期決定が難しいのでこの項で説明する。

1号建物跡 <SB1> (図版46、第50図)

1号石垣の東前面にあるが、この石垣の方向とP1・P5を結ぶ柱筋とは平行にならないのでお互いが同時期とは捉えにくい。主軸方向はN-42°-Eとされるが、東側の低い方は柱の数・配列とも不規則である。P1・P5間は90～120cmの間隔で規則的に並び、P6・P7間も同様であるが、それ以外は柱筋が描わない。P1・P5の軸を基線に柱間を結んでいくと第52図のようになるが、そのときP8・P9の2個はP5・P4のラインから180cm離れて対置するようにして存する。ここも何らかの付帯施設であろう。

建物内部にT字形に浅い溝があるけれども、これは建物に伴うものではないようだ。P2～



第 50 図 広輔遺跡 1号建物跡・出土遺物実測図 (1/60, 1/3)

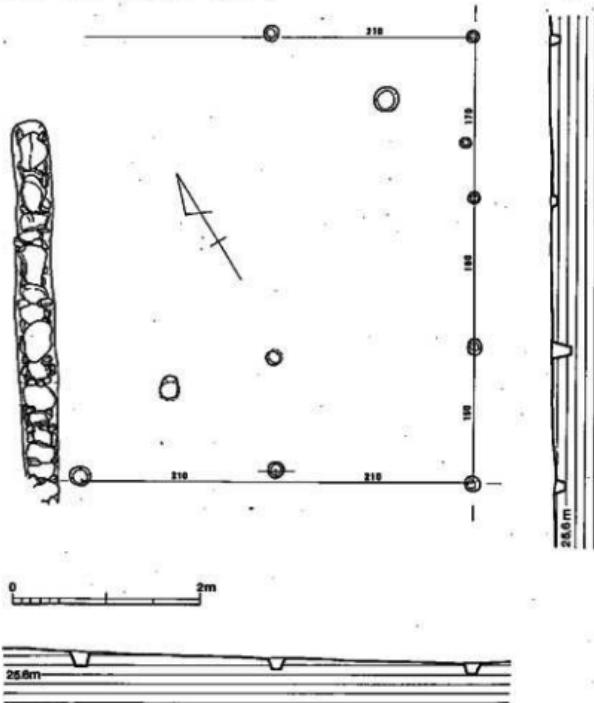
4より土師器・須恵器・瓦質土器・陶器の破片が出土した。

出土遺物（第50図）

P 3より出土した陶器の灯明皿である。内面には黄灰色の釉がかかり貫入が目立つ。外面は口唇部を除いて露胎のまとなる。約 $\frac{1}{3}$ の破片で口径10cmに復される。磁器質の陶器である。筑前高取系であろう。

4号建物跡〈SB4〉(第51図)

3号石垣から続く暗渠の先端の付近にある。主軸をN-31.5°-E にとるが、西北隅の柱穴は見つからなかった。柱穴が直径12~22cmときわめて小さいこともあり、建物として少し疑問の点もないではない。出土遺物等は全くない。



第 51 図 広輪遺跡 4号建物跡実測図 (1/60)

1号石垣 <SW1> (図版47、第52図)

調査区外に遺存する石垣と一連のものであろうが、その並びは直線とはならず、また1号建物跡の並びの所で一度途切れている。現存長12mのうち途中で3m程が崩壊し去っていて石を見ない。石垣の方向はN-34°-E。

もともと緩やかな斜面になっている所を約25°の傾斜で1.7mにわたってカットし、最も低い所に野面積みで最高4段までの石を高さ60cmに積む。その背後には茶褐色系の土を裏込めしつつ、上段部分には控え積みを行っている。石材は単一ではなく、花崗岩・凝灰岩・玄武岩・安山岩などが使われている。掘り形内や周辺より須恵器や陶器片が出土した。

出土遺物 (図版57-60、第53図 SW1-1~5)

1は須恵器の斐口縁部片である。波状文は6本の櫛歯が一単位となっている。2・3は瓦質の破片で火鉢であろうか。2は口径15.4cm、3は16.3cmに復原される。4は常滑焼の底部で、底径11.6cm。黒っぽい茶灰色を呈する。これのみが掘り形内から出土した。5は陶器片で小さいことからして落し蓋になろう。口径9.5cm。内底面に黄緑灰色の釉がかかり、それ以外は黃灰色の露胎に一部茶褐色の鉄釉を塗布する。4以外は石垣の周辺から出土した。

2号石垣 <SW2> (図版47、第52図)

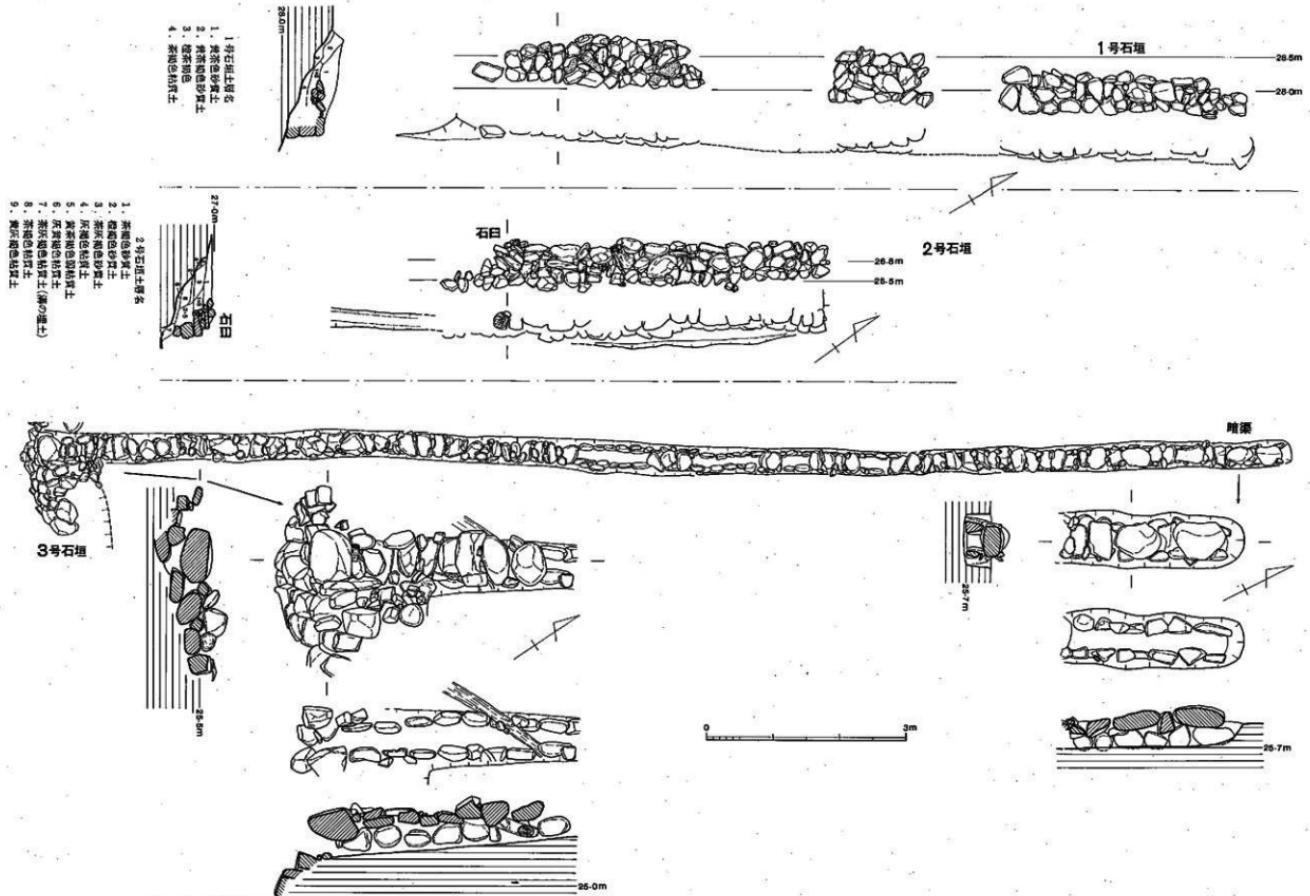
1号石垣の東南10m付近にあり、N-38°-Eの方向をとって1号石垣とは若干のずれがある。いま6m程しか残っておらず、南半部分は取り除かれている。1号石垣よりもやや急な傾斜で斜面をカットし、そこに3~4段の石垣を野面積みにて高さ60cmに築く。この石垣の真下に幅15cm、深さ20cmの溝(1号)が走っている。

石垣の周辺より陶磁器片が出土したのと、石臼1個が石垣の石として使われていた。

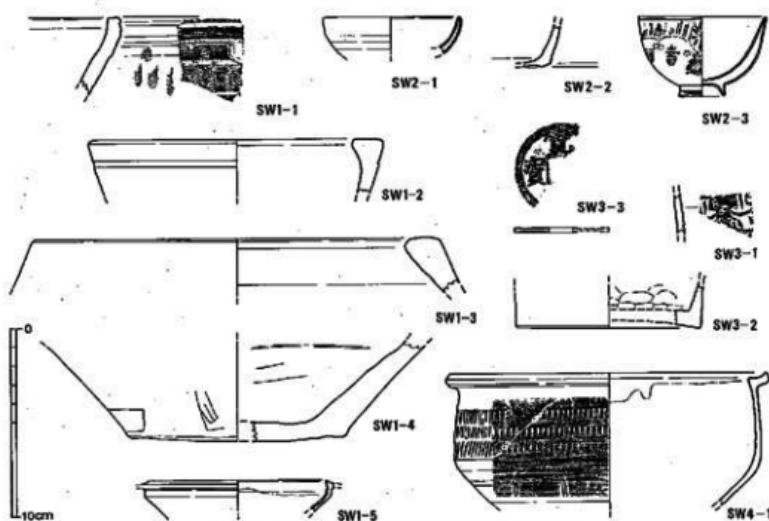
出土遺物 (図版65、第53図 SW2-1~3、第54図 SW2-4)

1は白磁で猪口にしてはやや大きいが、小碗とするには浅い。口径7.2cm。少し灰色がかかった白色を呈す。2は陶器の壺底部片で残存部は露胎のままである。3は染付の小碗で、外面は乳白色地の上に施文する。口縁下と高台部分のみ手描きであるが他はスタンプによるものようだ。「福壽」の文字と菊花文・線文が入る。

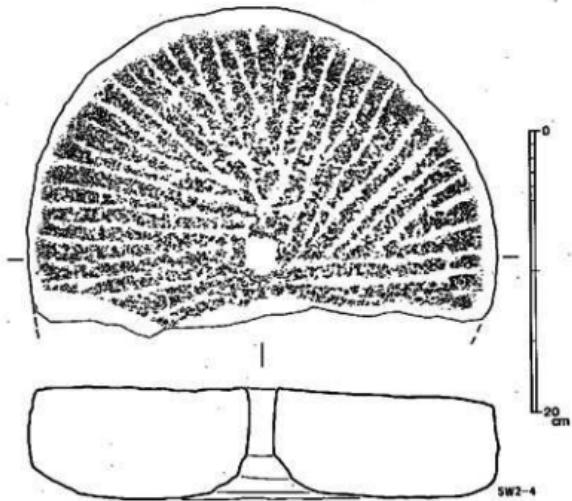
4は石臼の半欠品であり、下臼に使われたものである。径33.9cmで、周縁厚5.5cm、最大厚は7.8cmを測る。中央に一辺2.2cmの一見方形に見える輪突孔があるが、実際は丸い孔である。この孔を中心にして9cm程が周辺より少し高く残っているのは、この臼が使い込まれてすり減った結果とみることができる。上面の礎面に現状で35本の溝がほらされているが、何度も彫りなおした結果としての現状であろう。当初は6~7分割による割付けがなされていたものと思われるが今ではその原形を知る由もない。裏面は孔の周囲がアリ地獄状に傾斜をもち、それ以外の部分は平滑である。多孔室の凝灰質玄武岩であろう。



第 52 図 広報道路 1・2 号石垣、培塿実測図 (1/60)



第 53 図 広幅遺跡石塙出土遺物実測図 (1/3)



第 54 図 広幅遺跡 2 号石塙出土石臼実測図 (1/4)

3号石垣 <SW3> (図版48、付図4)

2号石垣とほぼ並行した暗渠が南西端で果つる所、その出口に直交して存する石垣である。暗渠と同時に築かれたものであることは間違いない。暗渠開口部と直交するように長さ約5mが残存していた。5~6段の野面積みで、控えには小さめの石を多く使用している。この周辺からも土器・陶磁器片が出土している。

出土遺物 (図版65、第53・73図 SW3-1~4)

1は瓦質土器の破片だが、どのような器形のどの部分になるのかわからない。外面はレリーフ状に弧線や珠文があしらわれる。きわめて薄手のづくりである。2は硬い土師質の小鉢で、復原底径10cm。内底面には指押えの痕跡が明瞭である。外面には丹塗りの痕跡をみる。

3は寛永通宝の破片で約 $\frac{1}{2}$ を失す。寛と寶の字が残るがともに手擦れの痕を認める。裏面に文字はない。1625年以降の鋳造にかかるものである。石垣の近くで採集した。

第73図 SW3-4は鉄鎌の茎かと思われる破片で、現存長5.3cm。

暗渠 (図版49、第52図)

3号石垣と同時につくられたもので、ごく僅かに蛇行気味に北東から南西へS-58°-Wの方向へ約18.5mが走る。幅約40cmの掘り形内に、選んできたやや扁平な石を横位置に置き並べて幅10~17cmの石組水路をつくり、これの上に掘り形のラインまでも隠れる程の大きさの石を蓋石として被せたものである。蓋石の間に小石をつめて空隙をなくすように努めている。

暗渠内の高さは10~15cmで、箱形の断面となる。底面レベルは北東端の取付け部分で25.75m、南西端の3号石垣の所の開口部分で25.20mであって、18.5mの間に55cm低くなっているので約2°前後の傾斜ということになる。

この暗渠を必要とした建物が存するはずであるが、現状ではその両側いずれにも見出していない。出土遺物はない。

4号石垣 <SW4>

石垣については前述のとおり調査前に除去していたのでここでは触れない。この周辺から陶器片が出土していたのでそれについて述べる。

第53図 SW4-1は陶器の鉢形になるもので、胴部上半は鉄軸の上に飛びカンナが施される。受口になっているので蓋付となる。小石原焼であろうか。

1号溝 <SD1> (付図4)

2号石垣の真下にあり、それよりは古く位置づけられる。石垣をこえて東北の方へは延びてゆかないが、西南方向へはずっと続いている。確認した長さは約20m。溝の幅は25~40cm、深さが20cm前後を測り、溝底レベルは西南方向へだんだん低くなっていく。須恵器や瓦器・陶磁

器等が出土している。

出土遺物（図版59、第55図SD1-1~6）

1は須恵器の杯身で内側が残存し、復原口径10cm。口縁の立上りは低い。混入品であろう。2は須恵器甕の刷部片であるが、古墳時代のものではない。外面は擬格子の平行タタキ、内面はなでを施す。3は青磁碗で、灰青色の胎の上に濃緑黄色釉をかけている。内底面は貫入が多い。疊付から高台内的一部に釉のかからない所がある。高台径5.6cm。龍泉窯系のものだろう。4は無釉の陶器摺鉢である。砂粒を多く含み胎土は粗い。赤茶色を呈する。復原口径24.6cm。高取系か。5も陶器摺鉢片で、胎土は紫灰色の良質なものを使用している。器表面は内外ともに黄灰色。内面の櫛目は密である。6は染付の皿である。白い磁胎の見込中央と体部とにコバルトで繪付けされ、その上にやや青みがかった透明釉をかける。見込の高台直上部分と疊付の所は釉をかき取っており、重ね焼きしたことがわかる。高台径7.8cm。

2号溝〈SD2〉（付図4）

2号石垣の延長線上あたりにあり、ここから東南方向へ3号・4号……10号・11号……と等間にて溝が並んでゆく。これらは近時の、おそらく畠の畝間の溝であろう。ただこの2号のみはその中央付近から瓦質土器や陶磁器・瓦の破片などがまとまって出土している。1号溝の延長線上にも近いことから、あるいはこの2号溝のみは古いのかもしれない。幅50~90cm、深さ10cm。

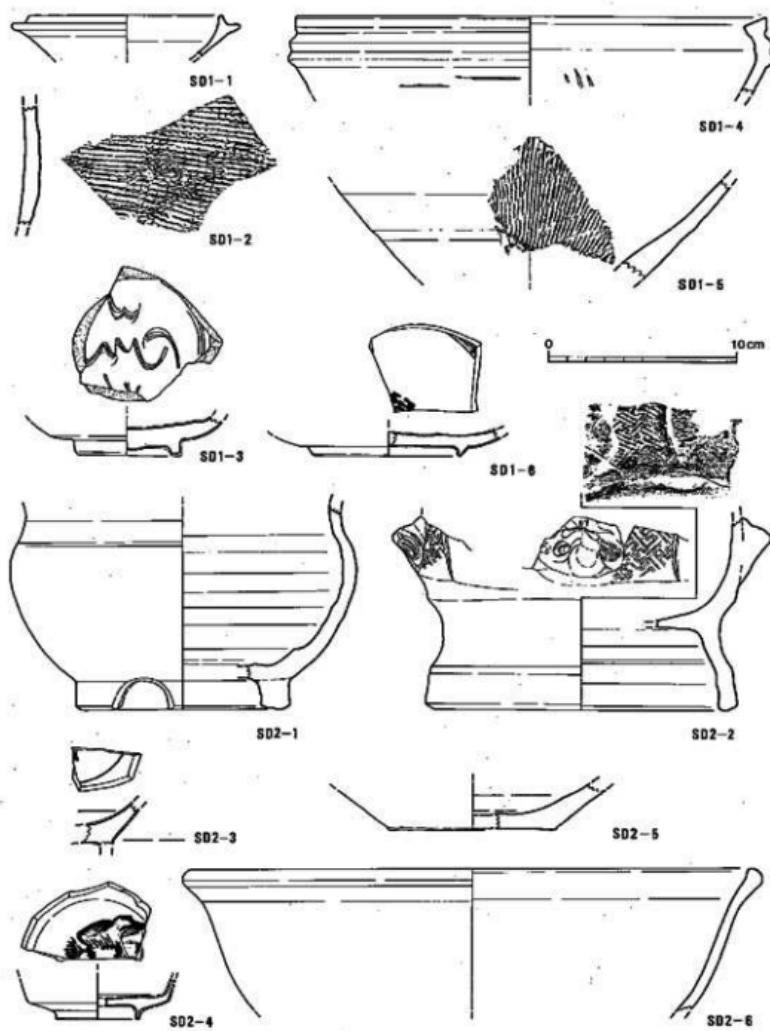
出土遺物（図版57・59、第55・73図SD2-1~7）

1は瓦質の壺形土器で、三方か四方に半円形の切込みを入れた高台が付く。肌色を呈し焼成は良い。復原で底径11.4cm、胴径18.2cm。2も瓦質で壺形になろう。高い脚台が付く。内外ともに黒く焼されている。脚部外面は凸印を主体とした斜行線文が浮形式にあり、その上に獸面が逆向きに貼付されている。復原で底径16.4cm。3は染付の小片である。見込に巻線と文様の一部が見える。やや青みがかった釉調をなす。4も染付の碗で見込には岩山と松の木を描いている。疊付は露胎である。高台径4.4cm。優品としてよい。釉は少し青みを帯びる。明代のものであろう。5は瓦質の、おそらく捏鉢になるものであろう。外底部には糸切り痕がわかる。底径8.8cm。6も瓦質の鍋になる破片である。やや土師質に近い。復原口径31cm。

第73図SD2-7はくさびのような鉄片で、現存長4.2cm。

3・4、10~14号溝（付図4）

3・4号は幅30~50cmで2号溝よりやや狭い。10~14号は幅50~65、深さ10~30cmを測る。3号溝からは瓦質土器片・陶磁器片・瓦片が出土し、4号溝は黒色土器片・陶器片があった。10~14号溝からは土師器・須恵器・陶器・磁器の小片とともに黒曜石片もあった。



第 55 図 広軒遺跡溝出土遺物実測図 1 (SD1・2) (1/3)

出土遺物 (図版59、第56図 SD 3-1・2, SD 10-1)

3号溝の1は薄手の陶器で鍋としてよいだろう。黄褐色の器胎で内面は薄い釉がかかり、外側は露胎で煤が付着している。復原口径23cm。同2は唐津系の陶器片で、黒褐色釉の上に外面は白灰色釉の模様がある。

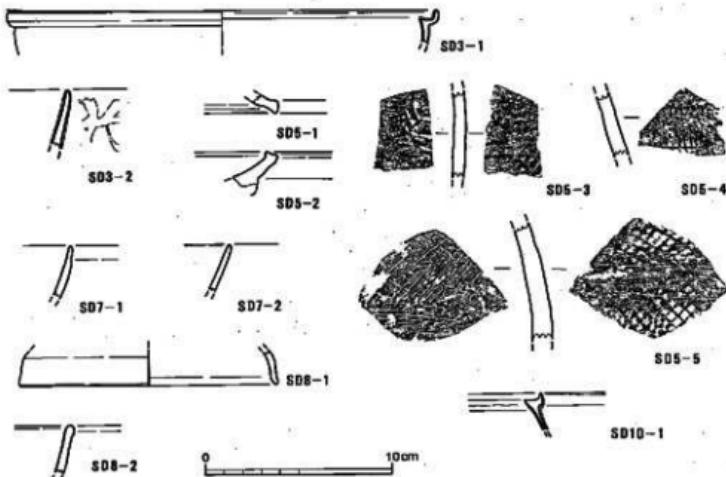
10号溝の1は器形的にはSD 3-1とよく似るが、これは磁器に近い陶器である。蓋受け部と口唇直下は露胎のままである。釉はうす緑を帯びた白灰色を呈し、貫入が著しい。

5号溝 <SD5> (付図4)

2号住居跡と5~10号住居跡の中間で、途中を暗渠に切られながらほぼ東西に23mのびている。幅はほぼ一定して約70cm、深さは15cm程度である。遺物はわりと多く、土師器・須恵器・白磁の破片とスラッグ、黒曜石の石鎚が出土している。石鎚については後述する。この溝はもっと古く住居群と同じ頃のものかもしれない。

出土遺物 (第56図 SD 5-1~5)

1は須恵器蓋の口縁部片である。2は須恵器であるが、落し蓋の破片になるかと思われる。内面は灰被りである。3は須恵器蓋の破片で、内面は同心円当具痕の上をなでてあるが、その同心円には弦状の直交線が入る。4は須恵質であるが常滑産大甕の破片であろう。5も須恵質の破片で、これの内面は細かい刷毛目調整を行っている。



第56図 広幡遺跡溝出土遺物実測図2 (SD 3~10) (1/3)

6号溝〈SD6〉(付図4)

2号住居跡のすぐ南にあり、ほぼ東西方向に長さ8mを検出した。幅40~70cmと広狭あり、深さは5cm程しかない。土師器・須恵器・黒色土器片が出土しているが図示しない。黒色土器は流入で本来は住居群と同様の時期の可能性もある。

7号溝〈SD7〉(付図4)

SG1と10号住居跡・8号溝を切って東西に走る細い溝である。幅25~30cm、深さ10~15cmで6mの長さを検出した。土師器・須恵器・瓦器塊の破片とスラッグが出土している。

出土遺物(第56図SD-1・2)

1・2ともに瓦器塊の小片であり、外面の口縁下約1.5cmは黒色となる。1はその下7mm程が白いベルトとなり、下方は黒色である。ともに焼成があまくもろい。

8号溝〈SD8〉(付図4)

SG1・10号住居跡を切り、7号溝に切られる。幅0.9mで長さ4.6m、深さ5~10cmなので、溝というより浅い土壌とした方がよいかもしれない。土師器・須恵器・瓦器塊・青磁の破片とスラッグが出土しているが、これらは本来がSG1のものかもしれない。

出土遺物(第56図SD8-1・2)

1は瓦器塊の破片で、口縁下1.4cmまでの外面は黒色に変ずる。焼成あまい。2は須恵器塊片で口径14cm。混入したものだろう。

9号溝〈SD9〉(付図4)

暗渠のところ、5号溝と交差するあたりからはじまって7・10号住居跡を切っている。長さ10mまでを確認した。幅は50~60cmで深さ20cm。土師器・須恵器・瓦器・青磁の破片とスラッグそして粘土塊が出土しているもの的小片ばかりで図示しない。

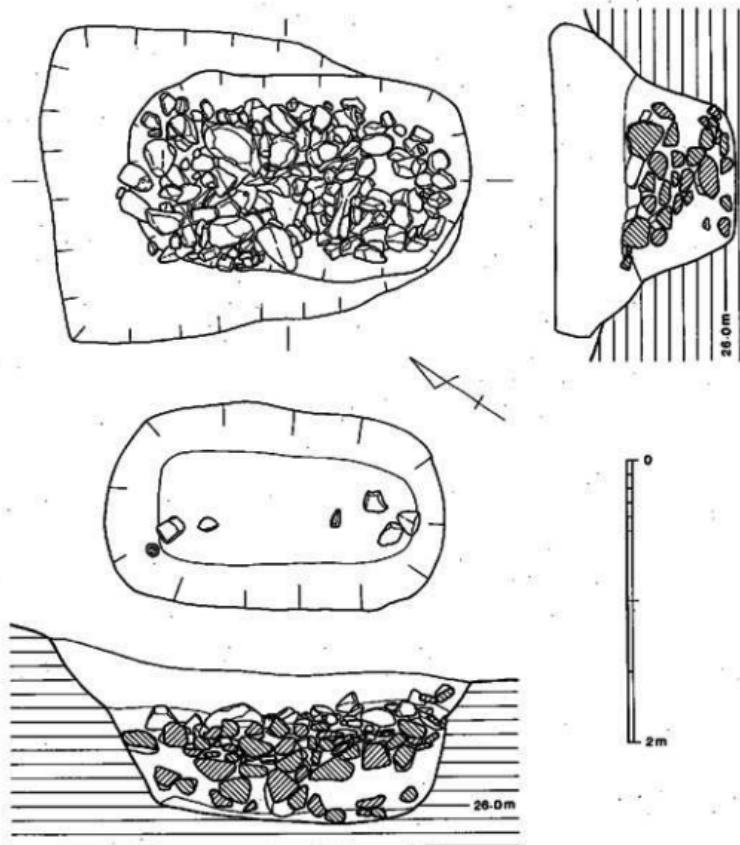
3. 土 壤

土壤としたものは3基がある。1号と3号は1・2号石垣間の平坦部に、2号は2号石垣の南側に位置する。

1号土壤〈SK1〉(図版50、第57図)

1号建物跡の位置する面、1号溝の西に位置する。平面プランは将棋の駒のような五角形に近い形状を呈するが、40~50cm下がった所で長方形プランの段があり、ここ所より以下に

多量の砾が入っていた。上面で $295 \times 190 \sim 225$ cm、中段は 240×140 cm、底面は隅円長方形を呈し 180×75 cm の規模となる。最深部で 130 cm の深さがあり、底面より 80 cm 上までは砾が充満している。主軸は N-35°-W。底面より約 15 cm 上位にて、北西隅より二彩の三足小壺が倒立にて出土し、それ以外には埋土中に土師器・須恵器・黒色土器・瓦質土器・白磁・瓦等の破片があった。



第 57 図 広輔遺跡 1号土塙実測図 (1/40)

出土遺物 (図版58, 第58・59図)

1は小さく低い三足を有する小壺であるが、残存部での見かけは黄釉のみであって單彩と捉えられる。しかし内底面に1.5~2mmくらいの点となつた緑色の釉が1ヶ所、他の同大の黄釉7~8ヶ所とともにこびり付いている。これを口縁から肩部付近に施釉したときの飛沫が落下したものと捉え、緑色と黄色に発色した二彩とする。なお、黄釉の下地に白色の化粧土を用いている。胎土はやや粗さも感ずるが良質としてよく灰黄色陶土を用いる。焼成はやや軟質。底部は径4.8cmの平底をなし、3ヶ所に小さな足を貼り付けるが、いま2本は欠損する。足の高さは5mm。外底面には基本的には施釉されないが、一部に黄釉が流下して付いている。器体は底部から内窓気味に立上り、底部より1cmと3.5cmの所に断面台形の突堤がある。これは削り出したものだろう。黄釉は底部を除いた外面全体にかかるが、薄くて貫入が多く入り、大半が剥落している。胴部最大径7.2cm、現存高4cm。二彩三足小壺と称しうるが、茶入れに使ったものであろうか。

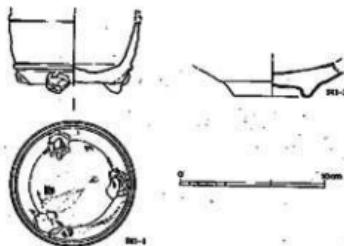
2は白磁の底部片である。きわめて良質の磁胎に乳白色の釉がかかるが、内底面は1.5cm幅で環状に釉がかけ取られる。高台疊付には一部に砂が付着している。復原高台径4.3cm。

3は土師器甕の破片で薄手のつくりをなす。器表面の磨滅が著しく調査の詳細を見極め難いが外面は刷毛目、内面はヘラ削りらしい。復原口径21.5cm。

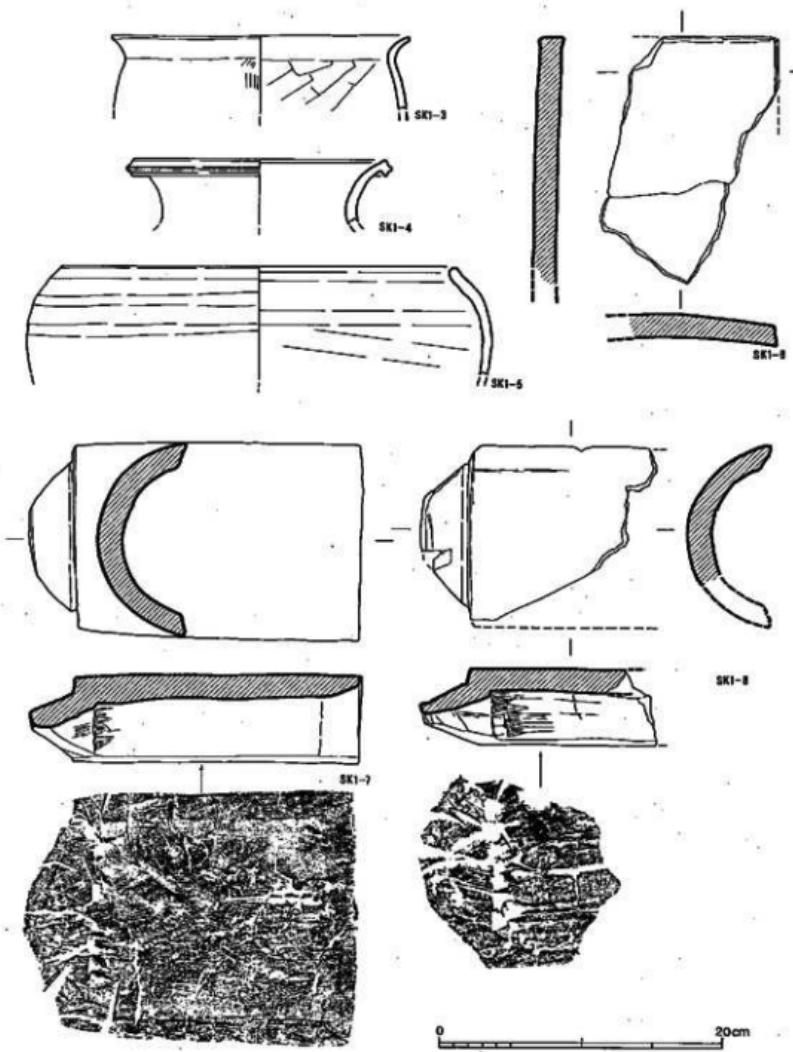
4は須恵器の甕である。黒灰色を呈する良好な焼成の土器で、復原口径18cm。

5は瓦質とするよりは須恵質とした方がよいという感じの土器である。無頬の壺になろう。外面はなでに近いヘラミガキを行う。復原口径28.5cm、肩部径33.7cm。

6~8は瓦である。ともに胎土は白灰色ながら外面は黒褐色を呈する。6は平瓦(女瓦)で長さ17.2cm、幅10.8cmを残す。厚さは1.7cm。上面はなで、下面は刷毛目のあとミガキが施される。7・8は丸瓦(男瓦)で同形同大のつくりをなす。完形に復された7でみると、刷長23cm、玉縁長3cm、幅14cm、厚さ1.7~2.1cmを測り、総体に寸詰まりの感を受ける。内面には布目痕をみるが、玉縁と本体の接合部は植物質の原体を用いての刺突痕がある。



第58図 広幡道路1号土塹出土遺物実測図1

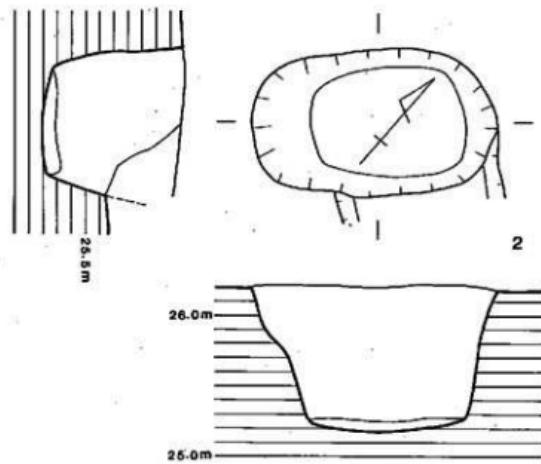


第 59 図 広幅遺跡 1号土塁出土遺物実測図 2 (1/4)

2号土壤 <SK2>

(図版51、第60図)

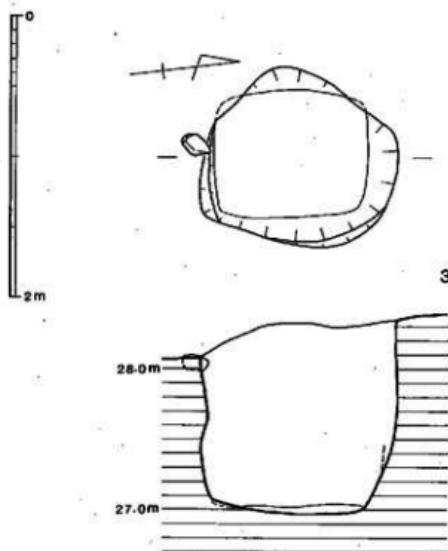
2号石垣の南にあり、主軸はN-49°-Eを示して石垣とほぼ同じ方向である。173×102cmの長楕円形プランを呈し、深さ100cm。東壁を別の掘込みに切られている。出土遺物は全くなく、時期不詳である。いわゆる落し穴のようにもとれるが同形状のものが近在しないことなどから今は中世のものとしておく。



3号土壤 <SK3>

(第60図)

1号住居跡の東隣にあり、1号土壤の北にあたる。平面は不整円形をなすが、底面は南北に長い108×90cmの長方形プランを呈する。主軸はN-7°-E。深さは140cm。この土壤は調査時には井戸状造構と考えていたが、遺物としては上層より黒曜石製の剝片が出土したにすぎず井戸とする積極的根拠もない。時期不詳ながらもここで報告しておく。



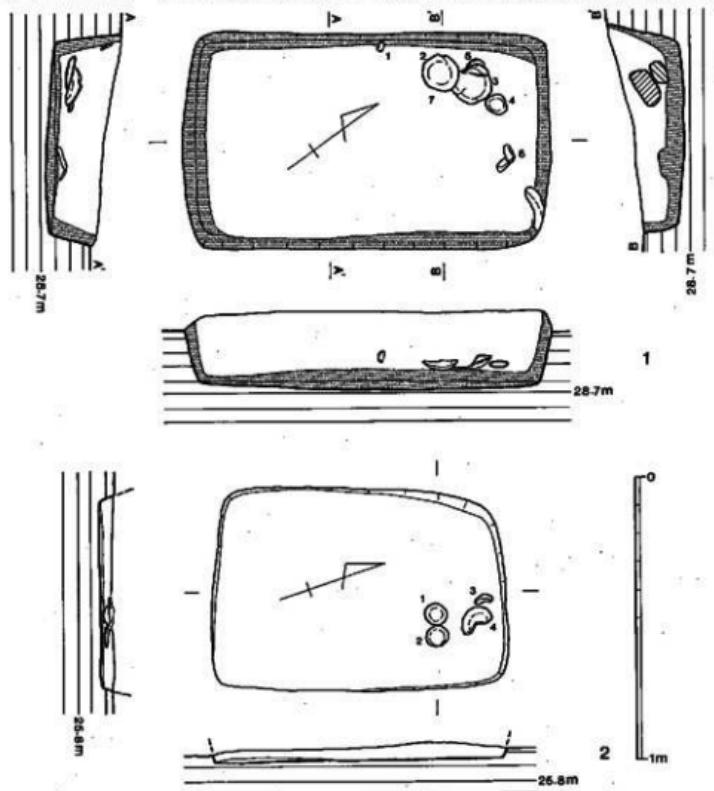
第 60 図 広幡遺跡 2・3号土壤実測図 (1/40)

4. 墓

2基があった。ともに北東方向に主軸を持ち、両墓間は25mを距てる。

1号墓<ST1> (図版51、第61図)

1号住居跡のすぐ東に位置する。主軸をN-35°-Eにとり、1号石垣とほぼ同じ方向を向く。長さ130cm、幅75cmの長方形プランをなし、深さは27cmが残る。四周壁と、床面から3cm程間層があってその上4~5cmには炭化材が圓錐しかつ敷かれていた。炭化材は丸太材が炭になっ



第 61 図 広幡遺跡1・2号墓実測図 (1/20)

たものであるが、これは棺材が焼けて炭化したものではなく、敷かれたものである。埋土は茶褐色土であった。北東小口壁寄りに土師器小皿・环・铁器が副葬してあった。土师器の环②・③と小皿④が南から並び、环②の下に小皿⑦が3個、环③の下に小皿⑤があった。环①はやや離れて、また铁器も少し離れて出土している。

なお、炭化材の検出状況をみると、木棺を埋置していたと考えるのが妥当と思われる。また、この炭化材についてはユズリハと同定されている。

出土遺物（図版57・60、第62図 ST 1-1～10）

1～5は小皿で、6・7が环、8～11は⑥の铁器である。小皿と环は磨滅が著しいものの底部は全て糸切り離し痕があり、6・7についてはその上に板状压痕がある。

1は①の小皿で $\frac{1}{2}$ の破片である。復原で口径6.2cm、底径4.6cm、器高1.2cm。底部が分厚い。2は④にあたり口径7.8cm、底径6.2cm、器高1.3cmとなる。3は⑤で口径8cm、底径6cm、器高1.2cm。少し上げ底となる。4・5は⑦にあたり、4の口径6.6cm、底径4.8cm、器高1.1cm。5は丸みを帯びた器形を示し底径5.3cm。これの底部もかなり分厚い。6は②にあたり口径12.2cm、底径7.2cm、器高3.6cm。7は③で口径13cm、底径8.2cm、器高4cmとなる。6・7は体部がともに内溝気味に立上る。7は底部が分厚く、その端部は高台を意識したかの如く少し高くなっている。

8～12は⑥の铁器にある。この5点いずれをとっても原形・用途が何であるのかよくわからない。8・12は鎌のような刀部がある。9は完形であって長さ8cm。10は片方の端部をねじって折り曲げている。



第62図 広幡遺跡1・2号墓出土遺物実測図(1/3)

2号墓 <ST 2> (図版51、第61図)

2号石垣と暗渠との間にあり、削平が著しくて遺存不良である。主軸をN-18°-Eにとり、長さ103cm、幅71cmの長方形プランをなす。深い所でも5cm程しか残っておらず、北側小口に近い所で土師器小皿3と壺1がかろうじて残っていた。このうち②と③については復原しえないほど遺存状態が悪く図示しない。

これが木棺墓であったか否かは徵証となるものがなく不明である。

出土遺物 (第62図 ST 2-1・2)

1は①の土師器小皿でかなり上部底となる。糸切り痕があるようだがはっきりとは見えない。口径7.7cm、底径6.2cm、器高1.6cm。2は壺の底部片であり④にあたる。復原底径9.3cm。底部から体部へは分厚い。

5. SG 1 その他

5号溝の南、のちに5~8・10号住居跡としたあたりの上面は黒褐色土が拡がっていて容易にプランを認めなかった。掘り下げていく中で検出したプランに番号を付したが、この時4号住居跡としていたものは不整方形プランをなし、その中から炭化米やスラッグ、青磁、白磁等が出土した。しかし、この4号住居跡は柱穴もなくプランもしっかりしないということから、住居跡とするには無理が多いので、これを中世期の造構SG 1として報告する。

そしてそれ以外の造構に伴わない遺物も紹介しておく。

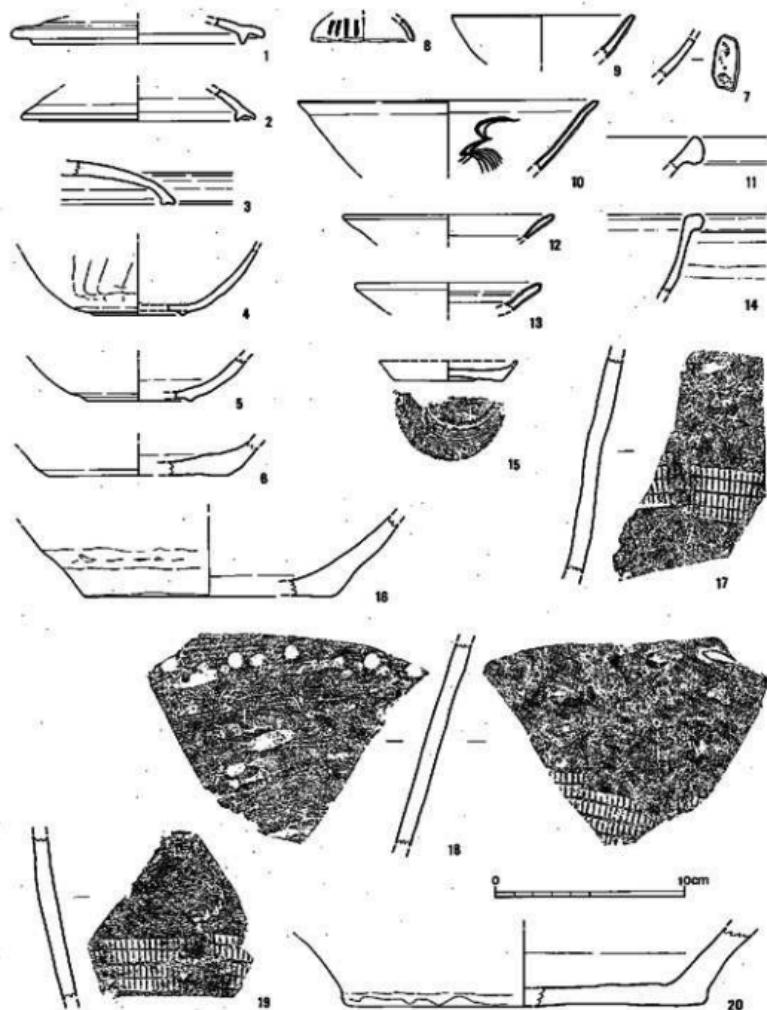
SG 1 (Photo. 3, 第74図)

ほぼ10号住居跡の直上にのっており、東西方向に5.5m、南北方向は南側が溝状に落ちてゆくのでそこまでの3.5mをプランとして捉えたが、これ以外の所からも中世期の遺物が出てるので、本来もっと広い範囲になるものと思われる。あるいは、明確な掘込みとしてではなくくぼみ状の所が包含層を形成していたのかもしれない。ここは北西一帯に多数のピットがあり、それらを建物としてまとまらないかどうか検討してみたものの適切なものは得られていない。

出土遺物は10号住居跡を中心とした付近の上面一帯から出土したもののうち、図化しうるものを見た。須恵器・土師器もあるが、黒色土器・綠釉陶器・瓦器・青磁・白磁・陶器・青白磁のほかに、鉄器・スラッグ・ふいご羽口片・粘土塊・炭化米・炭化種子そして黒曜石・サヌカイトの剝片や鐵などまで出土している。炭化米は全てジャボニカと思われる。石鎚については後述する。

出土遺物 (図版57・59・60・64、第63・64・73・85図 SG 1-1~25)

1~3は須恵器の蓋である。復原口径は1が11.2cm、2が10.5cm。



第 63 図 広輔遺跡 SG 1 出土土器実測図 1 (1/3)

4・5は内外とも黒色を呈する瓦器塊であるが、非常にもらい。高台径は4が4.8cm、5が5.6cm。

6・15は糸切り痕を持つ土師器で、6は板状圧痕もある。6の底径9.5cm。15は復原口径7.3cm、底径5.8cm、器高1.1cmできわめて浅い。

7は縄釉陶器の小片である。土師質の胎の上に薄い緑釉が表裏ともにかかるが、大部分が剥落している。釉は淡い黄緑色をなす。

8は青白磁の蓋である。小片からの復原だが、口径5.4cm。内面は露胎である。

9～11は白磁で、9はいわゆる口禿げの皿になる。灰白色の釉がかかり貫入が多い。復原口径9.7cm。10は白磁碗だが青磁と見まがうような緑黄灰色の釉調である。口径16cm。11は玉縁を有するもので黄灰色の色調を呈する。

12・13は青磁の皿でともに同安窯系のものと思われる。

14は黄釉陶器の破片であり、鉄彩を施す盤になるものと思われる。

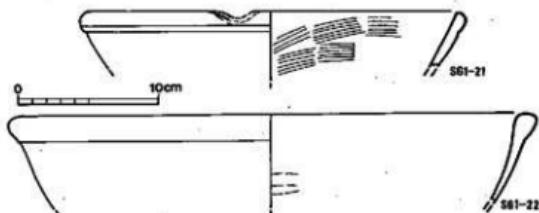
16は瓦質の鉢の破片で底径13.6cm。

17～20は須恵質の様相を帯びた陶器片である。いずれも大甕の破片だが、17～19の外面には長格子目のタキがあり、これが常滑産陶器の破片であることを教えてくれる。内面は茶灰色、外面は茶色を呈するが、20の内底面には緑黄色の釉がかかっている。これと同色の釉が肩部にかかっていたであろう。20の底径19.1cm。

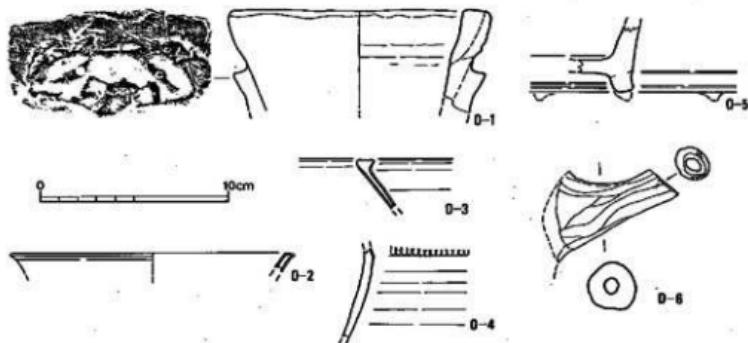
21・22は瓦質の土器片で、21は片口が付く。内面が横方向の刷毛目を施しており捏鉢としたものだろう。22はやや深めとなるが、鍋になるか否かは不明。復原口径は21が26.6cmで、22は38.2cm。

第73図24・25は鉄器の破片で、24は三叉の鎌かと思うが、あるいは三本の鉗をまとめたヤスかもしれない。錆化がひどく逆刺の有無もよくわからない。25は24と同一個体とはならないようだが、これも鎌でなくヤスの茎部分と考えることも可能である。

第85図2は滑石製紡錘車。上・下面是わずかではあるが凹む。周縁は面取り後に磨かれている。復原径4.5cm、厚さ1.3cm。



第64図 広幡遺跡SG 1出土土器実測図2 (1/4)



第 65 図 広報遺跡出土遺物実測図 (1/3)

その他の遺物 (図版57・65、第65図O 1~6)

1は瓦質に近い土師質の土器片であるが、これの外面は天狗のような顔面を表現している。ハの字形に重ね下がった眉の下にはやはり重れた目があり、目の中央に直径4mmの瞳を竹管にて表わす。この目に一部被さるように鼻翼が押し潰されている。鼻全体が少し左目側に傾いて貼付される。鼻より下方は欠損して不明である。天狗のような顔としたが、ひょっとこの如き面がまえかもしれないし、ただ単に老翁をあらわしているのみかもしれない。ともかくユーモラスな表情の顔面である。1・2号石垣の中間から出土した。

2は黄灰緑色を呈する白磁碗の口縁部片である。SG 1の北側から出土した。

3・4は陶器片で同一個体の破片らしい。3の口唇部と4の内面、外面屈折部以下は施釉されない。ともに黄緑灰色を呈する釉である。5号溝東半部の南側より出土。

5は瓦質の火鉢の破片であろう。5号溝西端部付近の擾乱部より出土。

6は瓦質土器の注口部で、外面はいぶしたような黒色を呈する。表探資料。

6. 小 結

これまで述べてきた各遺構は全てが同じ時期に營まれたものではない。時期比定の難しいものもあるがわかるものについて示しておく。

建物跡は1号の柱穴より陶器片が出土しているが、これはいくら遡っても江戸前期であろう。4号については不明である。

石垣は1・2・4号ともにほぼ同様の方向に築かれ、また3号はそれらと直交する方向であるから同じような時期に4基ともに築かれたとみることも可能である。しかし時期を押えうる

のは1号石垣掘り形内出土の常滑陶器片と2号石垣の石臼くらいのものであって、これらにしても築造の上限を知りうるにすぎない。1号石垣の常滑陶器は時期決定の判断に苦しむところであるが、16世紀代と捉えておきたい。2号石垣は1号溝より新しいことから上限を16世紀後半と考える。

溝は1号が16世紀後半、2~4、10~14号は明治以降、5~9号は14~16世紀の間と思われるが、2号については一括して出土した遺物が遅れば16世紀代において大過ないものと考えられる。

土壇においては、1号出土の二彩小壺について寡聞にしてその類例を知らない。これが国産なのか輸入品であるのかも、現時点では判断を留保せざるを得ない。1号土壇の上層より出土した瓦については、他遺跡出土例を参考にしても16世紀後半~17世紀前半のものと考えてよきようである。よって、1号土壇の年代を今のところ16世紀後半代と捉えておく。2・3号については不明とするほかない。

1・2号墓はその出土土師器の位置づけが問題となるが、確言しにくいけれども現時点では13世紀後半代と捉えておきたい。

S.G.1には12~14世紀代に位置づけうる輸入陶磁器があり、この頃にはその近辺に建物があったということの証左になる。ここで、広幡八幡宮が12世紀末には存在していたという記録が想いおこされる。

B. 古墳時代~平安時代の遺構と遺物

1. 積穴住居跡

9軒を調査したが、1軒を除いて調査南端に近い所に集中し、5~10号の6軒は重複している。3号住居跡・3号建物跡の東側が崖縁でなくなっているということは、この住居・建物の営まれていた時分には台地がもっと東までのびていたことを証するものといえる。

1号住居跡(図版52、第66図)

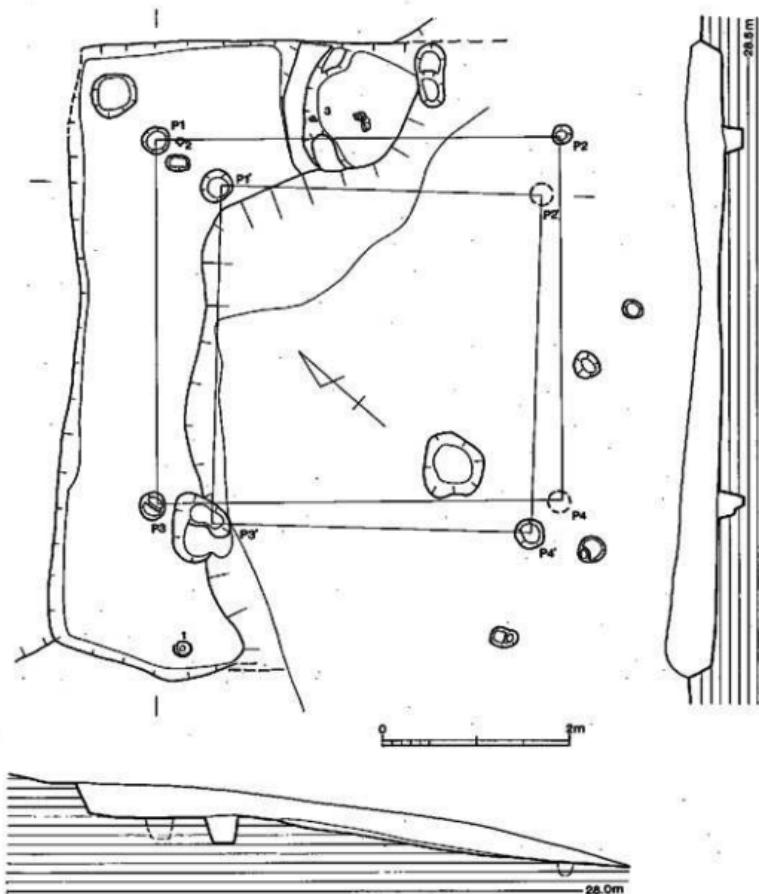
1号石垣の西にあり、東南部分は削平されている。カマドを北東壁中央に造りつける方形プランとなろう。カマド中心を通る主軸の方位はN-49°-Eをとる。残存する北西壁は長さ6.3mを測る。主柱穴配置は二通りが考えられるものの、P1~P4の配置ではP4が、P1'~P4'だとするとP2'が各々検出できていない。P1'~P4'を主柱穴配置とすると復原で43.3m²

の面積を有していたことになる。

カマドは左袖のみ残存し、右袖は削平されていた。

出土遺物（図版61、第71・72図1～5）

床面・カマド内・埋土中から土師器・須恵器・石鎌等が出土している。打製石鎌については



第66図 広幡遺跡1号住居跡実測図 (1/60)

別の項で述べる。1～3は須恵器、4・5は土師器である。

1はほぼ完形の蓋で口径15.3cm、器高3.8cm。宝珠形のつまみが付く。口縁の身受け部分は高い。この内面に身とセットで焼成した痕跡が色調の違いとして存する。住居内の④にあたる。2は高環脚部で据部径8cm。内外ともに灰被りとなる。3は壺で口径10.2cm、器高5cm。胴部中位に浅い沈線が入る。

4・5は壺の破片で、4が②、5がカマド内の③にあたる。復原にて口径が4は33cm、5は22.5cm。

2号住居跡（図版53、第69図）

5・6号住居跡の北にあって、2・3号建物に切られている。東西長3.8～4.0m、南北長4.3～4.7mとやや台形気味のプランとなり、主柱穴配置図もそれに倣っている。カマドは西壁のやや北寄りにあり、主軸線はカマド左袖の内側を通る。東壁と北壁の一部に細い周壁溝がある。床面の4ヶ所に直径30cm程の焼土・炭の広がりがあった。面積18m²。主軸N-65°W。

出土遺物（図版61・65、第67・71・72図2-1～8、第85図）

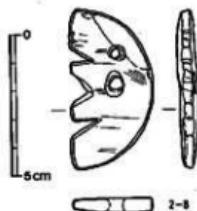
残存度がよくないわりには遺物がよく残っていた。カマドの周辺から多く出土している。土器以外では黒曜石の剥片・鐵に加えて紡錘車と子持勾玉がある。1・2・4・7は須恵器、3・5・6は土師器で、2・5～7は床面から出土している。

1は壺身で復原口径14.5cm。2は高環の脚部で据部径9cm。焼成があまい。4は壺になろう。丸底の底部は接合痕を伺うことができるが、ここに高台を付そうとしたのかもしれない。胴径17.6cm。7は生焼け状態の壺で、カマド内外から出土している。図上での復原になるが、口径28cm、底径14.2cm、器高30cm。把手の有無はわからない。

3・5・6とともに壺である。3は復原口径17cm。5は薄手で長胴気味になる。器表面はわりと凹凸があり、また二次火熱により黒変した所がある。口径22.8cm。6はなで肩で、胴部はやはり二次火熱で変色する。復原口径21.4cm。

第67図2-8は滑石製の子持勾玉である。半月形の背をもち、腹部に切り込みを3ヶ所入れて2つの突起を造り出して子としている。背には子を持たない。表面は擦過痕がみえる。穿孔は中央付近と頭部近くの2ヶ所にあり、両面から穿たれている。全長55.75mm、最大幅28.75mm、厚さ6.35mm。蛇紋岩とした方がよいような滑石であり、濃緑黄色を呈する。きわめて薄いつくりであることが特徴的である。

第85図1は、径4.7cmに復原できる縁部片岩製紡錘車。孔径0.7cm、厚0.9cm。住居内P-74出土。



第67図 広輪遺跡
2号住居跡出土
子持勾玉実測図
(1/2)

3号住居跡（図版52、第69図）

2号住居跡の北東にあり、半分近くが崖線で消滅している。また、3号建物跡にも切られている。いま北西辺が2.8m、南西辺が3mを残すのみである。北東部分は床面はなくなっているが主柱穴とみなされるピットは残っており、これをもとに復原すれば2号住居跡と同様の方向をとり、規模的にあまりかわらぬものとなろう。カマドは北西辺中央に存したと思われ、焼土と土器が遺存していた。主軸方位はN-47°-Wくらいになろう。

出土遺物（図版61、第71図3-1）

残存度に応じてきわめて少ない。カマドが存した所に土師器の瓶があり、内外に刷毛目を有する円筒形を呈するものであるが図示しない。他に黒曜石剝片とスラッグが1点ある。

1は須恵器の高环の坏部であろう。復原口径11cm。このように内湾する口縁部の高环はある類例がない。

5号住居跡（図版54、第74図）

2号住居跡の西南部、住居群が密集した中にある。SG1に切られ、6・10号住居跡を切っている。7号住居跡との関係はわからない。北辺の約4mと東西辺の一部のみが知られ、方形プランになることはわかるが、それ以上については不明である。主柱穴もよくわからない。カマドの痕跡も不明であった。

出土遺物（図68・71図5-1～3）

残存状況が悪い分、遺物も少ない。青磁片・スラッグ・ふいご羽口片などもあったが、これらはSG1からの混入とした方がよいだろう。土錐も3点ある。

1は須恵器の壺か壺の口縁部片である。口縁下2条の突唇が特徴的で、胎土がよい。2は土師器の壺の破片で、内面には粗い刷毛目に入る。

第68図5-3は羽口の破片で、外径6.4cm。外面は強い熱を受けている。

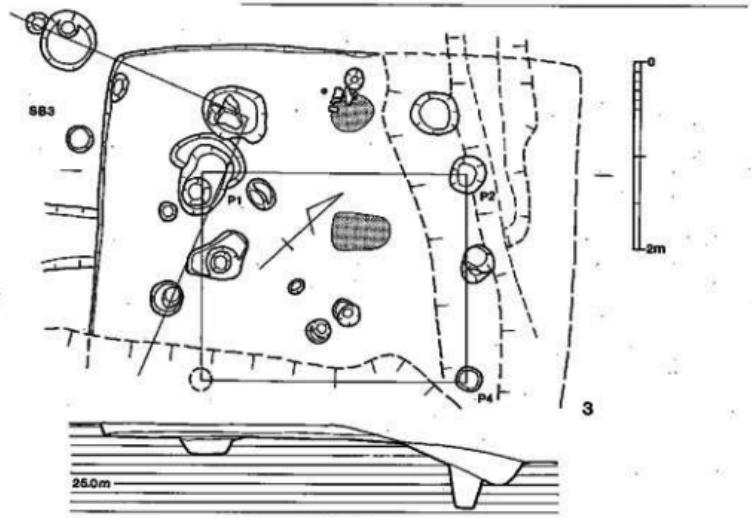
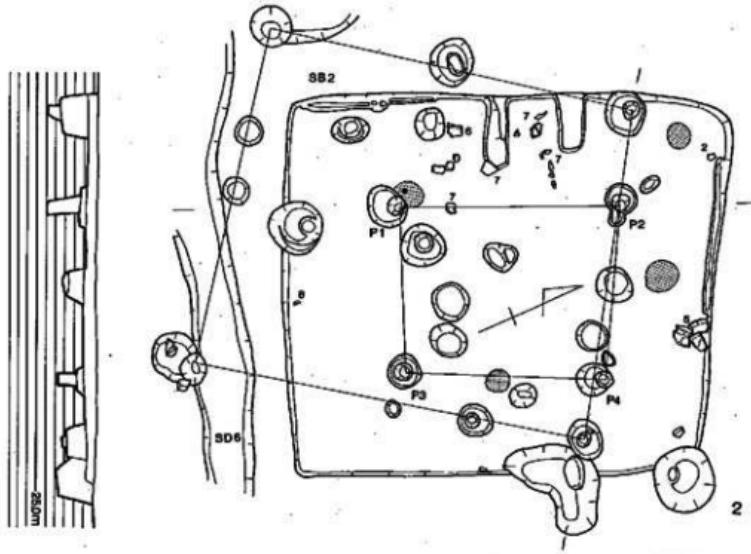
第85図3～5は、いずれも住居跡の覆土中より出土した管状土錐。小型品の3とやや大きい4・5に分けられる。3は径0.9cmと細身で内径は3mm。灰色を呈す。4は完形品で長4.7cm、最大径1.55cm、内径5mm、重9g。化粧土を塗布し、暗赤褐色を呈す。5は破損品で残長3.8cm、最大径1.6cm。灰白色を呈す。

6号住居跡（図版54、第74図）

5・10号住居跡に切られる。北東辺の4.7mとそれに取付く辺の一部があるのみで、詳細はわからない。カマドについてもわからなかった。この住居跡はその北西コーナー部分で2軒の重複を捉えていたが、これは6Aから6Bへの増築として考える。



第68図 広幅遺跡
5号住居跡出土
羽口実測図(1/3)



第 69 図 広橋遺跡 2・3 号住居跡実測図 (1/60)

出土遺物（第71図）

これもあまり多くない。1～3は須恵器、4は土師器である。1のみ6Aから出土した。

1は蓋とする。復原口径10cm。2は身とすべきか。口径8.7cm。3は蓋としておくがよくわからない。最大径8cm。

4は口頭部のすぼまる器形で、口径12.8cm。

7号住居跡（図版54、第70図）

10号住居跡の西にあり、9号住居跡を切っている。北西壁と北東壁のみが残存しているが、主柱穴P1～P4の配置によって一辺4.7～5mの方形プランであろうことが知られる。北東壁中央付近に焼土があるので、ここがカマドであろう。このカマド部分を通る主軸はN-45°-Wとなる。なお、北東壁の近く、P2とP4の中間あたりにも焼土の広がりが存した。

出土遺物（図版61、第71・72図7-1～6）

土師器・須恵器のうち図示しるのは須恵器のみである。埋土中に糸切り底の小皿があったが、SG1からの混入であろう。

1は环蓋で口径12cm。2・3は环身で、3は壳形である。3の外底部は回転台から切り離したままで調整を行っていない。また口唇部は僅かに面をとり、そこに打欠きを施した部分がある。2の口径11cm、3は10.5cm。4は坦蓋になろう。口径9cm。この土器は8号住居跡埋土中出土の破片と接合した。破片としてはこちらが大きい。5は环身で口唇は3と同様の手法をみる。底体部に焼き膨れがある。蓋をして焼成したことのわかる資料である。口径10cm。6は蓋の口縁で大きくなると思われるが器壁は薄い。口径32.8cm。

8号住居跡（図版54、第74図）

10号住居跡に切られて、その北東辺の一部が2.2mだけ残っているにすぎない。

出土遺物（第71図）

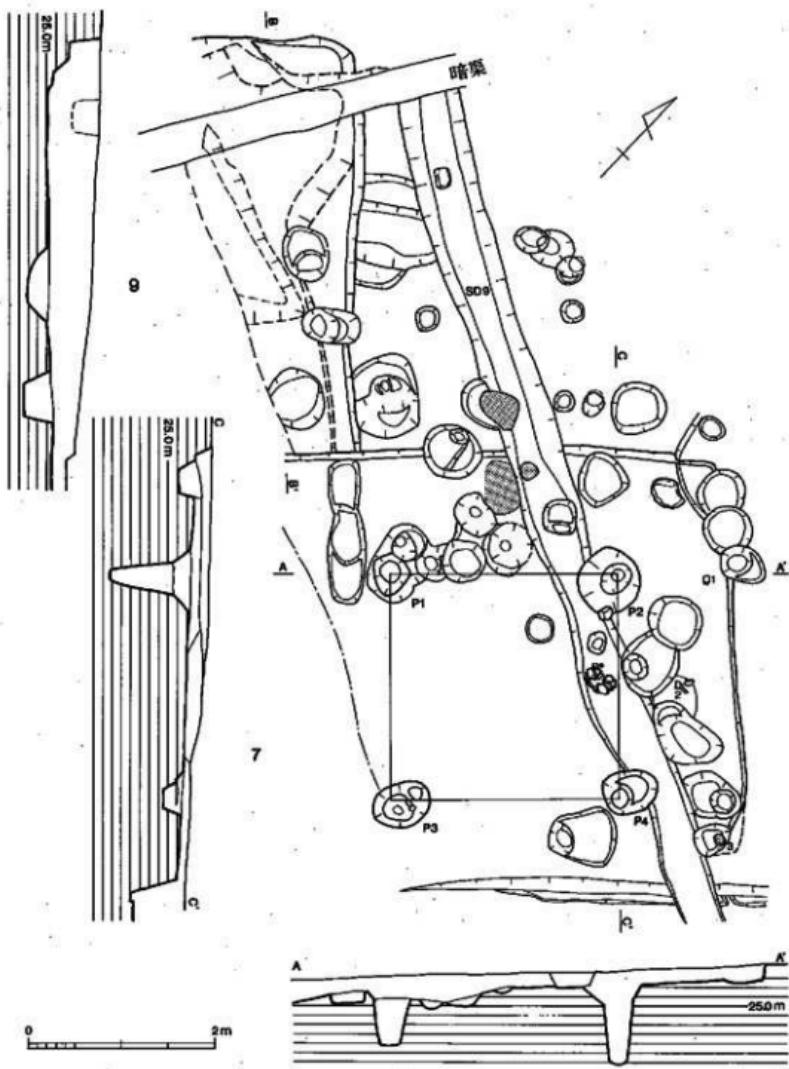
1は須恵器の腰肩部片で、内面の当具痕は同心円の弧線に直交する線が表出される。外面は平行タタキの上にカキ目を施している。2は小さな土師器の蓋で、復原口径13.3cm。

9号住居跡（図版55、第70図）

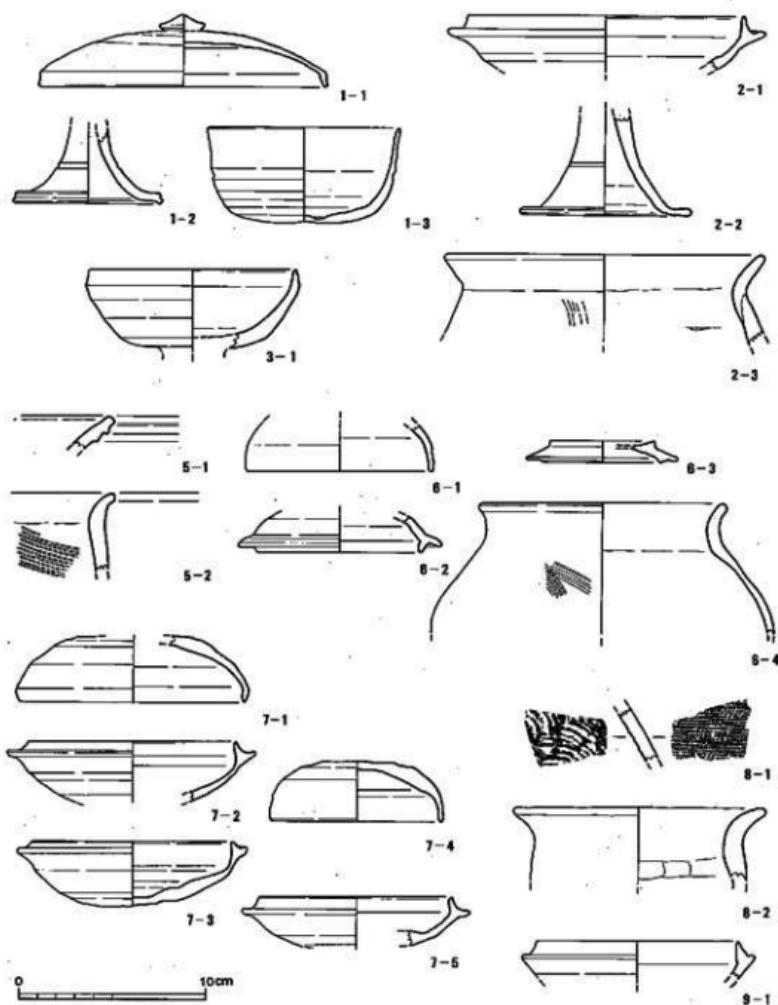
7号住居跡に切られつつ西にあり、さらに暗渠にも切られて北東壁4.4m、北西壁1.7mを残すのみである。検出した範囲にはカマドはない。床面下には更に掘込みがあり、その北側部分から繩文土器片が、また埋土中から打製石器が出土している。これは後述する。

出土遺物（第71図）

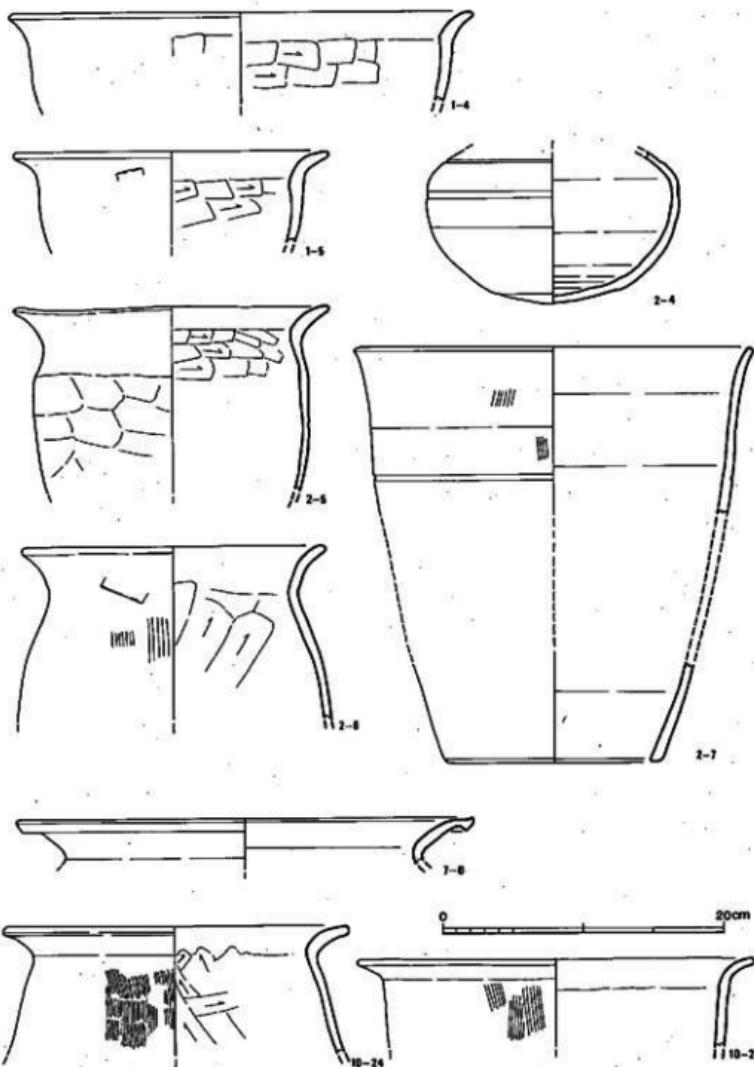
1は埋土中出土の須恵器环身で、復原口径10.5cm。



第 70 図 広幡遺跡 7・9号住居跡実測図 (1/60)



第 71 図 広幡通跡住居跡出土土器実測図 1 (1/3)



第 72 圖 広幅遺跡住居跡出土土器実測図 2 (1/4)

10号住居跡（図版54、第74図）

S G 1 と 5 号住居跡、そして 7 ～ 9 号溝に切られ、6 ～ 8 号住居跡を切っている。西側が溝状に大きく落込むことで削平されるが、全体の規模は察せられる。完全に残る北東壁は長さ 6.1 m で、その中央付近に焼土があったので、ここにカマドが存したのであろう。北西壁は 5.4 m まで存するが、おそらく 6.3 m くらいまであったものと思われる。主柱穴 P 1 ～ P 4 は P 4 が遺存しないものかなりの長方形配置になるようだ。北西・北東辺には周壁溝がある。カマドは焼土のみで全くわからない。このカマドの所を通る主軸は N-46°-E をさす。

出土遺物（図版61・62、第72・75・76図）

ここでの住居群の中では最も多かった。須恵器・土師器・黒色土器・瓦器そして鉄器・土錐・スラッグ・黒曜石などがあるが、S G 1 よりの混入と思われる瓦器が床面上からも出土しているのは、S G 1 が部分的に深くなっている所があるのだろう。ここでは平安期以降の土器は除外している。なお、土師器の婧壺が口縁のみを数えても 102 個分が出土している。同一個体があるとして半分でも 51 個であり、かなりの数にのぼっている。1 ～ 18 は須恵器、19 ～ 25 は土師器、26 ～ 35 が納壺である。石錐については後述する。

1 ～ 6 は蓋である。1 ～ 3 が床面上および下層、4 ～ 6 は埋土中からの出土であるが、4 が最も古く、2 が最も新しく位置づける型式である。3 ～ 6あたりは混入であろうか。1 の口径 16.2 cm。7 ～ 9 は环でこれらは蓋 3 ～ 6 に組み合うものである。7 は白灰色を呈する良質の土器で金属的な感じを強く受ける。口径 14 cm。10 ～ 16 は高環で、14 ～ 16 の裾部端部は蓋の口縁と形状がよく似ている。10 の口径 11.4 cm、15 の裾部径 11 cm。17 は平瓶の口頸部であろう。18 の蓋は粗々しい当呂痕をもつ内面にスラッグが付着したままである。

19 は高環の柱状部で精製土器である。20 ～ 25 は甕もしくは瓶の破片であり、24 が復原で口径 25.2 cm、25 は 28.5 cm。

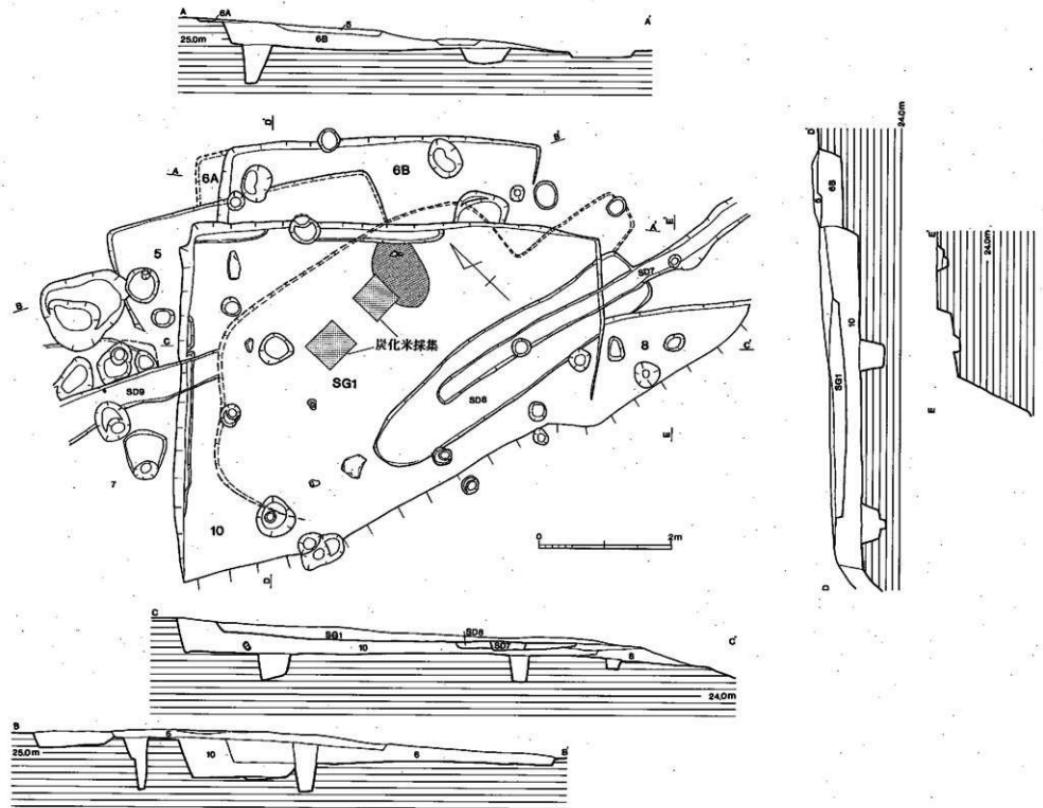
26 ～ 35 の婧壺は、図示しえなかつたものも含めて、ほぼ同様に円錐体状の形状をなす。口径は内径で 4.7 ～ 6.0 cm、深さ 5 ～ 6 cm であって、口縁下 1 ～ 1.5 cm に直径 0.74 ～ 1.12 cm の紐通し用の穿孔がある。また底部にも中心より少しずらして直径 1 cm 内外の孔を持つ。内外面ともに指頭でののでの痕跡が著しい。

第73図 10-36 は床面上出土の鉄器片だが、これが何の一部であるのかわからない。

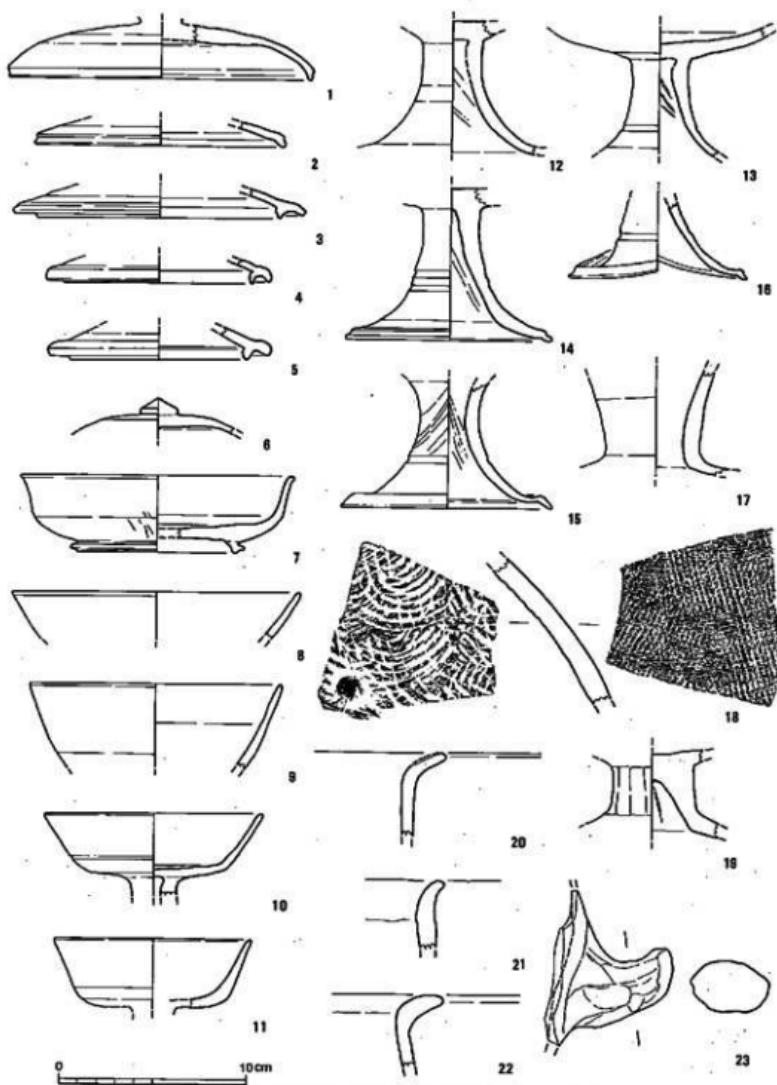
第85図 6 は管状土錐の完形品。整形時の指圧痕が著しい。中央部の断面は卵形に近い。色調は暗灰色を呈す。長さ 4.7 cm、径 1.6 cm、孔径 0.6 cm、重さ 9.95 g。



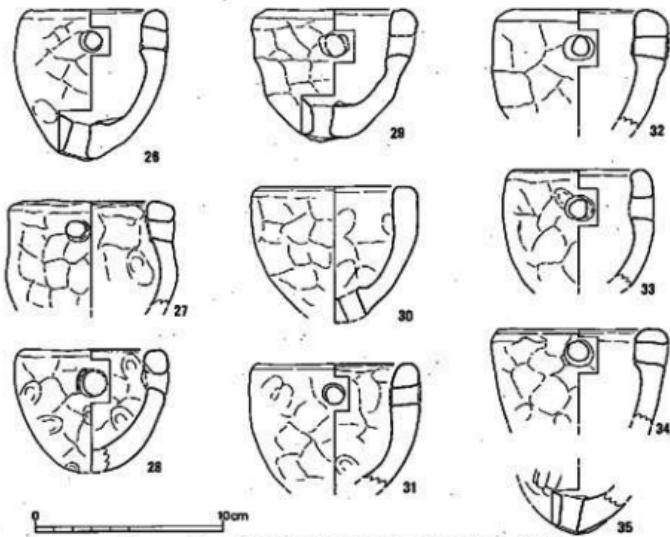
第73図 広幡遺跡出土鉄器
実測図 (1/3)



第 74 図 広輪道路 5・6・8・10号住居跡実測図 (1/60)



第 75 図 広輔遺跡10号住居跡出土土器実測図1 (1/3)



第 76 図 広幅遺跡10号住居跡出土土器実測図 2 (1/3)

2. 掘立柱建物跡

2棟をとりあげるが、7号住居跡の北あたりにまだ存するであろう。

2号建物跡 <SB2> (図版53, 第77図)

2号住居跡と重複しており、それよりは新しい。2×2間の総柱で東西長355~375cm, 南北長395~420cmとなり、主軸はN-36°-Eにとる。東側の柱穴P2・P3はやや外へ出張っていて正方形のプランにならない。

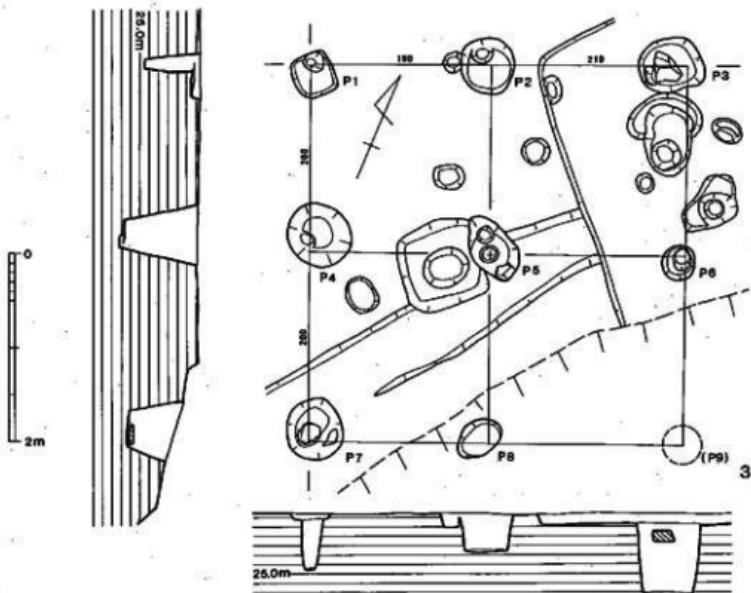
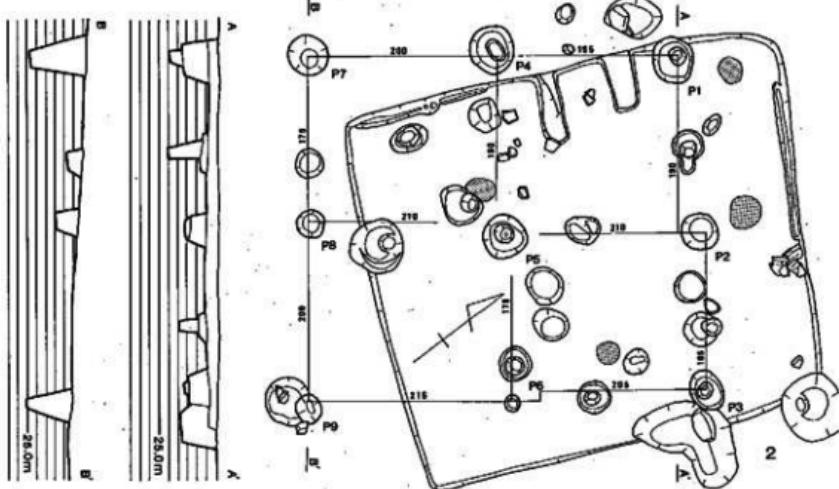
出土遺物 (第78図)

P3・P4・P7より土器が出土しているが図示しうるのは1点のみである。

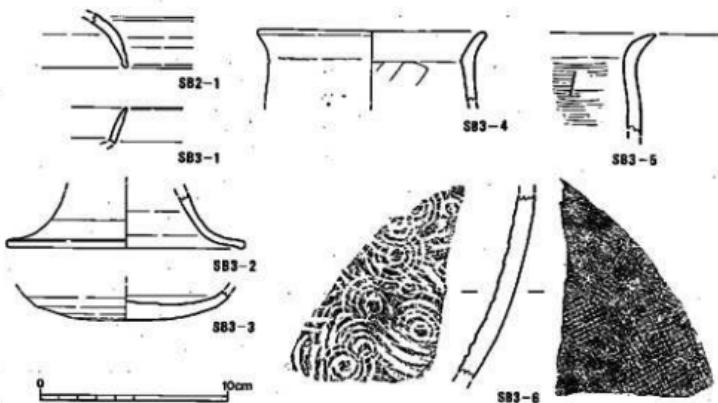
P7は須恵器の蓋の破片である。P7より出土。

3号建物跡 <SB3> (図版55, 第77図)

2号建物跡のすぐ東にあり、2・3号住居跡の上に営まれている。2×2間の総柱で4m四方の正方形プランとなる。主軸はN-23°-Wとしておこう。P9のみが削平でなくなっている。



第 77 圖 広幅道路 2・3 号建物跡実測図 (1/60)



第78図 広幅遺跡出土土器実測図 (1/3)

P3とP7に石が置かれていたが、P7のそれは柱穴底面にあるので根石としたものだろう。P3のものはかなり上位にあるから後で置かれたものと考えられる。

出土遺物 (第78図SB3-1~6)

P5を除く7個の柱穴から土器の小片が出土している。1~3, 6は須恵器、4・5は土師器である。

1は高環であろうか。2は高環の脚部である。復原で口径12.4cm。3は環の身とする。6は妻面部片で、内面の当具痕は粗々しい。1~3はP2、6はP3より出土した。

4・5は妻の破片で、4の口径12cm。4がP1、5はP4より出土。

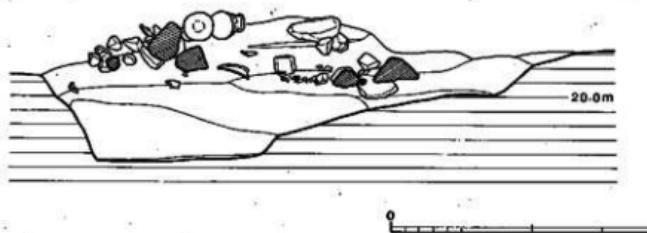
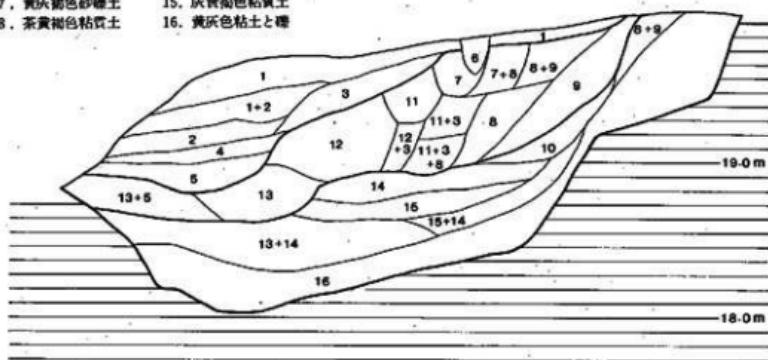
3. 包含層 (SG2)

2~10号住居群の東方、A面とした所に柱穴が20個弱と、遺物を多く含む包含層が存した。柱穴は何らまとまるものではない。

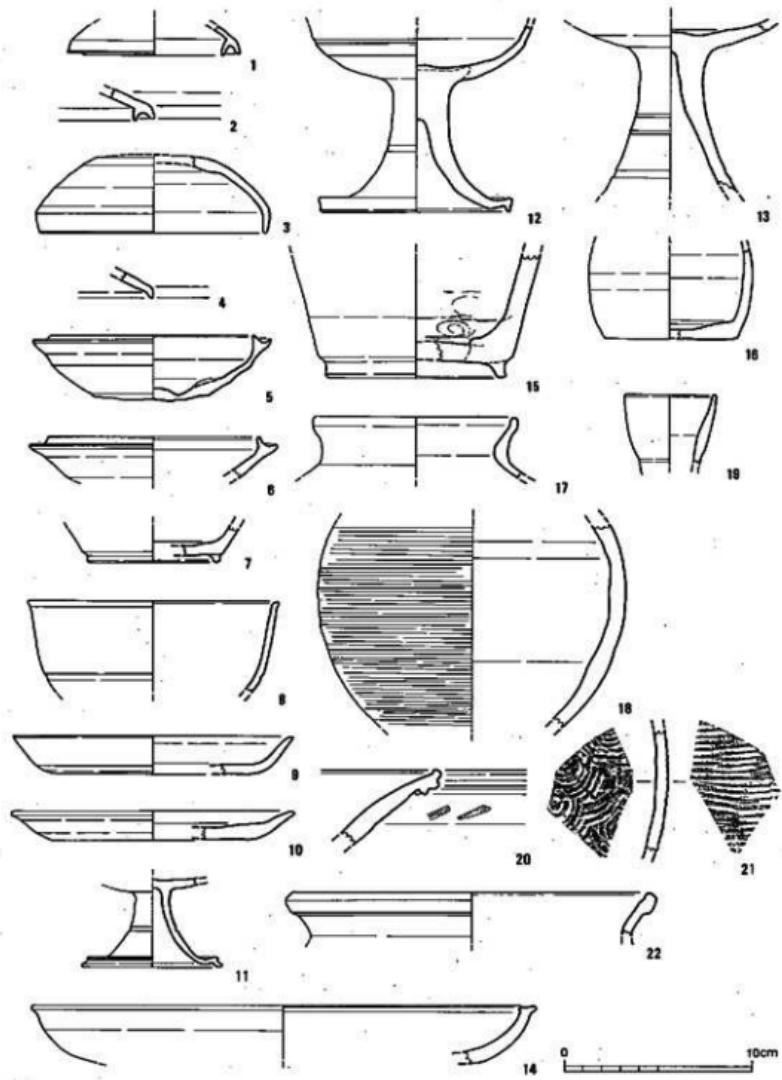
包含層 (SG2) は上面に砂質土が、下層に粘質土があり、それらは上方 (西方) から流れこんできた堆積状況を示す(第79図)。この土層のトレンチを境に北半と南半に分けて遺物をとりあげたけれども双方に差異はない。ただ、スラッグ・羽口片などは北半部の方が多かった。また、北半部には一ヶ所に土壟状の落込みがあり、ここの上面に石や土器が集中して出土した(第79図)が、これも上方からの流入である。

土 层 名

- | | |
|------------|-------------|
| 1. 黑褐色砂質土 | 9. 深褐色粘質土 |
| 2. 黑橙色砂質土 | 10. 桃黃褐色粘質土 |
| 3. 黑棕褐色粘質土 | 11. 桃黃色粘土 |
| 4. 茶灰褐色粘質土 | 12. 灰黃褐色砂質土 |
| 5. 茶褐色粘質土 | 13. 茶黃褐色砂壤土 |
| 6. 黑褐色砂質土 | 14. 灰褐色粘質土 |
| 7. 黃褐褐色砂礫土 | 15. 灰黃褐色粘質土 |
| 8. 茶黃褐色粘質土 | 16. 黃褐色粘土と砾 |



第 79 図 広幡遺跡包含層土層図・土器出土状態実測図 (1/40)

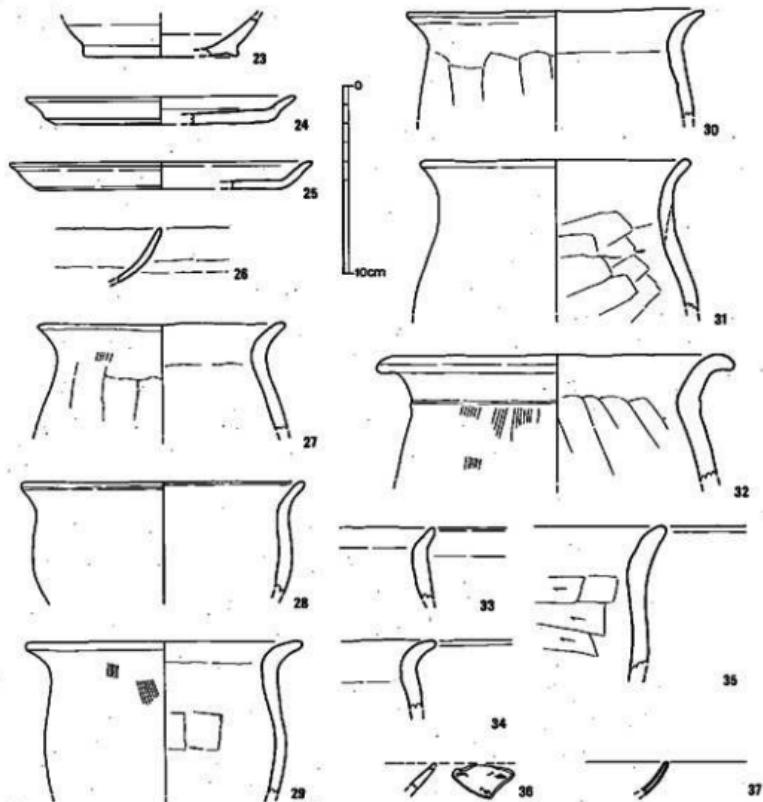


第 80 図 広輪遺跡包含層 (SG 2) 出土土器実測図 1 (1/3)

出土遺物（図版63～65、第80～85図）

かなりの量が出土している。土師器・須恵器が大半を占めるが、スラッグ100点、羽口片35点、焼塗土器片12点は注意される遺物といえよう。他に染付磁器・白磁・陶器・瓦器・縄文陶器・石斧・黒曜石の鏃・剣片・石核、サスカイト剣片、弥生土器片、繩文土器片、土錐などが出土している。石鎌と縄文土器は後述する。

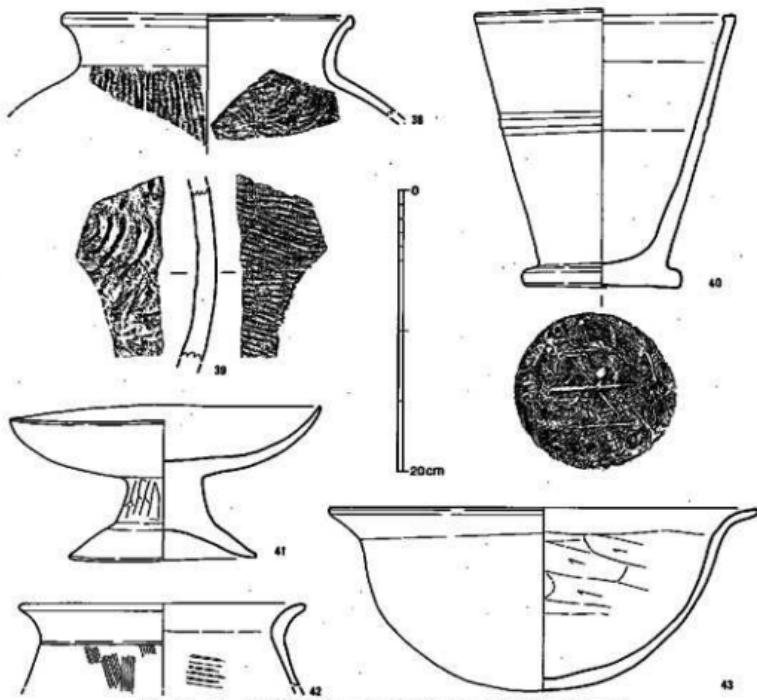
須恵器（1～22、38～40） 1～4は蓋で、1はかなり小さい。口径7.5cm。3の口径12cm。5～7は壺で、5は底体部に焼き膨れをみる。また外底部は未調整のままだが、そこに十字形



第81図 広幅遺跡包含層（SG 2）出土土器実測図2 (1/3)

をしたヘラ記号らしきものがあるもかなり浅い。口径10.8cm。7は高台から体部へはほとんど一直線である。8は壺になろう。つくりがよくて金属的な感じを受ける。口径13.2cm。9・10は皿でともに焼成がややあまい。11~13は高环脚部である。14は高环の环部になるのであろう。15~18は壺になろう。15の底部は円盤をはめこむようにして成形した痕がある。16は瓶形とすべきか。19は平瓶の口頭部であろうか。20~22・38・39は壺で、21の破片は内面の当具痕に弧線に直交した線が入っている。38は焼成不十分で白くなっている。39の破片も内面の当具痕に弧線に直交した線がみえる。40は捏鉢の完形品である。口径18.1~19cm、底径11.1cm、器高は19.5cm。外底面にはワラかと思える压痕が付いている。

土師器（23~35, 41~43） 23は高台の付く壺になる。24・25は皿で須恵器をまねたものとしてよい。26は壺になろうか。27~35は壺で、いくつかに分類しうる形態的特徴をもつ。41は高



第 82 図 広幡遺跡包含層 (SG 2) 出土土器実測図 3 (1/4)

坏で、口径22.4cmと大きい。脚部にも特徴がある。42は内面に粗い刷毛目を持つ壺である。43は洗面器のような鉢になり、口径31cm。

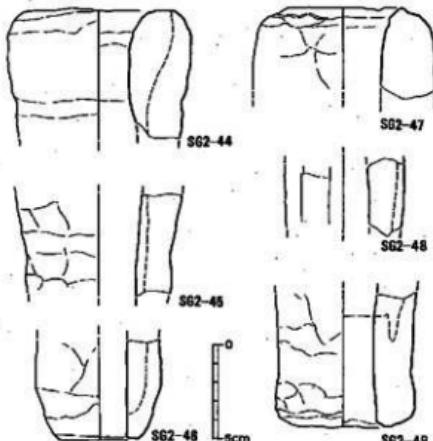
縄輪陶器（36）このSG2からは小片1点のみの出土である。土師質の白灰色の器胎に淡黄緑色の釉がかかる。

染付（37）小さな碗になるであろう破片で、内面の口縁直下に幾何学文を、外面には草花文を呉須にて絵付している。地肌は少し黄色味を帶びた青に変色している。

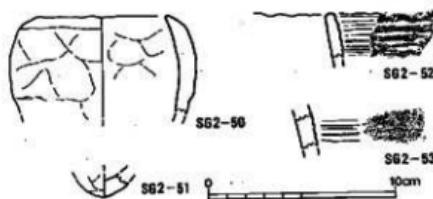
ふいご羽口（44～49）100点のうち図示しうるのは少ない。炉本体に挿入されていた部分およびその近辺は高熱で青灰褐色に変色し、それ以外の部分は黄橙色を呈する。内径は2.5cmから4.4cm程度である。46と48にはスサと粗穀とが粘土中に混ざられている。

焼塙土器（50～53）4点を図示しうる。50は内窓した器体のもので口径6.5cm。51は尖底部分である。52・53は外面に沈線のようにみえるタタキを施したものである。4点ともに布目は有しない。また等しく強い二次火熱を受けている。

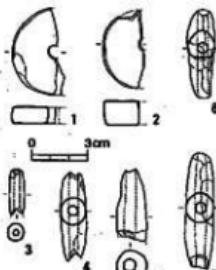
土錐（第85図7）管状土錐の完形品である。整形時の指圧痕が若干観察される。色調は灰白色で軟質。長さ6.1cm、径1.5cm、孔径0.6cm、重さ13.25g。



第83図 広輪造跡包含層(SG2)出土羽口実測図(1/3)



第84図 広輪造跡包含層(SG2)出土焼塙土器実測図(1/3)

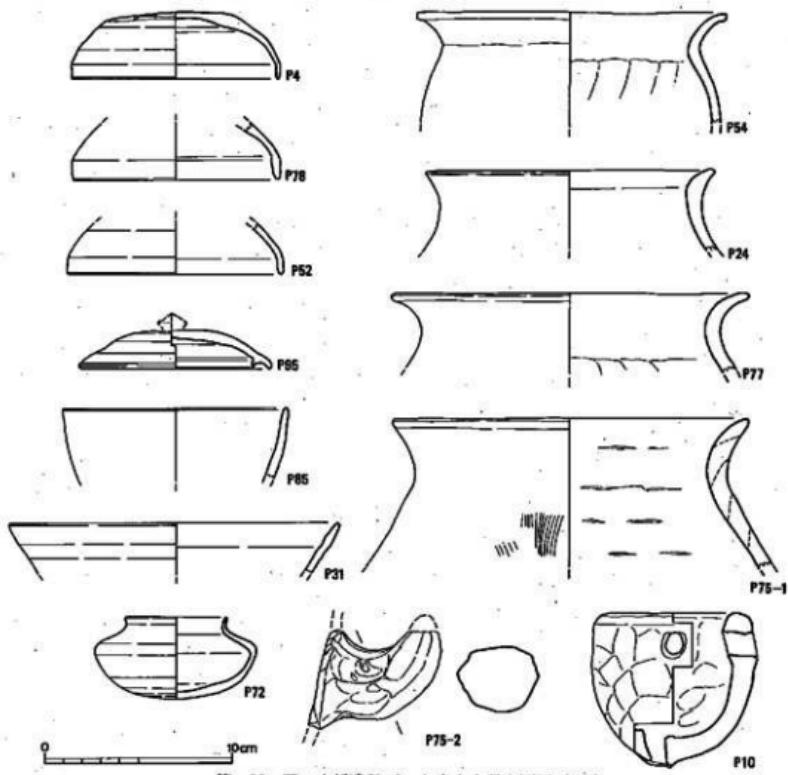


第85図 広輪造跡出土石器
・土製品実測図(1/3)

4. その他の遺構と遺物

上述してきた以外の遺構としてはピットがあるくらいで、特別なものはない。ピットは建物の一柱穴となっているのかもしれないが、現時点において把握しきれないので、遺物のみを掲示しておこう(図版63・64、第86図)。

- P 4 1号住居跡よりずっと北の斜面にあるピットで口径10.8cmの須恵器蓋が出土している。
 P 78 須恵器の蓋で、きわめて精良な胎土である。
 P 52 これも須恵器の蓋で口径11.2cm。



第 86 図 広幅遺跡ピット出土土器実測図 (1/3)

- P 95 摺みの付く須恵器の蓋である。口径10.2cm。
- P 85 須恵器碗の破片である。
- P 31 須恵器の大型の碗になろう。
- P 72 須恵器小壺で口径5.2cm。
- P 54 土師器甕で口径16.4cm。
- P 24 きわめて特徴的な口頭部の土師器である。
- P 77 口径14.8cmの土師器甕になる。
- P 75 1は内面に粘土紐の接ぎ目がよくわかる。口径19cm。2は1に付くのかわからない。
- P 10 1号住居跡と1号墓の中間にあるピットで、土師器の靖蓋が出土している。口径6.5cm。器高8.2cm。10号住居跡出土のものと同形態である。

5. 小 結

古墳時代以降、平安期までの遺構としては竪穴住居跡が9軒、掘立柱建物跡2棟、いくつかの柱穴であり、これ以外に包含層が存した。

竪穴住居跡は6世紀末から8世紀代にかけて営まれており、2号・9号が6世紀末頃、7号・8号が7世紀初、3号・6号が7世紀前半、1号・10号が7世紀末から8世紀代、最も新しい5号が8世紀後半～末の頃に比定されよう。7世紀前半では一辺4m前後の規模でカマドを北西壁に造りつけていたのが(2・3号)、7世紀も末になると一辺6mを越すほどに大きくなり、カマドも北東壁に造りついている(1・10号)。この変遷がどのような要因によるものか(多分に内的要因と思えるが)、現時点ではわからない。10号住居跡における靖蓋は注意されるところであろう。

掘立柱建物は2棟の検出にとどまったが、この2棟は2・3号住居跡よりも新しいので、その南西に存する6～9号住居跡が機能していた頃に倉庫として使用されていたものだろう。

包含層(SG2)は竪穴住居群が営まれ始めた6世紀末から形成され、7～8世紀を中心として10世紀頃までの遺物が出土している。中世以降の項で説明したSG1から綠釉陶器片・瓦器片が出土し、このSG2からも同様の遺物が検出されているので、SG1の周辺に9～10世紀代の建物が存したことは間違いないとみてよかろう。

また、包含層中よりスラップ・ふいご羽口片が多数出土しているのは、遺構は検出されていないけれども、10号住居跡かその近辺で製鉄(大鐵冶)が行われていたことを示している。これは時期的には8世紀中頃前のことと思われる。

C. 縄文時代ほかの遺物

縄文・弥生時代については、この広幅遺跡では明確な遺構を確認できたわけではないが、柱穴や住居跡の埋土中などから土器片、石鎌が出土しているのでここで一括して説明する。

9号住居跡の床面下から縄文土器片が出土していることなど、このあたりに縄文期の遺構も予想されたが確認できていない。

岩丸川をはさんで対峙する石町・山崎遺跡は縄文時代後期を主体とした集落であり、この広幅遺跡で確認された土器もほぼ同じ頃のものである。現在の川を隔てただけの至近の位置にあることから、お互いが無関係であるとは考えられない。

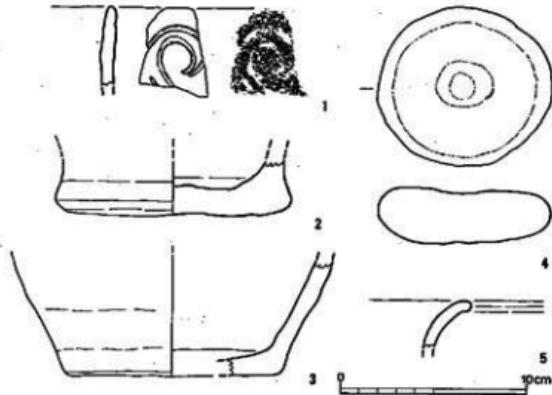
1. 出土遺物

土器（第87図）

1・2は包含層（SG 2）南半部の下層より出土したもので、1は縄文後期・北久根山式の口縁部片と思われる。遺存状態がよくないが、外面に渦巻状の沈線が入る。2は底部でやはり後期のものであろう。底径12.4cm。

3はP76出土の縄文土器底部で、後期のものと考えられる。底径11cm。P76は2号住居跡の西にある。

5はきわめて砂粒の多い口縁部片で、磨滅が著しくて調整等はわからない。一見して縄文土器かと思ったが、よくわからない。混入であることは間違いない。SG 1の出土。



第 87 図 広幅遺跡出土縄文時代他遺物実測図 (1/3)

石器 (図版66, 第87・88図)

第88図1は先端・片脚を欠損するが、脚部が大きく拡がる石鎌。残長2.7cm, 厚さ0.3cm。姫島産黒曜石製で、1号住居跡床面より出土した。混入品である。

2は平基式の石鎌で鋸齒状の側縁を有す。図中の右側縁は破損後再調整している。長さ1.85cm, 幅1.2cm, 厚さ0.4cm, 重さ0.75g。姫島産出の乳白色黒曜石製。SG1上層よりの出土。

3は脚端部を平坦に整えた石鎌で長さ2.3cm, 厚さ0.4cm。4は横長の剥片を素材とする大型の石鎌で、両側縁に細かい調整を施す。残長3cm, 厚さ0.55cm, 重さ3.0g。両者ともに安山岩製で、9号住居跡の埋土中より出土。

5は長身で抉りのやや深味のある石鎌。先端部を欠くが、調整も丁寧で良品。覆土上層出土で姫島産出の黒曜石製。9号住居跡出土の第88図3と同様に縄文時代の所産と考えられる。残長2.7cm, 厚さ0.4cm。

6は内渦状の基部を有す石鎌の完形品。長さ1.9cm, 幅1.6cm, 厚さ0.4cm, 重さ0.95g。P-21出土で乳白色を呈す姫島産黒曜石製。

7は基部を欠損する鋸齒鎌。残長1.9cm, 厚さ0.35cm。包含層北半の下層出土で、黒色を呈す良質の黒曜石製。

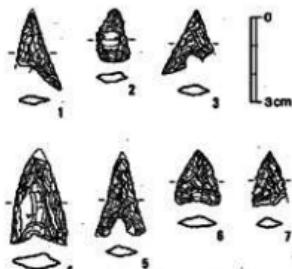
第87図4は表抜の凹石である。玄武岩質の石で表面は粗い。長さ9.2cm, 幅8.4cm。

2. 小 結

広幡遺跡では、2号住居跡や9号住居跡等の6世紀末葉より遡る確実な遺構は確認できていない。広幡城遺跡では、山頂部に弥生時代の住居跡等も存したが、この山裾の広幡遺跡は6世紀末以降に人々の営みの痕跡をはっきりと見出すことができる。ただ、縄文時代後期とされる土器片や、打製石鎌等が他時期の遺構に混入して出

土しているのは、もと該期の遺構が存した可能性もあるし、また近在することも考えられる。

もしこの広幡遺跡で縄文期の遺構があったとして、それが後期のものであるならば、石町・山崎遺跡と有機的に関連するものであることは疑いない。



第88図 広幡遺跡縄文時代他の出土
石器実測図 (1/2)

V 自然科学系の調査

A. 広幡遺跡から出土した炭化材

琉球大学農学部 林 弘也

広幡遺跡は、福岡県教育委員会が発掘調査した遺跡である。本遺跡から出土した遺物の一部である炭化材 4 点の樹種同定を行ったので、結果を報告する。

炭化資料はいずれも約 3 cm 以内の小片の炭化材であり、元の材の形態を保っていなかったので、材の用途や形態を推定することはできなかった。

同定は炭化材を木材の 3 断面に沿って割断し、金属顕微鏡で木材の組織構造を観察した。材の組織に基づいて樹種を同定すると同時に、現生種のプレパラートと対照して樹種名を判定して同定した。資料の写真は反射電子顕微鏡で撮影した。

同定されたウリカエデは落葉性の小高木または低木であり、小径の木材である。材は経木、経木真田や筈に使用され、材質は加工し易く、可撓性がある。本材は貯蔵穴から出土しているので、貯蔵穴の底に敷いた底木や穴の側面に沿って配置し、貯蔵物を土から隔離するものとして、または穴の蓋等に使用されたのであろうと考えられる。

出土した炭化材 4 資料の同定結果を次表に示し、顕微鏡写真を Fig.1 ~ Fig.4 に示した。

広幡遺跡出土炭化材

資料名	樹種名
広幡 1号墓	ユズリハ <i>Daphniphyllum</i> sp.
広幡城 貯蔵穴 2 下層	ウリカエデ <i>Acer crataegifolium</i>
広幡城 貯蔵穴 6	ウリカエデ <i>Acer crataegifolium</i>
広幡城 貯蔵穴 8	ウリカエデ <i>Acer crataegifolium</i>

顕微鏡写真について

1. 写真的配列は上から横断面、接線断面、放射断面である。
2. 写真的倍率は横断面写真は 45 倍、接線、放射断面写真は 100 倍である。

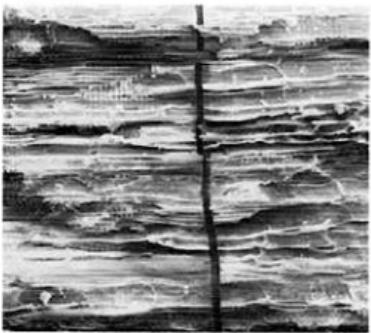
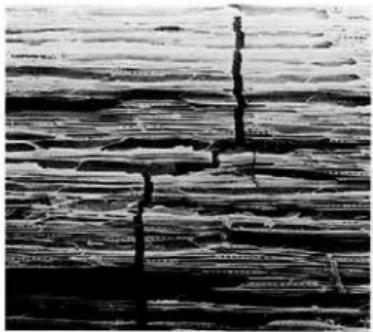
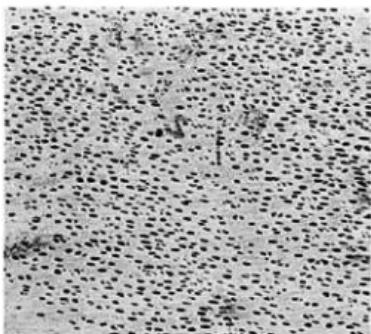
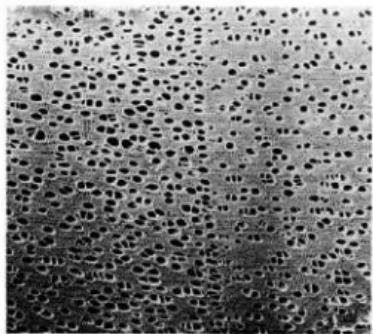


Fig. 1 広幡 1号墓
ユズリハ
Daphniphyllum sp.

Fig. 2 広幡城 貯藏穴2 下層
ウリカエデ
Acer crataegifolium

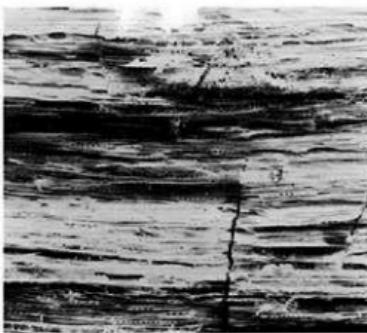
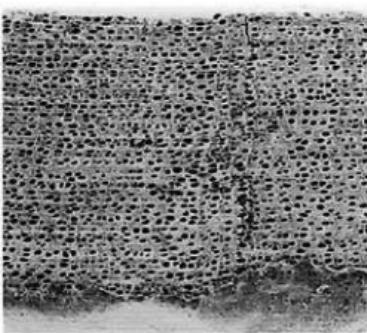
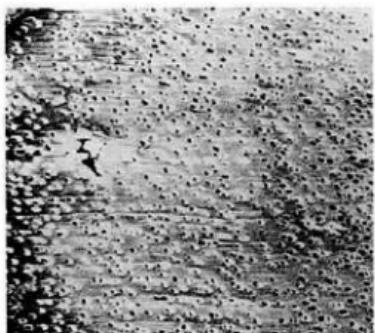


Fig. 3 広幡城 貯蔵穴 6
ウリカエデ
Acer crataegifolium

Fig. 4 広幡城 貯蔵穴 8
ウリカエデ
Acer crataegifolium

B. 広幡遺跡出土鉄滓の金属学的調査

新日本製鐵 大澤正己

概要

広幡遺跡の古墳時代から奈良時代に比定される住居跡出土の2点の鉄滓を調査して次のことが判明した。

- (1) 出土鉄滓の1点は、鉄器製作の為鉄素材を鍛接用に高温加熱した場合に派生した鍛錬鐵治滓に分類される。鉄滓中の砂鉄特有成分である二酸化チタン(TiO_2)は1%未満、バナジウム(V)0.011%と低減される。鉱物組成は、ヴスタイト(Wüstite: FeO)とファイヤライト(Fayalite: 2FeO·SiO₂)が基本組成となる。
- (2) 残る1点は、始発原料をチタン分の高い塩基性砂鉄とした荒鉄(製鉄炉から出た直後の不純物の多い小鉄塊)の成分調整時に排出された精錬鐵治滓に分けられた。

鉱物組成は、ヴスタイト結晶中に微小チタン析出物のウルボスピネル(Ulvöspinel: 2FeO·TiO₂)を含む品癖を示す。又、二酸化チタン(TiO_2)は、6.95%、バナジウム(V)が0.16%と高いことを特徴とする。10号住居跡は、鐵治滓を遺存させていた。

1. いきさつ

広幡遺跡は、築上郡椎田町水原に所在する。古墳時代から奈良時代に属する10号住居跡から鉄滓が出土した。この住居跡は、保存状態よろしくなく、鍛冶工房か否かさだかでない。出土鉄滓から遺構の性格をみきわめる為、福岡県教育委員会より、鉄滓調査依頼の要請を受けた。

なお、広幡遺跡からは10号住居跡の下方の包含層より100点近い鉄滓が出土している。遺跡内には鍛冶工房の存在が濃厚である。

2. 調査方法

2-1 供試材

Table. 1に2点の供試材の履歴と調査項目を示す。

Table. 1 供試材の履歴と調査項目

番号	試料	出土位置	推定年代	計測値		調査項目		
				大きさ(mm)	重量(g)	顯微鏡組織	CMA調査	化学組成
FK16	鉄滓	10号住居跡 (上層)	古墳～奈良 (7C末～8C代)	25×23×12	10	○		○
FK17	・	・ (床面直上)	・	37×25×15	30	○	○	○

2-2 調査項目

- (1) 肉眼観察
- (2) CMA(Computer Aided X-ray Micro Analyzer)調査
- (3) 化学組成

全鉄分(Total Fe), 金属鉄(Metallic Fe), 酸化第1鉄(FeO):容量法。炭素(C), 硫黄(S):燃焼容量法, 燃焼赤外吸収法。二酸化硅素(SiO₂), 酸化アルミニウム(Al₂O₃), 酸化カルシウム(CaO), 酸化カリウム(K₂O), 酸化マグネシウム(MgO), 酸化ナトリウム(Na₂O), 酸化マンガン(MnO), 酸化チタン(TiO₂), 酸化クロム(Cr₂O₃), 五酸化磷(P₂O₅), バナジウム(V), 銅(Cu):ICP法(Inductively Coupled Plasma Emission Spectrometer), 誘導結合プラズマ発光分光分析。

3. 調査結果

(1) 鉄滓(F K16)

① 肉眼観察

表裏共に赤褐色を呈し、粗粒な肌に木炭痕や気泡を露出させる。10 g の小塊。

② 顕微鏡組織

Photo. 1 の①②に示す。鉱物組成は、白色粒状のヴスタイト(Wüstite: FeO)が多量と淡灰色長柱状結晶のファイアライト(Fayalite: 2 FeO·SiO₂)、それらの粒間を暗黒色ガラス質スラグが埋める。典型的な鍛錬鍛冶滓の晶癖である。

③ 化学組成

Table. 2 に示す。全鉄分(Total Fe)は43.1%と鍛冶滓としては多くなく、そのうちの酸化第1鉄(Fe₂O₃)は23.3%, 金属鉄の錆化を含み、酸化第2鉄(Fe₃O₄)が35.5%と多い。ガラス質成分(SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+K₂O+Na₂O)も32.11%と多い。砂鉄特有成分の二酸化チタン(TiO₂)0.54%, バナジウム(V)0.011%と低減されている。他の微量元素も減少傾向にあり、酸化マンガン(MnO)0.16%, 酸化クロム(Cr₂O₃)0.019%, 五酸化磷(P₂O₅)0.22%となる。但し、銅(Cu)は鉄中に固溶するので鍛錬鍛冶滓となると増加し、0.010%を呈した。硫黄(S)も0.066%と増える。

(2) 鉄滓(F K17)

① 肉眼観察

表皮側は黄褐色を呈し、肌は粗粒面と流出状の滑らか面の2面を併せもつ。裏面は表と同色で反応痕をもつ。緻密質である。

② 顕微鏡組織

Photo. 1 の③~⑥に示す。鉱物組成は、大量のヴスタイト(Wüstite: FeO)で、粒内には茶

Table. 2 鉄津・製造剤生の化粧成形

番号	遺跡名	出土位置	種別	撲定年	全鉄分 (Fe)	全錫分 (Fe)	錫化物 Fe/Si	錫化物 Fe/Al	錫化物 Fe/Mn	錫化物 Fe/V	錫化物 Fe/Cr	錫化物 Fe/Pt	錫化物 Fe/Co	錫化物 Fe/Sc	錫化物 Fe/As	錫化物 Fe/Br	錫化物 Fe/Ti	錫化物 Fe/Na	錫化物 Fe/K	錫化物 Fe/Fe	注							
A-511	松丸	1号炉西土壤	砂鉱銀治津	TC中-SG	29.40	0.30	22.48	25.55	94.28	7.35	4.38	5.40	1.222	0.231	1.21	17.76	0.056	0.019	0.467	0.01	0.117	0.002	43.102	1.466	0.406	①		
A-312	*	*	*	*	*	*	30.15	0.12	31.77	24.81	19.77	6.43	3.36	6.34	0.757	0.152	2.57	20.87	0.079	0.014	0.458	0.12	0.158	0.002	37.469	1.229	0.865	②
A-513	*	*	*	*	*	*	29.58	0.30	30.41	26.93	20.32	6.34	5.27	6.40	1.004	0.181	1.40	19.90	0.063	0.007	0.596	0.06	0.164	0.002	39.515	1.336	0.873	③
A-514	*	1号炉内	(ガラス熔冶所)	*	9.46	0.14	2.87	2.37	57.63	16.66	1.69	1.86	2.365	0.569	0.37	4.95	0.059	0.004	0.254	0.12	0.045	0.002	80.754	8.336	0.323	④		
F15	水精鑿片	1号炉	精鍛銀治津	銀一平作	62.7	0.07	47.4	5.87	22.6	13.8	5.37	1.14	1.12	0.41	0.16	0.21	3.92	0.034	0.022	0.22	0.11	0.11	0.002	22.50	0.427	0.076		
F16	*	*	*	*	*	*	53.0	0.10	50.3	19.8	13.3	4.96	1.43	1.30	0.66	0.22	0.23	4.68	0.032	0.039	0.26	0.12	0.13	0.002	21.47	0.413	0.068	②
F17	*	2号炉	JPT	銀鍛銀治津	*	*	56.6	0.10	52.8	22.2	11.4	4.07	2.00	0.72	0.55	0.26	0.23	1.46	0.025	0.020	0.31	0.17	0.30	0.002	19.00	0.336	0.205	
F18	*	*	*	*	*	*	53.8	0.10	54.0	16.9	12.8	4.76	3.82	0.97	1.19	0.26	0.19	1.67	0.021	0.026	0.36	0.11	0.040	0.002	23.80	0.442	0.231	
F19A	土塼井	土塼(廢治所)	精鍛銀治津	13C後半	40.3	-	47.1	5.21	14.12	5.52	1.65	3.30	-	-	6.75	12.45	0.07	0.029	0.27	0.14	0.28	0.029	24.59	0.510	0.309			
B	*	*	精鍛銀治津	*	55.4	-	39.9	34.8	9.84	3.48	0.38	0.43	-	-	0.70	0.58	0.03	0.041	0.29	0.41	0.017	0.051	14.13	0.255	0.153			
C	*	*	*	55.4	-	50.7	-	57.47	23.50	8.89	1.38	0.67	-	-	0.21	0.59	0.02	0.031	0.21	0.10	0.009	0.042	34.44	0.759	0.033			
D	*	*	精鍛銀治津	*	17.67	-	7.45	17.01	58.6	11.25	0.90	0.35	-	-	0.07	0.66	0.01	0.017	0.16	0.08	0.012	0.030	71.10	4.024	0.037			
E	*	鐵道製片	*	*	71.5	-	53.0	43.3	1.66	0.79	0.23	0.12	-	-	0.07	0.19	0.03	0.026	0.12	0.16	0.004	0.024	2.40	0.039	0.003			
F19B	*	土塼(廢治所)	精鍛銀治津	*	55.7	-	51.7	22.19	7.08	3.33	0.61	0.82	-	-	0.19	5.68	0.04	0.037	0.57	0.25	0.11	0.028	11.84	0.213	0.102			
B	*	*	銀鍛銀治津	*	55.9	-	51.9	22.21	7.80	3.88	0.72	0.52	-	-	0.11	1.22	0.02	0.031	0.30	0.14	0.025	0.033	12.90	0.233	0.022			
C	*	*	*	51.3	-	55.9	11.26	16.16	6.06	1.28	0.73	-	-	0.09	1.19	0.02	0.027	0.42	0.25	0.029	0.034	24.23	0.472	0.223				
D	*	鐵道製片	*	*	70.8	-	-	-	-	2.32	1.05	0.20	0.13	-	-	0.05	0.29	0.04	0.059	0.14	0.25	0.007	0.026	3.70	0.062	0.004		
F19E	IC	精鍛銀治津	古墳-3号	43.1	0.14	23.3	35.5	21.0	6.53	2.32	0.83	0.79	0.24	0.16	0.54	0.019	0.066	0.22	0.20	0.011	0.010	22.11	0.745	0.033	⑤			
F19F	*	10号住跡上層	精鍛銀治津	*	51.1	0.21	51.3	15.6	12.0	4.35	3.12	1.70	0.82	0.16	0.41	6.96	0.15	0.035	0.40	0.11	0.16	0.004	22.35	0.437	0.136	⑥		

Table. 2 の注

- ① 大澤正己「松丸遺跡出土鉄器の金属学的調査」、「南丹市埋蔵文化財監査報告書第2集」、美郷町研究会 1992。
 ② 大澤正己「精鍛銀治津出土鉄器の金屬学的調査と復元の検討」、「龍田ハイバックス関係地質材料研究会報—8号」、1992。
 ③ 大澤正己「佐佐井遺跡出土鉄器と銀鍛製剣の金属性学的調査」、「佐佐井地区埋蔵文化財監査報告書第5集」、1990。
 ④ 大澤正己「玄海町出土鉄器の金属性学的調査」、「龍田ハイバックス関係埋蔵文化財監査報告書—9号」、1992。
 ⑤ 大澤正己「玄海町出土鉄器の金属性学的調査」、「龍田ハイバックス関係埋蔵文化財監査報告書第1集」、1992。

褐色微小結晶のウルボスピネル(Ulvöspinel: $2\text{FeO}\cdot\text{SiO}_3$)を析出する。精錬鐵治津の晶癖である。

③ CMA 調査

Photo. 2 の SE(2次電子像)に示したヴスタイト(Wüstite: FeO)と、その粒内に析出した微小ウルボスピネル(Ulvöspinel: $2\text{FeO}\cdot\text{TiO}_3$)の分析結果である。

検出元素は強度順に並べると次の様になる。珪素(S), 鉄(Fe), カルシウム(Ca), アルミニウム(Al), チタン(Ti), カリウム(K), マグネシウム(Mg), アンチモン(Sb), ナトリウム(Na), マンガン(Mn)となる。

ヴスタイト, ウルボスピネル, ガラス質成分に見合った構成成分である。

これら検出成分を、視覚化したのが Photo. 2 の特性X線像である。白色輝点の集中度によって分析元素の存在を知る事ができる。例えば、白色粒状結晶のヴスタイト(Wüstite, FeO)粒内の微小析出物は、チタン(Ti)で白色輝点が集中する。ヴスタイトは FeO で表わされる如く、鉄(Fe)にも白色輝点は強く認められる。鉄(Fe) - チタン(Ti)化合物であるウルボスピネル(Ulvöspinel: $2\text{FeO}\cdot\text{TiO}_3$)が析出物と判る。

該津は、まだチタン濃度の高い成分系で、前述した FK16 鉄津とは、明らかに差異のある事は明白である。

④ 化学組成

Table. 2 に示す。全鉄分(Total Fe)は 51.1% と高い。このうち、酸化第1鉄(FeO)は 51.3%, 酸化第2鉄(Fe_2O_3)は 15.8% の割合である。ガラス質成分($\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$)は 22.35% となる。ガラス質成分中の塩基性成分(CaO + MgO)は 4.82% と多い。砂鉄特有成分の二酸化チタン(TiO_2)は 6.95%, バナジウム(V) 0.16% らも高目である。他の微量元素らもやや多く、酸化マンガン(MnO) 0.41%, 五酸化磷(P_2O_5) 0.40% らとなる。精錬鐵治津としての成分系である。

4.まとめ

広幡遺跡の10号住居跡から出土した2点の鐵津は、鐵器製作時の折り返し曲げ等の鍛接加工時の排出津で鍛錬鐵治津に分類されるものと、製鐵炉から出された直後で不純物の多い荒鉄の成分調整を行って鐵素材とした時点で排出された精錬鐵治津であった。両者は鍛冶作業で形成された鍛冶津である。

この結果から、10号住居跡は鍛冶工房の可能性はもつが、火窯ともいべき鍛冶炉の検出がなく、鐵津出土量も多くないので、結論を出すまでには至らなかった。

しかし、古墳時代から奈良時代のこの10号住居跡出土鐵津は、松丸製鐵遺跡出土の製鐵津の成分系と繋がるものであり①。今後は両遺跡の考古遺物との総合的検討が必要であろう。

Table 3 広島造出土壤試料(FK17)のコンピュータープログラムによる高選択性分析結果

POS. NO.	HOLDER NO. CO:END1	X(MM)	Y(MM)	Z(MM)	COMMENT (CHARACTER)
POS. NO.	5	10.000	40.000	10.000	READY(PARTY) ?
COMMENT : FK17 ACCFI. VOLT. (KV) : 15 PROF. CURRENT : 5.000E-06 (A) STAGE POS. : X 40000 Y 10000 Z 10000					10-NPR-90
CH(1)	TAP	EL	WL.	COUNT	INTENSITY(LOG)
CH(2)	PET	EL	WL.	COUNT	INTENSITY(LOG)
CH(3)	LIF	EL	WL.	COUNT	INTENSITY(LOG)
Y -1	6.45	207	3.75	1286	0.75
BR-1	6.96	206	3.75	311	0.75
BR-1	6.98	173	3.36	1940	0.75
BR-1	7.13	6528	3.44	67	0.75
② BR-1	7.22	121	3.60	67	0.75
③ OL-K	8.34	1890	3.44	50	0.75
BR-1	8.37	179	3.96	20	0.75
OS-1	9.47	36	4.73	14	0.75
OB-B-K	9.89	482	3.37	17	0.75
GE-1	10.44	74	5.43	11	0.75
OB-1	11.29	19	5.79	11	0.75
OB-B-K	11.91	69	5.67	8	0.75
F = K 58.32	5	984	6.16	27	0.75
RESULTS:					
THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PRESENT					
HA HA Al Si K Ca Ti Mn Fe Cr					
THE FOLLOWING ELEMENTS ARE PROBABLY PRESENT					
P Sr					

Photo. 2 の OSE (2次電子像)に示したゲルマイト(Whitite: FeO)とその粒内の析出物の分析結果である。検出元素を粒度順に並べると次の様になる。硅素(Si)6528, 鉄(Fe)490, カルシウム(Ca)1940, アルミニウム(Al)1888, チタン(Ti)1386, カリウム(K)579, マグネシウム(Mg)487, アンチモン(Sb)92, ナトリウム(Na)69, マンガン(Mn)53となる。チタンを含むゲルマイトとガラス質成分から構成される。鍛冶に供した荒鉄はチタン分の多い堆積性鉄を始発原料とすることが想定される。

なお、広幡遺跡から出土した精錬鐵治津と同系鐵滓が、築上郡では赤幡森ヶ坪遺跡②及び土佐井地区遺跡③でも検出されている。築上郡一帯では、チタン分の高い塩基性砂鉄を始発原料とした鐵生産は広く行われたと推定される。

Fig. 1 は、Table. 2 の化学組成のうち、砂鉄特有成分のチタン(Ti)とバナジウム(V)をもとに、鐵(Fe)との比をとってプロットした結果である。製鐵一貫作業工程において、Ti/FeとV/Feが漸次減少してゆく傾向がよく読みとれる。すなわち、地元賦存の高チタン含有の塩基性砂鉄を始発原料とし、第1工程の製錬で排出された製錬滓から、荒鉄の成分調整の精錬鐵治、半製品となった鐵素材を鐵器製作における鍛錬鐵治までの滓中のチタン(Ti)とバナジウム(V)の工程推移である。築上郡、更に地域を括げて豊前地方までから出土する古代製鐵関連物は、Fig. 1 に示された線上に乗ってくると想定される。

(1992. 2. 18)

註

- 1 大澤正己「松丸製鐵遺跡出土鐵滓の金属学的調査」『城井谷I』（篠山町文化財調査報告書 第2集）篠山町教育委員会 1992。
- 2 大澤正己「赤幡森ヶ坪遺跡鐵治関連遺物の調査結果と造構の検討」『椎田バイパス開通記念文化財調査報告書-8-』福岡県教育委員会 1992。
- 3 大澤正己「土佐井遺跡出土梳形鐵滓と鍛造剝片の金属学的調査」『土佐井地区遺跡』（太平村文化財調査報告書 第5集）1990。

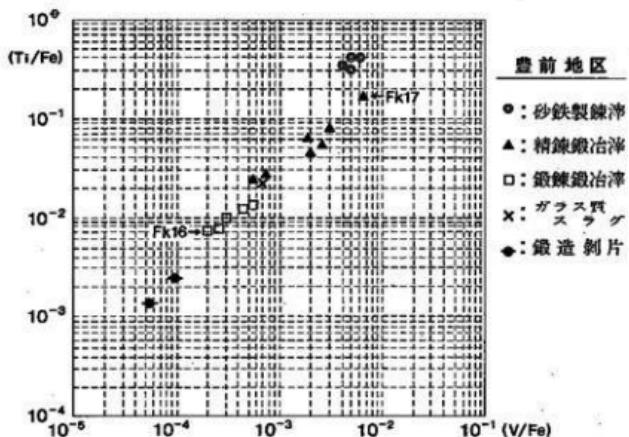


Fig. 1 築上郡地区出土製鐵関連遺物の Ti-V 成分変化

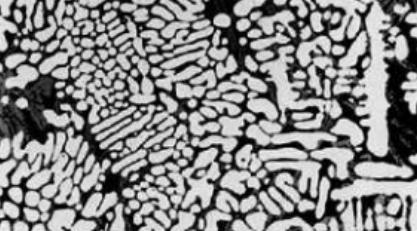
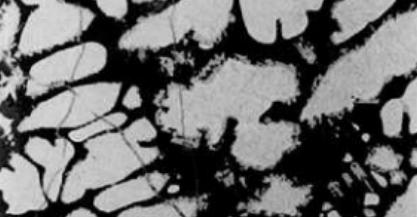
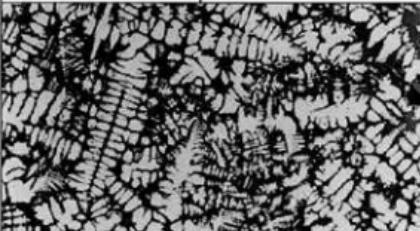
<p>(1) FK 16 広輔遺跡 (住居址内住10上層) 出土 鍛錬鐵治滓 $\times 100$ 外観写真 1/2.0</p>	 <p>表側</p>	 <p>①</p>
<p>同上 $\times 400$</p>	 <p>裏側</p>	 <p>②</p>
<p>(2) FK 17 広輔遺跡 (住居址内住10床面) 直上出土 精鍛鐵治滓 $\times 100$ 外観写真 1/2.0</p>	 <p>表側</p>	 <p>③</p>
<p>同上 $\times 400$ (⑤$\times 100$) (⑥$\times 400$)</p>	 <p>裏側</p>	 <p>④</p>
 <p>⑤</p>	 <p>⑥</p>	

Photo. 1 鍛錬鐵治滓、精鍛鐵治滓の顕微鏡組織

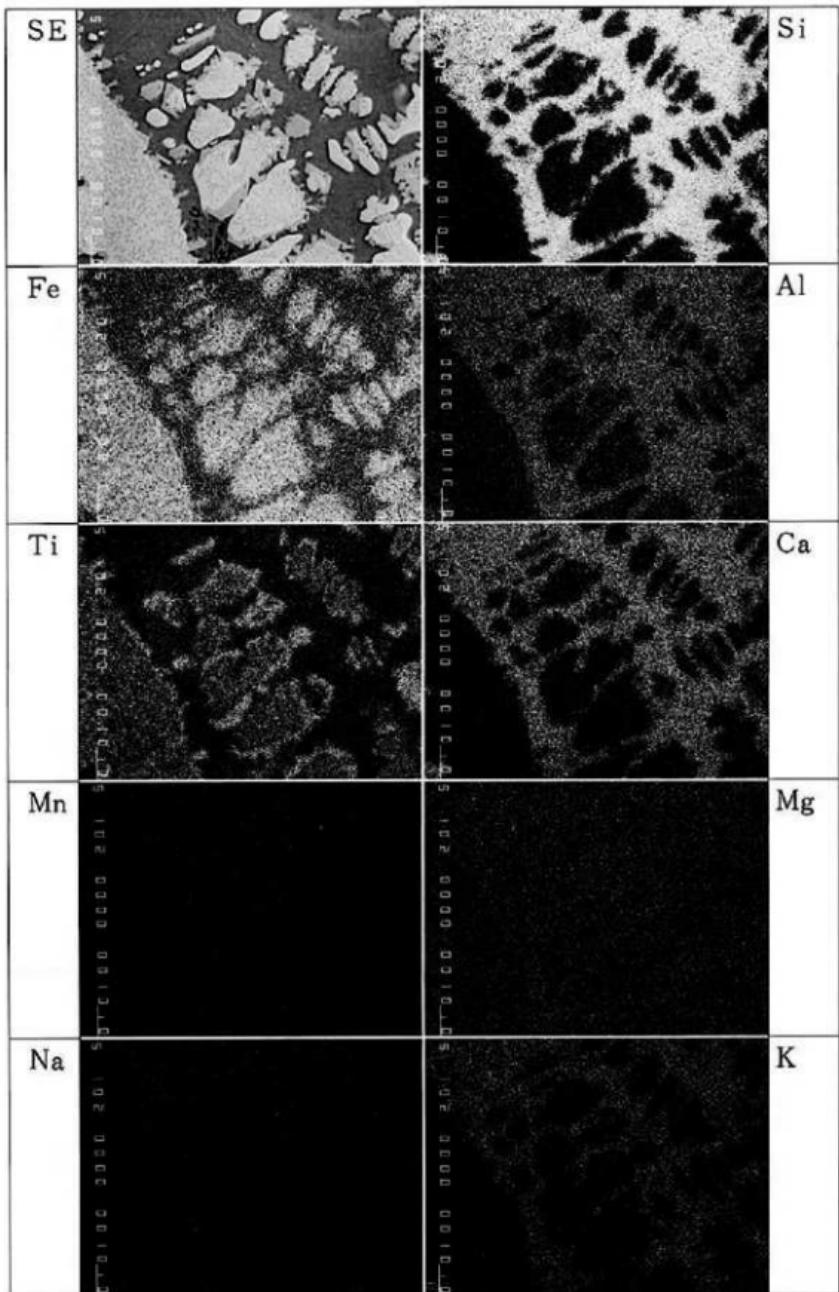


Photo. 2 広幡遺跡出土精鍛鐵冶津（F K 17）の特性X線像

C. C-14年代測定

広幡城跡のⅠ郭とⅡ郭間の堀にかかる土橋の下部に存した石組（S R 11下石組）の中（協会コードN-6135）と、広幡遺跡の1号墓（協会コードN-6136）から出土した炭化材について、社団法人日本アイソトープ協会（東京）に依頼して年代測定を行った。その結果は次のとおりである。

協会のコード	依頼者コード	C-14年代
N-6135	K-14	310±70y.B.P. (300±70y.B.P.)
N-6136	K-15	890±75y.B.P. (860±70y.B.P.)

年代は¹⁴Cの半減期5730年（カッコ内はLibbyの値5568年）にもとづいて計算され、西暦1950年よりさかのぼる年数（years B.P.）として示されています。付記された年代誤差は、放射線計数の統計誤差と、計数管のガス封入圧力および温度の読み取りの誤差から計算されたもので、¹⁴C年代がこの範囲に含まれる確率は約70%です。この範囲を2倍に拡げますと確率は約95%となります。なお¹⁴C年代は必ずしも真の年代とひとしくない事に御注意下さい。

（1992年1月24日付の回答報告書）

上記のC-14年代を5730年の半減期で、年代誤差をも含めて西暦で示せば次のようになる。

N-6135	1570～(1640)～1710 A.D.
N-6136	985～(1060)～1135 A.D.

すなわち、N-6135（広幡城跡S R 11下石組）は1640年（17世紀中葉）を前後する頃の年代を、またN-6136（広幡遺跡1号墓）は1060年（11世紀中葉）を前後する頃の年代を示したことになる。

VI 総括

1. 広幡城の築城と存続年代

山城の上限・下限

広幡城の築城については、それを文献史料から知ることはできない。もとより、広幡城のことを記した同時代の古文書は知られておらず、また広幡城のことにつれていた最も古い文書と思われる『豊前国古城記』に「宮原中将と云う者切開き」とある記事にしても、仮にこの記事が信じうる内容であったとしても、その宮原中将なる人物がいつの頃に生存していたかは皆目わからないのである。

これまでに広幡城は鎌倉時代あるいは戦国期の築城であろうとの俗説があったけれども、それについては多分に広幡八幡宮が鎌倉時代には存したという事実から派生したものであろう。

広幡八幡宮は、鎌倉時代初めには文献に見えており、宇佐神宮の系列として莊園を領していたことが知られる。その所在地は今回の調査地である広幡遺跡の周縁、おそらく北側に残る墨敷地と見做されるあたりが社殿の存した所と思われる。もちろん、今次調査の広幡遺跡において12~14世紀の間の遺物と若干の造構が検出されているので、ここもその「社殿」地の範囲に含まれていたことであろう。しかし、広幡八幡宮がここに存したからといって（まだ確定したわけではないが）、広幡城が同じ頃からここに存したことにはならない。広幡城の築城は、やはりまだ後のこととせねばならない。

さて、今次の発掘調査においてはごく少量ながらも、広幡城の築城あるいは存続年代を知るために有用な土器の出土があった。それは主にⅠ郭とした郭内の土壤と、Ⅰ・Ⅱ郭間の堀の中から出土しているが、礎石の周辺や南斜面の建物跡からの土器も取上げてよいだろう。

土器を扱う前に造構のあり方を見ると、郭内において礎石を使っての、あるいは掘立柱形式での建物は明確には確認できていないので、果たして建物の変遷があったのか否かわからない。しかし、土壤（SK）のあり方や堀からの遺物の出土状態を見ると、この山城が機能していたのはそれほど長くなかったのではないか、と考えざるを得ない。特に、堀の中から山城の時期に関連すると思われる土器が出土したのはごく僅かであり、このことは郭内における居住（生活）の期間がきわめて短かったことを示しているのではないかと考える。

山城というものの自体が日常的な生活の場ではなく、危急時に立て籠って対処する所であったはずだから、平常の生活空間に比べれば土器の出土量は少ないので当然であろう。でも、この広幡城における土器の量はあまりに少ない。そしてまた、以下で検討するように、出土土器全

体の時間幅があまり大きくないように考えられるのである。

なお、築城の上限としては、SK 1より出土した永楽通宝の鋳造年を過らないものと考えたい。SK 1がいつ掘削されたのかについては確証は得られないが、永楽通宝の初鋳年(1403年)以後にこの土壘が廃棄されたことだけは間違いない。SK 1が広幡城に関係するものとして築城の上限を15世紀前半におくことをまず提示する。

さらに城の下限については、全国の山城の殆ど全てが戦国時代の終結とともにその命脈を絶ったと考えてよいが、この広幡城については、これも確たる証明手段を欠くものの、黒田孝高(如水)が豊臣秀吉より豊前の京都・仲津・築城・上毛・下毛・宇佐の6郡を与えられ、中津に入封した天正16年(1588)には宇都宮氏が滅び去ったとされるので、この16世紀の末に近い頃を考えておきたい。

土器の検討

第23・24図に示した25点の土器を器種別に分ければ次のようになる(第89図参照)。

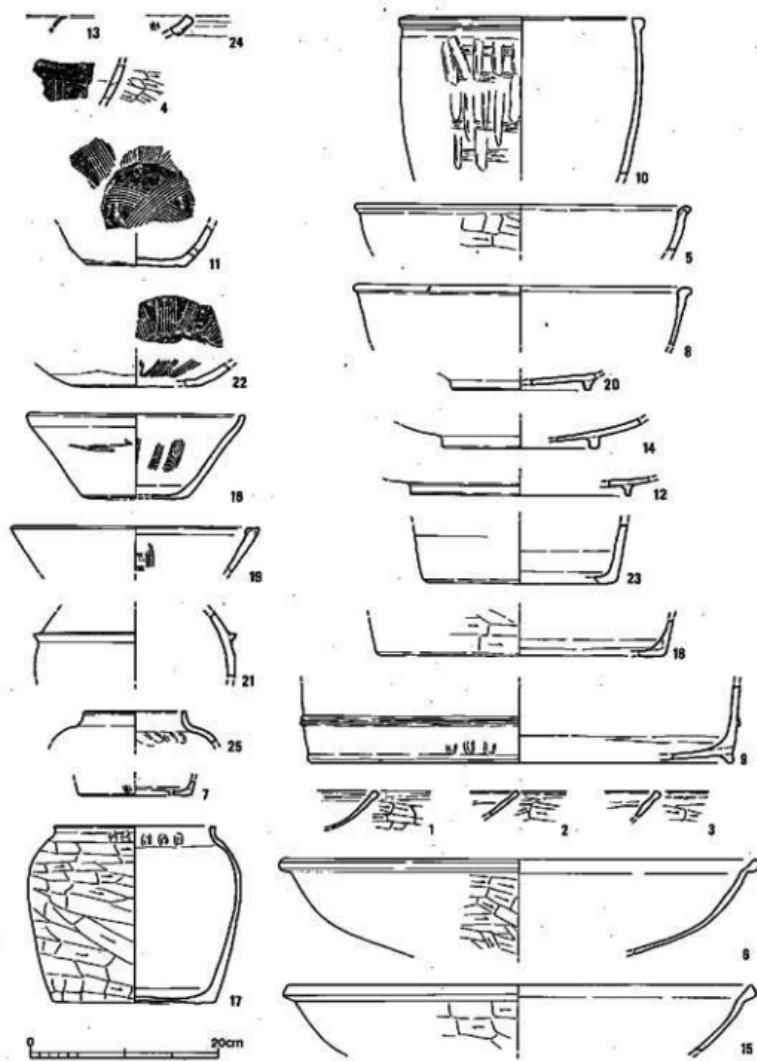
- 白磁 —— 13
- 捜鉢 —— 4・11・16・19・22・24
- 釜 —— 21
- 壺 —— 7・17・25
- 鉢 —— 5・8・10・12・14・20
- 火鉢 —— 9・18・23
- 土鍋 —— 1・2・3・6・15

これらは13の白磁を除いて、土師質・須恵質・瓦質の3者があるけれども、前二者もどちらかといえば瓦質に近いといってよいものである。

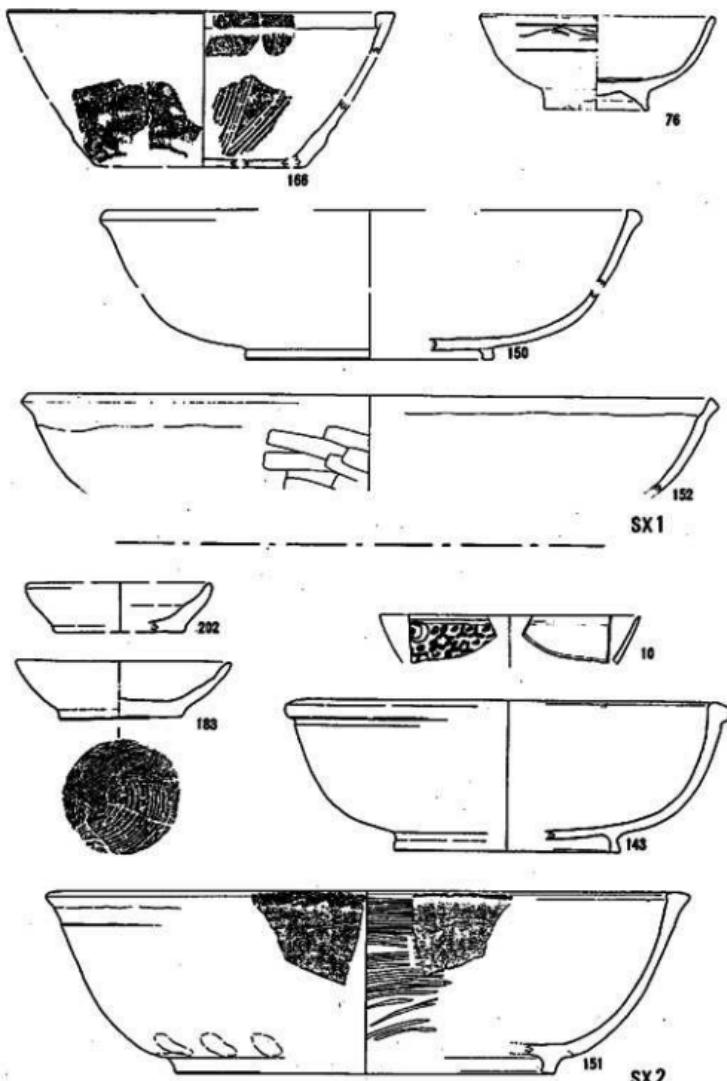
さて、上記の器種一覧でわかる如く、この出土品中には壺や皿といった供膳用の食器が含まれていない(13の白磁を除く)。これは図示しえなかった破片中でも全く見られなかったので、供膳具は磁器(といっても1点しかないが)か木器(漆器)であった可能性が高い。

壺や小皿があればそれを基準にもできるが、いまは土鍋と搜鉢と鉢とを他遺跡出土品と比較検討することとする。

まず、大分県東国東郡安岐町に所在する安岐城跡からは輸入陶磁器・国産陶器・瓦質土器・瓦などかなりの量の遺物が出土している。この安岐城跡の建物等は3期の変遷が捉えられ、それらは16世紀中頃から17世紀初頭の間に營まれたとされている。第92・93図に示したのは第2期とされるSX 2やSX 1その他の出土遺物を抽出したものであるが、これと広幡城から出土した土器等(第91図)を比べてみよう。次に示すものは互いに形態的によく似たものとしてよいだろう。



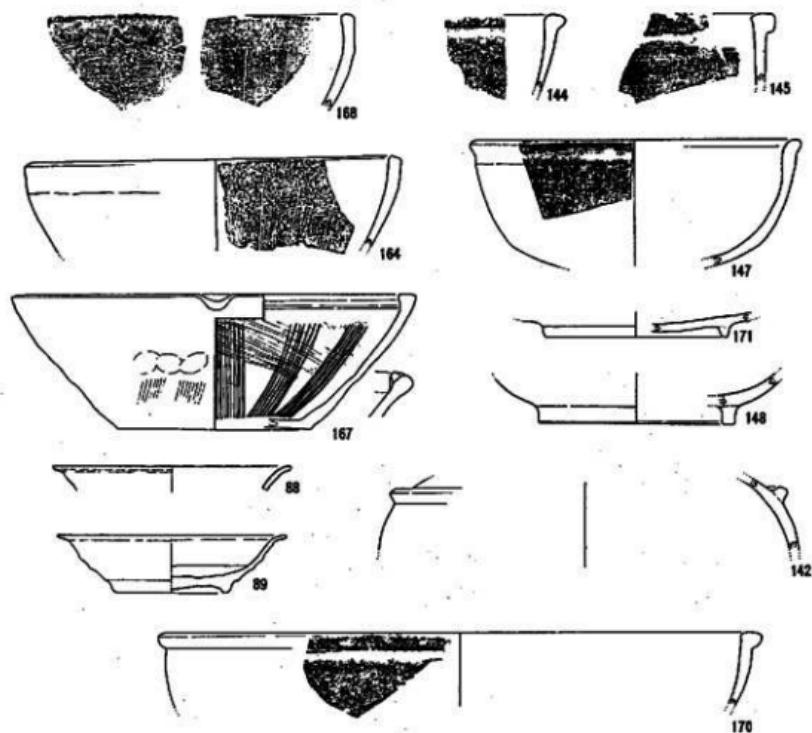
第 89 図 広幡城跡出土土器測図 (1/6)



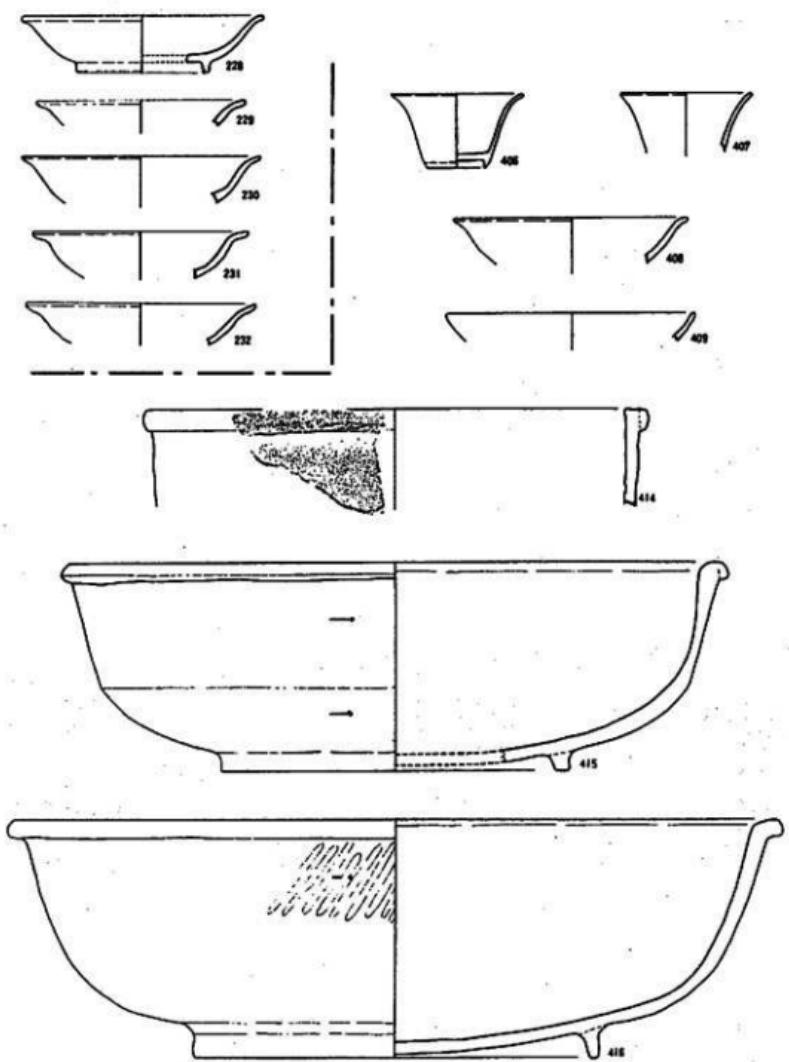
第 90 図 安岐城 SX1・SX2 出土土器 (報告書より改変転載)

	指 鉢	鉢	土 鍋	白 磁
安岐城(第92・93図)	166・164 19 16	143・144・145・170 10・5・8	152 1・2・3・(6)	88・89 13
広幡城(第91図)				

これらの中特に注意しておきたいのが土鍋と白磁の口縁形態である。安岐城 S X 1 はその所在も何期に属するかも報告書からは知りえないが、土鍋 152 は広幡城の S R 11 下石組より出土の 1~3 と非常によく似ている。また、広幡城の郭内より出土した唯一の磁器である S K 6 の13は皿形になるもので、安岐城の88と同形態とみてよい。



第 91 図 安岐城跡出土土器 (報告書より改変転載)



第 92 圖 伐株山城跡第 5 土器遺構 3 号土爐ほか出土土器
(報告書より改変転載)

同じ豊後国に属する大分県玖珠郡玖珠町の伐株山城跡では、1979～1983年の間の4次にわたる調査において、第1・第5の土塁造構^(註)その他から多量の土器・陶磁器類が出土している。それら1400点近い遺物は造構に伴っていないものも多数あるが、山城が機能した時期を示しているものではある。

それらの中の白磁皿Gに分類されたものは、やはり広幡城SK6出土のそれと同一形態のもので、口縁端部が反りを持つという特徴がある。この皿Gについては、15世紀後半から出現し、16世紀後半には衰退するものと捉えられている。

また、第5土塁造構で白磁皿Cが出土した3号土塙からは瓦質の鉢も出土しており、これの形態（第94図414・415）と広幡城出土鉢（10・5・8など）とは口縁のみならず高台のあり方なども酷似している。

伐株山城跡については、古く鎌倉時代から高勝寺という山岳仏教の寺院が営まれ、南北朝期にはその寺院が城郭として使われることもあったが、大規模な山城として築造されたのは戦国時代・天文元年から3年の間（1532～1534）であった、と推測されている。

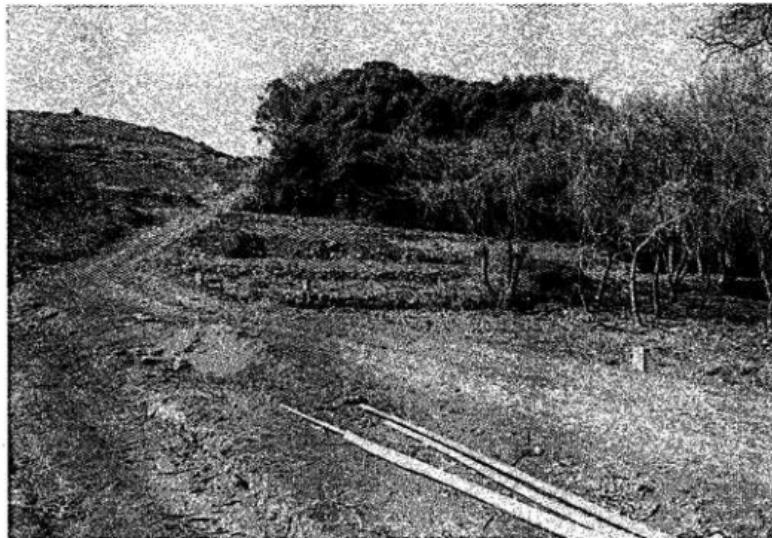
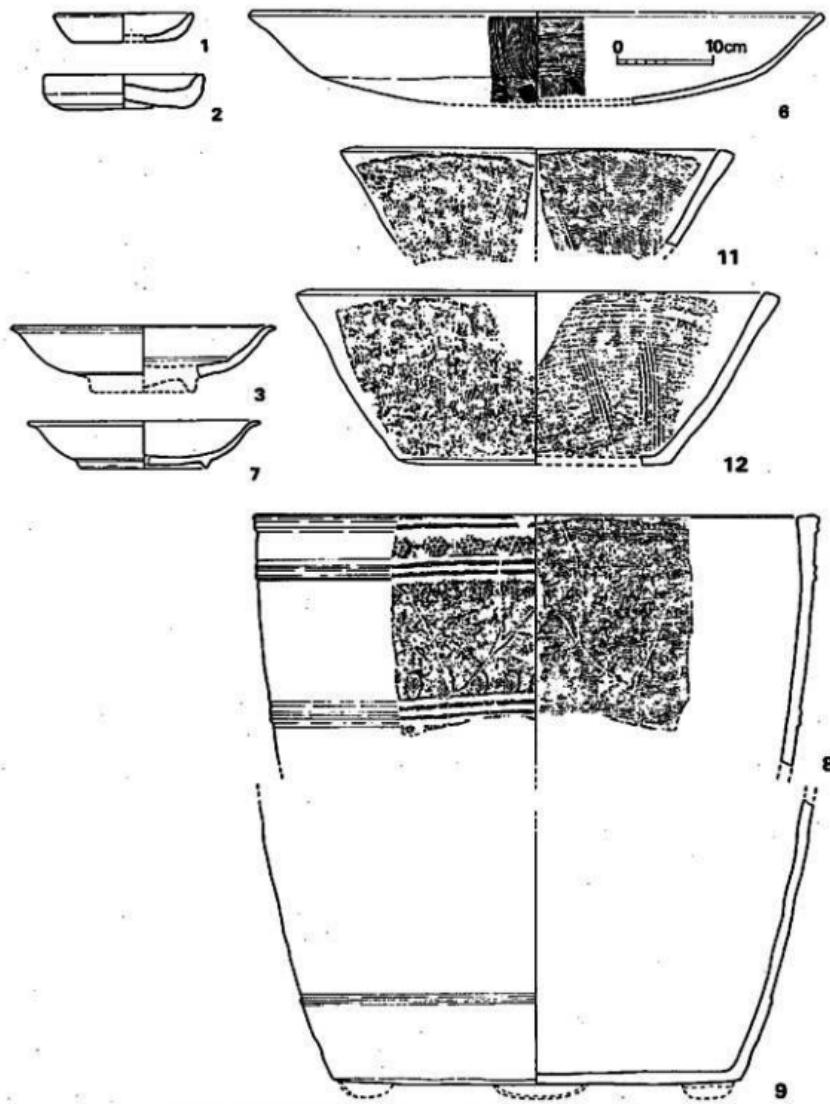


Photo. 21 広幡遺跡周辺



第 93 図 波多江遺跡 S D 003 その他出土土器
(報告書より改変転載, 3 : S D 002, 7 : S D 004 出土)

次に、旧国制では筑前国になるが、糸島郡前原町波多江遺跡では、戦国期の遺構が2期に大別されており、Ⅰ期は1500年を前後する頃、Ⅱ期は16世紀後半(1586年以前)に比定されている。第95図にⅠ期に属するSD 003の土器等を掲げたが、この中の土鍋6はその口縁がやはり広輪城出土の1~3に類似する。ただ内外面の調整は異なっている。3と7はⅡ期に属する白磁であるが、これは広輪城の13と同一形態のものと考えてよい。

築城・廃城の年代

以上の比較検討してきた結果として、広輪城跡にて出土した土器——それは図示したもので僅か25点であるが——はおおよそ16世紀中葉を前後する頃に位置づけて大過ないであろう。遡っても16世紀前葉の頃と思われる。

戦国時代の後半期、豊前国の政情があわだだしく不安定きわまりなくなってくるのは天文年間(1532~)以降のことと言われる。

豊前守護であった大内義隆は1532(天文元)年以降少弐・大友の連合軍と戦い、1536(天文5)年には大宰大弐に任せられている。その大内義隆が家臣の陶隆房(晴賢)に攻められて自殺した1551(天文20)年以降、豊前地方はますます風雲急を告げる情勢となってくる。

以前より北部九州一帯を狙っていた大友宗麟は、これを機に北上をはじめて豊前も攻略し、やがて博多も手中におさめて1559(永禄2)年までに六ヶ国の守護職を手に入れた。さらには九州探題にまでのしあがっている。しかし、中国地方の雄となつた毛利元就も九州へ食指を伸ばし、このあととくに豊前・筑前を中心とした北部九州は戦乱に明け暮れる状況が続いていくのであった。

これらの極限までの戦乱状態が收拾されるのは、日向耳川の戦い(1578=天正6年)で島津軍に大敗して以降勢力の弱まつた大友宗麟が豊臣秀吉に救援をもとめ、それをうけて秀吉が九州に入り、島津氏の降伏でもって九州平定が達成されたときである。時に1587(天正15)年5月のことであった。

さて、如上の世相をも含めて考えるならば、広輪城の築城については16世紀、天文年間の頃(1532~1555)が最も妥当性が高いということになろう。廃城(破却)はやはり天正15(1587)年を前後する頃と捉えたい。

註

- 1 大分県教育委員会『安岐城跡・下原古墳』(大分県文化財調査報告 第76号) 1988
- 2 琉球町教育委員会『伏株山城跡』1984
- 3 福岡県教育委員会『今宿バイパス関係史跡文化財調査報告』 第6集 1982

2. 広幅遺跡と広幅城跡

広幅遺跡と広幅城遺跡においては、古くは縄文時代後期から、新しくは江戸期、明治期から昭和期の遺物が出土している。ここでは、それらの時代ごとに遺構と遺物を概観して、遺跡全体のまとめとしておきたい。

I. 縄文時代

縄文時代には、広幅遺跡において後期・北久根山式の土器片少量と、その時期に属すであろう打製石鎌・石斧があるが、いずれも明確な遺構に伴ったものではない。9号住居跡の下層から少しがまとまって出土したものの、これもはっきりした遺構とは捉えられなかった。

岩丸川をはさんで広幅遺跡のすぐ東側に石町・山崎遺跡がある。ここでは縄文後期の堅穴住居跡や土壙が検出され、該期集落の一端が明らかにされた。この広幅遺跡における縄文土器・石器については、遺構の存否に拘らず石町・山崎遺跡と深い関係を有するものであることは疑いないところである。岩丸川の川縁から、山崎遺跡・広幅遺跡の遺構の存した所までの距離は、各々15m、30mとごく短い。このことは、現在の岩丸川が古くは流路を異にしていたのではないか、との想定を抱かせる。

ともかく、縄文時代後期にはここ広幅遺跡にも人々が足跡をしるしていたのである。

II. 弥生時代

弥生時代がはじまって、前期中頃には広幅城遺跡の標高60mの所に住居跡が営まれる。なぜか、より条件がよかつたはずの広幅遺跡の方には居住した痕跡が見られない。

広幅城遺跡には堅穴住居跡6軒、貯蔵穴9基(さらに第2次調査で6基を検出)、その他ピット等が存したが、その遺構の分布状況は片寄りがある。すなわち、3~6号住居跡が城跡におけるⅠ郭の東端に近く集中し、1・2号住居跡と1・2・6~9号貯蔵穴が中央付近に集中する。第2次調査分の貯蔵穴はⅡ郭の西端に近く位置する。これを見るに、丘陵頂部においては2~3グループが住居を営んでいたといえそうである。

注意しておきたいことに、2・6・8号貯蔵穴から栗・カシと思われる堅果類が出土したことが挙げられる。北部九州で稻作が開始されてしばらくの時を経ているが、この広幅城遺跡の2・6・8号貯蔵穴の中には米は貯蔵されていなかった。また、大陸系磨製石器としては第2次調査でSP32から大型蛤刃石斧が出土したのみである。さらには、6号住居跡から姫島産黒曜石の剣片が多量に出土したことは、この住居内で石器製作を行っていたことを伺わせる。

この周辺では弥生期でも最も古く位置づけうるこの広幅城遺跡において、なぜこのような小

高い所に住居を営まねばならなかつたのか。北方の眼下600m程の所には弥生中期前半を主体とする広木・安永遺跡があり、集落が営まれている。また、十双遺跡や、赤幡森ヶ坪遺跡、下清水遺跡においても少量ながら前期後半以降の土器が出土しているが、これらは広幡城遺跡と比べると少しが新しい。つまり、広幡城遺跡が放棄されたのち、平地部に集落が営まれるようになってきているのである。弥生前期の中頃から後半の頃に、平地には住みにくく何らかの要因があったものと思われる。

III. 古墳時代～奈良時代

古墳時代後半の6世紀末頃に至って、広幡遺跡には住居が営まれ始める。まず、2・9号住居跡がつくられ、それと時を同じくして下方にある包含層（SG2）も形成されはじめる。住居群は7世紀を経て8世紀末頃まで連続とつくられている。

2号住居跡から出土した子持勾玉は腹のみに突起（子）を作り出した扁平なもので、子持勾玉としては退化した形態である。近年、豊前市荒振中ノ原遺跡からも出土している。

奈良時代になってその半ば、8世紀中頃には広幡遺跡で10号住居跡が営まれる。この住居内では、具体的な内容は知りえないが、精鍛鍛冶と鍛錬鍛冶とが行われていた。つまり大銀治と小銀治である。その結果として、住居内のみならず包含層（SG2）からも鉄滓やふいご羽口片などが出土しているのだろう。この住居が銀冶工房として使用されていたことはほぼ間違いないものと思われる。岩丸川流域の谷筋にも、築城町松丸F遺跡のような製鉄遺跡が存するのかかもしれない。

また、同じ10号住居跡から飯蛸壺が50個体近く出土したことでも注意しておく必要があろう。赤幡森ヶ坪遺跡でもやはり飯蛸壺があり、当時の海岸線は今よりもっと内陸側にあったものと考えられよう。

なお、同じ頃に広幡城遺跡では火葬墓が営まれている。

IV. 平安時代

この時期の造構として確かに把握できるものは今のところない。ただ、10号住居跡の上層に存したSG1や、その下方にあったSG2などの包含層中から綠釉陶器・黒色土器の破片が出土していることより、9～10世紀の造構がSG1の近辺に存したであろうことを想定するのみである。あったとすれば掘立柱建物であろう。

綠釉陶器については、豊前地方においても近年ますます発見例が増えている。赤幡森ヶ坪遺跡や犀川町下木井遺跡、行橋市崎野遺跡等でも最近発見され、いわゆる「長門国姿器」の問題がさらに追究されるほどに資料がふえてきた、ともいえよう。

なお、綠釉陶器の破片が含まれていたSG2は、それより新しい遺物としては染付磁器1点

のみしかない。この染付磁器片に伴う遺物が他に全くないことから、これを混入とみれば、広幅遺跡においてその東端部の崖面、すなわち2・3号住居跡等が削られ去った部分は、多分に9世紀以降に岩丸川の氾濫によって形造られたとみることができる。

V. 鎌倉時代～室町時代前期

広幅遺跡では確実なところとしては、SG1が12～14世紀に形成された包含層と考えうるので、その周辺に建物跡が存した可能性は高い。SG1には9～10世紀代の遺物もあったが、12～14世紀の輸入陶磁器片も20数点が出土している。点数としては少ないが、岩丸川東岸の石町遺跡でも13世紀後半と目される遺物があるので関連するものとしてよいだろう。

また、1・2号墓が13世紀後半と考えうる土師器を出土しているが、この墓の年代は土器の位置づけによって変動することもありうる。

さらには1号石垣の掘り形内より常滑陶器が出土しており、これも古く考へれば12～14世紀におくことでもできる。しかし、2号石垣との絡みもあるので16世紀代と考えたい。

溝の5・6号が14～16世紀の可能性もある。

この鎌倉期以降の広幅遺跡については、やはり「広幅八幡宮」との関わりを無視するわけにはゆかない。「広幅八幡宮」の位置を特定できない今は、この広幅遺跡もその一部に含まれている可能性があることのみ考慮おくこととしよう。

VI. 戦国時代

広幅遺跡では石垣や溝がつくられ、建物が建てられてくるが、はっきりと知りうるのは石垣くらいである。1号建物跡はその全体の形状を描みにくい。2号石垣の前面には大きな建物が存したはずと考えるが、捉えきれない。3・4号石垣については江戸期の所産ではないかと考えている。この広幅遺跡において、15～16世紀に建物が存したであろうことは予想されるし、一部の遺物についてもこの時期に属するものがある。1号土壇などは、16世紀後半代の建物に付属した遺構と捉えているけれども、周辺の具体的様相が知りえない。

広幅城跡は、16世紀中頃には築城され、同後半代には破却されたと考えられる。この山城で最も注目されるのは、まず東南斜面における建物跡の存在である。SX1・5～8とした建物跡がこの山城跡に伴うことはほぼ間違いないところであり、その性格が重視される。第一には見張番をおいた小屋の跡とする捉え方もできるが、それだけのものであろうか。現時点ではその位置づけを十分に行いないので、今後の調査事例等も加味して後日再考したいと思う。

次に、横矢掛りの一棟たる出枡（本文中ではSZの略号を用いた）の存在、その在り方も注意されよう。I郭に2ヶ所、II郭に1ヶ所を配したその位置は、縦堀・虎口の近くであったり、尾根筋の進入路の突き当りであるなど、山城の防禦性を十分に考慮したものである。

この広幅城を鳥瞰すれば、その繩張りの整然とした配置に感心させられる。やはりこの地が常に防衛の最前線におかれたがための工夫として整備されたものであろう。

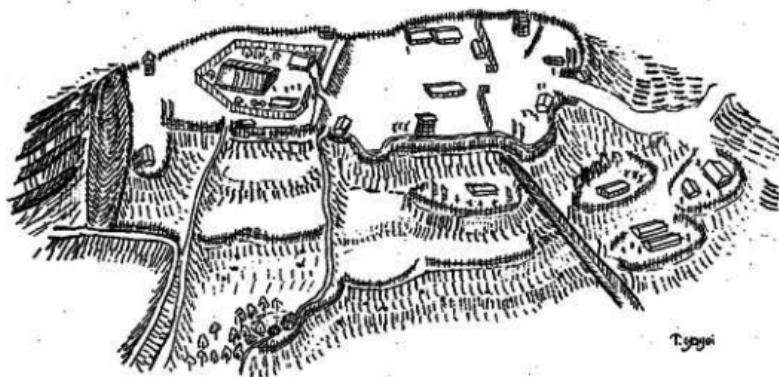
VII. 江戸時代以降

陶磁器類の中に江戸期以降に位置づけうるものがあるけれども、そのときの遺構は特定しない。ただ、広幅遺跡3・4号石垣と暗渠は中世にまで遡りえないものと思われる。

広幅城跡のⅠ郭堀Ⅳ区上面出土の陶磁器類は、明治期以降の花見の時に使われたものかもしれない。礎石3の近くから採集されたボタンについてはいろいろ調べてもみたが、いつ、どこで作られたのかという肝心な点が不明のままである。表面にあしらわれた紋章は生半可な文様ではないと見ているがどうであろうか。

註

- 1 推田町教育委員会「石町遺跡」（推田町文化財調査報告書 第2集）1988
- 2 福岡県教育委員会「椎田バイパス開係埋蔵文化財調査報告 — 7 —」1992
- 3 笠城町教育委員会「安永遺跡」（笠城町文化財調査報告書 第1集）1984
- 4 福岡県教育委員会「椎田バイパス開係埋蔵文化財調査報告 — 5 —」1991
- 5 福岡県教育委員会「椎田バイパス開係埋蔵文化財調査報告 — 8 —」1992



第 94 図 広幅城復原イラスト（豊福弥生原図）

- 6 註5と同じ
7 註3に所収
8 豊前市教育委員会「県営箇場整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告－Ⅲ－」（豊前市文化財調査報告書第7集）1991
9 築城町教育委員会「城井谷I」（築城町文化財調査報告書 第2集）1992
10 犀川町教育委員会「城井遺跡群」（犀川町文化財調査報告書 第3集）1992
11 行橋市教育委員会が1990年に調査した。現在確認できているのは3点であり、うち1点は須恵質である。
小川秀樹氏教示。



Photo. 22 広幡遺跡の石垣

[特論 1]

宇都宮氏について

福岡県教育庁文化課 磯村 幸勇

1. 宇都宮氏について

宇都宮氏については、恵良宏氏論文「豊前国における東国御家人宇都宮氏について」（『九州史学』24号、1963. 7）及び『築上郡志』（築上郡教育支会刊、明治45年）に詳しいが、その概要は次のとおりである。

平安中期開白右大臣となった藤原道兼（藤原道長の兄）が宇都宮祖とされ、道兼の曾孫宗圓（石山寺座主）が前九年の役の時、反乱の中心人物であった安倍頼時の調伏祈祷のため下野国に下り、その後反乱が平定されたため下野國宇都宮座主に迎えられた。この頃より下野国との関係が生じ、宇都宮頼家は後々宇都宮検校及び日光山の別当職を兼ねていている。

源頼朝の挙兵後、宇都宮氏は頼朝に属し、以後有力御家人として活躍し、豊前国宇都宮氏の祖となった信房も御家人としての活躍により、文治元年(1185)平家没官領を与えられた。それは、平氏方の有力武将であり、平家全盛時代に北部九州に勢力を張っていた大蔵一族である板井種遠の所領であった。板井氏は、豊前国仲津郡城井郷、築城郡伝法寺庄や豊前国衛田所、税所職を有しており、信房は、種遠の旧領をそのまま与えられたのである。信房は、その後も南九州の平家残党追討に功があり、豊前国伊方庄や日向都於院などの地頭職を得ている。こうして信房の子孫は、豊前の地に土着し、庶子は多く豊前国内に勢力をはるようになる。その一族は多く『太宰管内志』、『宇都宮系図』等に記載されているとおりである。宇都宮氏の本拠地は、板井氏と同様に城井郷であり、そのため城井氏とも称するようになるのである。なお、宇都宮氏の本拠地は、その後築城郡に移され、ここも城井谷と称されるようになる。この地は伝法寺庄内であったと思われ、仲津郡の紀伊谷より広く奥が深い場所であり、本庄城を本城として勢力を張ったのである。宇都宮氏は、4代目の通房（道房）の代には宇佐郡佐田庄の地頭職を得、筑後國守護職にも補任せられたりしており、子の頼房と共に鎮西宇都宮氏の勢力を最も伸ばした時である。

このようにして、宇都宮氏は豊前国一帯にその勢力を及ぼし、子孫は国内各所に土着し、山田氏・中間氏・成垣氏・西郷氏・如法寺氏・佐田氏・野仲氏・友枝氏等を称するようになるのである。

この鎮西宇都宮氏は、南北朝期以降も活躍し戦国期までその勢力を有したが、豊臣秀吉の九

州統一後、領地を失ない、かつ黒田氏の謀略により、鎮房・朝房親子が殺されることは、よく知られているところである。

なお、豊前宇都宮氏についての詳細な解説は、小川武志著『豊前宇都宮興亡史』(1988刊)に記載されている。

2. 宇都宮系図について

宇都宮系図については

- (1)『姓氏家系大辞典』宇都宮の項、豊後の宇都宮氏
- (2)『太宰管内志』豊前之六、築城郡の項
- (3)『豊前志』六之卷築城郡、茅切山城趾の項
- (4)『尊卑分脈』

に所収されており、その他に県文化会館(現県立図書館)の古文書調査の中で確認された『佐藤文書』の「宇都宮系図」がある。

このうち、「太宰管内志」と『佐藤文書』所収の宇都宮系図は、資料編記載のとおりである。特に『佐藤文書』所収の宇都宮系図は、鎮房・朝房親子の宇都宮本家滅亡後、朝房の孫の信隆が家再興と代々の記録を後世に残さんがために作成したものらしく、各時代の記録はかなり詳細にかかれている。「太宰管内志」所収の系図は、基本的には『佐藤文書』のものと同一であり、途中若干の差異もみられる。

この『佐藤文書』の系図は、前述のように詳細に記載されており、この系図の内容を見れば豊前宇都宮氏の本家の動向及び一族、家臣のあり方がよくわかる。

3. 宇都宮氏と広幡城

広幡城については、後述の松下辰章氏の論じてあるとおりであるので特にここでは書かない。ここでは『太宰管内志』所収の「城井闘争記」に「鎮房家臣瓜田・春永両人水原村広幡城に在し」としている点について若干考察したい。

宇都宮家の一族郎党は、かなりの数となるのであろうが、一応一つの城の守り手(城代)ともなればかなりの重臣と考えて良いと思われる。

『太宰管内志』豊前之六、紀井家の項には「城井家記」所収の一門の士が記載されている。それを列記すると次のとおりである。

上毛郡山田城代山田右近

中津西郷ノ城代西郷刑部

馬岳城代長野三郎左衛門

角田尾城代賀来孫兵衛

上毛郡廣津ノ城代廣津角兵衛
川底ノ城代川底弥三郎
下毛郡津田城代城井五郎
日吉崎ノ城代原田伊豫
宇佐ノ立山城代真賀四六郎
宇佐龍王ノ城代城井三郎兵衛
伝法寺ノ城代伝法寺兵部
神楽城代白石加兵衛
田川郡岩石ノ城代佐々木雅栄
九十谷城代九十谷玄蕃
香春城代高橋九郎
海老野城代遠山孫六・末松加賀
上毛郡日野瀬定番渡辺右京
求菩提山定番塙田内記
友枝光明寺ノ城代友枝忠兵衛
壹戸城代壹戸與平

以上18ヶ所の城代と2ヶ所の定番が記載されている。また前述の『佐藤文書』所収の「宇都宮系図」の長甫の項には、自分は出陣せずに「城代十九ヶ所ヨリ替々為将出陣ス」とあり、19ヶ所の城に城代をおいていたともとれる。そうすると上記の18ヶ所にあと1ヶ所追加した位のものであり、この広轍城の守り手の将は、出陣の際に将となるべき一門の士ではなく、家臣團の一員であったものと思われる。

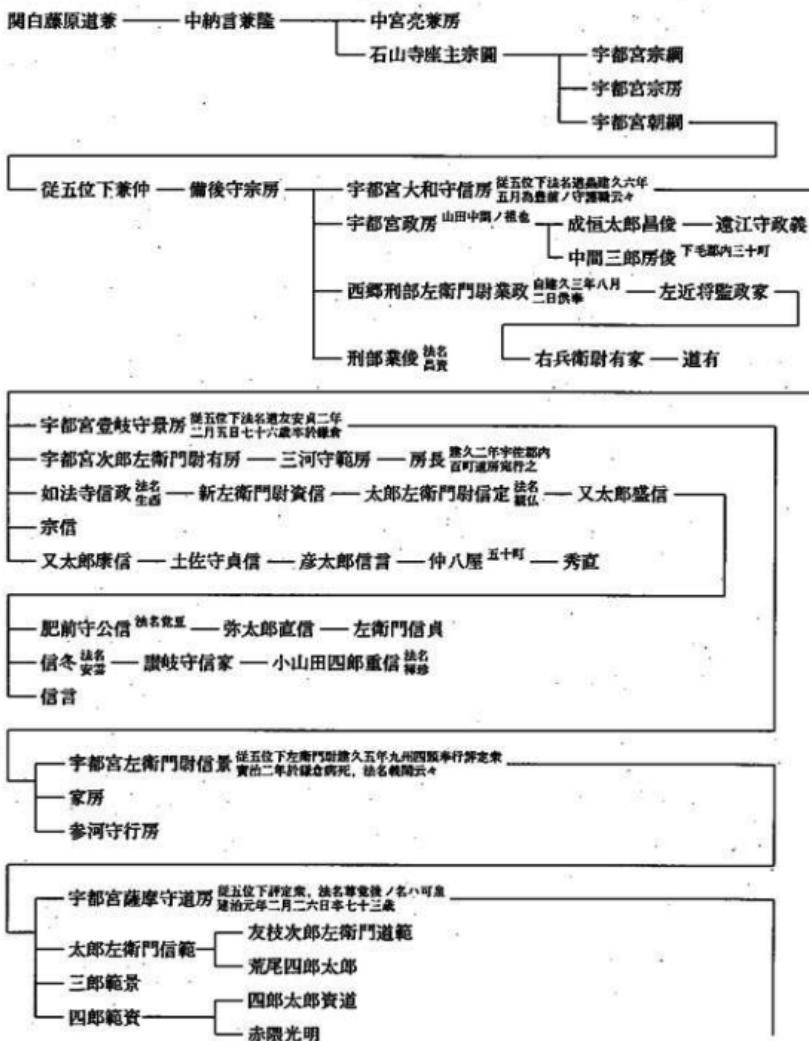
また、「太宰管内志」には、続けて『城井闘争記』の宇都宮家臣団を載せているが、この中にも瓜田・春永の名はない。系図中にも家臣の名として記載されていない。そのことで宇都宮氏にとっての広轍城の位置付けを考察するまで至れるかは疑問であるが、一つの考え方を出せるかも知れない。

4. おわりに

以上、宇都宮氏について若干記載して来たが、宇都宮一族を含めた豊前宇都宮氏の全体像をつかむのは、まだまだこれからとの課題であり、今回は、宇都宮系図を資料として提出することにより、宇都宮氏理解の一助になればと考えた次第である。

なお、宇都宮氏及び系図については、『如法寺』（豊前市教育委員会、1983、豊前市文化財調査報告書第4集）II-3 如法寺関係資料で記したことが多く題材にしたことを追記しておく。

「太宰管内志」豊前之六、築城郡 [紀井宇都宮系図]



宇都宮大和守頼房 従五位下芦定衆、九州四箇奉行之隨一也
法名道曉正徳二年七月崩日本

太郎左衛門盛房

次郎左衛門経房 貞和六年二月属谷軍
任伊豫守

八郎道氏 異言軍

九郎實景 遂原常行四十町

宇都宮常陸介冬綱 正四位下計定衆 法名家開 明治二年三月豈前守通職

貞治五年二月三日於京都卒七十歳云々

冬綱正文五年八月於筑後國那波ノ佐與官軍合戰

薩摩守豊房

能登守仲房

周防守公景

中務少輔師冬

延文五年属官軍於筑後國那波ノ合戰討取少貳忠政・松浦吉種・佐志府監事
於傳中戰死。年三十一年十二月征西將軍良雄為想陵房之忠魂祭奉明神也

(房)

宇都宮常陸介 中務 保友 —— 大和守親綱 豊州駿河合戰の大将 —— 兵庫助重信

少輔

宇都宮常陸介 兵部 家綱 從五位下法名義安母の名和怡者守ノ女也
建武三年京都並中國合戰之時属官軍、人數三千餘騎

應安三年八月九日於京都卒、六十歳

城井出羽守 左馬 助房家

於田川郡合戰以千五百人ノ勢切取

官軍六萬人於戰死于時永(恩永カ)二年

宇都宮常陸介直綱 别名孙三郎 —— 宇都宮出羽守盛綱 從五位下外六箇名藤若丸、永和年中

於筑後國那波討取蒙古ノ大將及切取

唐船家士多被死

宇都宮民部少輔家尚 法名道珍、至徳三年 —— 常陸介俊房 法名 道全 —— 越後守俊明 自應永十三年為

三月二日本六十歳

宇都宮左馬助尚直 法名家保

應永九年十一月十六日本六十九歳

宇都宮播磨守盛直 法名義長

應永十三年五月十二日本

女子 伊豫成綱室

女子 吉田水桂室

宇都宮常陸介秀直 挑五位下法名安永
文明十八年二月五日卒八十六歳

宇都宮常陸介弘亮 挑五位下法名宗仙前云興房
江戸御殿之左侍也
永正六年十二月二日卒八十一歳

女子 岩山庭主 / 室

日向守直重 自文明十八年
嘉正房之後見

宇都宮豊後守正房 在忠助挑五位下法名季承
文明八年四月十日生
母者大内義隆ノ女云今
義種公ノ時ノ左陣也
一生之間除干戰場五十七
資産還不復敵弘治三年七
月五月卒八十歳

女子 岩山成蘭幼室
奥長市與娘也

宇都宮常陸介長甫 永正十四年八月一日生、永禄三年四月上洛城井大蔵御園内供奉云々

小畠貞自身無出十九所ノ城代、交為大将出陣、天正十七年四月廿二日本八十二歳

宇都宮民部少輔鎮房 初称奥所遣国近國自身出陣云々天正十七年四月廿二日
於中瀬川ノ城為黒田長政所挙法名永永云々

埋葬於城中

弥次郎長房 鎮房ノ異母弟也

右近甫房 防原ノ異母弟也

女子 防原ノ異母妹

女子 吉賀江六郎ノ室

女子 仲八屋康右衛門室

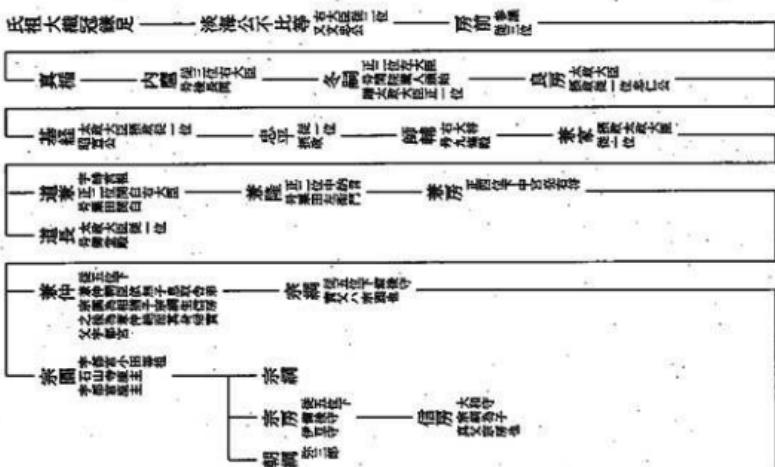
宇都宮弥三郎朝房 天正十五年六月秀吉九州征伐之時朝房為先手云々
同十七年四月廿三日依職下之命於肥後、因爲清政見誅于時十九歳
法名木持、殿下朝鮮征伐之時請取為先手朝房之謀臣或兼依之
清政帰朝之後、慶長元年八月廿依靈為宇都宮明神即肥後國
木ノ葉野ノ社是也

女子

女子

宇都宮治部左衛門朝木 初葬左衛門

宇都宮系図(佐藤文晉)(一部略)



人主七十代後冷泉院御子天喜元年詔八幡太郎義家討安倍貞任高家來任
家承詔族而泉州猪為調伏于貞任家任石山寺主宗園道下野國宇都宮動
御折隸於是遂討平逆黨連王上洛之次因禪願成就 輒怒核畠下野國宇都宮

信房 (宇都宮直五) 上
准達 (真父) 也

九州可被相續事 捨官此殊可致其沙汰之被仰使顯候可令存其之狀所被
仰下候仍執達如件

權中納言親俊

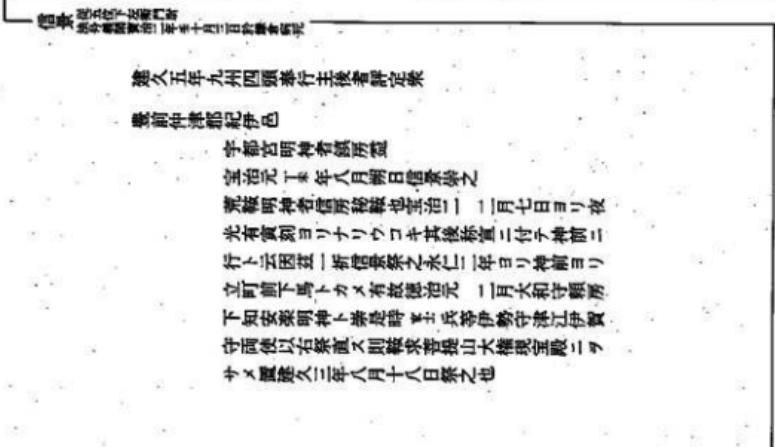
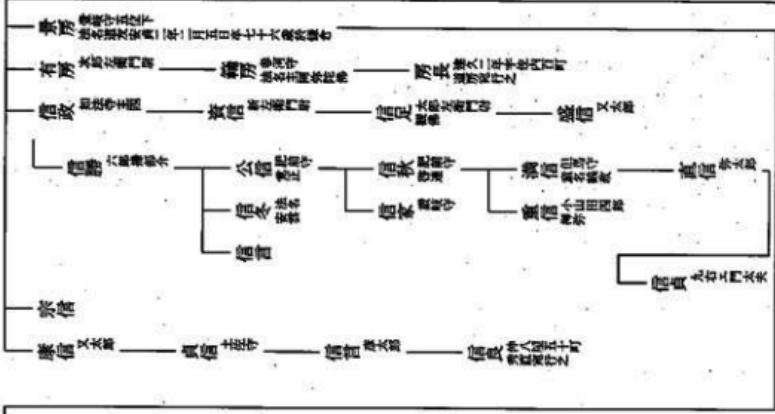
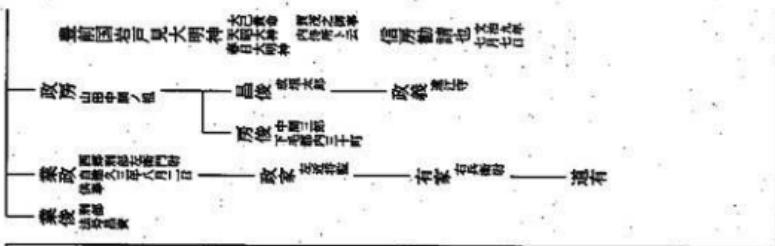
文治元年六月十三日

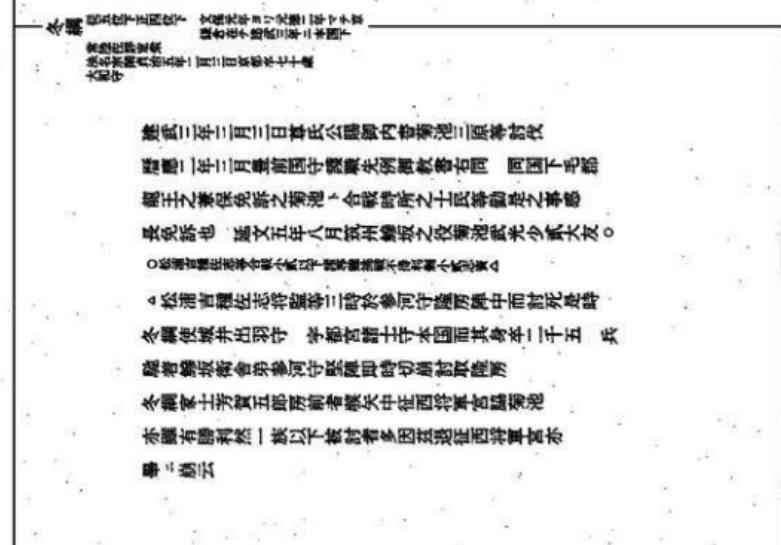
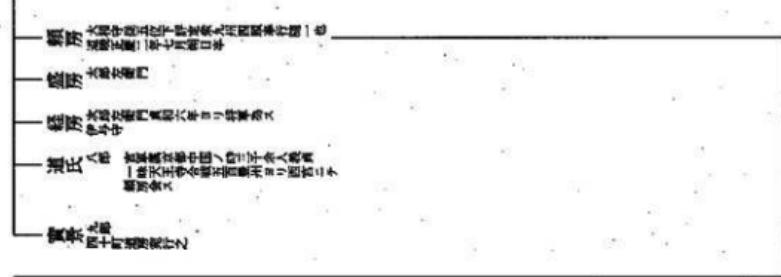
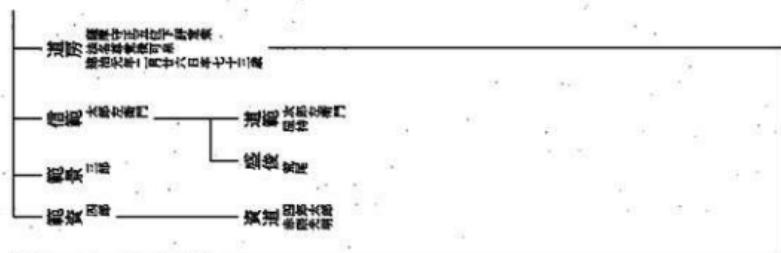
宇都宮大和守殿

文治元年頃朝公鶴岡八幡宮指信房勤供奉 公於拜殿命信房為執行量前國
八郡之内一萬五千餘町也

内三百三十餘町宇佐八幡宮御領同二千九十一町十六人地頭職世々配分之
是時下賜給官然無所沒落之時焼失焉 建久六年五月十六日右大將家天王
守參指之時使信房掌豐州之一職也

紀井三百町之事同國仲津都令井之津江 信房始着岸之時定云此津ヨリ東江
三三百町西江三三百町上十六百町此間百里上云此内ヨリ十六人之地頭職配分
百里之外ヨリ先例地頭六人放御家一百三十六町充配分





銀頭領 左 萩内記 一 朝鮮太尉 鹿内守源子 武備司五郎
 右 鎌田三郎兵衛 二 浅井左近 勝手 口川権守 関根貞
 駒ヶ頭 トカシテニ士子 木村家多安藤国輔
 旗本七百海人村野 旗本七百石出山 家家五百人五郎伊勢入道
 旗本七百石出山野 旗本七百石出山 家家五百人五郎伊勢入道
 旗本七百石出山野 旗本七百石出山 家家五百人五郎伊勢入道

豊房 鷹守
仲房 熊守
公景 鷹守
師冬 中島守
膳房 事守
女 須富

延文年中南朝帝攸下賜總旨豊房出謀威征西將軍率下會海池武光同五年八
 月於筑州鎌坂合戰討取小貳志良松浦吉種住志野藍等於城井常陸佐藤中討
 死年季三十二歲同十二月後征西將軍良忠為豊房忠政娘子都宮明神也

豊房 中島少輔家臣 朝鮮太尉守 重信 佐助
 丈屋 佐助少輔家臣 朝鮮太尉守 重信 佐助
 家康 佐助少輔家臣 朝鮮太尉守 重信 佐助
 佐助少輔家臣 朝鮮太尉守 重信 佐助
 佐助少輔家臣 朝鮮太尉守 重信 佐助
所宮 大内守出羽守

延元元年八月四日勝義貢脚收齊八幡山崎合戰大將是也
 佐助少輔家臣五位下家臣
 佐助少輔家臣三品八月九日文部省六十二
 佐助少輔家臣中京守出羽守重信
 佐助少輔家臣中京守重信

为後征西將軍田川郡音春城村死是時中國之大内介者海池方ベカウサレシ
 テ命ヲ助出羽守者千五百兵以征西將軍六萬之人數ヲ切崩終討死ス永和二
 年也是時番者ア士民依防海池太宰府ニ引取宮郷土民小忠子感所ヲ長免
 訴

豊州音春ノ城ニテ大内介カ出羽守トヤリタクランシテ命ヲ助ル
 出羽守房春ハ海池江相儀メ武光トサシチカヘントス赤尾是時
 有合戰依武光命ヲノカル故房春皆不及力赤尾トサシチカヘ死ス
 此合戰終末チ細川頼之以謹言上不達 上聞體テ不忠ナル事忠ヲ
 不忠トスア云カ

永和ノ合戰大内即此與事ニ付特句義瀬公ヨリ恩コト人細川頼之ト不和故ト云

卷之二十一

水前守正房文出守水前太守日井貞十八歳
水前守正房文出守水前太守日井貞十八歳
正房守正房文出守水前太守日井貞十八歳
正房守正房文出守水前太守日井貞十八歳

家尚 藤公
秀方道五郎三月三十日生 俊房 菊次
秀方道五郎三月三十日生 俊房 菊次
秀方道五郎三月三十日生 俊房 菊次

直義
秀方道五郎三月三十日生

女 妃直義

女 青田少佐

秀直 菊次郎五十年
秀方道五郎三月三十日生 弘光 守安
秀方道五郎三月三十日生 弘光 守安
秀方道五郎三月三十日生 弘光 守安

直重 日向守文郎十八年ヨリ正房歿

正房 文出守行吉文郎 文明八年四月十日生
仲内守女

享禄元年八月九日至 一度合戦正房無不力戦同十七日歿本

猛勢攻米正房接戦斬敵六百九十一人也因茲敵之猛勢既敗北正房遂斬敵不知其數云ア 義權公ノ時限左也

天文二年二月既後國山香郷大半札山合戦之時突厥敵陣有無雙之劍凡一生之間臨于戰場絶五十七箇度速不合一敵畢其後云々

志摩左近守備人數三百六十

江州禪陳 律江守和 平野守与 人間守會 友松子者 青田守七郎 石城源人
通御守正和田四郎 佐野守伊藤 田中守内 田中守介 佐原九郎 四小一
通御守正和田四郎 佐野守伊藤 田中守内 田中守介 佐原九郎 四小一

通御守正和田四郎 佐野守伊藤 田中守内 田中守介 佐原九郎 四小一

封記 通御守 友松子者 青田守七郎 三八間守 二十六人

手負 佐松右又介 佐木久七郎 古澤九郎 口川守内 佐原十郎五人

文津山曾田秀
長雨ト御持り也

長雨 荘院位 壱正十四年八月一日生 小七ツアイ即ち日向守山城代
大法寺保延正十七年四月十二日八十ニ歿 十九子有り皆々秀持近附ス

永禄年中大友宗麟筑後筑前出陣是時合力頼来不同心事

永禄十三年立花ノ城攻モ右同同年龍造邊信ヨリ頼来宗麟ヨリ使日本件難ミヨリ告來也語
ノ敵工請ハ長雨鎮房勇智アリ原田下総守親種ヨリモ同前也

鎮房 沢部少輔 沢國守備大二自身也隸ナリ鎮房
姓毛利家第十五代毛利元泰五十國守

元裕房

永禄元正月廿五日上洛之時豐後沖ニテ俄那萬古ニ候船共不行方鎮房乗船在是時
鎮房太刀ヲ海神手因茲顯風トナル同年十一月備國之時石之中通時海中ヨリウノト
リクワエテ諸所ノ船來則右ノ太刀也故クイト名作者波平長サ一尺九十寸正十二
年秀吉公遠廻文於九州有不輸之旨然鎮房不應常却攻次筑州岩原城失塹勢破弱子槍
有故辭之備自是秀吉公懇請房云々

同十三年日向國土護主持氏者元来大友宗麟部下也頃年無奈歸慶有間隙故士持氏叛
宗麟義端津義久宗麟怒而接駁友教度然義久為士持氏後隨之故宗麟不得勝利 宗麟
請援兵於鎮房鎮房與大友家有内隙之故勤力向之雖以西勢於然鷲津有五ヶ國勢因
高丘子宗麟鎮房之兵士僅一万餘也以軍兵不可當多則得利亦難乎鎮房無奈歸審譲使
宮川三味遣京師宗麟不遺羽子巴馬共訴義久罪遂於秀吉公使仙石櫛兵衛討義久仙石
氏逆謀廢也仙石氏再訴於秀吉公秀吉公大怒而節技出焉既而檢轍若干度義久
屈伏而和讞成矣此後朝所到先鋒禦房右衛不出陣同十五年六月廿一日鷲房依和開
之命而襲秀吉公燒火營居毛利庄岐守領内赤姫堂岐守謂鎮房曰不速有此不寧吾校
時宣院秀吉公則可有敢者也嘗寓居于毛利可也田川郡之内四郷附之鎮房謂彼難忍
我然密傳謀夜潛出入木江城木江城長政既領之使大村氏三和氏居之鎮房急攻之大
村氏三和氏遂去焉鎮房驅遣使繩子所々而僕殺其部族等十人條木江城惡相待敵
之號米糸右馬頭雙元進兵士一万加長政五千之兵都合一万余兵長政引軍之同十一
月中旬欲攻木江城鎮房朝乃擇擇精兵七百人為三隊出陣于岩丸山去城二里許也長政
使大野小辨輝元使藤間田彦六左衛門為大将大野勝間田平數千兵備魚鱗掛腰移刑獄

序掌士畠内記村取大野新兵黨五郎村取勝利田朝房自提突厥可一時而得八百八十六之首級朝房候見若干官而頗勤快氣類房候指二隊之都兵一同舉間聲衝長坂陣之中監長政怒敗北逃鎮房遂北可三里斬敵不知其數長政不得近木江城而遂敗軍值為主從三騎逃過于馬橋其後數度繼文報長政不得利而訴秀吉公熟案曰不如密和議而以密謀擊之可且有鎮房領可長政之會長政以件之欲與鎮房相對為鎮房兼長政其偽謀而不肯之間十七年重慶下命使份到來告之如前皆是鎮房不聽拒之間十七年四月廿日長政招請鎮房於中津城修繕僅既而繫應安五郎聞為鎮房將幹長政率伏兵同鎮房醉而殺之長政況而使伏捨其尾然於格之尾不動長政往之乃埋葬於中津城中鎮房案嗣今雖在焉云々是時鎮房侍臣松田小吉者持鎮房之太刀斜次席脅斬敵十九人而自盡云々

大友宗麟ト數度合戦井賴保ヨリ鎮房幕下中立題文ニ付國中逆

天正六年七月十三日二大友ヨリ邊書ヲ以告米菴今度秋月善彦山底主母有様ノ座廢ア被蒙候未今度西所ヲ可接迫候參近國ト云先陣頼候也鎮房述ニ曰奉事宗麟如承知落山者ハ故神也宇佐大神モ同前也於鎮房裏述トクミスル事ニアラスト述事也因茲傳法守兵部津江伊賀白川藏内城井大膳ヲ以國中之幕下中示聞ス今度定チ大友ヨセクリ事モ可有用心ノタメフレワタヌ然所ニ重テ言弘左近將監ヨリ告采ハ幾重ニモ今度是非共願換入候采ト次第ハ右向亦鎮房返同前因茲吉弘左近將監ヨリ鎮房幕下中密ニ通文傳其子細ニハ鎮房為國中ト追崩ニライテ豈前國中有國人十一人可地頭職ト也

既知幕下中ニハ
長野市 中八幡藤原衛門 道臣元種 中山市 八山本
城主筑紫 有田江六郎 山田安近 西江前綱 神田久延

守矢傳鎮房一味ノ人々ニハ城井頼豪百萬江六郎山右近西江刑部神田人達五人也逆党ニハ中間三郎仲八屋藤左衛門高權元種八田太郎長野三郎此五人大友二一味ス也因茲秋月善山之事ハワキニナリ國中ノ乱トナリ天正六年ヨリ國中逆党却而鎮房邑城ヲ貪事同年十月ヨリ同十年アテ四方戰爭五年也雖然鎮房叶天理將逆党討滅也故織絣モ秋月善山貢事殊甚城井秋月善山ニケ所ア敵ニシテハ備テ九國之乱トナラシ夢思ヒ後悔無限ト沙汰ス也

國中ノ逆党聚組ノ志宣恩伏天命五ヶ年ノ合戰一度モ不得利事鎮房武勇ト云似之同年十一月ヨリ國中太平

同十二年ヨリ秋月種實ノ息文朝房室トナル故大友ヨリ前ノヒツカヘシ和儀便度々也鎮房無用ニ付後ハ長田ア賴和儀トナル依然秋月善山ト無異候事也

長房等三司
總督各官員

用房等司

女 有司 市賈江六郎重

女 有司 伴八郎等女宿門主

朝房等三司

天正十五年二月廿五日秀吉公奉膳于膳前小舍也

朝房御秀吉公

同四月秀吉公使攻破石城丹波少将秀勝為大将秀吉公命御所曰岩石城主在今木稚樂者元領房ノ都下也頃平叛賴房且全還為諸士之汝其可封乎之也朝房奉命突厥而歷十六日而拔城秀吉公被稱譽之又達州征伐之時朝房為太宰府同六月廿一日秀吉公召朝房曰我今豐州逆其領地悉沒收之領房領豐州之北部十二萬石之食糧也今拂汝以伊豫國內十二萬石之地為豊州之營地而移行之乃被感賞朝房之軍功哉……戴之辭謫自我也祖信房受賴朝公之封以來累代領豊州既四百年也今被罷旧領尤所不忍去也願今日領無替則為大帝秀吉公大怒拒其命於是賴房朝房共讐秀吉公勤勦即使毛利壹岐守淺野秀兵衛事惑者印草而賴房曰領八郡之内真字佐都下毛郡上毛郡仲津郡京都郡此六郡黑田助解由幸高以幾矩都田川郡此都毛利壹岐守賴房曾居于赤江縣其後橘經千木江城與黑田長政合戰吳同十七年正月伏秀吉公命而戰長政和膳同三百廿六日秀吉公有密議而使御所黑田吉兵衛遣加藤記後守之許朝房之慶賀安乃使家士遠藤八兵衛報賴房曰今為陛下之使往在肥州恐為殺我之謀我某遷謫於此不如相命而死於此城今死亦死不仕亦死請受嘗醉而死遠藤氏受旨言賴房曰我亦預之過不可往肥州也然以命之難終首向而歸此時賴房之父是甫八十一猶存矣告朝房曰陛下之命其重矣何始不仕哉遂從長甫之旨而與黑田氏共赴肥州以陛下之命苟請改變之隙設懈矣此間清政津兵次新朝房然處朝房勇猛而不果既終變之事尋而朝房歸于館縣經嘗役役士等曰渭政必乘夜襲來乎汝等努力誠莫敵憲情將同廿三日夜刻清政詔諭士團朝房之四方縱令燒船急攻之朝房使寺野英五郎登岸上島燒雨幕中清政甲冑堅然僵僵朝房絕言曰吾命盡於何為殺我之攝朝故他曰黃泉之鬼而罪然而已言畢而火自

順次次第十九歳 秀吉公明鮮征伐之時改政為先鋒其關原房之怨遂成出走者千度也
清政得朝之後慶長元年八月恭依靈而宇都宮大明神即一所四所神是也

御守御用印行署人越前八十人 二十人頭領ヨリカバス
年金百三十ナリ

女子

士若

朝天參拜門

萬永十二年正月十三日奉聞十三事

天正十七年四月廿日黒田長政以偽謀家難鍋房而木江城亦陷矣捕朝房之責是時朝來
在胎内是改室主井上九郎小河傳右衛門講長政令朝房養而密送也其後遷于彦山寶珠
満朝未得免命也大阪之役朝未欲奉屬大神君陛下然不幸有病三年不愈遂故失其榮志

云々

信盛 萬永癸卯四月十日生

道隆

女子

延寶四年夏七月吉日

信隆(花押)

[特論 2]

廣幡城と城井宇都宮氏

篠上郡文化財協議会顧問 松下辰章

廣幡山は、東に岩丸・奈古の谷、西に小山田谷、その間を北に向って延びた山稜の突端にある。西隣にも並立する山塊があり、之は「鳩山」という。北麓は岩丸・小山田の両川の合流する處、岩壁を噛んで渦を巻く景観は見るからに其の昔の要塞を思わせる。歴史に微するに此の地には、古社「廣幡八幡」が鎮座し、又中世には「廣幡城」の備えがあったという。西に並ぶ「鳩山」は其の名の如く「烽台=トビヒ台」の設けられていた處。共に「城井城塞群」の北の備えであった。

一. 廣幡八幡

「越路村日吉神社」の項に「境内社。八幡神社、明治四十年十二月。水原宮悟より遷したる古社廣幡八幡社なり」(篠上郡史)とあり、又「太宰管内志」には「廣幡は比呂波多と訓むべし。元享駿書廿卷に云“我は是第十六ノ王營田天皇廣幡八幡也”とある。其の御名を其ままで祭れる社に負せたるものなり」……又云「篠上郡廣幡八幡は越路村の南、水原村ノ北に有て両村の境なり。比の社の事早くより論ありて今は何れの内とも定め難し」〔註、中世奈古の莊妙見宮の勢力比の社を覆い、社領押領の事あり〕……更に小出氏云。「比の社（越路日吉社）より半町許上に廣幡城のあとあり。今は僅かに二尺許の小祠なれども、昔は神殿二間に三間、廻廊は二間半に五間ありて、又御供殿、古鳥居、大燈籠、御手洗などありて大なる社なりしと……」「今も越路村の内に二月田・九月田・御供田・鳥井田などの名残れり」

二. 廣幡城

○豊前古城記「廣幡城、右は宮原中将と云者切開く」とだけ見える。比の要塞の地をトシ、八幡社を守護として薪を集めたものと推する。宮原中将なる武将については分明を欠くが、恐らく南北朝対立時代（南朝・正平年間、北朝・貞和年間1340年の頃）南朝宮方勢として、豊前に下向した新田義基（馬ヶ岳）世良田貞義=代々大膳太夫を称す（畠）等に組した部将ならん……とされている。

○時代が降り應永年間（1390～）南朝北朝の合一は成ったが、世情相変わらず騒然。城井谷に盤居した宇都宮氏（専ら城井氏と称す）は時勢に應じ、十指に余る城塞群を築いて非常に備

えた。その北の備とされたのが廣幡城と赤幡城である。

應永5年(1398)、世にいう「應永の叛乱」が起った。豊前守護職大内義弘に対する大友氏鑑の「豊前独立戦」である。此の時「城井の党」は或は大内方に、或は大友方に分派加担した。當時大友方に加担した世良田大膳太夫(諱不詳)は大内守護勢に敗れ降伏した。(比の時宮原氏の動静不明)

○弘治2年(1556)、豊後大友義鎮(宗麟)は、内乱によって滅亡した大内氏に代り豊前を征服せんとして侵攻してきた。豊前の守将抗し得ず、その軍門に降った。

※ 郷党に残る傳承に依ればその時「切支丹大名宗麟の為比の地の社寺悉く破却された……と

※ 其の後世良田氏の名は地方史から消えている。

※ 前掲「廣幡八幡の項」にある如く、一小祠のみ永く残り、地人比の辺を「八幡堂」と称した。

○平文年中(1532~)城井正房 — 長房は時勢に即応して再び「城井城塞群」を強化した。「天文年中戦出入人數積」の古記録によれば「廣幡城・瓜田謙岐春永・二千七百石・兵數欠」となっている。〔註。二千七百石は勢力下の収穫高と考えられ、他の城塞の石高と兵数を勘案すれば、十四~十五石が兵一人に当る。廣幡城の兵員百八十人か〕

三、豊臣秀吉、九州平定

○天正15年(1587)、春三月から豊臣秀吉の九州平定戦が始まった。前年暮から小倉に駐留した毛利勢は、緒戦として「城井党」の川底城及び宇留津城を攻略した。年明けて羽柴秀長は築城原に「陣構え」をおこない豊後路へと向った。太閤秀吉は京都郡馬ヶ岳城に本陣を進めた。比の時「城井の党」は或は豊後勢に加わり或は本陣秀吉の軍に参じたが、宗家たる城井鎮房の動向は鈍かったという。それは硬骨を以て鳴る彼を想う時背ける。今秀吉が馳向わんとする香春高橋元種も英彦山僧徒も添田巌石城も永年に亘る一味ではないか。特にその向うにあら秋月家は嗣子朝房の室籠子の実家である。之は単なる優柔不断を以て待する事は出来ない。

それはさて置き太閤秀吉の勢は疾風の如く南下した。皆その威風にひれ伏した。5月薩摩嶋津氏が降伏して征旗は終り7月博多(一説馬闇)で論功行賞。各地の新領主が補任された。企救・田川二郡毛利勝信。他の六郡黒田孝高(嫡子長政)とされ、「城井の党」は所領を悉く失い、四百年間に亘る支配者は消された。

〔註。陰徳太平記には「城井氏は上筑後に於て二百町を賜わる」とあり、城井闘争記等には「四国今治に於て十二万石を賜わる」とある。それに対しても鎮房「御朱印返上・再考を願上……」となっている。

四、城井谷合戦

- 一旦は田川郡赤の郷に隠棲して「追っての御沙汰」を待った城井鎮房及一族も、十月一日遂に意を決して故城に帰り、黒田氏が置いていた城将を追うて挙兵した。これは黒田氏としてはかねて期した事でもあり、黒田長政は「城井討伐」に乗り出した。折柄同勢していた毛利氏の部将勝間田彦六左衛門【陰徳太平記には内藤庄左衛門】の援を請い総勢三千騎城井谷に向かって攻撃した。城井谷を攻めるに三路がある。(一)は城井谷を正面から攻める方法で、それには難險といわれ、過去何度か攻囲軍が苦闘した轍を踏まねばならぬ。(二)は犀川谷・伊良原谷を制圧し、途中から東へ越えて城井谷に踏み込む戦略。(三)は岩丸谷を押して行き、途中から西へ駆け、小山田谷の谷詰の辺を通りて櫻原に突出する計。黒田長政は第三の路をとった。
- 此の攻め方では先ず「廣幡城」を陥さねばならない。廣幡城は正面たる南と東からは攻め難い。其處は自然の濠たる岩丸・小山田川があり、急峻なる堅濠も設けられている。黒田方は西隣に並立する「鳴山城」を攻めとり広幡の背後に出て方策を樹てた。「鳴山」の西麓に今も其の名の残る「コベン坂」がある。先陣を承った大野小弁正重が攻め立てた処である。「鳴山」を攻略した黒田勢は広幡城を「袋の鼠」にした。
- 此の事態に至って城将爪田春永は降伏した。長政は「降」を容れて彼の手の者に「道案内」を命じた。南へ続く尾根道は割合坦々として「馬道」が続く。本隊は奈古・岩丸の谷を行く。行くこと二十数町、「中園」辺から右脚へ山に登る。之もかねてから城井勢が設けた「騎馬道」である。山尾根伝いの道は行く程に狭まって、やがて右手に小山田谷を見下し、左手はこれも又岩丸谷を見下す処に出る。土地の人がいう「白岩道」又は「馬の背越」である。この道は約半里で櫻原の「黒岩越」いわゆる「城井谷の腹部」に出る……筈であるが……。
- 果然「馬の背越」に城井勢は伏せていた。城井闘争記によれば「……伏勢様々静まり返りて音もせず。敵何心なく打過ぐる時、伏せたる勢鉄砲の者、さっと懸出で散々に打放つ。敵思ひも寄らぬ事なれば進退に迷ひたよう処に後の武者鎌波をどっと作りかけ会釈もなく馳落す。寄手さわぎ引かんとすれば後に多勢満々たり。進まんとして打かられ、立返らんとして途に迷い山より下にまくり落され、水田の深き谷底に人々雪崩を築いて落ち重なれば、敵に逢うて討死する者は少しと雖も大刀長刀に貫かれ死する者數を知らず……」と。先手の將大野小弁正重は黒田長政の身代りたらんとして「われこそ黒田長政なり」と名乗って戦ったが、あえなく塩田内記に打取られ、二番手の將勝間田重勝は山尾根を退きつゝ、兵を纏めんとしたが「市道」で急追して来た新貝荒次郎に討たれ、全軍潰滅した。主将長政は「小川谷=オゴ谷」といわれる小谷に迷い込み水田に踏込み、麾下の者の馬を乗り替え乗り替え辛うじて「馬ヶ岳」の城に辿りついた。此の戦を世人「城井谷峰の合戦」といった。

※ 此の戦、黒田勢の首級八百余は「黒岩越」の杣道に懸け連ねられたというが、他日葬め葬られて「首塚」と称した。永年伝承ばかりで所在不明だったが、昭和53年道路工事中、夥だ

しい「石佛」が現れ」首塚には佛様が埋められている」という伝承が実証された。

※ 大野小弁の墓・勝間田重勝の墓、共に戦死した現場というに建っている。〔地名をもコペンド・カツマタと称す。〕

※ 道案内をした爪田春永は其の儘求菩提山にこもり十余年の後水原の地に帰って「長寿庵一現長寿寺」を建立専心向の道に入った。子孫代々其の跡を嗣ぐ。

※ 捕話あり「椿の村（オウコ）は滅多に使うな」と今も云う。此の戦に参じた里人、武器代りに薪等を担う「オウコ」を振って黒田勢を突き落し、拂い落したが故………という。

五、城井氏滅亡

陰徳太平記に云う「同年十一月十二日、太閤の台命により吉川征貞（のち広家）雲伯の兵一万六千騎を率い小倉着。直に發して十六日萱切山〔註、犀川谷を上り横瀬という處より東に擧じて城井谷本庄を眼下に見る個所〕に到着、其の勢一万騎、黒田父子も二千騎を以て陣を布く………。このたびは堂々の陣備えでひた押しに本庄盆地を攻めのぼり「寒田口=二ノ戸」に至って投降を奨める使者を出した。「………先日一戦の科は太閤殿下に御免願い………本領相違なく黒田より相渡す様申すべく候………。」本城大平城では軍議に手間どったが鎮房は之を容れるに決した。………「極月までに領内悉く平らぎぬ。」

○此の止戦条件、城井方は「和議成る」と受取り、黒田方は「他日機を見て………」とした。

※ 城井闘争記等後年編纂された記録書には「此の時鎮房の娘鶴姫と黒田長政の婚姻が定まつた」とあり、黒田家譜には「………弥三郎朝房、鶴姫は共に入質として差出された。」とある。

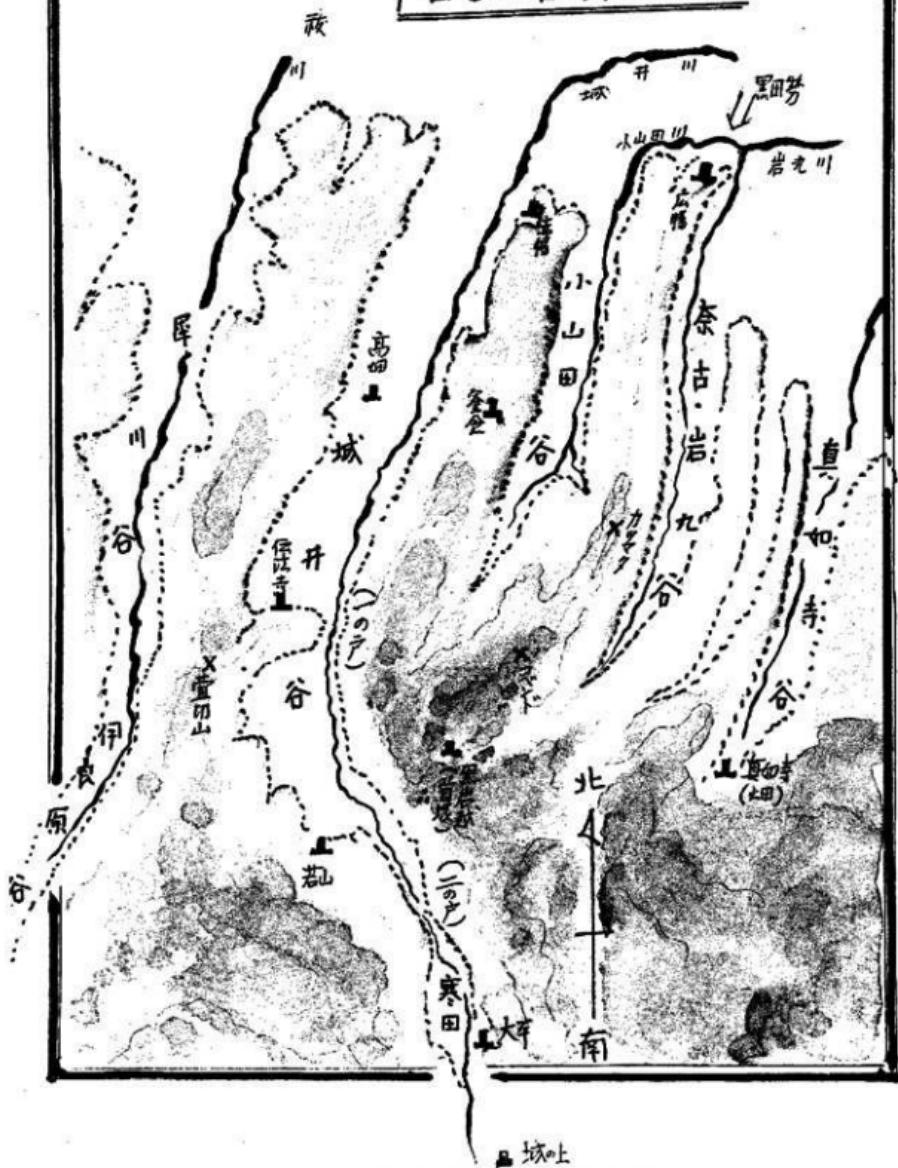
○年明けて天正16年（城井方資料では天正17年）4月、世子朝房には「如水黒田孝高に隨い肥後の国人一揆鎮圧に赴くべし」とあり、当主鎮房には「新城中津城に参向されたい」と招請があった。朝房は部下24騎と共に肥後に向って進発した。一方鎮房は四月二十日意を決して中津城に参向。城中で消えた。遺骸は城門の傍に埋められたという。従者23騎、「供待」に当てられた寺町の「合元寺」で襲われ全員斬死した。

○翌四月二十一日、長政は寸刻を置かず、寒田大平城を襲い、集落一帯に火をかけ焼土と化し、御隠居長甫を斬り、主だった女房共16名を中津に引立てた。不日此の女達は中津河原で磔刑に処せられた。（宇賀神社記・城井谷物語等）

※ この挙極めて迅速なりしか、大平山麓の通称「溝口屋敷」には焼かれし遺構出土すれば背後に聳ゆる山城跡には証跡見当らず。又「詰城=かくれ城」とされた「城の上城址」にも戦いの跡なし。憶うに老幼婦女子も避退の暇なかりしとみゆ。

※ 但し伝承あり。「朝房室龍子は當時懷胎中なりしが老臣池永善右衛門謀り「身代り女房」を立て密かに彦山へ連れたり……と。他日彦山下宝珠山にて出産、遺孤と共に実家秋月氏

城井城塞をめぐる
各谷・各城塞見取図



第 95 図 城井谷をめぐる見取図 (松下辰章原図)

の鎧地日向高鍋に寄りたり………と。

○是より先、命により肥後に赴いた城井朝房は、四月二十三日肥後玉名郡木の葉宿にて、加藤清正の手の者に襲われ麾下24騎と共に横死す。年十九才。同所宇都宮大明神（肥後宇都宮隆房卿をまつる）に合祀せらる。城井寒田における変と同時に、朝房の許に馳せた家士達もありたれど、空しかりしという。

備考

(一)元禄年間、黒田氏に嘱されて「黒田家譜」を編纂した貝原益軒は、豊前を遍歴して「豊前紀行」を書いた。其の中に「城の上城」見聞を詳細に記している。そして其の後そこを戦の舞台と誤認して「城井谷合戦」を「家譜」に載せた。いわゆる「城の上城」は「詰城」であり本城は「大平城」たる事を知らなかつたのである。



Photo. 23 宇都宮鎮房の墓

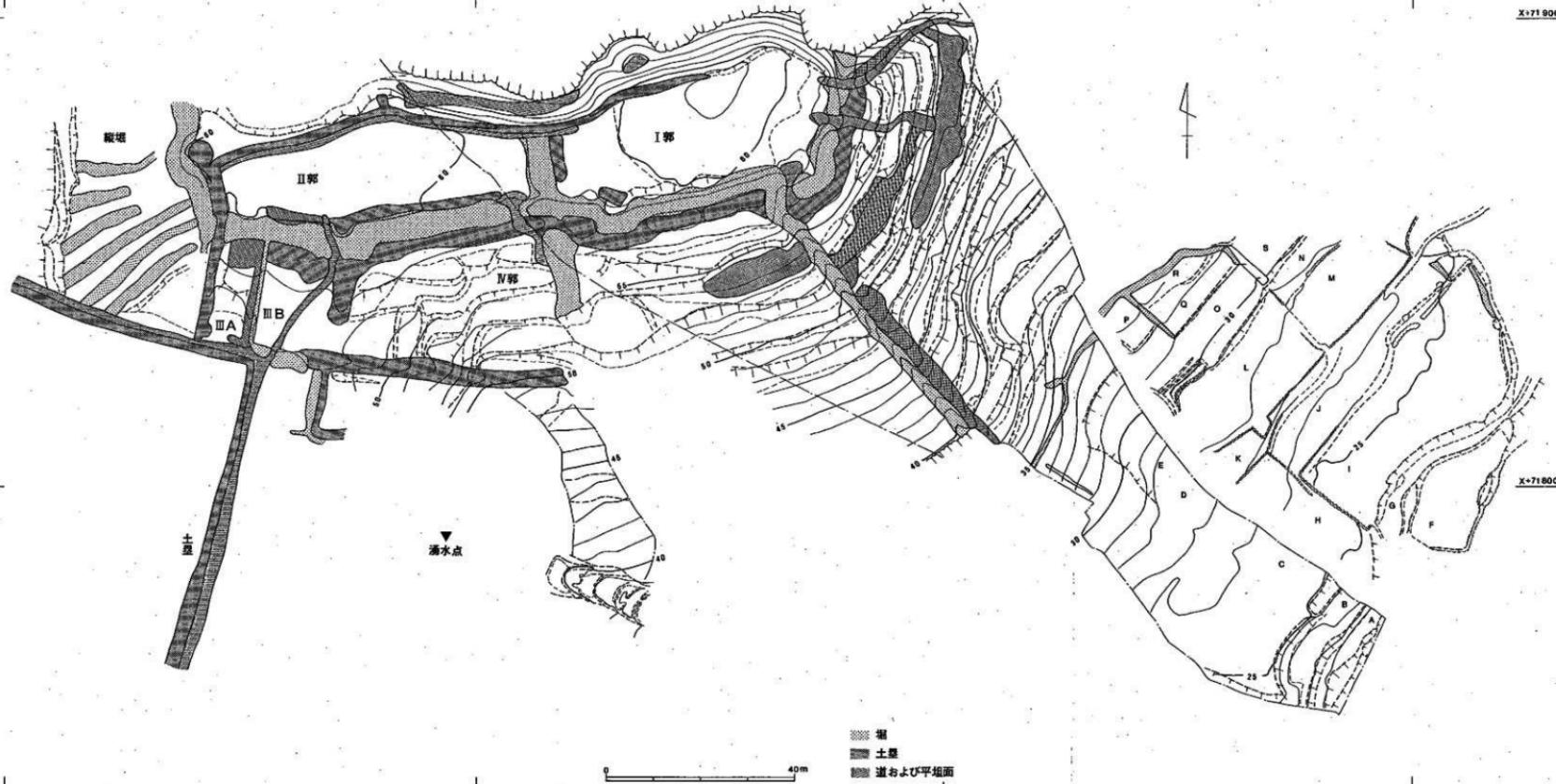
Y+3'800

Y+3'800

Y+3'800

Y+3'800

X+71'800



第 96 図 広報城跡・広報道路地形図 (1/800)

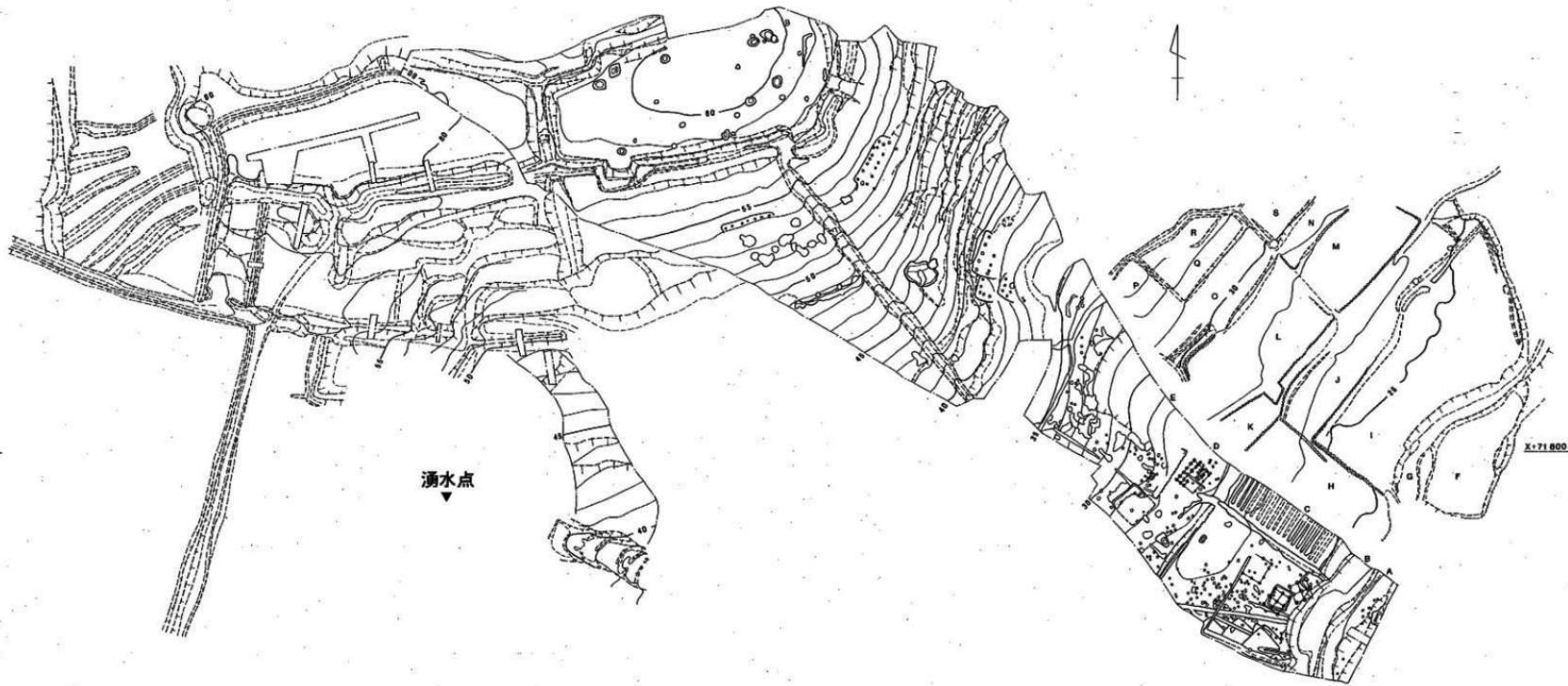
Y-3100

Y-3200

Y-3300

Y-3400

X-71800



第 97 図 広福城路・広福道路全体図 (1/800)

0 40m

図 版

図版 1



広幡城跡周辺航空写真 (国土地理院 KU-72-IX C1-4)

図版2



広輪城跡全景航空写真（東から）



1 広輔城跡航空写真（東南から）



2 広輔城跡航空写真遠景（東南方向から）

図版4



1 広幡城跡航空写真（東から）



2 広幡城跡航空写真遠景（北から）



1 広輔城跡航空写真（東から）



2 広輔城跡航空写真（西から）

図版6



1 広幡城跡遠景
(北から)



2 広幡城跡遠景
(東から)



3 バイパス開通
後の広幡城跡
(東から)



1 広輔城跡
調査前
気球写真
(東南から)



2 広輔城跡調査前Ⅰ郭
部分気球写真
(東から)



3 広輔城跡調査前Ⅱ郭
の堀・土塁気球写真
(東から)

図版8



1 広輔城跡と広輔造跡全景（東南から）



2 広輔城跡全景気球写真（東南から）



1 広幅城跡全景気球写真（東から）



2 広幅城跡工郭気球写真（南から）

図版10



1 広幡城跡 SR1
(東から)



2 広幡城跡 SR3
(西から)



3 広幡城跡 SR4
(南から)



1 広幡城跡 SR2
(東から)



2 広幡城跡 SR2
下石組(東から)



3 広幡城跡 SR2
下石組(西から)

図版12



1 広幡城跡 SR2
下石組(南から)



2 広幡城跡 SR2
下石組(北から)



3 広幡城跡 SR11
下石組(北から)



1 広幡城跡 SR11
(東から)



2 広幡城跡 SR11
下石組(東から)



3 広幡城跡 SR11
下石組(南から)

図版14



1 広幡城跡塹Ⅰ区
とSR11(東から)



2 広幡城跡塹Ⅱ区
とSR10(東から)



3 広幡城跡塹Ⅲ区
とSR9(東から)



図版16



1 広輔城跡堀留区 SZ I (北東から)



2 広輔城跡 SZ I (南西から)



1 広輔城跡Ⅱ区とSZⅡ（東から）



2 広輔城跡SZⅡ（南から）

図版18



1 広輔城跡 SR5 と階段（東から）



2 広輔城跡虎口とSZ I（東北から）



1 広幡城跡虎口とⅠ郭内（南東から）



2 広幡城跡Ⅰ郭内礎石群（東から）



1 広幡城跡 SS1
(東から)



2 広幡城跡 SS4
(北から)



3 広幡城跡 SS5
(北から)



1 広幡城跡 SS2
(南西から)



2 広幡城跡 SS3
(北西から)

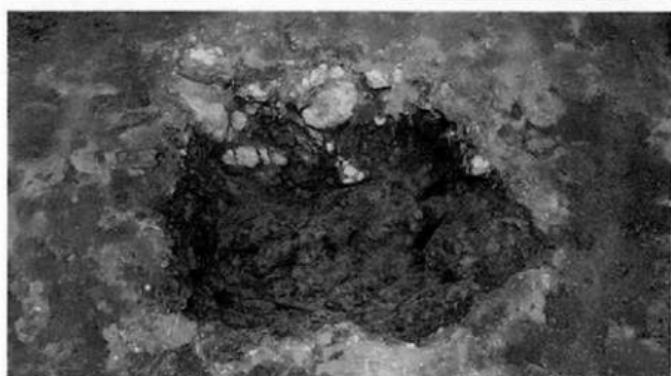


3 広幡城跡 SS9
・10 (西から)

図版22



1 広幡城跡 SK1
(東から)



2 広幡城跡 SK3
(南から)



3 広幡城跡 SK5
(南から)



1 広幡城跡 SK6
(北から)



2 広幡城跡 SK7
(南から)



3 広幡城跡 SK7
(南から)

図版24



1 広輪城跡 SX1 (真上から)



2 広輪城跡 SX1 (北東から)



1 広幡城跡 SX1
(南西から)

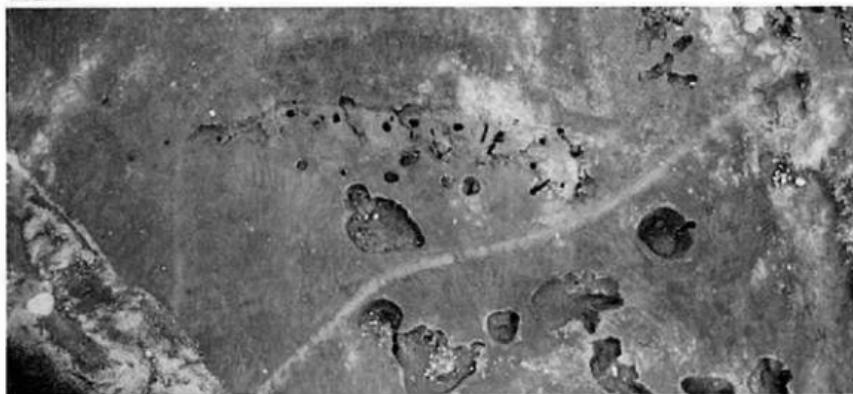


2 広幡城跡 SX1
の礎石(南から)

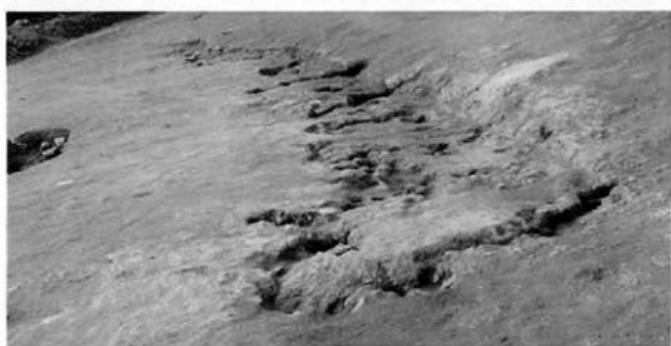


3 広幡城跡 SX1 の
堀溝 (南西から)

図版26



1 広輔城跡 SX8
(真上から)



2 広輔城跡 SX8
(東から)



3 広輔城跡 SX8
(西から)



1 広輔城跡 SX5～7（東から）



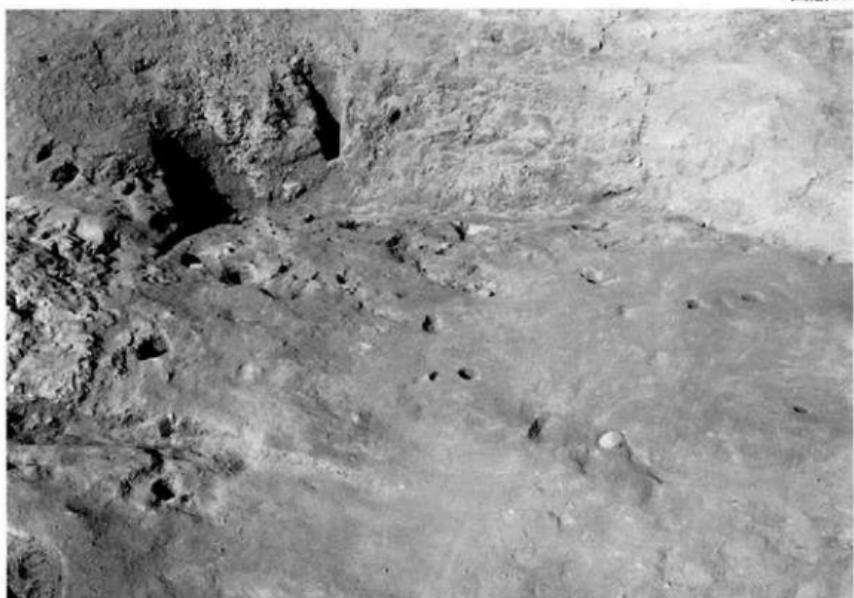
2 広輔城跡 SX5～7（真上から）



1 広幡城跡 SX5～7 (北から)



2 広幡城跡 SX5～7 (東から)



1 広幡城跡 SX 5 (東から)



2 広幡城跡 SX 6・7 (東から)

図版30



1 広幡城跡 SX2-4
(南東から)



2 広幡城跡 SX2
(北から)



3 広幡城跡 SX9
(東から)

1 広幡城遺跡1号
火葬墓検出状態
(南から)



2 広幡城遺跡1号
火葬墓検出状態
(真上から)



3 広幡城遺跡1号火葬墓断面 (南東から)



図版32



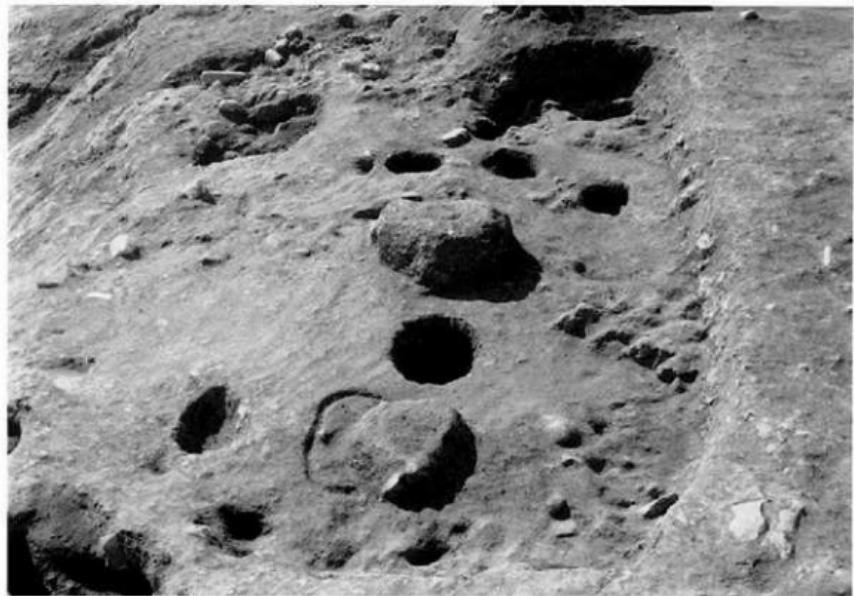
1 広輔城遺跡1・2号住居跡（北東から）



2 広輔城遺跡1・2号住居跡（西から）



1 広幡城遺跡 3号住居跡（南西から）



2 広幡城遺跡 4号住居跡（北から）

図版34



1 広幡城遺跡5号住居跡（西南から）



2 広幡城遺跡2～9号貯藏穴（南から）



1 広幡城遺跡1号貯蔵穴（北から）



2 広幡城遺跡7号貯蔵穴（南から）

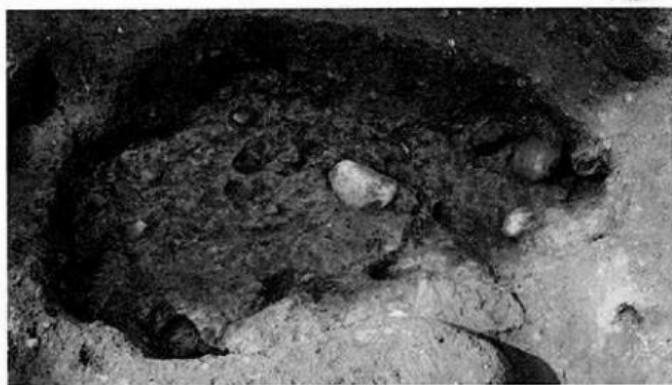
図版36



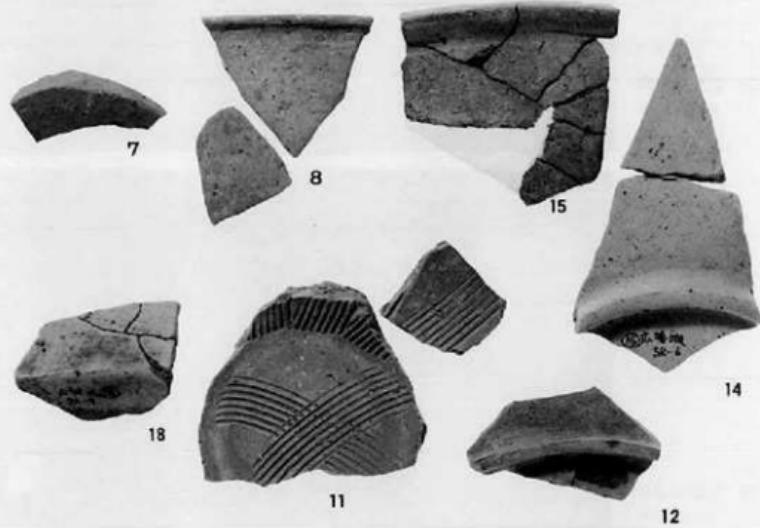
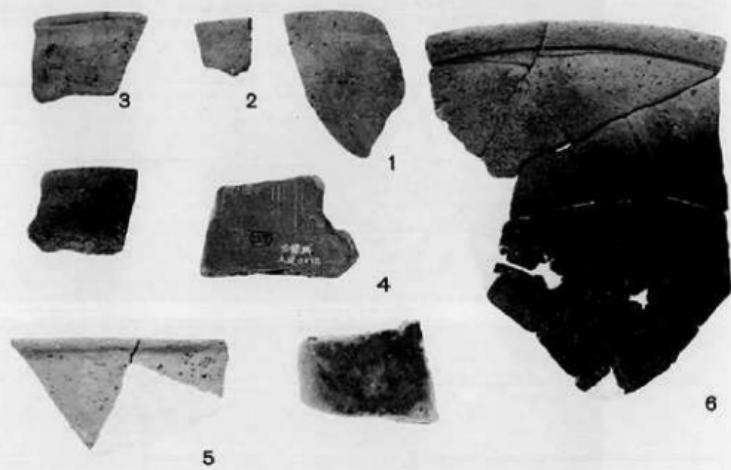
1 広幡城遺跡 2・6号貯藏穴（南から）



2 広幡城遺跡 8号貯藏穴（東から）



图版38





16



9



17



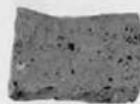
10



19



22



25



24



21

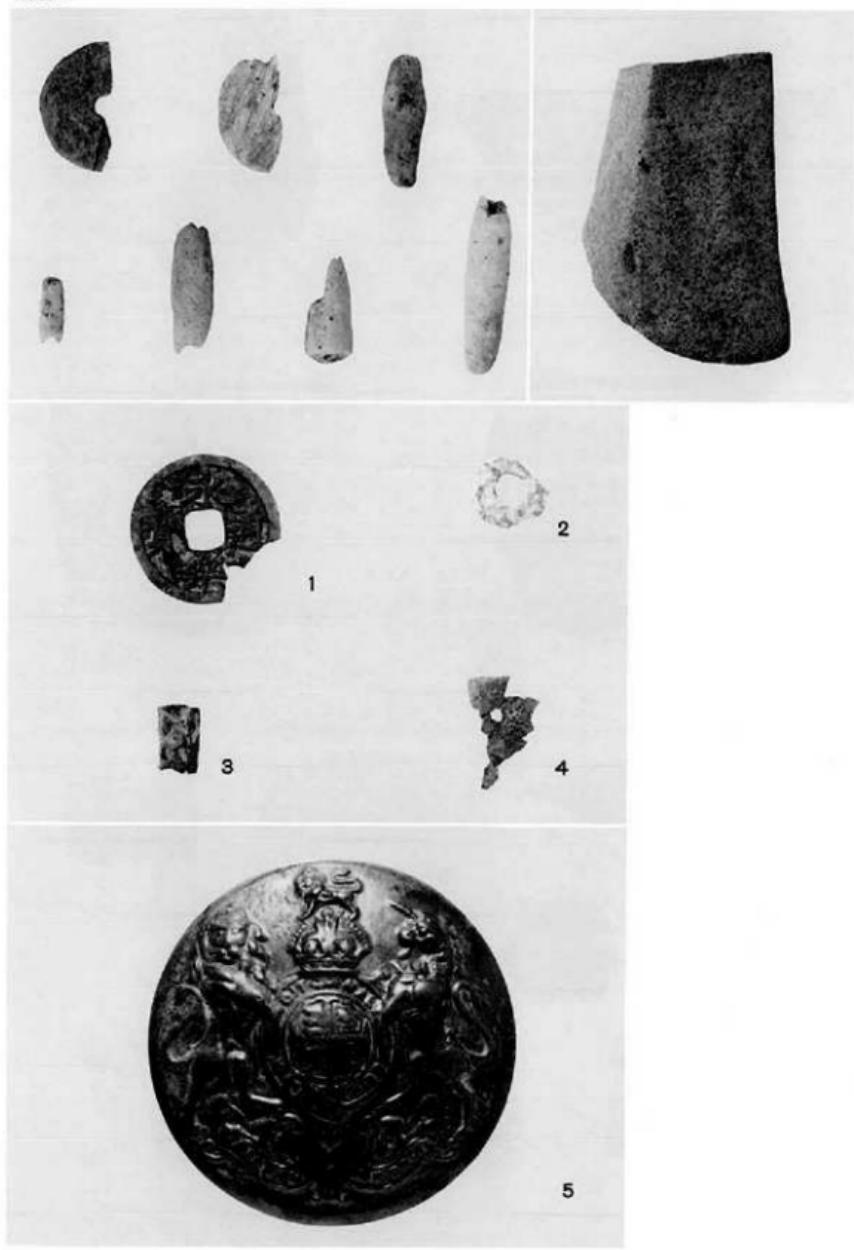


23



20

圖版40



高昌城跡出土土製品・石器・金屬器



1

2

4



1



14



2



17



2-2



SP3-2



2-3



SP3-4



2-6



SP4-2



3-5



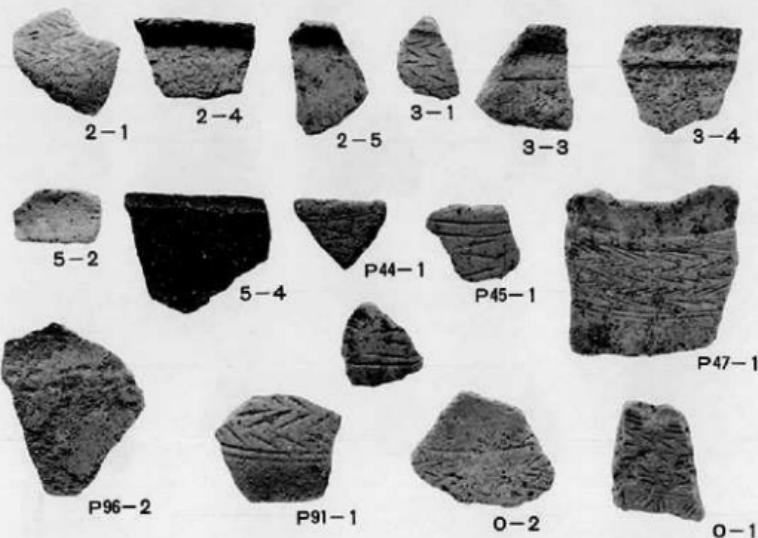
SP7-5



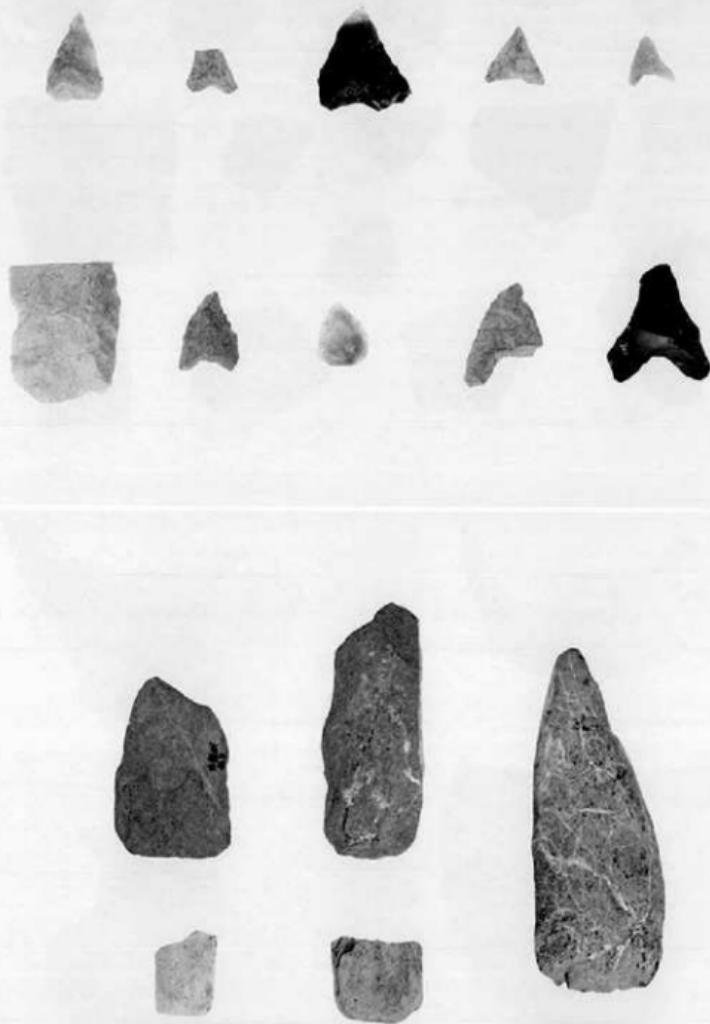
SP2-2



SP7-7



圖版44



上轄城遺跡出土石器



1 広輔遺跡全景（南東から）



2 広輔遺跡全景（北西から）

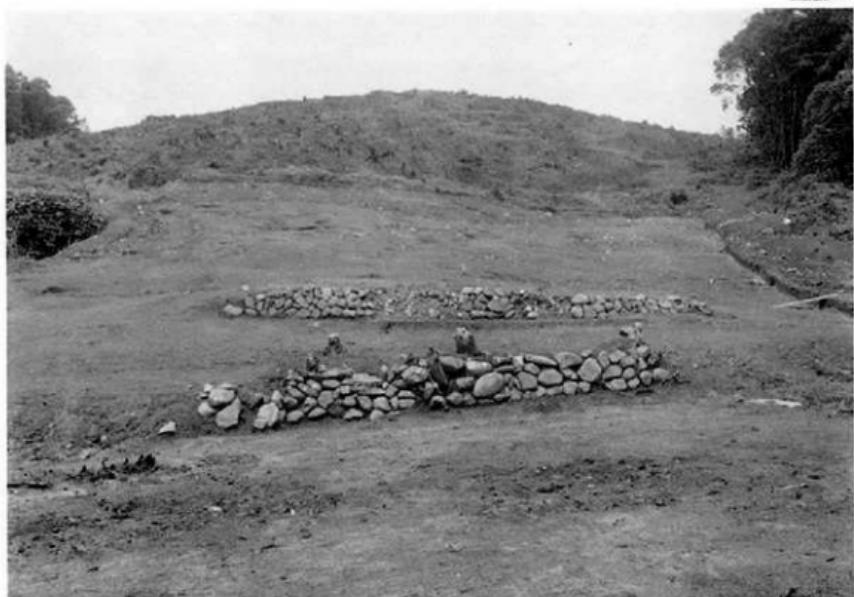
図版46



1 広輔遺跡東半部全景（北西から）



2 広輔遺跡1号建物跡（南東から）



1 広輔遺跡1・2号石垣全景（東南から）



2 広輔遺跡1号石垣
(東南から)



3 広輔遺跡2号石垣
(東から)

図版48



1 広輔遺跡3号石垣（東南から）



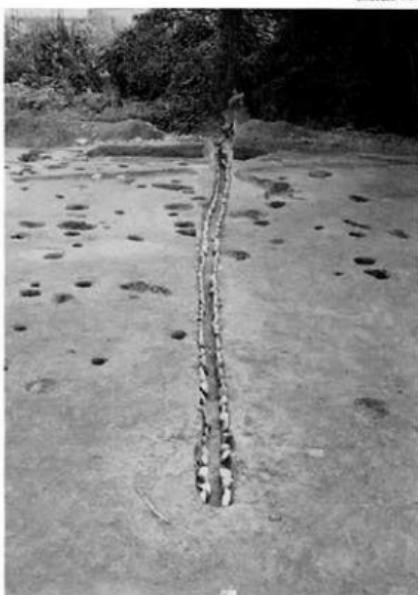
2 広輔遺跡3号石垣と暗渠（南西から）



3 広輔遺跡3号石垣と暗渠（蓋石除去後）
(南西から)



1 広幡造跡暗渠全景（北東から）



2 広幡造跡暗渠全景（蓋石除去後）（北東から）



3 広幡造跡暗渠全景（南西から）



4 広幡造跡暗渠の一部（東北から）



1 広輔遺跡1号土壙（東から）



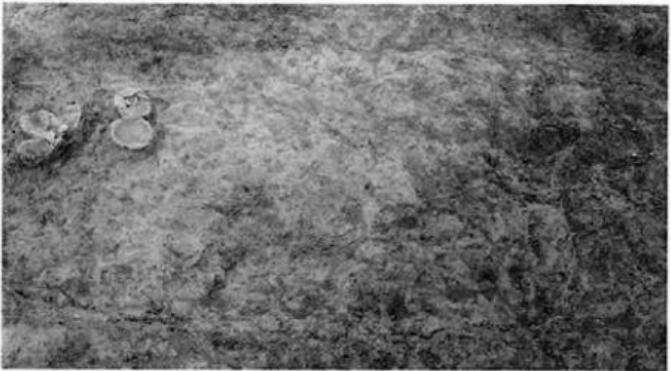
2 広輔遺跡1号土壙（礫石除去後）（東から）



1 広輪道跡
2号墓
(南東から)



2 広輪道跡
1号墓
(東南から)



3 広輪道跡
2号墓
(西から)



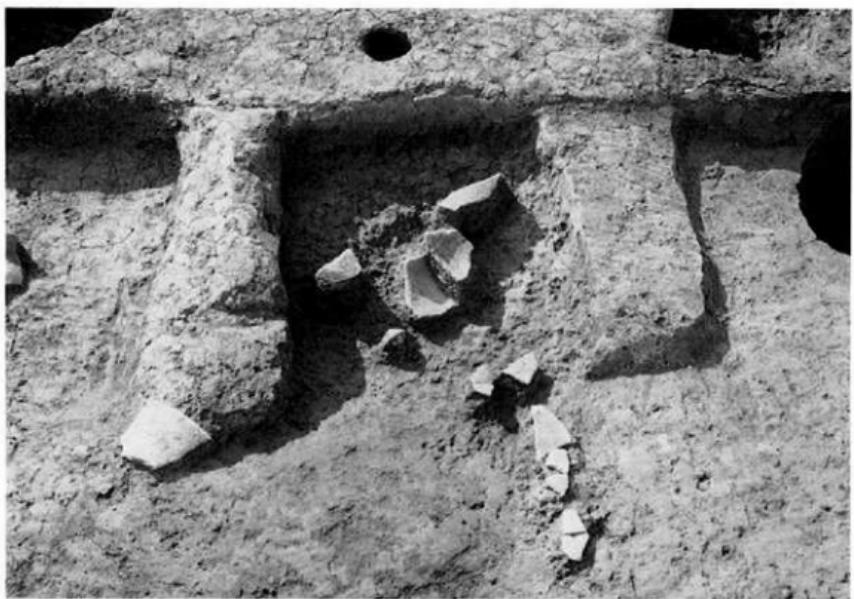
1 広幅遺跡 1号住居跡（南東から）



2 広幅遺跡 3号住居跡（北西から）



1 広輔道路2号住居跡（北東から）



2 広輔道路2号住居跡カマド（東から）



1 広幡遺跡5～10号住居跡（西北から）



2 広幡遺跡7号住居跡（北から）



1 広幡遺跡9号住居跡と3号石垣・暗渠（北東から）



2 広幡遺跡3号建物跡（北西から）

図版56



1 広輔遺跡包含層（SG 2）土層（北東から）



2 広輔遺跡包含層土器出土状態（東から）



表 捐



ST1-2



ST1-3



SW1-4



ST1-6



SD2-1



ST1-7



SD2-2



SG1-20



O-6

圖版58



SK1-1



SK1-2



SK1-7

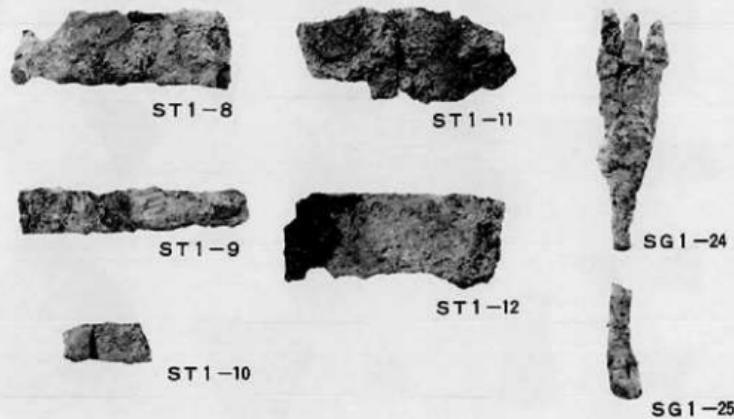
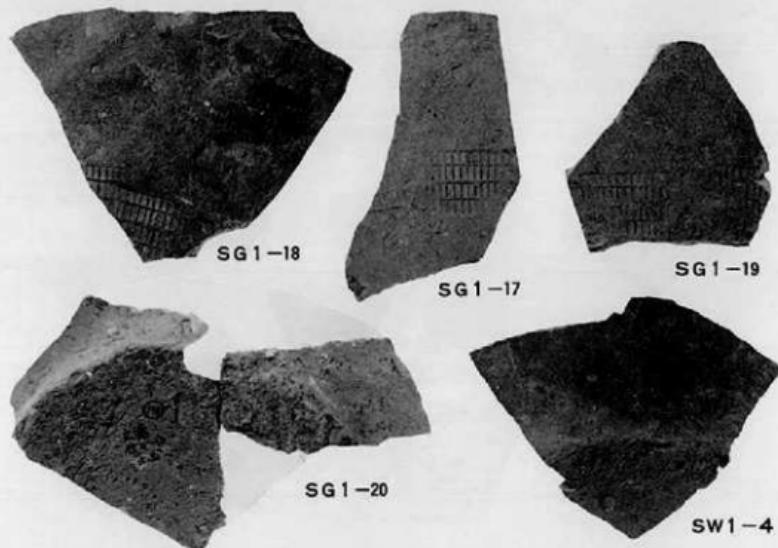


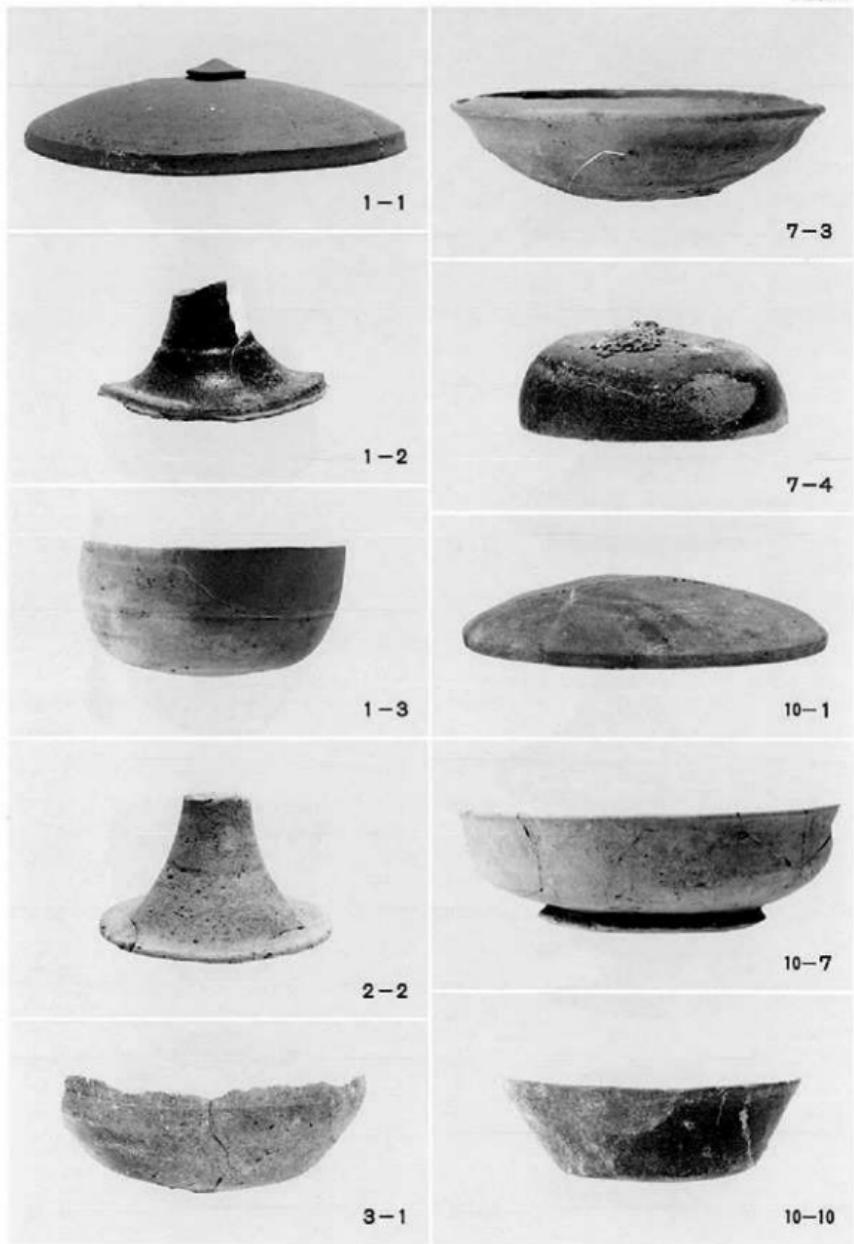
SK1-8





广德造路出土陶磁器





广泰遗址住居跡出土土器

圖版62



10-12



10-26



10-14



10-29



10-15



10-31



10-16



10-19



10-32



SG2-5



SG2-16



SG2-11



SG2-41



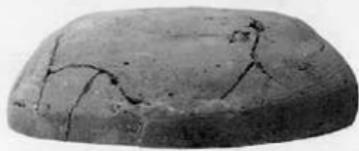
SG2-12



SG2-43



SG2-40



P4



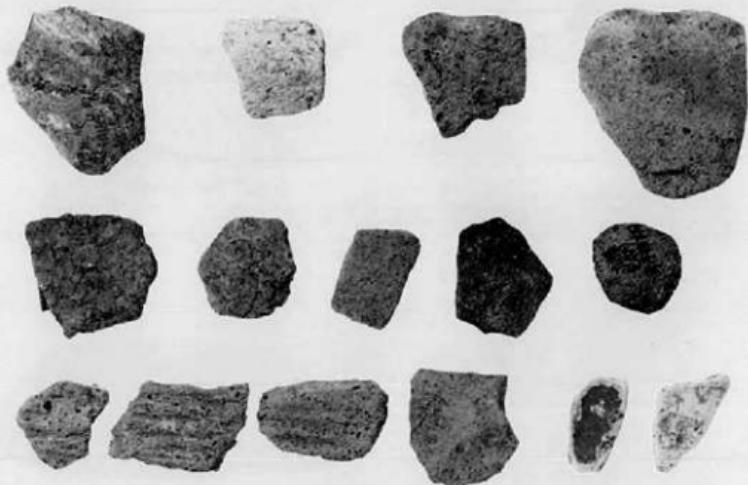
P72

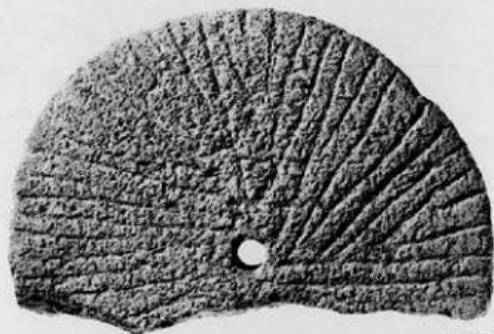


P95



P10





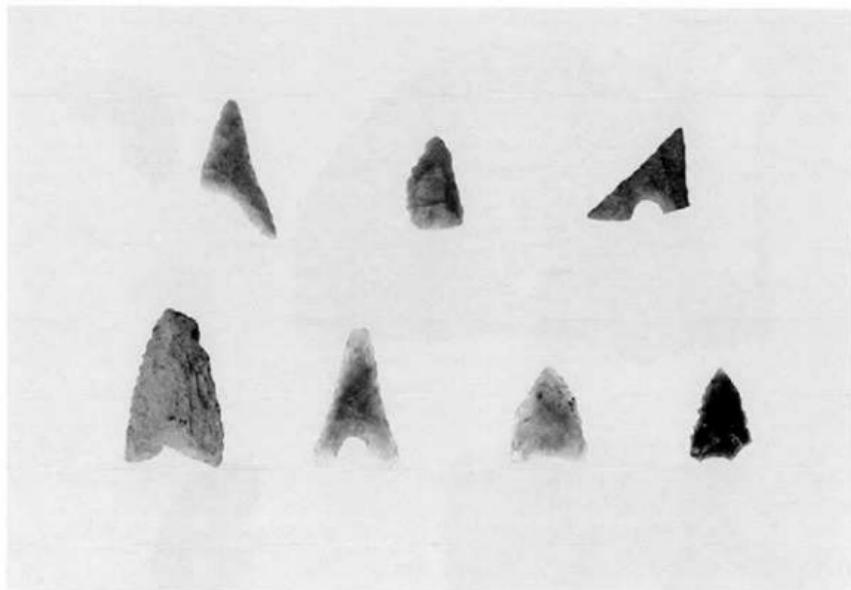
SW3-3



0-1

2-8





高轉遺跡出土石器

付 編

序

椎田町は、まちづくり特別対策事業の広幡城歴史公園整備工事に伴い、県教育委員会の援助を得て埋蔵文化財の発掘調査を1991年(平成3年)5月から実施いたしました。

本遺跡は、昭和63年度に一般国道10号線椎田バイパス建設工事に先だって行われた、広幡城本丸発掘調査に付随するもので、今回の報告はその二の丸、三の丸等の発掘調査結果を取りまとめたものであり、鎌倉時代以降に作られた山城文化を探る資料として役立っていただければ幸いです。

なお、この度の発掘調査にあたり御指導、御援助を賜りました関係者各位、地元関係者の方々に衷心から感謝申し上げます。

平成4年3月31日

椎田町教育委員会

教育長 松尾 安

例　　言

1. 本書は、福岡県椎田町教育委員会が「広幡城歴史公園」の建設に先立って平成3年度に調査した広幡城跡の報告書である。
2. 以前に椎田バイパス建設に伴って調査されたのを1次とし、今回の調査を2次とする。
3. 調査中の写真は伊崎俊秋と緒方泉が撮影し、遺物写真は岡紀久夫が撮影した。
4. 遺構の実測は伊崎と緒方が、遺物実測は伊崎が行った。
5. 造構・遺物の整図等は、豊福弥生・原かよ子・水野美奈・関久江・岡由美子・黒木美幸・塩足里美と伊崎が行った。
6. 本書の執筆・編集は伊崎が行った。

本文目次

I. はじめに.....	1
II. 遺跡の立地と歴史的環境.....	2
III. 調査の内容.....	3
A. 城跡に関する調査.....	3
B. 弥生時代の調査.....	11
C. その他の遺構・遺物.....	15
IV. おわりに.....	17

図版目次

PL. 1 1. 広幡城跡航空写真(東南より)	2. 広幡城跡航空写真遠景(東南方向より)
PL. 2 1. 広幡城跡航空写真(東より)	2. 広幡城跡航空写真(西より)
PL. 3 1. 9 トレンチ(東から)	2. 9 トレンチ(西から)
PL. 4 1. 7 トレンチ(東から)	2. 7 トレンチ(東から)
3. 6 トレンチ(東から)	
PL. 5 1. 8 トレンチ作業中	2. 8 トレンチ(東北から)
3. 5 トレンチ(南から)	
PL. 6 1. 4 トレンチ(西から)	2. 3 トレンチ(西から)
3. IV郭付近(東南から)	
PL. 7 1. 1・2 トレンチ発掘中	2. 2 トレンチ(西から)
3. 1 トレンチ(西から)	
PL. 8 1. 9 トレンチの貯蔵穴発掘中	2. 9 トレンチ貯蔵穴(S P 31・33~35)
PL. 9 1. S P 31	2. S P 33
3. S P 34	
PL. 10 1. 谷水田の現況(北西から)	2. 谷水田の現況(東南から)
PL. 11 1. 谷水田周辺樹木片付け中	2. 谷水田(北東から)
PL. 12 広幡城(2次)出土遺物	

挿図目次

Fig. 1	一般国道10号椎田バイパス周辺地理図 (1/500,000)	3
Fig. 2	豊前中部地方中世山城分布図 (1/200,000)	4
Fig. 3	広幡城跡周辺遺跡分布図 (1/50,000)(折込)	
Fig. 4	広幡城跡周辺地形図 (1/5,000)	5
Fig. 5	広幡城跡II・III郭地形図 (1/800)	7
Fig. 6	広幡城跡（2次）トレンチ土層実測図 (1/80)	9
Fig. 7	広幡城跡（2次）トレンチその他出土土器実測図 (1/4)	10
Fig. 8	広幡城跡（2次）II郭内遺構図 (1/200)	11
Fig. 9	広幡城跡（2次）貯藏穴(S P 31・32)実測図 (1/40)	12
Fig. 10	広幡城跡（2次）貯藏穴(S P 33～36)実測図 (1/40)	13
Fig. 11	広幡城跡（2次）貯藏穴出土土器実測図 (1/4)	14
Fig. 12	広幡城跡（2次）貯藏穴出土石器実測図 (1/3)	14
Fig. 13	広幡城跡（2次）作業風景	15
Fig. 14	広幡城跡（2次）近世谷水田平面図 (1/200)	16
Fig. 15	広幡城跡（2次）弥生時代遺構分布図	18
Fig. 16	広幡城公園計画図(折込)	

I はじめに

昭和55年2月、一般国道10号の交通混雑を解消し、地域の健全な発展に寄与するため椎田道路（10号バイパス）建設の事業許可がおり、平成3年3月、開通の運びとなった。この間、道路用地内の文化財発掘調査には福岡県教育委員会があたり、本町区域においては、石堂中後ヶ谷古墳群、菜切古墳群、頭無古墳群、山崎遺跡、広幡城跡の5ヶ所が造喰検出確認の後発掘調査された。

今回調査された広幡城跡については、昭和63年～平成元年に県教育委員会において調査された続編にあたる。本遺跡は、古くから町内の憩いの場として管理・保存され、史跡としても貴重なものであり、椎田バイパスとして一部消失したことから、椎田町では歴史的な文化遺産を保存し、かつ、豊かな緑との調和のもと、ふれあいとやすらぎ空間の創出を目指し、歴史公園としての整備を計画した。

この計画を達成するには予定地の発掘調査が不可欠であるとの観点から、平成2年（1991）1月22日、椎田町役場において、福岡県教育庁京築事務所の文化財担当と企画担当者・教育委員会担当者が調査方法・期間等について協議した。その結果、国・県の補助金を得たうえで町教育委員会が事業主体となり、京築教育事務所及び地元各位の協力を得て、平成3年度事業として発掘調査を行い、歴史学習の資料としても活用すべく、記録保存することになった。

発掘調査は平成2年5月29日から6月16日までの間に実施した。なお、当地が山頂上であり、現存するかきあげ塙、土壘等の分布が広範にわたるため、公園施設までの進入路（工事用にも使用）についても調査を行い記録保存に努めた。

調査関係者は次のとおりである。

椎田町教育委員会 教育長 松尾 安

社会教育課長 津田 勝喜

社会教育係長 木本 福満（前任）・浜田 俊秀（現）

担当 川崎 道雄（前任）・島田 幸隆（現）

同和・企画課々長 上田 信行

指導係長 加来 篤・田中 哲

福岡県教育庁京築教育事務所

主任技師 伊崎 俊秋

主任技師 繕方 泉

II 遺跡の立地と歴史的環境

広幡城跡の第二次調査で対象となったのは、福岡県築上郡椎田町大字水原679-1, 680-1, 685等である。

ここは、一般国道10号椎田バイパスの路線内において第9地点として、昭和63年（1988）から翌平成元年（1989）にかけて発掘調査を実施した広幡城遺跡・広幡跡の西方に位置し、とくに広幡城跡の郭の続きをあたっている。さきの調査（これを第一次としておく）で、I郭の全てとII郭の一部が対象となって、それらは既に消滅したが、今回の対象地はII郭・III郭の丘陵頂部と、その下方にある小谷の一部ということになる。

遺跡の立地・歴史的環境については、バイパス関係の報告の中で述べたので再説を避けたいが、以下に簡略に触れておくこととした。

1. 立 地 (Fig. 1~4)

広幡城の立地する所は、英彦山・犬ヶ岳等から周防灘に向かって幾つも派生した丘陵の、その一つの先端付近にある。丘陵の東西には岩丸川と小山田川が流れ、この丘陵先端にて合流する。城跡の立地する丘陵頂部は標高約60mであり、周縁の田地面との比高40mを測る。この丘陵先端部は北急南緩の地勢であって、山城の繩張りを考えるとき見逃せない点である。

2. 周辺の遺跡 (Fig. 2・3)

広幡城跡の所在する椎田町や築城町においてはこれまであまり多くの遺跡は知られていなかった。それが、ここ近年の椎田バイパスの建設や開場整備事業に伴っての事前調査というかたちで発掘の行われた遺跡がふえ続けている。

築上郡に限らず京都郡までも視野に入れたうえで、最近の発掘調査で得られた新知見を総合的に見ると、まず縄文後期の遺跡が大きな谷筋ごとに発見されている点が特筆されよう。豊津町節丸西、築城町松丸D、椎田町石町・山崎、豊前市中村石丸等である。次いで弥生期における特定集団墓の検出例が目立ってきたことも注目される。

また、古墳時代中期から奈良時代の頃の集落と製鉄関連遺構の検出例がふえていること、そして輸入陶磁器を持っていた中世期の遺跡も多く見られだしたことなど注意される点である。特に中世の遺跡は豊前地方という地理的特性を考えると、時期ごとにどのようなあり方を示していたかが究明されなければ、文献史料によってのみの歴史叙述の欠を補って余りあることであろう。それがやがて少しずつ達成されてくるものと思われる。

広幡城に関連しての周辺の山城跡はFig. 2に分布を示した。これらの中でその内容が知られているのは殆どないと言ってよく、今後の調査に俟つところが多い。

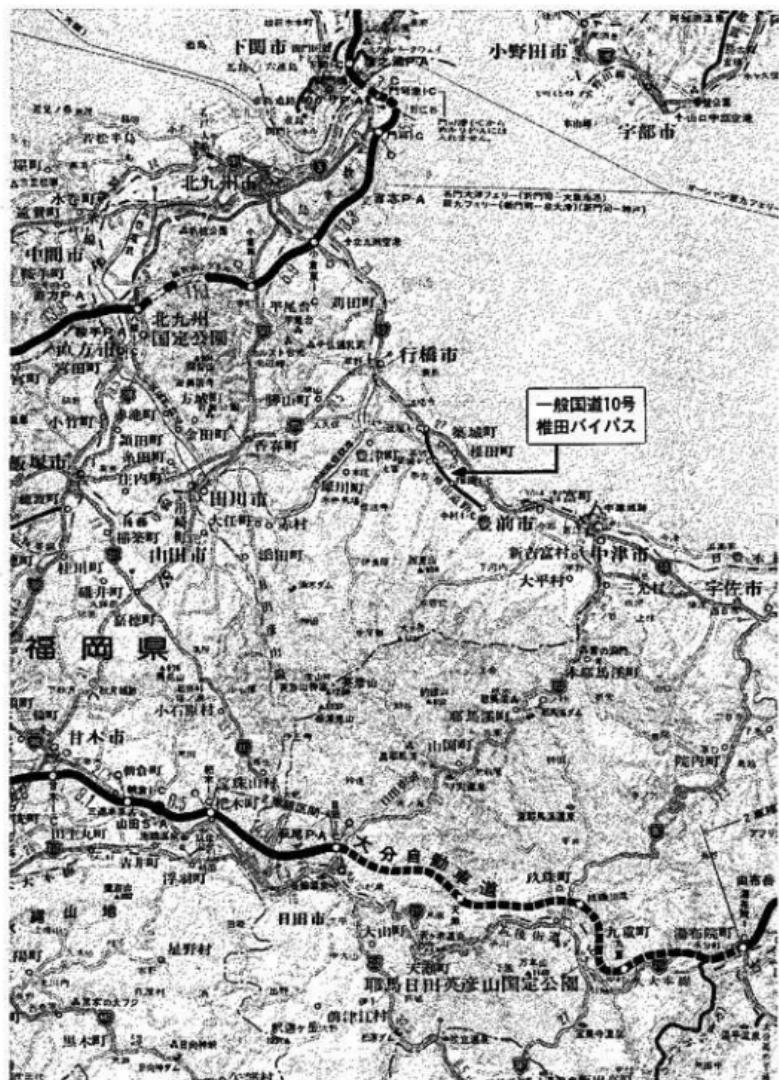


Fig. 1 一般国道10号椎田バイパス周辺地理図 (1/500,000)

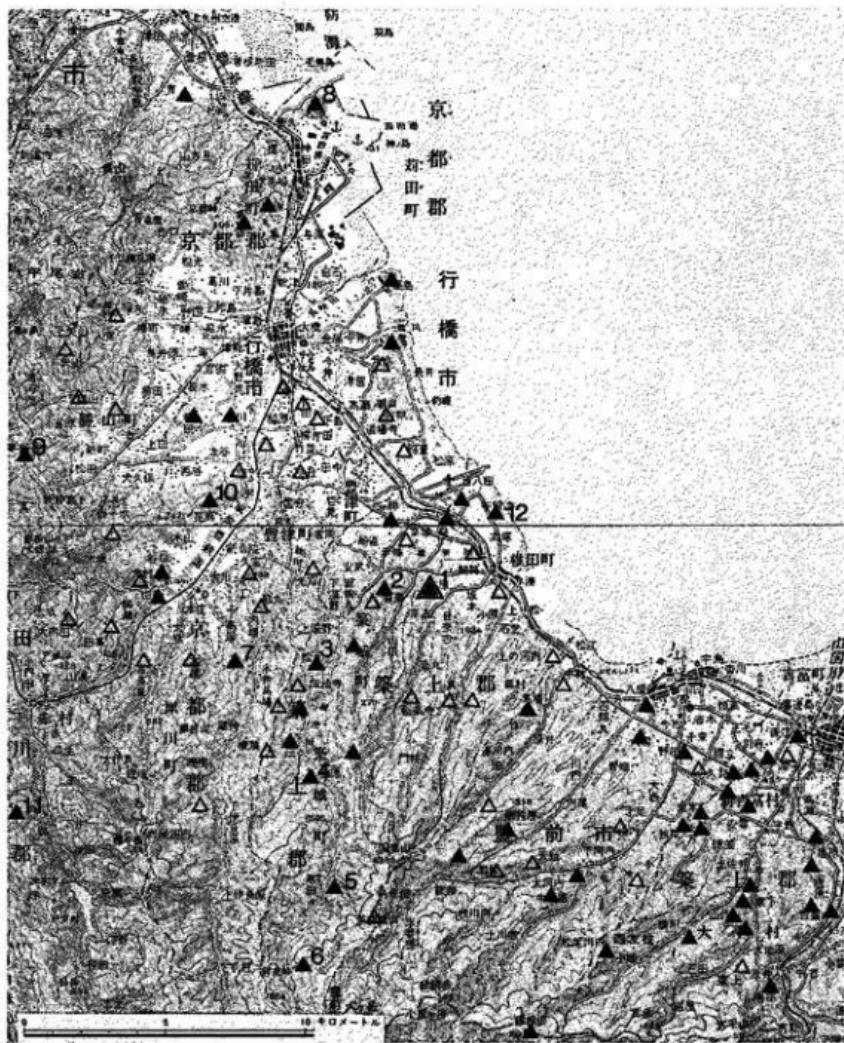


Fig. 2 豊前中部地方中世山城分布図 (1/200,000)

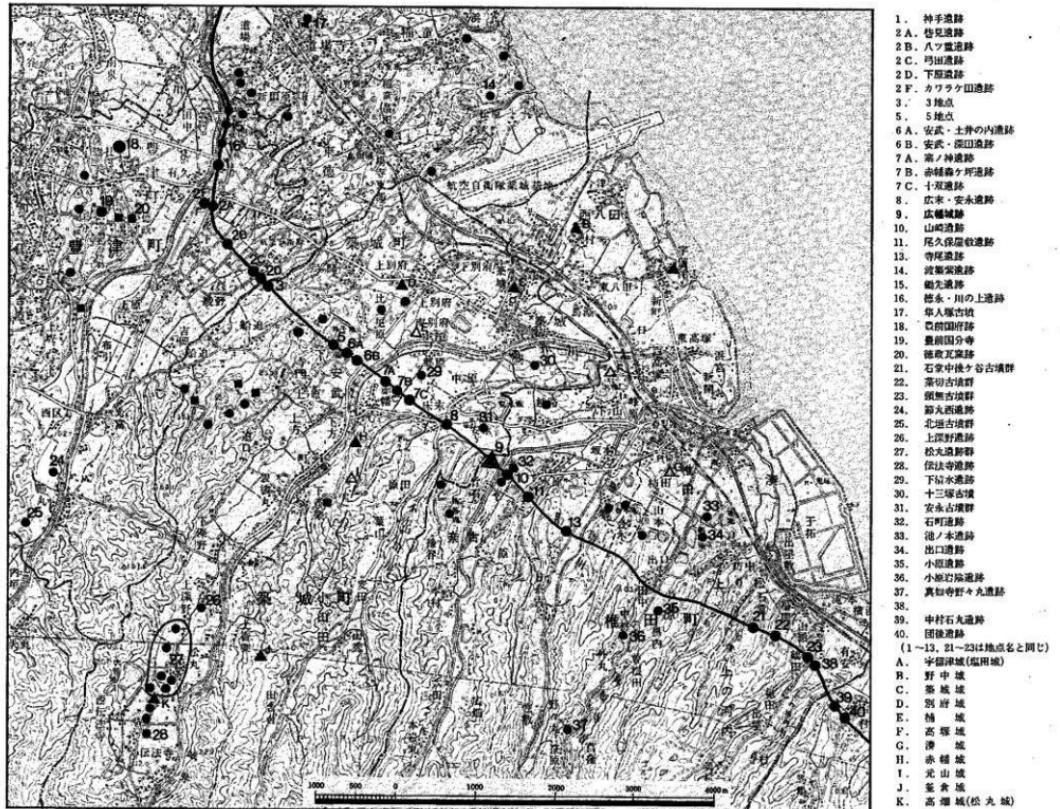


Fig. 3 広城城周辺遺跡分布図 (1/50,000)

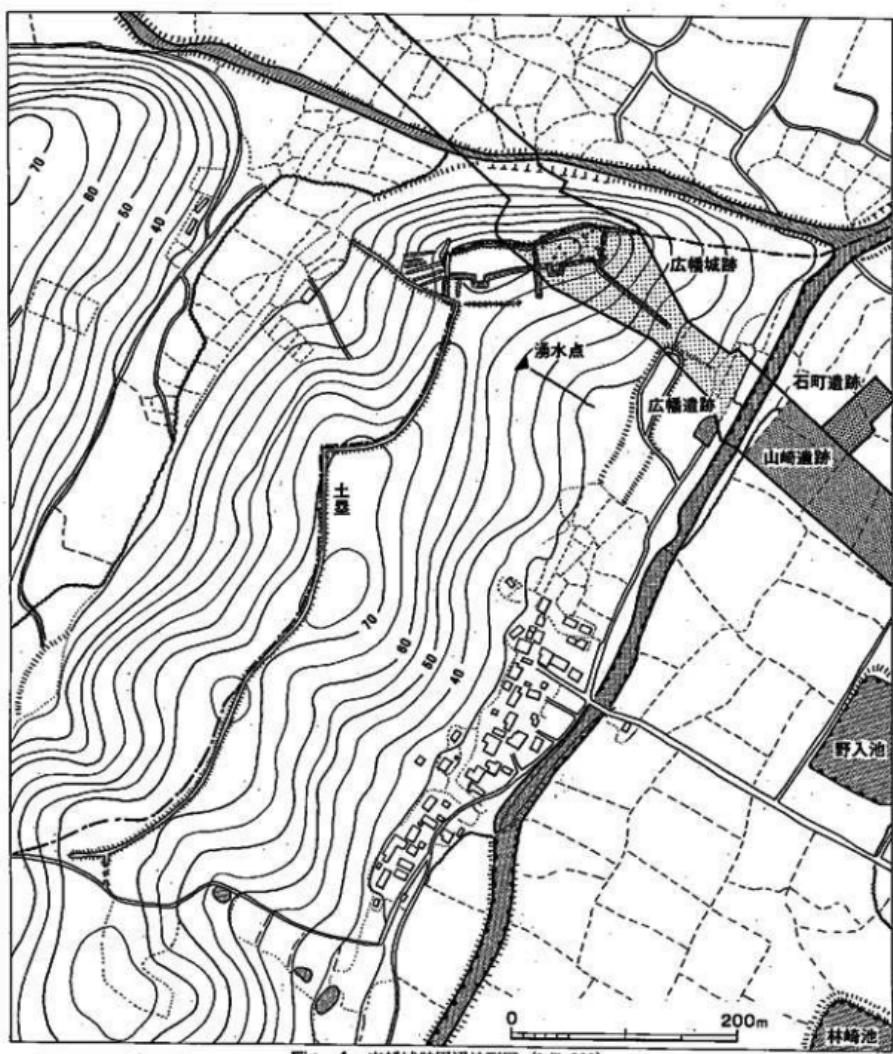


Fig. 4 広幡城跡周辺地形図 (1/5,000)

III 調査の内容

今回の調査は、広幡城公園を造るに際しての必要最少限の範囲にとどめることとした。すなわち、Ⅱ郭・Ⅲ郭を公園とするのに基本的には土盛りをもって整備し、施設等をその上にしつらえるとのことであったので、Ⅱ・Ⅲ郭の測量と造構の確認、そして進入路兼工事用道路とされる部分の測量とトレーニング調査を行うこととしたのである。

調査地点の名称についてはFig.5のように仮称しておくこととする。

Ⅱ郭においては、ほぼ東西に幅1.5mのトレーニングを長さ37mにわたって設け(9トレーニング)，その東端より11m地点で直交して長さ6.5mを南へ延ばし、これは6トレーニングとつながらせるとした。また9トレーニング西端付近では一部を約7m四方にわたって掘削した。ここは、この上部に施設が建てられる予定であったので、伐開した樹木の処分地としての選地による拡張であった。ここから弥生時代の貯蔵穴5基が検出された。Ⅱ郭には堀際の土壠の残存状況と、堀の堆積状況を見るために別に6・7トレーニングを設けた。

Ⅲ郭ではⅢAとⅢBとを分ける土壠に直交して5トレーニングを、またⅢBの北端でⅡ郭の堀の掘削土による土壠の部分に8トレーニングを設定した。

Ⅳ郭はその南辺の土壠が進入路にかかっていたので、ここに東から2~4トレーニングを設けた。

1トレーニングは2トレーニングの東南に設けたが、ここは少し平坦な面が存したので造構の存否を確認する意味で設定した。

なお、進入路の取付き側に近い所で、湧水点からの水を利用した小さな谷水田が存したので、これも貴重な造構として測量図を掲示する。

以下は、城跡の調査、弥生時代の調査、その他に分けて説明してゆく。

A. 城跡に関する調査

トレーニングは進入路から上方へと設定していったが、以下の説明は山城の中心たる郭の方から行ってゆく。

9トレーニング (Pl.3, Fig.6)

Ⅱ郭の中央に設けたものである。東西37m、幅1.5mで、一部に拡張部を設け、6トレーニングともつないだ。6トレーニングも含めて97.3m²を発掘した。中央から東半分では小ピットや土壠状の掘込みがいくつか検出されたものの発掘をせず埋め戻した。調査したのは西端拡張部のみであり、これは次項にて述べる。

7 トレンチ (Pl.4, Fig.6)

6 トレンチの東10mの所に、堀まで含めてのトレンチを幅1m, 長さ7mにわたって設定した。面積は8m²。郭内は一度掘削したあと埋めて整地しているらしい。堀への落ち際には高さ70~80cmの土塁を築いている。堀はその底面を丸く掘った毛抜堀となっている。底面に玄武岩や頁岩の礫15個程が存した。

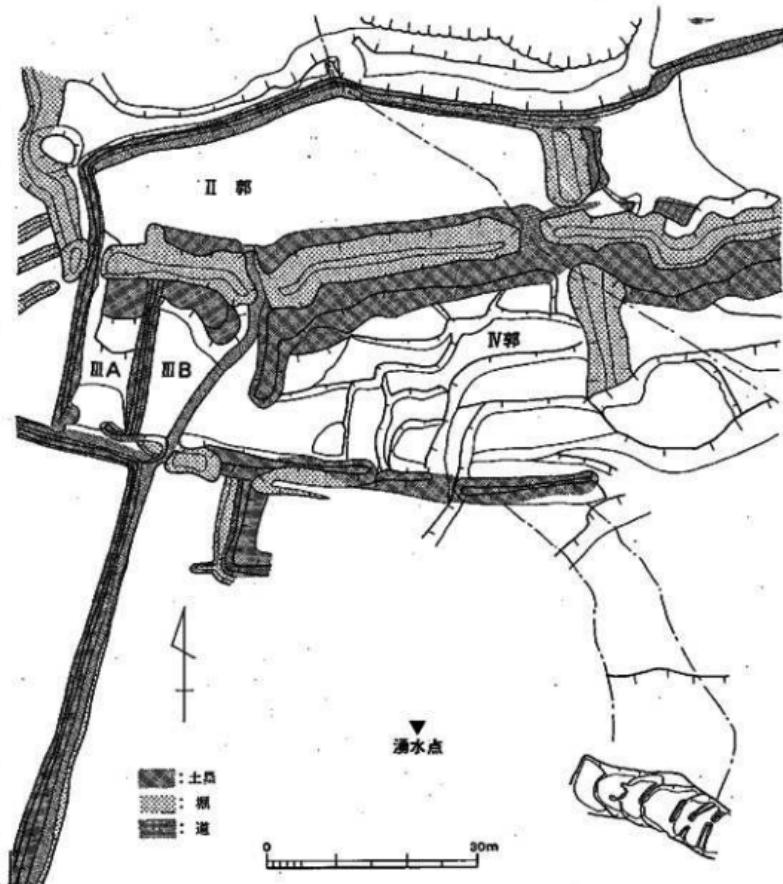


Fig. 5 広縄城跡 II・III郭地形図 (1/800)

6 トレンチ (Pl.4, Fig.6)

堀の内側に設けたトレンチで、幅1m、長さ4.5mを発掘した。あとで9トレンチを設定した際、それとつないでいる。南端にはもと50cm、基底部幅2m程の土壘の存することが土層図でわかる。北半部には貯藏穴と思われる掘込み (S P.36) が存した。これについては弥生時代の項で触れる。

8 トレンチ (Pl.5, Fig.6)

幅1.5m、長さ9.2m、12m²を発掘した。北半部はⅡ郭の堀を掘削した堆土でもって土壘状の高まりとしている。土層は大きく3層に分かれ、上から赤茶色・灰褐色・赤褐色の土が置かれている。トレンチ内より弥生土器1が出土している。

5 トレンチ (Pl.5, Fig.6)

幅1.2m、長さ3mをⅢ郭内の低い土壘に直交して設け発掘した。3.2m²と狭い。土壘の盛土はごく僅かであるが、これの基底面等は整地している可能性もある。中央付近と下部に土壤状掘込みがあるも性格はわからない。

4 トレンチ (Pl.6, Fig.6)

幅1.5m、長さ5.2m、8.4m²を発掘した。ここも2・3トレンチと同様に土壘がはっきりと認められる。北側は少しくぼんで溝状となっていたようだ。武者走りの如きものであろうか。弥生土器3、須恵器壺片1が出土した。

Fig.7-5は弥生前期の壺底部片である。底径9.2cm。

3 トレンチ (Pl.6, Fig.6)

長さ4m、幅0.7mで約2.8m²の面積を発掘した。見かけ上は北側は平坦であるが、もとは幅2.8m、高さ0.8mの土壘の存したことが知られる。この北側部分はあとで埋めたのかもしれない。弥生土器の壺片が出土している。

2 トレンチ (Pl.7, Fig.6)

長さ5.8m、幅1.5mで約8.8m²を発掘した。現状では高さが15~70cmしか捉えられない土壘が、土層図で見ると40~120cmもあったことがわかる。また、南側には溝が掘られている。トレンチ内より弥生土器3、須恵器壺片が出土している。

Fig.7-2~4はいずれも須恵器壺の破片で、2は2個の破片が融着しており、外面は平行タタキ、内面は同心円当具痕がある。このような破片があるということは窓跡が近在する可能性もないではない。3は外面が擬格子目タタキ、内面は平行刻み目の当具痕である。4は底部付近の破片であろう。外面は平行タタキ、内面は同心円当具痕をみる。

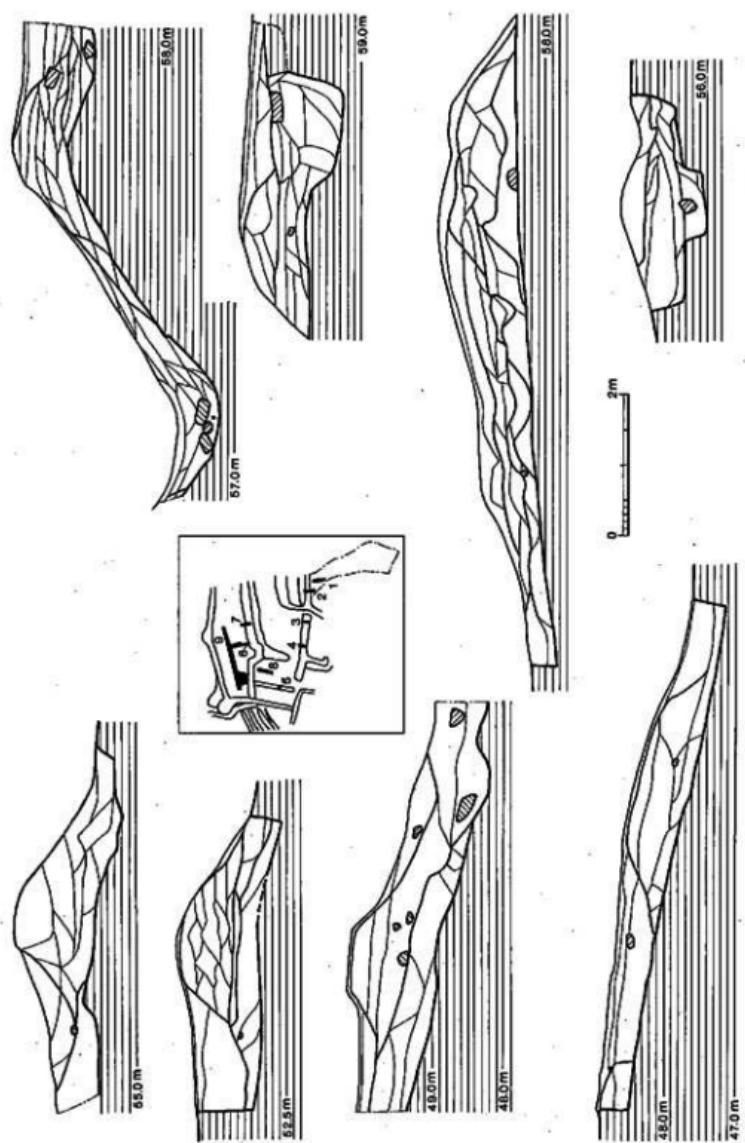


Fig. 6 広幅道路（2次）トレント土層実測図 (1/80)

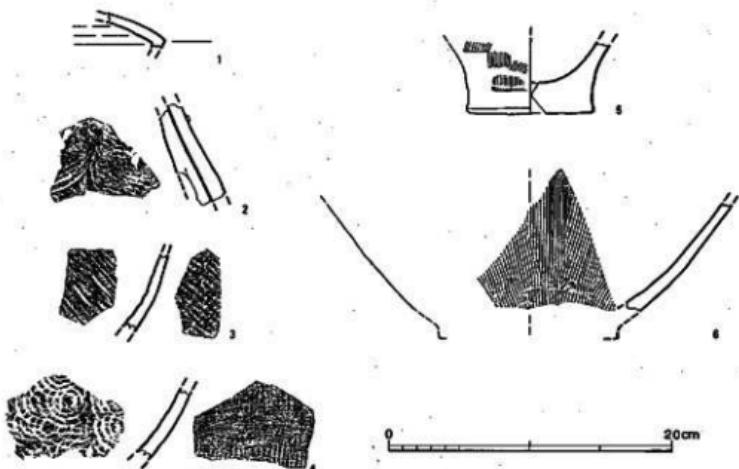


Fig. 7 広幡城跡（2次）トレンチその他出土土器実測図（1/4）

1 トレンチ（Pl. 7, Fig. 6）

長さ 7.2m、幅 1.5m で約 11.2m² を発掘した。表面上は見えないが土層図によってこれの南半に基底部幅 3.8m の土壘のあることがわかる。トレンチ内より弥生土器の甕 1、二次熱を受けた土師器 1、須恵器壺 1 の破片が出土している。

Fig. 7-1 は須恵器の破片で、胴部が算盤玉状に屈折した形状となる長頸壺になろう。外面部肩部は緑色の自然釉がかかっている。

以上、1～9 トレンチにて主に土層図を中心として見てきたが、土壘・堀以外に山城に直接関係すると思われる遺構は 9 トレンチのピット・土塙等を除いて検出されなかった。9 トレンチのそれも未掘なので詳しいことはわからない。

土壘では、6・7 トレンチで見るように郭内周縁にしっかりした土壘の築かれていたことがわかったのは大きな成果といえよう。また、W 郭南辺を画する土壘についても、2～4 トレンチでわかるように、元来は現状での見た目よりずっと高くしっかりしたもののが築かれていたことがわかる。

出土遺物は須恵器・弥生土器が大半で山城に関連するものはなかった。なお、1～9 トレンチで合計 151.7m² を調査したことになる。

B. 弥生時代の調査

弥生時代の遺構はⅡ郭内の6・9トレンチにおいて、貯蔵穴6基を検出した。SP31~35は9トレンチの西端部に集中して存し、SP36のみが6トレンチ内にある。全て前期後半~末の頃に營まれたものと考えられる。

SP31 (Pl.9, Fig.9)

開口部は崩落しており、現状では直径1.7m程の円形プランとなる。底面はそれと同心円状で、やや北側に広くなり径2m前後となる。深さ1.7m、断面形は北側が大きく張り出しての袋状となる。

出土遺物 (Pl.12, Fig.11)

壺1・甕2そして扁平打製石斧1が出土した。1は如意形に開く口縁下に三角突帯を貼付けた甕であるが、磨滅しての剥離が著しい。2は青緑灰色の綠泥片岩製の打製石斧である。長さ10.8cm、幅5.7cm、厚さ1.4cm。

SP32 (Fig.9)

この周辺の5基の中では最も西に位置し、一部が調査区外へ入る。平面プランは直径1.2m程の円形となるようだ。この貯蔵穴は深さ0.9mの所まで掘りすすめ、それ以上は発掘しなかった。よって底面のプラン・大きさ等は不明である。

出土遺物 (Pl.12, Fig.11)

壺2・甕4・石斧2・姫島産黒曜石のコア1・黒色の剝片1が出土した。1は壺、2・3は甕であろう。1の底径7.5

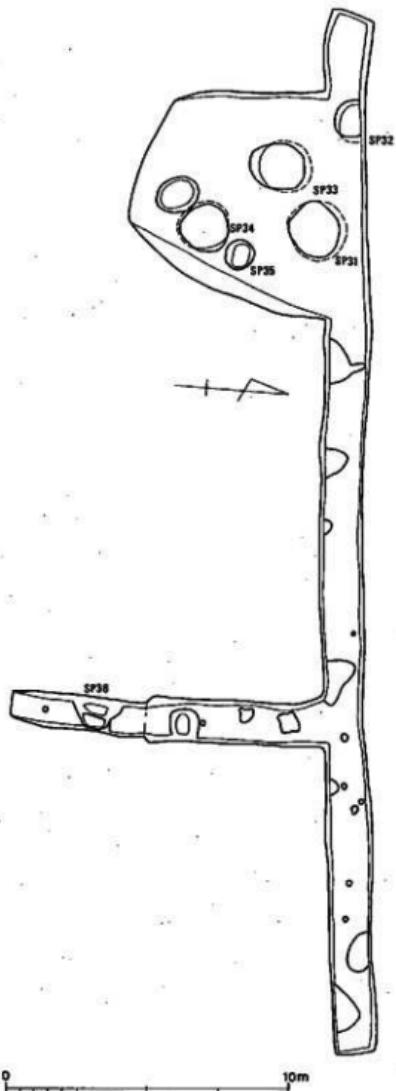


Fig. 8 広幡城跡(2次)Ⅱ郭内遺構図(1/200)

cm。2は底径7.4cm。2次火熱を受けているように見える。3は肩部が少し張った器形となる。最大径20cm。4は緑泥片岩の扁平打製石斧で長さ5.8cm、幅3.1cm、厚さ0.4cm。5は大型蛤刃石斧の刃部付近破片で、現存長6.9cm。玄武岩。

SP33 (Pl.9, Fig.10)

SP31の西南にあり、底面で1.8~1.9mの円形プランを示し、断面は袋状となる。深さは1.65m。東半分の下位の方は全掘できなかった。

出土遺物 (Pl.12, Fig.11)

壺2、甕1と黒曜石剣片1が出土している。1は大型の壺になろう。内外ともに化粧土をかけた痕跡がある。底径12cm。2も壺の底部で、こちらは底径が7.6cmと小さい。

SP34 (Pl.9, Fig.10)

SP31の南にある。現状で直径1.5m程の円形プランをなし、底面はそれよりやや広くて径

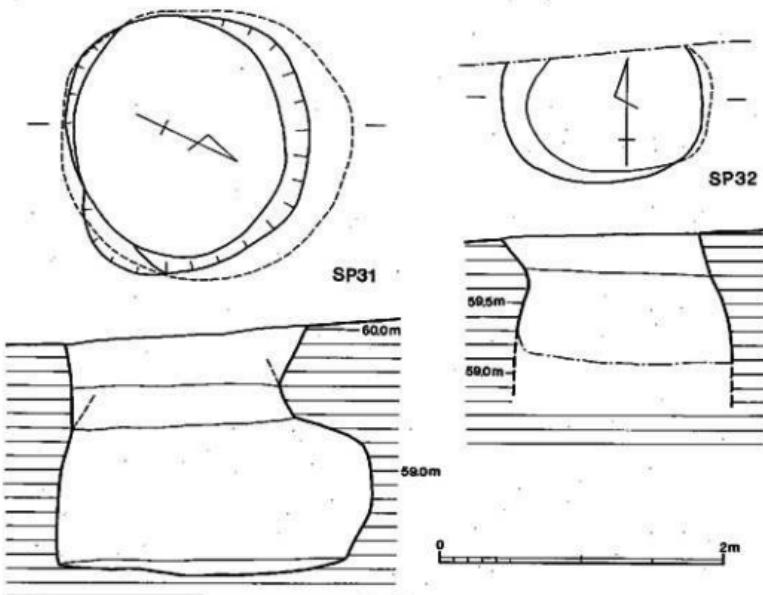


Fig. 9 広幡城跡（2次）貯蔵穴（SP31・32）実測図（1/40）

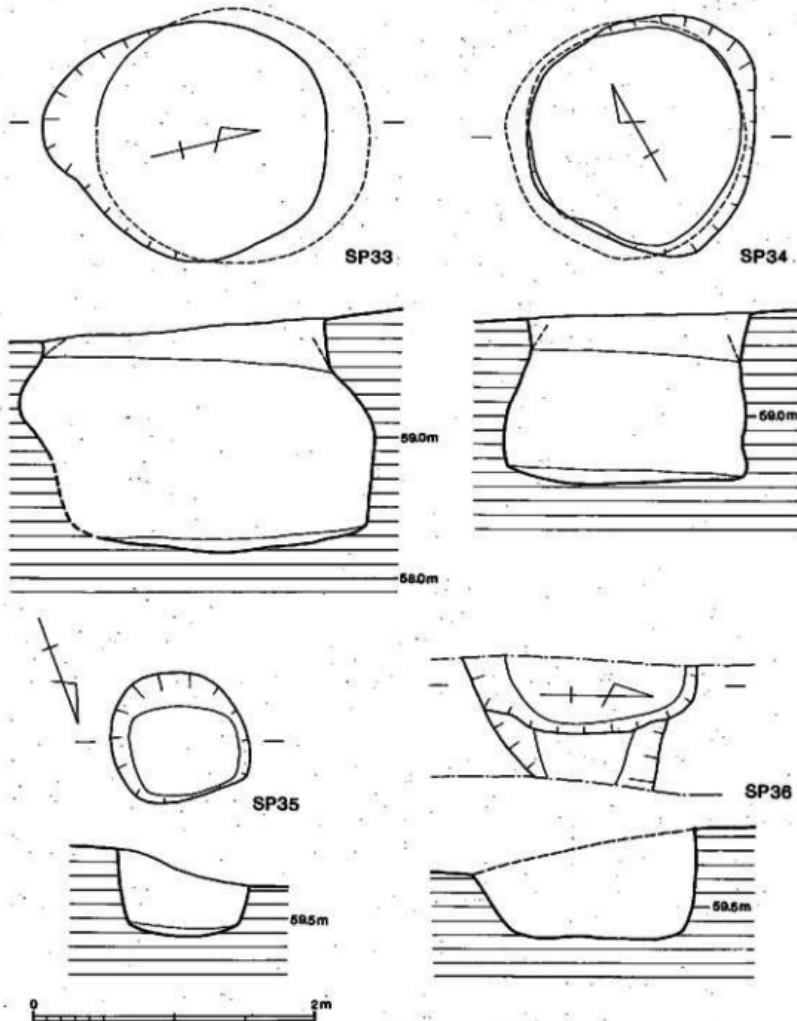


Fig. 10 广幅城跡（2次）貯藏穴（SP33～36）実測図（1/40）

1.7 m 程となる。深さ 1.2 m。

出土遺物 (Pl.12, Fig. 11)

壺 1・壺 3 とサヌカイト剝片 1, チャートのコア 1 がある。1 は壺にならうか。底部から一度くびれたのち、胴部へと立上る。底径 6.7 cm。2 は壺の底部で、割れて断面が見えるので成形法がよくわかる。底径 7 cm。

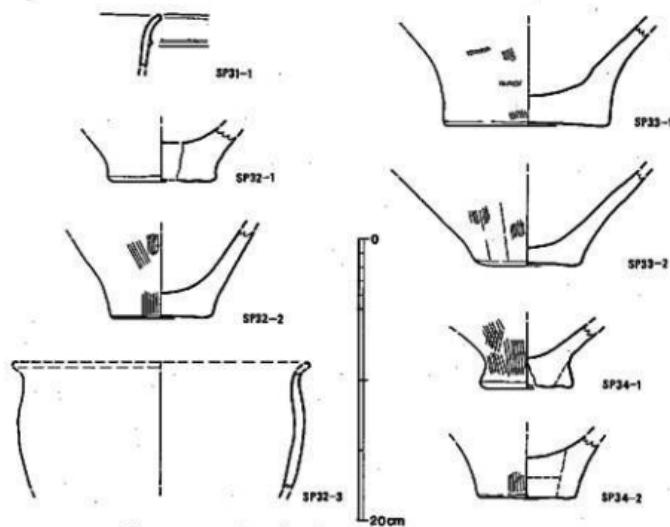


Fig. 11 広幡城跡（2次）貯蔵穴出土土器実測図（1/4）

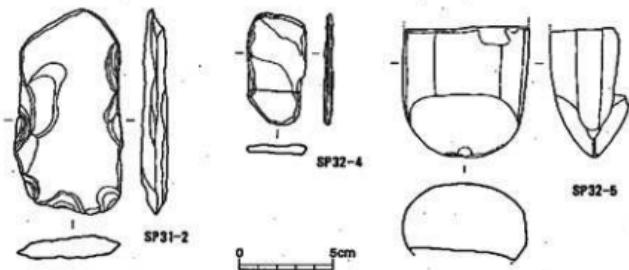


Fig. 12 広幡城跡（2次）貯蔵穴出土石器実測図（1/3）

SP35 (Pl.8, Fig.10)

S P 34の北隣にある。上面径90~95cmの不整円形プランをなし、底面は65×75cmの隅円長方形プランとなる。深さは60cm。灰茶褐色土が入っていた。規模も小さく、深さもないで貯蔵穴ではない可能性もある。甕の破片1が出土したが図示にたえない。

SP36 (Pl.4, Fig.10)

6トレンチ内にあり、南北長1.65mを測り、大半は調査区外へのびてゆく。底面は隅円長方形プランとなりそうである。東側は溝状に一段深くなっている。出土遺物はなかった。

C. その他の遺構・遺物

1トレンチのずっと南方、進入路としての取付き付近に、谷頭からの湧水を利用した狭小な谷水田数枚が存した。現状では7枚を数えたが、もう数枚は存したであろう。

これらは上端幅8m程の略東南に走る溝を段々に区切って水田としたというほどの、はなはだ簡便なつくりである。便宜的に西の方からA~Gの記号を付すと、Aは面積19.53m²、Bは16m²でこの両者間に畦は明確には見えなかった。Cは13.3m²でB・C間も畦がはっきりしない。Dは23.1m²と最も広い。C・D間には畦がはっきりと残っている。CとDとは幅40~50cm、長さ1.4m、3.3mの小さなトレンチを設けてみたが、ともに黄色ロームブロックを混じえた灰



Fig. 13 広幡城跡（2次）作業風景

褐色粘質土が耕作土（あるいは床土）として置かれていた。Cは10~35cm、Dは30~55cmの厚さでその下は岩盤である。

Eは9.23m²、Fは12.6m²の広さを有し、D・E間、E・F間、F・G間には畦がつくられている。

これら7枚の水田に水をかける特別の水路はつくられておらず、畦の途中を切って適当に調整しつつ水を流したものである。

水田地からの出土遺物はなかったが、水田Eの北側、崖面付近で陶器片が採集されている。

Fig. 7-6は備前焼風の摺鉢片である。この摺鉢が水田と関係あるか否かはわからない。

この水田はおそらく太平洋戦争後からしばらくの間使われていたものと推測する。

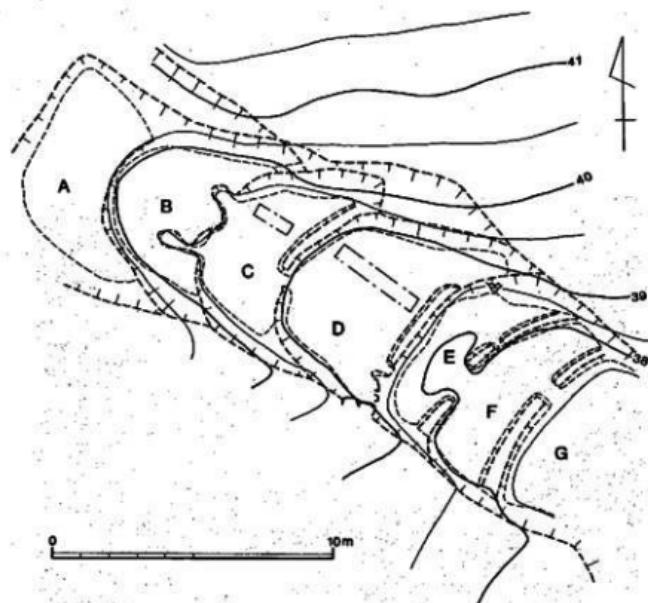


Fig. 14 広幡城跡（2次）近世谷水田平面図 (1/200)

IV おわりに

今回の調査は、歴史公園建設一広幡城跡の歴史性を生かして町民の憩いの場をつくる、という主旨一に伴うものであったので、発掘調査は必要最小限の範囲にとどめ、なるべく現況を残そうという方向性で調査し、進めていくこととした。従って、Ⅱ郭内で施設の下部兼伐開樹木処理場としての所を拡張して弥生時代の貯蔵穴を調査したのと、各所の土壘についてその土盛りのあり方を見たのが主な内容となる。

以下、山城と弥生時代の貯蔵穴に関して若干のまとめを行っておこう。

なお、この広幡城歴史公園の計画図の一部を巻末に示しておく (Fig. 15)。

〈山城について〉

広幡城跡の山城としての縄張りは、前回のバイパス建設に先立つ調査（一次調査）の成果に今回の二次調査の結果を加えて、より詳細が知られるようになったと言えよう。すなわち、Ⅱ郭の郭内周縁は現状では北面、西面にのみ土壘が目立つが、南面の堀の前面にもしっかりと土壘が築かれていたこと、あるいはまたⅣ郭とした所の南面土壘も見かけ以上に高さを有していたことがわかり、土壘等を随所に配した防御面の善説は堅固になされていたことを伺せる。

Ⅱ郭・Ⅲ郭その他における造構は、発掘調査の中では確認できていない。Ⅱ郭の9トレンチにて見られたピット・土壘状の掘込みが山城に関連する可能性はあるが、Ⅰ郭にてみられた土壘 (SK 1~7) のようになるのか否かわからない。Ⅰ・Ⅱ郭に建物を配置する場合、最も主要な建物はⅠ郭にというよりむしろⅡ郭の方が種々の面で適当であるように思われる。

Ⅳ郭南面の土壘については、その下方に存する湧水点を見据えてのものと考えて大過あるまい。Ⅰ~Ⅳ郭内に井戸は掘られていないと考えてよいので、飲料水を得るための方策は万全を期して施されていたことと推察される。

ただ、このⅣ郭とした所に建物等が存したのか否かは今後の調査に俟つかないが、平坦面が階段状にいくつか存することは建物の存在を示唆しているとも見てとれる。

今回の調査においては、山城の築城年代を伺うについての新しい資料は何ら得られなかった。調査範囲を限定したことによって、山城の存立に関する遺物が全く出土していない。従って、今回の調査のみをもってして、広幡城の築城および廃城について述べることはできないのであるが、先のバイパスの調査で得られた成果をもとにすれば、築城は最も遅ったとしても16世紀中頃までとし、同後半から末の頃に破却されたものとすることができよう。

〈弥生時代について〉

貯蔵穴はⅡ郭の西端付近で6基を検出したが、バイパスでの調査のときⅠ郭西端からⅢ郭にかけて9基を検出していた。これを見る貯蔵穴の分布には大きく二ヶ所の中心のあることがわかる。

竪穴住居跡は今回は検出されなかったが、前回の時に1・2号と3~6号という二つのまとまりがあったことを考慮すれば、S P 31~35の周辺の未調査部分に住居跡が遺存している可能性は十分にあるといえよう。また、1~4トレンチからも弥生土器が出土しているので、Ⅳ郭のあたりにも住居跡等の存在する可能性があるとしてよいだろう。

弥生前期中葉～末頃に、比高差40mの標高60mの山頂に住居群を造営した集団は、何故にかのような立地を選んだのか。この山頂から見おろせる範囲内に居住可能な土地はいくらでもありそうに見える。やはり必要に迫られての選地と考えるのが最も自然であろう。黒曜石やサヌカイトの剥片が多いことや打製石器もありと多く見つかっていることなどを考慮すれば、この時期に一時的に社会的緊張関係が生じた可能性もある。この点については、今後の調査例の増加によって更なる検討ができるようになろう。

弥生時代については、いまはその立地の特異性を強調することのみにとどめたい。

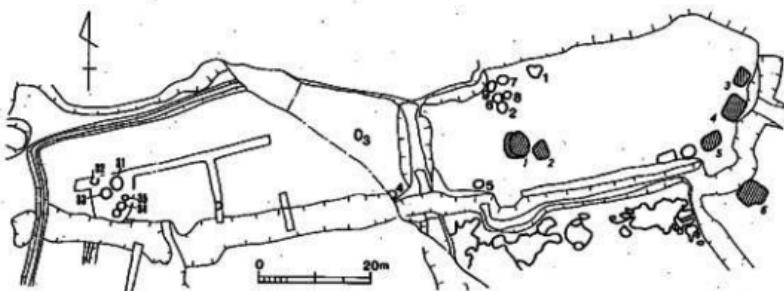


Fig. 15 広幡城遺跡弥生時代遺構分布図 (1/1,0000)

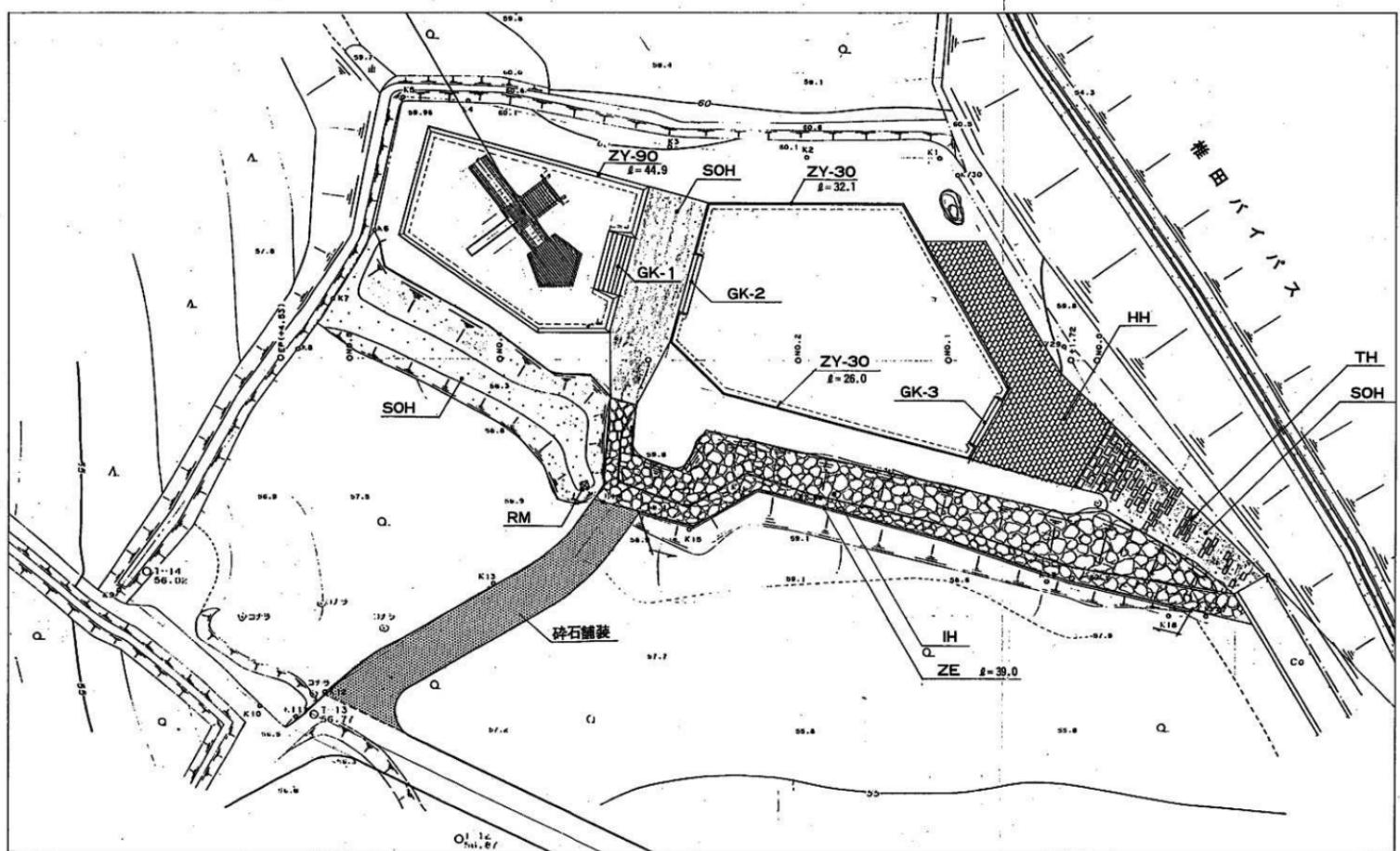


Fig. 16 広幅城公園計画図

図 版



広輔城跡航空写真（東南より）



広輔城跡航空写真遠景（東南方向より）



広輔城跡航空写真（東より）



広輔城跡航空写真（西より）



1 9トレンチ（東から）



2 9トレンチ（西から）



1 7トレンチ
(東から)



2 7トレンチ
(東から)



3 6トレンチ
(東から)



1 8トレンチ
作業中



2 8トレンチ
(東北から)



3 5トレンチ
(南から)



1 1トレーンチ
(西から)



2 3トレーンチ
(西から)



3 西郭付近
(東南から)



1 1・2トレンチ
発掘中



2 2トレンチ
(西から)



3 1トレンチ
(西から)



1 9 トレンチの貯藏穴発掘中



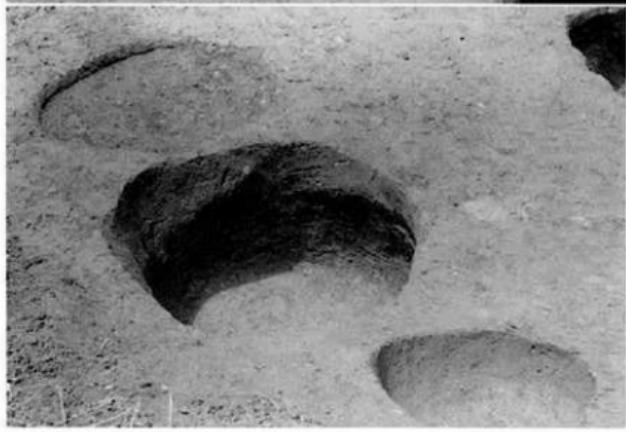
2 9 トレンチ貯藏穴 (S P 31-33-35)



1 SP 31



2 SP 33



3 SP 34



1 谷水田の現況（北西から）



2 谷水田の現況（東南から）



1 谷水田周辺樹木片付け中



2 谷水田（北東から）



SP32-2



SP33-1



SP33-2



SP34-1



SP34-2



4トレ



SP31-2



SP34-4



SP32-5

福岡県行政資料

分類番号 J H	所属コード 2 1 3 3 0 5 1
登録年度 H 3	登録番号 9

椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告－9－

平成4年3月31日

発行 福岡県教育委員会

福岡市博多区東公園7番7号

印刷 福岡印刷株式会社

福岡市博多区大字那珂142番地

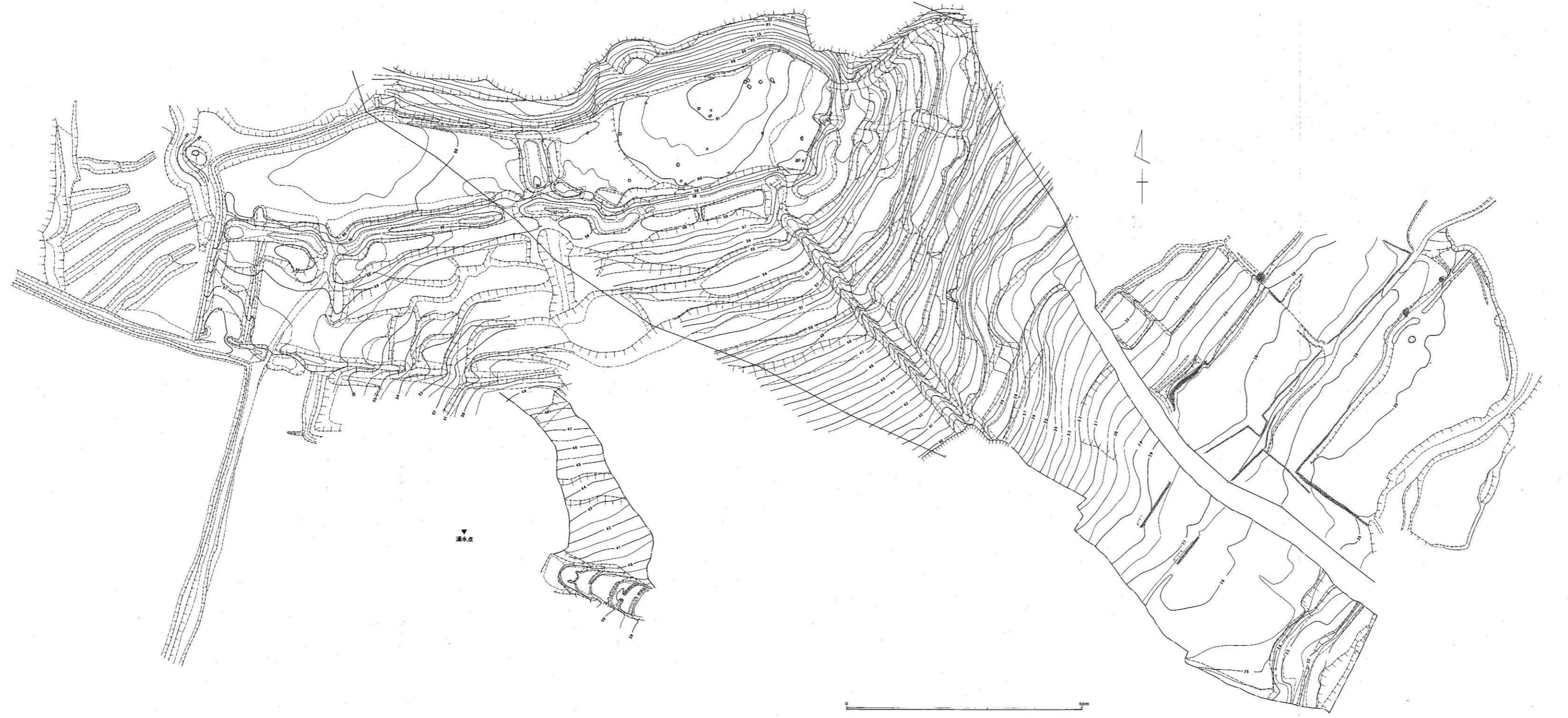
椎田バイパス関係 埋蔵文化財調査報告

—9—

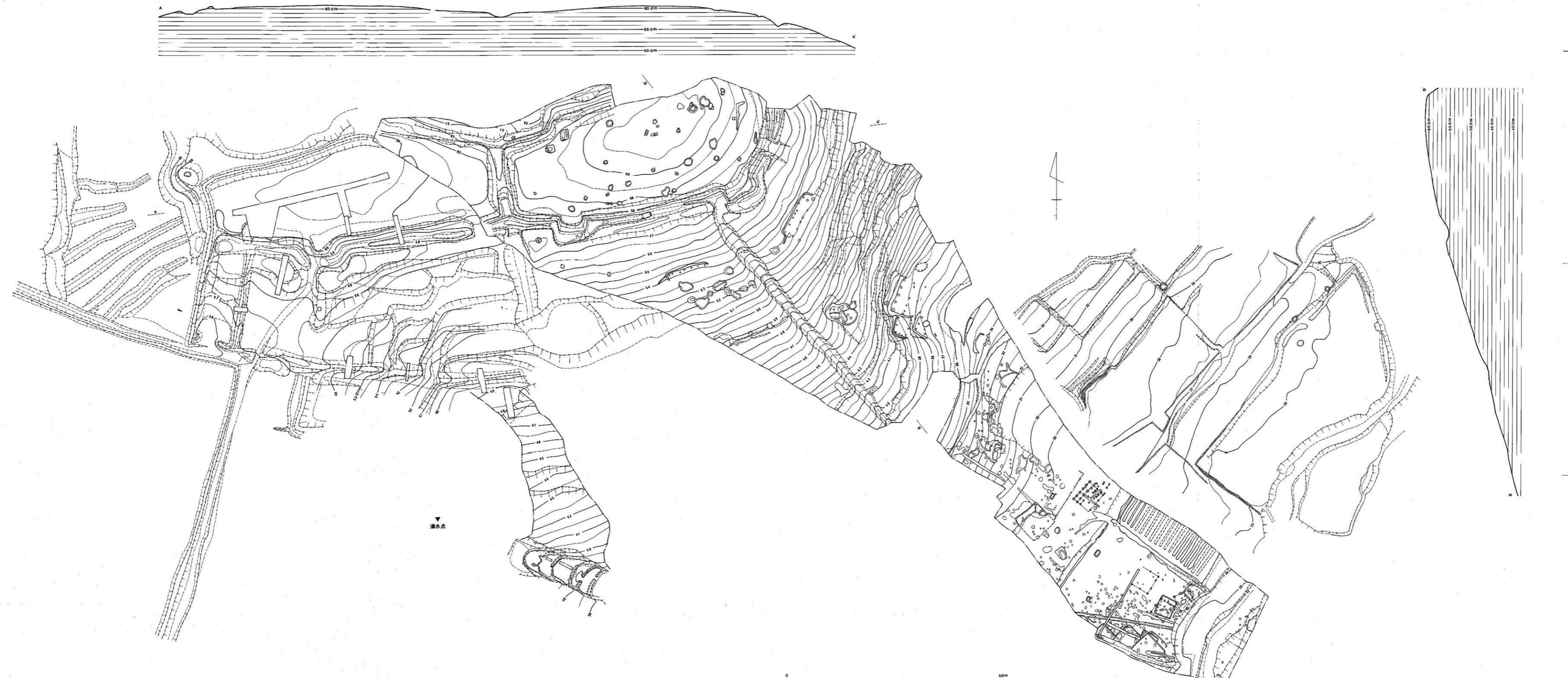
広幡城跡

付図

- 付図 1 広幡城跡地形測量図 (1/400)
- 付図 2 広幡城跡測量図 (1/400)
- 付図 3 広幡城遺跡遺構図 (1/200)
- 付図 4 広幡遺跡遺構図 (1/200)



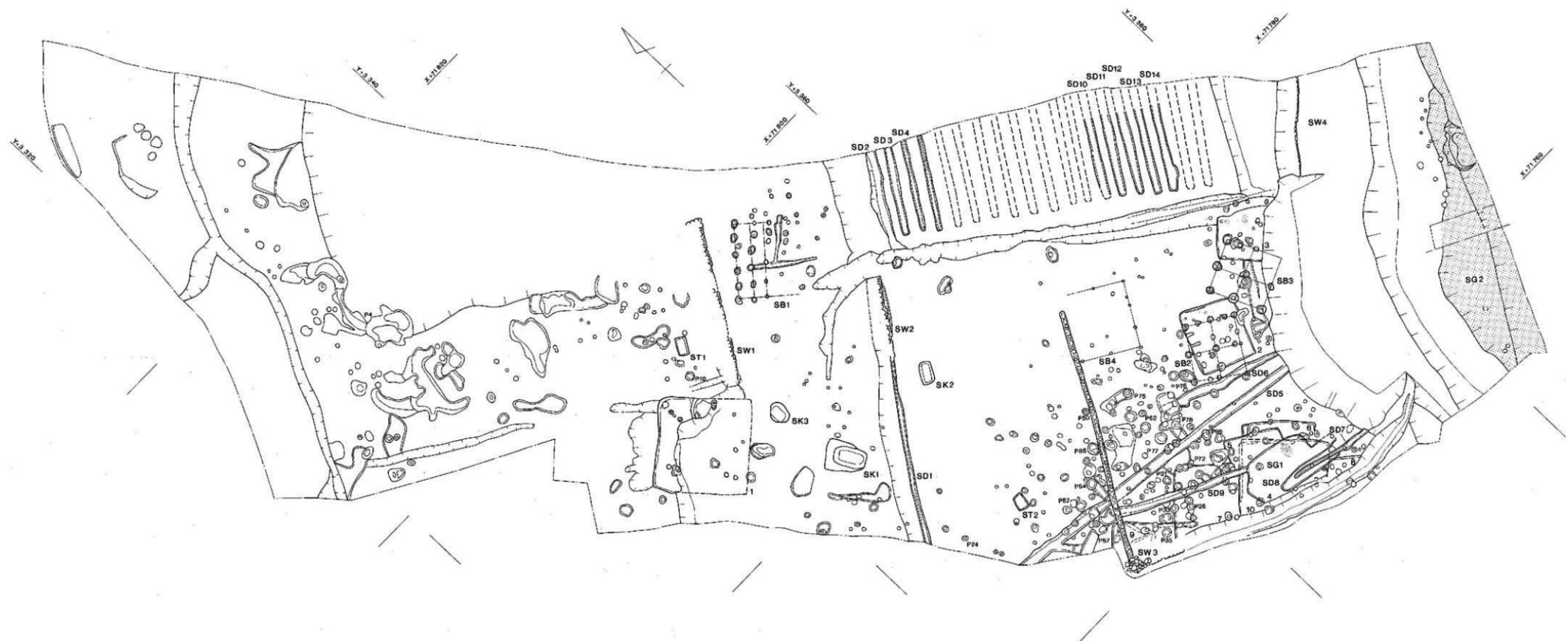
付図1 広幅地地形測量図(1/400)



付図2 広幡城跡測量図(1/400)



付 図 3 広輪域透跡地図 (1/200)



付図4 広域造路地図 (1/200)